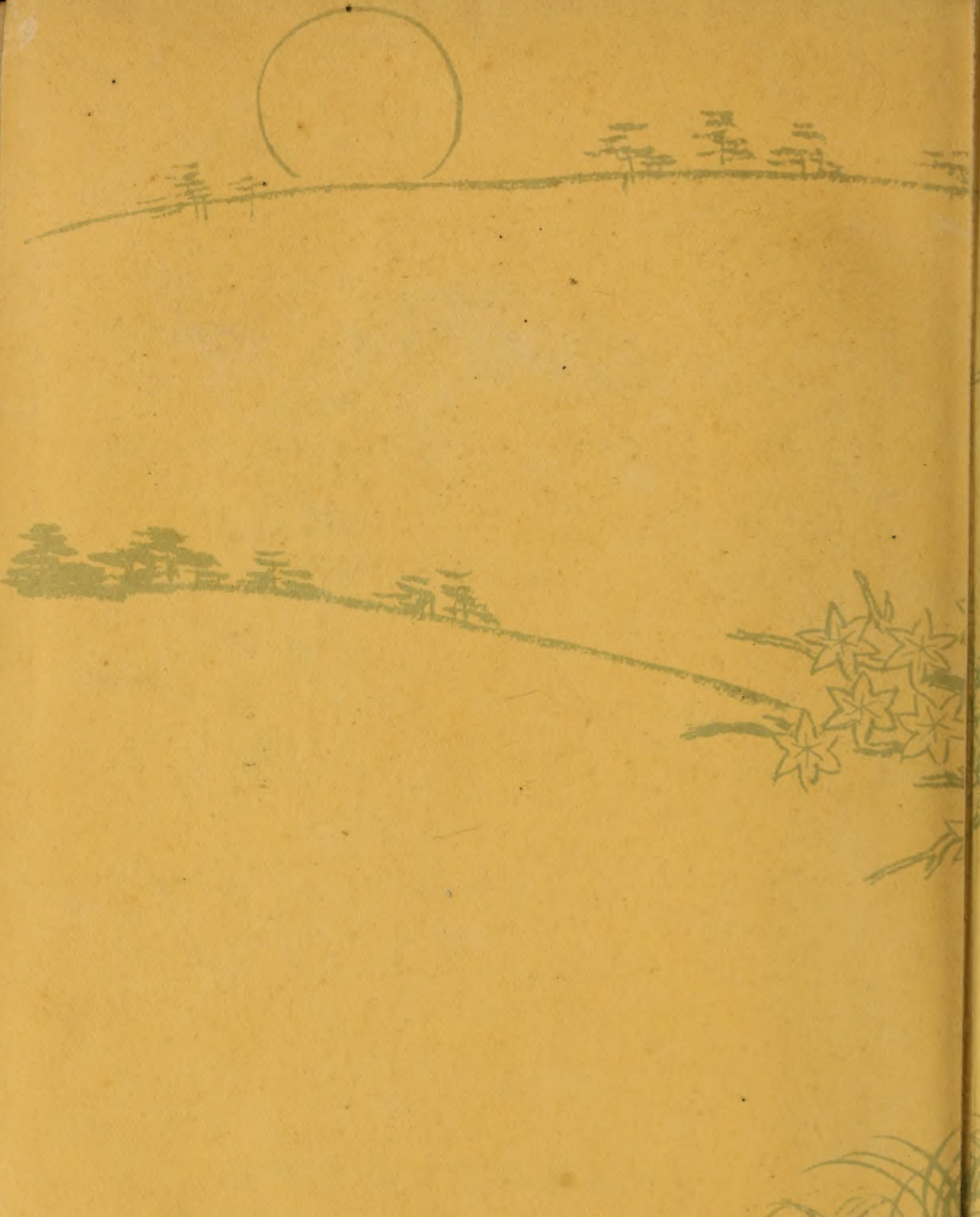


VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the

LIBRARY *of the*

UNIVERSITY OF TORONTO

by

Mr. E. Tamaki

生長の家聖典全集

生命の實相

第八巻

人生問答篇

東京 光明思想普及會發行

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

「生命の實相」第八卷目次

序文　新生活への出發……………………一

人生問答篇　人生の悩みを解く……………………一—四一

第一章　家庭爭議の解決を語る……………………三
第二章　生活に顯れた神通妙用……………………三六
第三章　生きる道の座談會……………………七三
第四章　基督の偉さと奈翁の偉さ……………………一一一
第五章　戀愛・相性・方位・家相……………………一三四
第六章　念の集積・業の流轉・念の憑……………………一五四
第七章　念の病氣に及ぼす力……………………二〇三
第八章　治す念波の話……………………二二四
第九章　『みんな一體』の信仰を語る……………………二五三
第十章　世界は何處へ行くかを語る……………………三三九
第十一章　國と家庭を良くする話……………………三六六

LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO

新生活への出發（はしがき）

昭和七年十一月二十二日恰度私の誕生日の午後、廣島の『生長の家』誌友平川皆人氏が約半年振で來訪された。半年前に會つたときとは雲泥の差のやうに健康がよくなり、容貌が明るくなり、氣分が快活になつてをられ以前にお目にかゝつたときには沈默がちで押し默つてをられたのが、今度は打つて變つてスラ〳〵と思ふことを何の滯りもなく話し出されるのであつた。

半年の間に何が氏をこのやうに變化させたのであらうか。病弱より健康へ、陰鬱より明朗へ、消極的退嬰より積極的邁進へ！　昭和七年の春、氏が私を訪れて下さつたときには平川氏は健康を害して、就職地であつた東京の地を去つて郷里廣島へ隱退せられる途中であつた。記憶によると氏は北海道の日魯漁業へつとめてゐられた令弟平川德夫氏から送られた『生長の家叢書』二冊をもつて私を訪れて來られたのであつた。そして私と會談すること二時間餘、唯一回神想觀の指導を受けて郷里廣島を指して歸られたのであつた。

爾來、平川皆人氏は毎日毎時聖典『生命の實相』に讀み親しむ人となられ、また毎日缺かさず神想觀を實修せられた。その功德によつて二ケ月ばかりすると既に氏の健康は全然回復してしまつた。氏は神想觀の功德の偉大なるに歡びやる方なく、そのために幾分慾が出來、神想觀實修

中、生長の家の神樣のみ姿を拜したいとの念に深く捉はれるに到られた。

『生長の家大神』の神示に『われは姿かたち無きものである』とあるが、機に從つて時には一定の神姿をもつても顯はれられる事實があり、或る時には旭日の姿にて、或る時は夕日の姿にて、或る時には宇宙に滿つる燦爛たる金光もて顯はれ給ひますので、熱心なる讀者が神姿を拜したいと云ふ慾望を起すことも無理からぬ譯でありますが、神姿を顯はし給ふのは衆生の機に從つて化度し給はんがための方便であるので、こちらから求めて姿を見せて下さいと願ふべきではない。こちらから求むれば、それが我となり『慾』となり、神の救ひに對して、自分を主張することになるので、そこに幾分の不純を免がれないのである。

それは兎も角、當時の平川皆人氏は毎夜靜座神想觀して『神姿を見せて頂きたい』との念願をもつて打坐すること、二時間、三時間を超えたのでありました。或る夜つひに氏に靈眼が開いた。そして諸々の靈姿を見たのであつた。併し神姿は見えなかた。

氏が神想觀をしてゐられる時氏の靈眼には、亡者の如き幽靈の如き、祖先の靈魂が氏の周圍に集つてくる姿が毎夜見えた。そのうちに本當の神姿が見えるであらうかと尚、毎夜、その念願をもつて神想觀を繰返してゐられると、或る夜群がる祖先靈の中に一人の骸骨の姿があらはれて、

つかつかと平川氏に近づいて來たかと思ふと、その骸骨は手を上げて平川氏の頭をぐつと押へた。あまりの恐しさに平川氏は目を開いて周圍を見ると自分の姿勢が何者かに押へられた形に傾斜してゐた。それ以來氏は寢ても覺めても頭に釜を被つてゐるやうで頭が暗く重くなつた。

それはたしかに成道前の一魔境であつたのだ。釋迦が佛道を成就せんがために菩提樹下に端座して實相を觀想せるときにも惡魔波旬が多數の眷族を引連れて釋迦を試みたのであつた。イエスも四十日四十夜惡魔に試みられんがために斷食靜座したのであつた。その時『サタン來りてイエスを試みた』と聖書には書いてある。されば魔境に挫折して實相を觀ずる修行を中止してはならないのである。

元來、平川皆人氏は餘り文章には秀でてゐられないので、其の當時、私へは直接手紙を寄せないで、そのあらましを令弟平川德夫氏に書き送られた。それで平川德夫氏から私に『どうしたら好いか』とのお尋ねの手紙が來た。

そのお尋ねの手紙には、皆人氏が諸々の靈魂の姿を見たなどと云ふことは書いてなかつた。ただ、『神想觀中、何者かに頭を押へられたやうな氣がして、それ以來、頭に物を被つたやうで、頭が重くて、晝も何一つ出來ない由』す。そして神想觀も、それ以來、恐ろしくつて、試みる氣

になれないと云つてゐます」と書いてあつた。

私は、その質問狀を見たとき、祖先の靈が救はれる緣を求めて皆人氏の周圍に集つて來てゐるのだと直覺した。それで私は神想觀を中止しないで、恐るゝ所なく神想觀をなし、何者かが押へるやうな感じがしたならば、それは眞理を知つて悟りを開いて救はれたい靈魂が來てゐるのであるから、眞理を知らしてやるために、眞理の言葉を話してきかせるか『生命の實相』を讀んできかせてあげて下さいと返事を書いた。

……が、以後暫く平川兄弟からはその後の經過の報告は來なかつた。私も多忙のために、經過の報告が來ないことすら氣がつかなかつた。もう、私がそのことを忘れた頃に、平川德夫氏から『兄は自分の病氣が癒つて、人の病氣を癒してゐるさうです、感謝します。』と云ふ手紙が來た。

そして、たうとう去る十一月二十二日に平川皆人氏みづから上京の序に御禮かた〴〵兼ねて立寄られたのであつた。私は見ちがへるやうに元氣になつてゐられた皆人氏の顏を見ると、本當に見違へて『始めてお目にかゝります』と挨拶した位であつた。

氏の語られた處によると、氏は私から返事したやうに實行してゐられた結果、半月ほどのうちに祖先の迷へる諸靈も出て來なくなり、今迄頭の重かつたのも何時のまにか輕快して健康は舊に

倍するやうになられたのだ。氏は愈々有りがたく思つて、毎日自分の守護神でゞもあるかのやうに聖典『生命の實相』を携帯して山へあがつてはそれを讀み、またそれを携へては山を下つた。村の人々は平川さんは妙な人だと不思議に思ひ出した。豪華版『生命の實相』の黒革表紙のドッシリ厚い三方金の聖典らしい典雅さが村の人たちの心をひいたのだ。

或る日、村の人たちの一人は訊いた。

『平川さん、貴方は妙な人ですなあ。毎日その本を携へて山へあがつては又降りて來なさる。最初は病氣のやうにやつれてゐられたので保養にでも歸つて來られたと思つてゐたが、此頃は達者な御容子ですが、一體その本は何の勉強の本ですか。』

かう問はれて平川氏は答へた。『これは眞理を書いてある本です。私も病氣で仕事をやめて村へ歸つて來ましたが此本を讀んで眞理を知つて自分の病氣が治りました。誰でも眞理を知れば病氣がなほるのです。』

かう答へたのが縁となつて、『私も病氣を治して呉れ』『私も病氣を治して下さい』と平川氏に頼んで來る人が次第に殖えて來た。大きな割木が上から落ちて來て足の甲が毬のやうに脹れ上つたのなどは三回の按手神想觀で治つた。子供が腕の關節を脫いたのは一回按手神想觀

してゐるうちに自然に元の關節に嵌つて二度と脫臼しなかつた。松田と云ふ七十一歲になる老婆が鍬を持ち上げる拍子に倒れて腰をしたゝか打つて起つことが出來ないで躄になつてゐたのは數回の按手神想觀で完全に治癒した。河本まさのと云ふ子宮癌の中老婆さんに按手神想觀を施してゐる內に激しい『おりもの』がドツと下りるやうになり『あまりにそれが物凄いので、それを見てゐると怖ろしくて目まひがして倒れさうです』とその婆さんは云つた。『生命の實相』を繰返し讀んで眞理そのものになり切つてゐる平川さんは恐れなかつた。『下り物が出るのは惡いものが出て身體が淨まり、あとは達者になるのですから、これは有りがたいと感謝しなさい。感謝の氣持でゐれば必ずよくなるのです。下り物があまり物凄くてそれを見るのが恐ろしくて目眩ひがするなら、それは眼と云ふものに迷はされて有り難いことが判らぬがちであるから、じつと眼をつぶつて下り物を見ないで、有りがたい、生きる力があらはれてゐるのだ、生きる力がなかつたら下り物がするものではない、死骸からは下り物がしない、生きてゐるから下り物がある、あゝ有り難いと思つて、その生きる力――生命の實相だけを見るやうにしなさい。』と教へてあげられた。これは大分重い病氣だつたので平川さんは四十日間、河本さんの宅へ通つてあげて眞理を話し、心の結ぼれを一つ一つ解かれたら、すつかり全治して、今では山へ薪刈りに往つて重い

柴を背負つて歸るほどに健康になつた。

平川皆人氏はかうして聖典『生命の實相』を體讀して、此の有りがたいと云ふ心持を病人に喚起し、心の平和を根本的に得せしめることによつて病氣の治癒が非常に促進することを知られ、それを病人の治療に應用せられたのであつた。一切事物には光明面と暗黑面とがある。子宮癌のオリ物に於てすら吾らが光明面のみを見るやうにするとき、念の創造力で、その光明面が現實化するのである。が本當に光明面のみを見るやうにするには其の人の愛が深くならなければその實現力が徹底しないのである。眞の光明は神のみより來る、神は愛であるから愛なきものは一時明るくとも、其の心の奧底から光明輝くやうにはなれないのである。平川皆人氏は老婆のために四十日間何の報酬をも求めずにその治療のために通はれた。二里三里の遠きより賴みに來ても自轉車で飛ばして往つて少しも面倒がられない。そして云はれる『みんな如來さまの子、神の子だと知らして頂きましたから誰でも自分の兄弟ですから、どんな病人でも穢いと思つた事も、どんなに遠くとも、遠いとも面倒くさいとも思つたことはありません。』と。

諸君よ、現象の醜い假相を見ずに、實相の美しい本當の姿をこの平川皆人氏のやうに見るやうにせられよ。諸君の身體は、境遇は、周圍は、やがて光明化して來ることを見出すであらう。

本書はかゝる生活への指針を提供するものである。

何よりも、今幸福でない者は、笑ひの分量が足りないかを顧みよ。

人は笑ふのも自由である、顰め面するのも自由である。併し笑ふ者の運命は光の如く輝き、顰め面する者の運命は闇の底に沈衰する。諸君はその何れを選ばうとも自己の好みに委されたまつたくの自由を許されてゐるのである。光となつて輝きたい者は笑ふが好い、闇の底に沈衰したい者は眉を顰めるが好い。幸福でもないのに笑へないと云ふな。笑はないから幸福が來ないのである。

本篇に輯錄された話の中に、六十餘歳になる大阪の某老婆が醫師より數年前子宮筋腫の診斷を受け不治と斷定せられたのであるが、ある日生長の家誌友から『生長の家の生き方に從うて大いに笑ひなさい、さうしたら治ります、そのほかに治る方法がない』と教へられ、その通り行つて治つた話がある。最初、老婆は『そんなに被仰つても可笑しうないのに笑へません』と答へたのだつた。するとその誌友は『笑ふのも體操と同じ事です。體操はひとりでに身體が運動出來て來ないでも、體操をしようと思つたら身體が動くでせう。可笑しうなくても、笑はうと思へば笑へるものです。可笑しうて嬉しうて愉快で笑へるに越した事はありませんが、可笑しうなくとも笑

ふやうに努められゝば自然に必ず愉快になり、お腹の塊りが溶けて來るものです。貴女のこのお腹の塊りは醫學的には子宮筋腫だが、精神的に云へば氣の鬱ぎの塊りですよ』と說明した、それ以來、老婆は此の誌友の言に從ひ、毎日努めて笑ふやうにしたところが、だん〲その子宮筋腫が小さくなつて治つて了つたと云ふ。これは昭和六年十月十七日の生長の家本部に於ける座談會で談された實話である。

哄然として笑ふことを大人らしくないと思ふな。老婆だから笑へないと思ふな。キヤツ〱と騷ぐことは心に良藥を飲ますにも等しいのである。子供が騷いでゐるのを五月蠅いと叱るな。そんな家庭で育つ子供は屹度弱いのである。騷ぐ方が生々躍動する生命の本然の働きを表現してゐるのであるから、それと調和し得ないで子供を叱る大人の方がどこかに間違ひがあるのである。さう云ふ人たちは寧ろ自分自身を叱り飛ばして子供と一緒に踊るやうに鞭韃するが好いであらう。天理教では神樂歌に合はして明るく踊る、踊つて踊つて踊り拔いたとき、或る種の病ひは癒えてゐるのだ。美しく飾つた部屋で、騷いで家具調度を傷けてならないと思ふならば廊下に出よ、庭に出よ。敷物や、衣服の穢れるのを氣にするな。心の氣枯れてゐることをこそ氣にせよ。心の中へ陽氣をうんと吹き込んで、心の氣枯れを吹き飛ばせ。穢れるとは外から土がつくことではな

い、心のうちに生氣が枯れることなのだ。

諸君よ、神の子たる諸君の食卓は『歡びの食卓』でなければならぬ。どんな榮養料理も悲しみと一緒にたべては榮養にならぬ。あらゆる榮養品のうちで、歡びと云ふ無形の精氣ほど吾らを元氣づけるものはないのである。どんな粗食でも『歡び』と云ふ無形の菜を添へてたべるとき最上の榮養食に變るのだ。食事にうんと歡びのお菜を附けて食へ。さうしたら、どんな消化不良でも治つて了ふのである。タカヂアスターゼを一瓶すつかり飲むよりも、食事どき三十分間の快活な笑ひの方がよく効く消化劑となる。食事どきには出來るだけ諧謔を云へ、滑稽を話せ、機智を飛せ、この習慣が日本中の家庭々々に擴がつて行くとき、日本中の病人は半分に減つて了ふであらう。

鉢植の盆栽も、終日、部屋の中へ閉ぢ込めて置いては間もなく枯れて了ふけれども、一日數時間あて太陽の光にあてゝやるとなか〳〵枯れないであらう。植物の葉に綠を與へ、その花に色いろの色彩を賦へ、その果に美しい光澤と美味しい味を與へるものは太陽の光である。それと同じく人間の心にも太陽の光が必要なのである。

心に必要な太陽の光とは、光の名に相應はしい、生命の自然から湧き起る明るい歡びである。

『生命』は『生命』であつてそのほかの何物でもない。『生命』は躍動がその本然のすがたであるから、それを自然のすがたに置くとき躍動するほかはないのである。『生命』はその歡喜がその本然のすがたであるから、それをその自然性に委せるとき歡喜するほかはないのである。本當の聖人とは常に几帳面に正座――眞面目くさつて冗談一つ云はない窮屈な人間のことではない。『生命』のその本然に從つて歡びを自由自在に形にあらはし、大笑し、哄笑し、跳び廻り、躍り廻り、周圍の人々にも自分の歡喜を感染さし得るやうな人こそ本當の大聖なのである。

子供は總じて大人に比べて大聖の資格を備へてゐる。彼は流るゝ水の如く生れたまゝの『生命』の自然性を失はずに歡びを流露して跳躍するからである。『天國とは幼兒のごときものなり』とキリストはいみじくも云つてゐる。大人が子供に比べて靜かで落付いてゐるのは好い。溪流は奔湍となつて激するが、大河と深淵とは底で流れてゐても表面はしづかである。しかし大河も深淵も溪流と手をつないで動いてゐるのである。されば大人も子供と手をつないで私のやうに躍り跳ねるが好いであらう。溪流と手をつないで動かずして、底の流れが新陳代謝しない淵があればその水は腐つて惡臭を放つ沼となるであらう。子供の魂と一緒に歡喜し、子供と一緒に手をつないで笑ひ興じ得ない大人にはその精神狀態の何處かに自然性に逆つたところがあるのである。

だから諸君よ、諸君は子供のさわがしいのを叱り付ける前に先づ無邪氣に子供らしく成れない自分を叱り付け、出來るだけ子供のやうに無邪氣に飛び跳ね笑ひ叫び得るやうに修養するが好いのである。此れを諸君の生活の課題として勸め諸君にしてそんな暇がないと云ひたいならば、私を見よ、道場の指導と『生長の家』の執筆と、二重の生活をしてゐる私は諸君に比べて暇が多いであらうか。諸君にして精神的な人間は躍つたり跳ねたり出來ぬと云ひたいならば私を見よだ。『生長の家』の人類光明化運動に心を獻げてゐる私は、諸君にくらべて精神的でないであらうか。しかし私は子供と手をつないで一緒にダンスし一緒に大笑し、一緒に哄笑する！ さうすれば別に家庭のそとにダンス場は要らない、家庭がダンス場となり、歡樂鄕となり、そこからは細君のヒステリーも、子供の虛弱も、吹つとばされて消えて了ふのだ。

人間は笑ひ興じたい慾望を『生命』の本然の性質として有つてゐるのである。澄ましてゐて冗談ひとつ云ふことを淑女としての愼しみがないと思つていつも表情を固くしてゐる細君はともすれば良人を家庭のそとのもつと笑ひの多い世界に逐ひ出すのである。淑女と云ふものは笑顏一つほころばせずに、事務的な語調で必要なことだけ話してあとは默つて澄ましてゐるものだと思つてゐては間違ひである。本當の聖人が幼兒の如く大笑するやうに、本當の淑女も幼兒の如く大笑

し、蝶々の舞ふが如く舞はねばならぬ。學校の女教員をして來たやうな婦人がやがて人妻になつた場合、生眞面目一方で冗談一つよう言はず、其處に一つも女性的な生命の躍動があらはれてゐなかつたゝめに家庭を破壞して了つたやうな實例は世の中に澤山あるのである。

諸君よ、此書を手にせられたのを機會に今日からあなたの家庭をもつと明るく笑ひに滿ちたものとしようではないか。苦い顏は家庭のそとでもう見飽きるほど見てゐるのである。厭や味や小言はもう飽き飽きするほど家庭の外で聞かされてゐるのである。せめて吾らは家庭にゐる間だけでも吾らの人生を樂園としようではないか。吾らが外に出て人生の戰ひを戰ふとき、振返つて、歸れば樂しい明るい慰めらるべき家庭があることは何と云ふ力強いことであらう。諸君よ、この人生の樂しいオアシスを、決して苦い火宅とするな。あなたの天國に地獄を持ち込むな。一歩あなたの家庭に入るとき、そこを天國だと思へ。家庭の全員が、そこを天國だと思ふやうにするならば、其處に本當の天國が出來上るのである。

『運命の神も、快活な人には十歩も百歩も讓歩する』(Fate itself has to concede a great many things to the cheerful man.) と云ふ西洋の諺がある。日本の諺『笑ふ門には福來る』と云ふのと好一對である。天照大御神が岩所隱れをせられて天地たゞ暗黑に滿たされたとき、その暗黑の

眞つたゞ中にあつても悲觀せず、失望せず、陽氣な音樂を奏でつゝ明るい笑を笑ひ、つひにその暗黑を笑ひによつて吹き飛ばした天宇受賣命こそ生粋の古代日本人の標本であり『生長の家』人の好標本であるのである。苦難に面するとも朗らかに哄笑せよ。やがて諸君はその苦難を征服することが出來るであらう。

天宇受賣命ほ八百萬の神々の奏で出でる音樂につれて明るい踊りを踊つたのであつた。音樂にも色いろあるが、明るいリズムの音樂は聞く人の心のリズムを明るくし、肉體のリズムまでも調子よくし、その結果は心の惱みは勿論、肉體の健康をさへよくするのである。近頃、琴曲の名人でその演奏によつて他人の病氣を治したと云ふ實例が或る雜誌に出てゐたが、さもあるべきことである。輝くやうな明るい笑ひは人生の不幸を吹き飛ばし、不治症をさへ雲散霧消する不思議な効果をもつてゐるものなのだ。吾々が健康でなかつたり、不幸であつたりするのは自己の魂の中の天照大御神が岩戸隱れをしてゐるからであるのだ。魂の中の天照大御神が岩戸隱れをしてしまつたら、形の世界は悉く黯黮として光明を失つてしまふのである。何故なら形の世界は心の世界の映像に過ぎないからである。諸君も知らるゝ通り、皇典『古事記』によれば、天照大御神が天岩戸に御隱りましたとき、萬物悉く闇黑の中に沈衰してしまつたのである。其の時、心の岩戸

を開いて天照大御神の出御を促したところのものは、天宇受賣命の明るい動作に促がされた八百萬神々悉く高天原を揺り動かすやうな哄笑であつたのである。諸君はこれを單なる神話だと思ふか。然らず、これは生命の創化作用を說明する深遠なる象徵劇であつたのだ。

『生長の家』では吾々人間は皆神の子であると云ふ。吾々が神の子であるとは、各人は『天照大御神』を各自の魂の底に包藏してゐると云ふ事である。言ひ換へれば皆が天照大御神の御子であると云ふ事である。では、吾らは今日から神の子らしく朗らかに生き、各自に宿る天照大御神を、岩戸を開いて導き迎へ奉り、此の現實世界を輝かしい明るいものとしようではないか。『現實世界は世々吾が子孫の君たるべき地である。汝行きて治めよ、寶祚の榮えまさんこと天壤と共に極まりなからん』と天照大御神は宣うたのであつた。だが、各人は各自の現實世界を造るのである、そして此の現實世界は天照大御神の子孫が君たるときのみ、限りなく無窮に榮えるのである。若し諸君の現實世界が榮えないならば、諸君が病身であり不幸であるならば、諸君は自分に宿る天照大御神(明るい心)を岩戸の中に押し籠めて窒息せしめてゐるからである。心の岩戸を取除いて、いと清明と自己に宿る天照大御神を輝き出せるものは何れも天照大御神の子孫であつて、その人の支配する豐葦原瑞穗の國(即ち現實世界)は明るく無窮に繁榮せざるを得ないのである——

これこそ天照大御神さまの大豫言であつて天地は亡せるともこの大豫言は亡せないのである。

事物を明るく觀ると云ふ事は、事物を偏らず本當の位置に於て觀ると云ふ事である。事物を偏らず全體に關係さして觀ると云ふことである。空間的に一局部を觀ず、また時間的に一局部を觀ず、總べてを一つの神の圓滿無限にして無始無終なる愛と智慧との構圖の中に觀ることである。總べての暗さ、總べての悲しみ、總べての呪ひ、總べての憎みは自己が永遠の神、全體の智慧に對する關係を見失つた井蛙の管見から起るのである。どんな大作の繪もそれに使つてある一局部の繪の具だけを見るならば其のセピア色は糞土のやうに穢く、その墨色はタドンのやうに見苦しいであらう。

井蛙の管見が何故悪いかと云へば『迷ひ』と稱ふ井戸框によつて叡智の限界を遮られ眞理の太陽の光線を見得ないからである。さうして此の世界は狹いものだ、此の世界には光線がないと呟いてゐるのである。一と度び『迷ひ』を吾らが飛躍によつて跳び越えるとき、其處には廣々とした明るい世界が横たはつてゐるのである。

諸君よ、今を機會に飛躍せよ、新生は刻々諸君に近づきつゝあるのである。今が時だ。すべての柵を跳び超えよ、物質の柵を跳び超えよ、有限の柵を跳び超えよ、凡そ自己を有限に限る一切

の物を跳び超えよ。そして無限の生命の世界に出でよ。諸君が陥る井戸の框は外にはなくて自分の心のうちにのみあるのである。されば、自分の心の柵を跳び超えよ。一跳して如來地に躍入せよ。自己に宿る天照大御神をその十全の光りに於て輝き出さしめよ。爾に宿るキリストを磨き出せよ。イエスは常に『汝ら歡び勇め』と云つてゐたのである。彼は斷食する時にすら頭に香油を塗り、顔に紅を塗つて明るい顔をせよと云つてゐたのである。全ての宗教はその核心に於て一致してゐるのだ。憂鬱は諸君に宿る無限力を堰する關門の最も大なるものである。悲しみは諸君を暗黒の世界に押し込む天岩戸であるのだ。諸君よ、自分の心で牢獄を造つてわれと吾が迷ひて地獄へ墜ちるな。地獄の英語(HELL)は『周圍に牆壁をめぐらす』と云ふ意味から來た語である。諸君は自分で牆壁を築かねば地獄へ墜ちる氣遣ひはないのだ。諸君はみんな神の子ではないか、天照大御神の御分身御分靈ではないか。神の子が朗らかに笑ふほど自然な行事はないのである。諸君が明るく笑ふ時、忽ち諸君の本性たる『神の子』に立ち歸へるのである。諸君が神の子たる本性に歸るとき、明るく朗かな〳〵天照大御神の子孫本來の面目に復歸する時、諸君はもう其の儘で自由自在なのである。天岩戸は外にはなく、心で築いたものであるから、心が明るく朗らかなるその本來の面目に歸るとき、もう其處には天岩戸は消えてゐるのである。何よりも明るく朗

らかに笑ふ事が自己に宿る無限力を引き出す第一歩である。『明るく朗らかな神の子が自分である。あゝ自分が神の子である事が難有い。』今日から、就寢前の一分間と、朝眼が覺めた時の一分間とに、かう二十回程繰返して丹田に力を籠めた低聲で自身の心に言つて聞かせよ。そして機會ある毎に大笑せよ。諸君の運命と健康とは此の言葉の力と笑ひの力で日々にその前日よりも一層明るく改善されたものとなるであらう。この一文を以て本書の序文とする。本書は『生長の家』誌友が其の道場にて實際に私に人生指導を求められた際の對談であり、掲載の順序は第一章以外は座談の年代順に纂めたものである。

昭和十年三月二十日

明治神宮傍の寓居にて

著者識

人生問答篇

人生の悩みを解く

人生問答篇は私が諸方の會合に招かれて多くの誌友たちから質問された人生の諸問題に對して答へた私の實際の回答や、毎月生長の家出版部にある誌友の座談會で發表せられた誌友の人生相談に對する私の應答を編輯したものである。座談中、他の人々の回答は私の説と混同してはならないから拔いたのもある。一々の對話悉く實際の對話である。その中、一二の問題は實際の對話に質問されずして、手紙で質問されて手紙で回答したものであるが、人生問題として捨て去るに惜しいので對話の中に織り込んである。談話者の名前は發表して差支へないと認められる方々のそれは實名を用ひ、他は假名を用ひてあるが、悉く實在の人物である。人生篇に輯錄されたる內容は實際生活の成功不成功の問題や、金錢の取扱ひ方や、生活の根本態度や、戀愛問題や、男女相性、方角、日取、姓名、家相、人相、地相の吉凶問題や、病氣の問題や、神佛祖先祭祀の方法や、靈界と人間界との交渉や、反省の仕方や、悟りの根本的問題に到るまで、人生の日常生活に於て、誰も一應考へて見なければならない重要な問題の一切を含んでゐる。それには誌友が聖典『生命の實相』第一卷を讀んで心に浮んだり行當つたりした實際の疑問に對する回答が含まれてゐるので聖典第一卷と併讀されたい。

第一章　家庭爭議の解決を語る

内容——昭和九年一月二十八日及び二月二十五日、生長の家本部にて話されたる座談のうちより『家庭の狀態は吾が心の影』である眞理に觸れた座談を主として纂めたもの。

瀧本——私の宅では『生長の家』家族にして頂いて以來すべてが光明化されまして、殆んど悪いと云ふことがない。非常に平和で善い家庭になつたのでありますが、たゞ一つ老人の小言が多いのが缺點であります。あんなにまで云はなくとも好ささうなと云ふやうな小さな問題を、多くはお茶の問題ですが、漬物の鹽氣が足りないとか何とかクド〳〵詰らないことに引つかゝつて小言を云ふのであります。そんなに小言を云ひなさるなと申しますと、老人は、お前が小言を云はないから私が小言を云ふよりほかに仕方がないと申されるのでございます。何號かに伊東樣の大黑像の頭を撫でゝ念じたら子供の性質が直つたとありますので、私もやつて見ましたが、これは老人のために感應が悪いのか効かない。何とか此の老人の小言と云ふものが私の家庭から無くなれば私の家庭は申分がなくなるのでございますが、皆さんそれを無くする方法

はございませんでせうかな。

宮——私の體驗で申上げますると、皆な自分の心の影だと存上げます。環境は吾が心の影だと云ふことが『生命の實相』に書いてございますが、私は昨年の三月『生命の實相』を讀ませて頂きますまでは、私の家庭も恰度貴方樣の御家庭と同じやうで、老人の小言が絶えなかつたのでございます。そして貴方樣と同じやうに『老人の小言がなくなれば家庭がどんなにか明るくなるだらう』と考へてそれを久しく祈つてゐたのでございます。ところが『生長の家』を知らして頂き、聖典『生命の實相』を拜讀しまして以來、環境は自分の心の影だと云ふ事に氣付きまして老人が小言を云ふのは、どこかに自分に他の小言を云ふ心があるから『類は類を呼ぶ』心の法則で老人が小言を云ふのであるから、自分の小言を云ふ心を捨てようと決心しまして、それを棄てるやうにしましたところが、だんだん老人の小言が減つて來まして、近頃では殆ど小言を云はれなくなつたのでございます。

瀧本——ところが私の場合では、私は人に小言などを云ふやうな心は自分に微塵もないと思ふのです。世の中の人達をよく觀察してをりますと、小言を云はない家庭に育つた人は却つてユッタリと生長してよく發達してゐる。小言を常に云つてゐるやうな家庭に育つた人は却つてその

發達が惡い。だから小言の多いのは人間をよくする道ではないと私は以前から痛感してゐたのであります。そこへ『生長の家』を讀まして頂いて、言葉の力と云ふものを知らして頂き、心の法則を知らして頂き、惡いことは見ないやうにすれば消える、惡い言葉を成るべく使はなければ惡い事は出て來なくなると云ふことを知らして頂きましたから、出來るだけ人の惡い點を見ないやうに、出來るだけ人の惡い所に小言を云はないやうに心掛けてゐるのです。すると私が小言を云はないと、誰もほかに小言を云ふ人がないから拙老が注意せねばならぬと云つて老人が小言を云はれる。そんなにして老人に小言を云はしてはならないと思ひまして、少し私が代らうと思つて、私が少し注意を與へますと、好き機會を得たとばかりに老人の小言が火蓋を切つて愈々益々老人が口喧しく小言を云ふと云ふことになるのです。私は老人の代りに注意を與へますと云ひましても、私は永らく會社に勤めてゐて、人にはどう云ふ風に小言を云つたら角がたゝないかと云ふことを知つてゐますから、極當りさはりのない言葉を使ふのですが。どんなにしたら此の老人の小言がなくなるか、それを私は教へて頂きたいと思つてゐるのです。

宮——いま貴方樣のお話を承つてをりますと、小言を云はない家庭に育つた人はよく發達してゐる、小言を云ふ家庭に育つた人はどうもよく發達してゐない、だから小言は善くないと御自

分で極めてお出でになつてゐられる。だから小言は善くないと云ふ自分で作つた尺度におひつかゝりになりまして御自分が『小言は善くない、善くない』と心の中で御小言を被仰りながら、その御自分の御小言を被仰る心を直さうとなさらないで、何とか外の工夫をして此の老人の御小言を止めさせようとお考へになつてゐるから、老人のお小言が絶えないのではございますまいか。どうも私はさうのやうに考へさせて頂きます。

谷口――さうです。『小言は悪い』と老人に對して小言を云ふお心持になつてゐられるやうですなア。こいつを一つ超越なされば自然に家庭が善くなつて來るに違ひありません。

宮――私も『生命の實相』を最初讀まして頂きました當初は、これは善いことが書いてある。この通り皆の人間がして呉れたら此地上も直ぐ天國になるから、あの人にも讀ませたい、この人にも讀ませたい、讀ませて、その通りに實行させたい。あの人にも實行させたい、この人にも實行させたい。かう思つて焦りながら、自分がその通りの心にならねばならぬと云ふことには氣がつかないで、周圍の人が聖典の通りになつて呉れないのを誠にもどかしく、イラ〳〵として焦りながら人を責める心でゐたのでございます。ところが聖典を更によく讀みまして『環境は吾が心の影』と云ふことを知らして頂きまして、周圍の人が自分の氣に入るやうにならない

のは、自分の內部に自分の氣に入らない心があつて、それが周圍に映つてゐるのだと氣がつきまして、他を直さうとするよりも、先づ自分の心を直さねばならないと痛感したのでございます。人に讀ませて、人に善い心になつて貰つて、周圍から自分が善くして貰つて自分は元の儘でゐたいと思つてゐました間は、私が『生長の家』を母に勸めて見ましても、良人に勸めてみましても、老母も良人も『生長の家』に興味を有つてくれないのでございました。その頃お盆の佛樣の供養にと思ひまして『これは難有いお經であるから』と申しまして、生長の家の聖經『甘露の法雨』を佛前であげましたら、母が大變機嫌を惡くしまして『いくら難有いお經でも、他宗の御經を佛前であげてくれたら佛樣が迷ふから』と被仰いましたので、その事を谷口先生にお話し致しますと、谷口先生は『お母さんが眞宗なら、眞宗の御經をあげたら好い。生長の家も南無阿彌陀佛も結局は同じことだ』と被仰つて下さいましたので、それ以來、眞宗の御經の本を買つて來まして、振假名を賴りにそのお經を佛前であげることに致しましたら、老母が大變喜びまして、それ以來却つて『生長の家』の話も素直に聞いて下さいまして『生長の家』へ行くと云ふことにも反對なさらなくなりました。相手の信仰を貶す心があるから、相手からまたこちらの信仰を貶されることになるのだと分りました。皆自分に與へられるものは、自分

の心の影だけのものを與へられるのでございますね。昨年『生命の實相』の扉に何か題字を書いて下さいと谷口先生に御願ひ致しましたら、私はその題字を筆で書いて頂きたい、ペンなどで書いて頂きたくないと思つてゐたのですのに、谷口先生はペンで『生命の實相』と書いて下さいました。それで今年も『久遠の實在』が出ました時、『題字をお書き下さい』とお願ひ致しましたが、矢張りペンで『久遠の實在』などゝ書いて下さるのぢやなからうか。私は筆で『行雲流水』と書いて頂きたいのになアと考へてゐました。すると谷口先生は今迄持つて何か書いてゐられたペンを措いて何か取りにお起上りになつた。見ると硯箱を持つて來て墨をおすりになるのでございます。何と書いて下さるかと思つてゐますと、『書けました』と云つて私の前に置いて下さつたのを見ると『行雲流水』と私が書いて欲しいと願つてゐたその通りの文字が、願つてゐた通り墨で書いてあるのでございます。その時私はハツと思ひました。谷口先生程の方になられると、私の心の中の狀態が判るのだと思ひましてねえ。昨年私の心境がまだ進まなかつた頃には筆で書いて貰ひたいと思つてもペンでないと書いて下さらなかつたのに、だん〳〵私の心境が進んで來ますと、その願ふ通りに筆で、文字までも願ふ通りのことが書いて頂けるのでございますから、書いて貰ふことも、して頂けることも、一見相手がして下さるのだ

と思へますけれども皆自分の心の影が映つてゐるのだと一層ハッキリ解らせて頂いた譯でございます。

何故私が題字に『行雲流水』と云ふことを書いて頂きたかつたかと申しますると、私は此の『行雲流水』のやうに何物にも引つかゝらない心境になりたいと常に願つてゐたからでございます。私が子供の行ひに對して色々と引つかかる『あれは悪い、これは悪い』と引つかゝつて小言を云ふ。すると老母がまた私に對して『あれは悪い、これは悪い』と引つかかつて小言を言ふのでございました。『人間は小言で善くなるものではない。神の子たるその實相で善くなるものである』と云ふことを『生命の實相』を讀んで悟らせて頂きました結果、宅の娘がお客様の前でこんな恰好に足をなげ出して不行儀なことを致しましても、今迄とは異つて私は少しも小言を云はなくなりました。先日も私の小言多い性質をよく知つてゐる友達が來まして『貴女は前には、側で聞いてゐると全く聞き苦しい程に子供に小言を云つてゐられましたが、此頃は子供がどんなことをしてゐても子供に小言を云はないのですねえ。貴女ももう年が五十を過ぎたから、衰へて子供に小言を云ふ氣力が無くなつたのでせう』と云ふ位に私自身が變つて來たのでございます。『いゝえ衰へたのではありません。前には老眼鏡をかけねば小さな文字が

見えなかつたのが、近頃は却つて若返つて老眼鏡をかけないでも小さな文字が讀めるやうになつた位です。子供に小言を云はなくなつたのは、子供は私の心の影だと云ふことを悟つたからです』と云ひまして、『生長の家』の話を致しましたやうな譯でムいましたが、其樣に私の子供に對する小言が減つて來ますと、老母の私に對する小言も減つて來まして、私が『生長の家』へ行くと申しましても、婦人會へ行くと申しましても少しも小言を云はなくなり『サア〳〵往つておいで』と云つてくれるやうになりました。それで小言を云はないでゐて、子供の方も益々善くなるばかりで難有いと思つてゐるのでございます。

佐瀨――私も老人からよく小言を云はれたものでございまして、それを矢張り宮さんと殆ど同じやうな心の持方で老人が小言を云はなくなつた體驗を有つてゐるのでございます。私は『愛する』と云ふことは全てのものを廣い心を以つて愛さなければならない。自分の好きなものだけを愛して自分の好まないものを愛さないやうでは本當ではない。何でも平等に愛するのが本當である。何物も本當に惡いものと云ふものは一つもない。小言でも決して惡いものではない。小言を云つて下さるお氣持と云ふものはこちらのことを色々深切に考へて下さるから小言も出るのである。それを思ふと小言も難有いものである。私は母の小言を今迄五月蠅い惡いものだ

と考へてそれから逃れよう逃れようと考へてゐた、私の方で何とか胡魔化して逃れよう逃れようと考へてゐたものですから、老母の方にしましても、これだけ云ふのにまだ判らぬか、お前はまだ私の心持が判らぬのか、まだ此の私の深切が解らぬのか、これでも解らぬのか、これでも解らぬのかと、益々小言が追及して來るやうになつてゐました。それが私が小言を嫌つてゐたまでの狀態でありましたが、『小言を愛しよう』と決心するやうになりましてからは小言を反撥するやうな氣持を起さない。しみ〴〵とその小言を難有く受入れるやうにする。『成る程左樣でございました。』とその小言を素直に受入れる。それも口先だけでさう云つて胡魔化すのではなしに、心から相手の氣になつて受入れるやうにしましたところが、近頃では老母は少しも小言を云はれなくなりました。今迄は手紙に何の氣なしに書きました言葉でも直ぐ惡くとられまして始終その返事に小言を頂いたものでございましたが、小言も愛しなければならない。小言も難有いのである、成る程老母が斯う云つて下さいますので難有いと思ふやうになりまして以來、手紙の上でも少しも小言を頂かずに濟むやうになりました。

瀧本――いや、どうも難有いお話を伺はせて頂きました。

野田――私も一つ此處で懺悔させて頂きたいと存じます。私も『生長の家』の眞理を知らして頂

きまして以來、出來るだけ多くの人に『生長の家』の眞理を知らしてあげたい、人を善くしてあげたい、人を善くしてあげたいと思ひまして『生長の家』を勸めるのですが、なか〳〵讀んでくれる人が少ない。第一、私の家内が『生長の家』を讀んでくれないので、家の中の信仰が一致しないので困つてゐるのです。今、宮さんのお話を承りまして家内が私の信仰に反對するのは私に何か惡いところがある、それが映つてゐるのであると氣付かせて頂きました。家内が惡いのではない、自分が惡かつたのだ。これを私は家内に云つて手を突いて詫びようと決心しました。さうしたら家内も『生長の家』を讀んでくれるやうになつてくれるかと存じます。

宮――貴方が奥さんにおあやまりになりましても、奥樣は『生長の家』をお讀みにはならないでございませう。私の體驗ではさうでございました。『生長の家』を讀ませるのは御自分が『生長の家』にならなければならないと思ひます。先づ自分自身が『生長の家』になりまして、自分の身體で『生長の家』を讀ませるのでございますね。

野田――私が家内に詫まらうと思ひましたのは、自分自身の心を清算して了ひたい。自分の心を淨めて引つかゝりをなくして了ひたいと云ふ心からでございます。決して家内に『生長の家』を讀ませる方便としてゞはございません。今迄でも家内との調和が得られないのは、自分の心

に『神の子の實相』があらはれてゐない。家内が惡いのではない自分が惡いのだと氣付いてゐましたので家内に手を突いて詫まらうかと思つたこともございましたが、家内に謝罪つたら良人の威嚴に關すると云ふやうな卑怯な心持がしてゐましたので詫らずに『ニセ物の自分』を通して來たのですが、この『ニセ物の自分』を辯解して守らうと云ふ心がある間は『本物の自分』があらはれてゐない。だから此の『ニセ物の自分』は惡かつたと詫まつて捨てゝ了ひたいのです。この『自分は惡かつた』と詫びようと云ふのは、此の『ニセ物の自分』を清算して『本物の自分』を出したいためなのでございます。

谷口――貴方は『自分が惡かつたのを詫まらう』と被仰いますが、どこをどう惡いとお思ひになるのですか。そこをハツキリしなければ……。

野田――さあ、それは……。（一寸考へて）どこもかしこも惡いのです。

谷口――貴方の奥樣は稻荷さんを信じてゐられるのでせう。貴方は奥樣が稻荷さんを拜む事は本當の信仰ではない迷信だと云つて輕蔑するお心がおありになるから、奥樣の方でも防戰的に貴郎の信ずる生長の家は迷信だと云うて輕蔑的態度になるのぢやありませんか。

野田――別に輕蔑もしませんけれども、本當の信仰でない位は思つてゐるかも知れません。その

稻荷さんも本來は私がお祭りし始めたのでございまして、私が今迄あまり色々のものを信じて、西式もやつて見る、手のひら療治もやつて見る、稻荷さんも祭つて見ると云ふ風で、色々のものに移り氣だつたものですから、折角『本當のもの』を掴んだ時にも、カラキシ家內の信用がないのでございます。

谷口――今の不信用は、過去の貴方の信仰の動搖の反映なのでありますから、その反映はやがて過ぎ去り、やがて現在の動搖しない『本當の信仰』の反映として動かない信用を得ることになりませう。

宮――私の體驗を申しますならば、私の同窓で此の人こそは『生長の家業書』を讀んで下さるに相違ないと思ひまして、或る日一冊持つて往つて差上げますと、一寸披いて御覽になりまして「この御本なら以前誰かに貰つたことがあります。こんな本は駄目ですよ。醫術の發達してゐる現代に病氣の時にも醫者も藥も要らないなんて書いてある。そんな亂暴な話はないと思つて讀むのを止めました。病氣の時には醫者も藥もなくては治りやうがない」と被仰るものですから、素直に『さうですか。お讀みにならないやうなら仕方がないから』と云つて、その御本をまた返して貰つて歸つて來たのでございますが、その時思つたことでございましたが、折角私が

善い本を持つて往つてお勸めしてもさう被仰るのは、これは『私の心のうちに善いものを與へられても、善いものだと採らないで、惡くとる心が潜んでゐるからである。また一部分を見て全體を推し測る輕卒な心があるからだ』と反省して氣付かせて頂きまして、それ以來、自分に與へられるものの善さを必ず探して難有く受け取るやうに努力しまして、一部分を見て全體を惡いなどゝ云はないやうにし、全體的に視野を廣めて行きますと、どんなものでも其處に善いところがあると云ふことを聖典に照らして見て行くやうにしましたところが、それから一年經つて、その同窓の友達に數日前會ひましたら『私も「生命の實相」が讀みたいから一揃買つて來て下さい』と被仰るのです。やはり私の心の反映なのでございますねえ。それがねえ、斯うなのでございます。佐藤定吉博士と申される方で基督教に熱心な先生がございます。その方の話を私は十年程も前に聞いたのでございますが、その佐藤博士の御兄弟に佛教の僧侶がある。その坊さんが或る日佐藤博士の宗教講演をきいて『私も基督教になりたいから洗禮してくれ』と被仰つた。すると佐藤博士は『貴方は佛教でよろしい。佛教は止めなくとも佛教信者は佛教で救はれる』と被仰つたとか聞いてをりまして心の廣い方であると感心してゐたのでございますが、先日その同窓の友達に會ひますと、近頃佐藤定吉博士の講演を聽いたのださうでございま

す。そして本來佛教信者だつたのでございますが、佐藤定吉博士の講演をきいてから基督教になり近頃は聖書を讀んでゐるとその友達が申しますものですから『それは大變結構なことですが、聖書をお讀みになつて意味が充分にお判りになりますか？』とお尋ねしますと『讀んでも難かしくて本當の意味が判らない所が澤山ある』と被仰いますので、それなら『生命の實相』を是非お讀みなさい、それを讀んだら本當の意味が判りますよ。例へば聖書に『敵を愛せよ』と云ふ言葉が書いてありますが、これなども普通の牧師さんならば敵は自分を害する存在であるけれども神の心を心として赦して愛するのだと說明なさいませうけれども『生命の實相』を讀んで見ますと、敵と云ふものは本來無いものだと云ふことが解りますから、敵を愛すると云ふ神の命令が、單純に理窟なしにそのまゝ承認することが出來るやうになるのです。『右の頰を打つものがあれば左の頰をも廻らしてこれに向けよ』と云ふイエスの教へでも卑屈な教へのやうに見えたり、イエスの教へ通りに侵略する者に無抵抗にその侵略に委すと云ふことになつては生存權を脅かされて了ふ、これは實行不可能の教へであると思へたりしますけれども『生命の實相』を讀んで、人間と云ふものが物質的存在ではなくて神の子であり金剛不壞の存在であると云ふことが解りますと、右の頰を打つ者に左の頰を差出すことも決して卑屈な心ではな

く、最も強者の自覺があつて出來ることであり、それがまた決して生存權を犯されるやうには成らないで、却つて確實な生存を確保する結果になると云ふやうなことも解ると申しますと、『そんな好い本なら讀みたいから買つて來て頂戴』と被仰るものですから、先日一冊買つて持つて往つてあげたやうな譯でございます。やはり私の心が以前には一部分を見て全體を惡評する心や、善いものを與へられながらそれを惡く取る心があつたからその心が友達に映つて善いものを勸めても惡く取られ、一部を見て全體を惡評されてゐたのですが、私の心が段々直つて來ますと、前には『惡い』と思はれてゐたものでも『これから、もう一度讀んで見よう』と云ふことになつたので、皆な私の心の反映なのでございます。

私の主人に致しましても、讀書家ではありますが、斯う云ふ修養本を讀むと云ふことは前には好まなかつたのでありまして、十年程前に賀川豐彦さんの『死線を越えて』と云ふ本を近所で借りて來まして讀まうと思つて机の上に置いてゐますと、主人が見付けまして『こんな本をお前讀むのか、借りて來たのなら返して了へ。俺は賀川豐彦は僞善者だから嫌ひだ』と被仰いました。翌日それをまだ返さずに机の上に置いてゐますと、『お前まだそれを返さずにゐるのか。返さないなら破つて棄てゝ了ふ』と被仰いました。それが今度『生命の實相』を机の上に置い

てゐますと、破つて棄てるとは被仰りませんので、流石に本の位が異ふと思つてゐたのでありますが、それでも『生長の家』には贊成なさらないで、私が神想觀をしてゐますと、『氣狂ひのやうなことをする、そんなことをする暇があつたら家の仕事をせよ』と被仰いましたが、近頃では少しも反對せられないで、先日も主人の知人で修養團の人が來ましたら、主人が私に對つて『此の人にお前の研究してゐる「生長の家」の話をしてあげて御覽』と被仰る程になられました。最初は贊成なさらなかつたのが『生長の家』の本はお讀みにならないが、私の心持や行ひが變つて來ましたので、私の身體で『生長の家』を讀んで下さつて『生長の家』とはどんなものだと云ふことをだん／＼知つて下さつたからだと存じます。

谷口――身體で『生長の家』を讀ませたゝめに家族が善くなられた方では、こゝにも杉野さんがゐられます。御自分の心境が非常に朗かになられまして何にも屈托のない自由自在の心境になられました結果、奥樣が杉野さんの自由な朗かな心境を羨ましくお考へになりまして『私も生長の家へ往つて見たい』と云ふやうになり、夫婦揃うて生長の家へお越しになるやうになられました。

杉野――ところが此の四五日來憂鬱が來ましてねえ。理由が判らないで、心境が朗らかになれな

い。別に原因がないのに心が憂鬱なのです。さうしますと今迄順序がトン〳〵拍子に往つてゐた會社の仕事が一時失敗りましたのです。それは委してある店の者が不良品を買つたと云ふやうな事ですが。私の心が朗かであればこんな事は起らない。私の心が朗かでないために、それが會社の仕事、店の者の仕事に反映してさう云ふことが起つたのであります。實に環境は吾が心の影と云ふ譯ですねえ。それでどうして私の心に斯う云ふ朗かでない心境が起つて來たのであるかどうも判らない。ところがよく〳〵反省して見ますと四五日前に『××××××』と云ふのが來ました。それをポケットに入れて電車の中で讀んだのであります。いつでも會社へ往復の電車の中では聖典『生命の實相』を讀むやうにしてゐましたのですが、丁度『×××××』が來たものですから、此の雜誌も『生長の家』の分身だと思ふものですから、讀んだら眞理を知る上に同じ効果があるつもりで讀み始めたのですが、讀んでゐると『生長の家』と少しちがふところがあるやうな變な不安な憂鬱な氣がして來たのです。何だかその理論は物質の存在を認めてゐるやうな、小我自我の存在を認めてゐるやうな點がありますので、讀んでゐるうちに物質も存在する、現象も存在すると云ふやうな氣がして來たのです。

谷口――『ニセ物の我』とか『本物の我』とか云ふ區別はない。いづれも眞我の顯現だと云ふ、

僞說に迷ひなさるな。生長の家で『物質は無い、現象界は蜃氣樓のやうに心の影に過ぎない』と申しますのは理論や理窟でさう云ふのではなく、實際眞理に於て『物質は無い』から無いといふのであります。實相から觀て現象は映象であるから映象であると云ふのであります。そのほかに別に理窟はないのであります。無論聖典『生命の實相』の中には椽大の筆を揮つて物質の無い理論が詳しく書いてあります。併しそれは實相の悟りに導くためにさう書いてあるだけでありまして、理論が斯うだから『物質は無い』と結論するのではありません。理論は、眞實の悟りに導く方便として後から造つたものであつて、理論より先に『物質は無い』と云ふ眞理があり、その眞理の啓示を解りやすく納得させるために理論を說いてゐるのであります。だからその眞理に權威があつて讀んで信ずる人の心に『生命の實相』をさとらせ、自由自在の心境に達せしめ、その副作用として醫術難治の痼疾でもズン／＼治る例が澤山あるのであります。無論、理論はどうにでも附けられる『物質は有る』とでも『ニセ物の我こそ本當の我である』とでもどうにでも附けられます。そして其の理論を信じたい者は信ずることが出來ます。それを信ずることも自由であります。併し、さう云ふ理論を信じますと、信じなくとも多少在來の信念に動搖を來しますと『物質がある』と云ふ自己の信念の結果、物質によつて自分自身が自

繩自縛せられることになり、先の自由自在な心境が不自由な心境になり、不完全なる『ニセ物の我』を眞我の一顯現として肯定する結果、不完全な状態が自分の世界に一層多く顯れて來、今までトン〳〵拍子に往つてゐた事がトントン拍子に行かなくなるのであります。吾々が五官で物質を觀、現象を觀、それに立脚して色々複雜な理論を作りあげて、物質もある、現象もあると肯定するのはいとも易しいことなのであります。科學者は皆なそれをやつてゐる。併し實相覺で『物質は無い』と云ふのは理窟ではないのです。誰でも頭の善さを信じて理窟で眞理に這入つて往かうとして理窟を益々複雜にし、『物質は無い』と單純に承認すれば可い所を、『物質は無いと有るとを超越したところの有るである』と無理に複雜化して云つたり『ニセ物の我は無い』と單純に否定すれば好い所を『ニセ物の自分も眞我の一顯現として實在である』など〻複雜に云つてゐられると、いつの間にかその人は物質があるやらないやら、自分自身で理窟を云つてゐながら判らなくなるのです。理窟は迷せるものです。

南――それでは我々は『物質は無い』『ニセ物の我は無い』と單純に信じてゐれば一番好いのでございますねえ。

谷口――さうです。それを反駁する理論づけをすることは、肉眼で見て有るやうに見えるものを

有ると云ひ、意識に有るやうに感じられる「我」を有ると云ふのですから最も易しいことで、最も信じられ易い理論が出來るのですが、それでは今迄の人間智慧であつて人間が新たに生れ更つて救はれる眞理にはならないのです。

南――それでもお釋迦さんは涅槃經で「我」があると云ふ事をお說きになつたではありませんか。

谷口――さうです。お釋迦さんは四十餘年間「無我々々」と云つて「お前達の我だと感じてゐる我と云ふものは本來無いものぢや」とお說きになり、徹底的に「ニセ物の我」の非存在をお說きになつた後、法華經と涅槃經とに「本物の我」の存在をお說きになつたのです。般若經に「無我」が說かれて、涅槃經の「有我」が生きてくるのです。般若經の如くに「我」の存在を否定することをせず、「ニセ物の我」と云ふのも「本物の我」と云ふのも畢竟は一つの眞我の顯はれだと云つて「ニセ物の我」を肯定主張することになりますと、我が儘勝手次第、生存競爭、弱肉强食、病氣の我の存在をも肯定することになり、其處からはショウペンハウエルのやうに暗い人生觀が生れて來ることになるのであります。

原――此の行爲は「本當の我」の顯れであるか、「ニセ物の我」の顯れであるかと云ふことはどう

して區別を付けたら好いのですか。

南――誰か悟りと云ふものを持つて來てこれが悟りぢやと見せてくれませんか。

南――(誰も無言なので自分で悟つて)心と云ふものを見せてくれと云ふのと同じか。ハッハッハッ……。

谷口――吾らの實相は本來自他一體のものであるから、ヨリ多く自他一體の働きをするものはヨリ多く『本物の我』が顯はれてをり、自他一體を切り割く働き――利己主義、忘恩、反逆などと云ふ『自他一體を切り割く働き』は『ニセ物の我』が顯はれてゐるのです。

南――この頃よくある寄附行爲の勸誘ですが、それに應ずるのが『本物の我』が顯れてゐるのでせうか。自他一體であるからには求むる儘に欲する者に與へなければならないでせうね。

塚田――私の現在の心境では、與へたい時には與へる、與へたくない時には與へない。それで『本物の我』が顯はれてゐると思ひます。與へたい時には與へることによつて相手を生かすし、與へたくない時には與へないことによつて相手を生かす。私は以前には一燈園の説などによりまして、自分より貧しい者には必ず與へなければならぬなどゝ信じてゐましたが『生命の實相』を讀まして頂いてから、與へても與へなくとも、內からの催しに從つて自由に振舞つて皆を生

かす道があることを知りました。

山田――誰かゞ自分に求めて來る場合には、何を求められませうとも、それは神から自分に遣はされた使ひであると思ひ、是非の分別を用ひず、自分考へを出さずにすべてその要求せられる儘に與へるのが本當ではないでせうか。

塚田――その心境は私の心境より確かに上だと思ひますが、現在の自分として、其の境地まで達せられないのです。

南――お二人とも各々御自分の職業によつて、その生活態度を述べてゐられるやうでありますなア。塚田さんは質屋さんだから、お客さんが値打のない品物を持つて來てそれで澤山金を貸してくれと云ふ。それに一々要求通り貸してゐては破產して了ふから、貸したいと思つたゞけは貸すし、貸したくないと思つたら貸さない、それで好いと云ふ哲學をお拵へになつたのでせう。山田さんはまた洋服屋さんだからお客樣の求めるまゝに洋服を拵へてあげれば、拵へてあげる程商賣が繁昌するので、求められるまゝに是非の分別なしに與へると云ふ人生哲學をお作りになつたのでせう。（一同笑ふ）しかし、この二つの生活態度は眞理の上からどちらが優つてゐるのであるか、谷口先生の批判を仰ぎたいと思ひます。（一同、谷口氏を注視して固唾を飲む）

谷口――山田さんの求められる儘に總てを與へると云ふのは自他一體の極致であつて、大きな愛の行爲であります。また塚田さんが相手に從つて與へたり與へなかつたりすると云ふのは義の行爲であつて又尊いのであります。相手の持つてゐる雰圍氣に從つて與へたい時には與へ、與へたくない時には與へない。即ち相手の心が自分に映つて、その映つた相手の心の點數に從つて報いて行くのであります。だからこれは、義の行動である。百點の價値ある者には百點を與へ、一點しか價値ない者には一點しか與へない。それで、一點を貰つた者が口惜しく奮發して努力することになれば、その義の行爲が生きて來る。愛もまたジヤンバルジヤンに盜まれても盜まれても、お前に與へたのだと主張してゐるミゼラブルのミリエル司祭の愛のやうに徹底して一點のものにも無限の點數を與へて吝まないやうになるとジヤンバルジヤンの神性を生かすことが出來た。愛も義も結局神の兩面の働きであるから、山田さんの說が塚田さんの說に優ることもなければ、塚田さんの說が山田さんの說に優ることもない。愛に秀でた人格と、義に秀でた人格とはどちらもそれは天分であつて、どちらもに神が生きてゐるのだと思ひます。『このどちらも好い』と云ふことが判らないで、こちらに限ると云ふ頑張りが出來ますと、自分と行き方の違ふ人を見ると腹が立つて來たり、家庭でもごたごたが起きて絕えないと云ふことに

なるのであります。

宮――家庭の環境も吾が心の影だと云ふ箴言で思出しますのは、主人は義齒を入れてゐまして、それを夜、眠しなに外して枕元の盆の上に置いて寢るのでございます。毎朝それを私が臺所へ持つて參つて綺麗に掃除するのでございますが、或る朝女中がそれを掃除しようとして誤つてその義齒を二つに割つたのでございます。女中がそれを私に打明けまして『旦那樣に謝罪りにこれから往つて參ります』と申しますから、『それは私が洗ふべきものを私が洗はないで割つたのであるから、それは私の罪である。物を傷けるやうな心が私にあるから斯う云ふことになつたのであるから、私も一緒に往つて詫まりませう』と云つて、主人の枕許へ往つてお詫び致しますと、主人は少しもお咎めにならないで、ニコ〳〵笑ひながら『それは接がせれば接げるだらう』と被仰つたのです。それで私は別室へ退いて女中に申したことでございますが『お前は麁相をしてあやまりに行つて、旦那樣がお叱りにならずにニコ〳〵してゐられたことをこれまでに見たことはないでせう。あんなに旦那樣がお小言を被仰らないのは何故だと思ひます？それは斯う云ふ麁相をすると云ふのは、皆な自分の心に過ちがあつて、その心の間違ひが形の上に映つて、かう云ふ失策をしたのであると云ふ自覺があるから、眞から自分が惡いのだと云

ふ自覺があるから、眞から自分が惡いのだと云ふ自覺があつて謝罪つてゐるのですから、その自分の惡いところが何處にあると云ふことを眞に知つて謝罪つてゐるから、神樣が私をもうこれ以上追求する必要がないから追及してお咎めなさらないのですよ。此の義齒が破れると云ふことは、形の上では今朝割れたのですけれども、心の世界ではもう三日も前に割れてゐる。私の心のうちに、齒をヒヾわらせるやうな心が三日も前の晩に起つてゐたのです。私にはそれがよく判ります。それは私が惡いのです。だから、私がいつも掃除する筈になつてゐる義齒が毀れたのです。併し、私の掃除する筈になつてゐる義齒を貴女が代りに掃除して破るやうになつたのは貴女も亦惡い所があるのですから考へて御覽なさい』と私は女中に申しました。女中は『生長の家』の誌友にもなつてをり、『生命の實相』を讀んでもゐるのですから暫く考へてゐるやうでした。私が三日も前に心の世界で義齒が既に割れてゐたと申しましたのは、實は三日前の午後、女中を外へ使ひに出しました所が、夕方になつても中々歸つて來ない、夕飯時になつても中々歸つて來ないのでヂレ〳〵してゐますと、夕飯時に遲れて歸つて參りましたから、『お前何故そんなに晩くなつたのだ』と申しますと、一家七人の瓦斯心中があつた。今日はその葬式があつたので、それを物珍らしさうに眺めてゐたので遲くなつたと申すのでございます。私が

思ひますのに『一家七人家族心中するのはよく〳〵のことがあつてのことである。それを見世物のやうに見物して歸るとは何事であるか。さう云ふ葬式の所に出會せば靜かに敬意を表して敬虔に合掌して見物などせずに歸つて來るべきものであるのに』とかう思つて私は心で非常に噛んで割つたやうに云つて叱り付けたい氣が起つたのでございます。此の時に心の世界では、私のいつも扱ふ義齒が既に割れてゐたのでございますね。その時は言葉ではそんなに叱りませんでしたし、女中がするべき仕事を忘れてそんなものを見物して歸るのは私にも矢張りさう云ふ日々の務めを忘れて我儘をする心があるからだと反省しましたが、一時は我にもあらずガミガミ叱りたい氣がしてゐたのでございました。

女中が私の質問にどう答へるかと待つてゐますと、女中は『三日前の晩は私がどうも惡うございました。お使ひに參りまして途中で七人心中の葬式を見てゐまして、奥様を怒らせ申しました。あれを思ひ出しました。あれが惡うございました。』と申すのでございます。『さうでせう。私が腹を立てたので心の世界では既にその時義齒が割れたのですが、それを割るやうにし向けたのは貴女ですから、貴女に連帶責任がある。だから、私が扱つて割る筈の義齒を貴女が代りに扱つて割ることになつたのですよ』と云ひきかせますと、女中もよく解つてくれまして、近

頃では、私の宅では何が起つて來ましても、みんな自分の心の影だと反省しまして、家庭の中が實に穩かで調和して往つてゐるのでございます。

瀧本――唯今は大變難有いお話を承らして頂きました。私の宅は唯今申しました通り、老人のお小言のほかには、お蔭樣で何一つ惡いと云ふことはなく、殊に難有いのは病氣に對する恐怖心が全然なくなつたと云ふことでございます。先日も私は知人一同と會食致しましたが、その中の魚の刺身に古いものがあつたらしく會食者一同いづれも吐き瀉しをやつたのでありますが、私は吐くたび毎に『これは難有い、内部から治す力が働いてゐるのだ』と思ひ、瀉すたび毎に『これは難有い惡いものが皆出てしまつて治るのだ』と思ひますから、近來こんなに愉快な吐き瀉しをやつたことはございません。(一同笑ふ)だから吐き瀉しを夜徹し、やつてゐながら少しも疲勞しないで、翌朝は會社へ出勤しようと思ひ、鏡に向つて例の通り顏に剃刀を當てようと思ひますと、顏中に蕁麻疹のやうな斑點が出來、處どころ皮膚の下の方からポチ〳〵と紫色の斑點が透いて見えるのです。これでは電車に乘つても一緒に乘る人に不快な目をさせるに過ぎないと思ひまして、急に電話をかけてその日一日會社を休むことに致しましたが、顏面のみならず身體中全體に出てゐる斑點が四回の神想觀でスッカリ治つて了ひました。翌日

會社へ出勤しますと餘りに完全に治つてゐるので假病を使つて休んだやうで恥かしい位でした。一緒に會食した友人を見舞つてやりますと、いづれも醫者にかゝづて藥を飮んでゐて、それでゐて私ほど早く治らないで桃色や紫色の斑點を皮膚に出してみんなまだ寢てゐました。神想觀が病氣にこんなに効果があると云ふことは今度の體驗で一層ハツキリ解りました。

谷口――病氣の症狀も『家庭の中の小言』と同じやうに、これは『身體の中の小言』ですから、矢張り家庭の中の小言をなくする方法と同じやうにして治るのですよ。佐瀨さんの被仰つた『小言も愛さなければならない、小言を云ふ人の身になつて、あゝ云つて下さるので難有いと思ふやうになつたら、却つて家庭の中の小言がなくなつた』と云ふ事實と同じやうに身體の中の小言でも同じことです。身體の中にも治す力と云ふ舅姑がゐて、それが自分の心、身體に應じて小言を云つて下さるのです。その小言が熱となり、痛みとなり、苦しみとなり、吐瀉となり、下痢となつて現はれるのですから、自分の內部に働いてゐる『自然療能博士』と云ふ舅姑の心持になつて『こんなに私の身體に氣を付けて下さるのだ、難有い!』と云ふ氣持になつて、發熱でも疼痛でも難有く受ける氣持になれば速かにその病ひが治つて了ふのです。

荒川――神想觀のとき雜念が起つてくるのは、どう云ふやうに處置したら宜しうございませうか。

谷口――雑念と云ふものも、病氣の症狀や家庭の小言と同じことです。小言は家庭を善くする働きであつて、その小言の使命を知り、此の小言は難有いと思つて反撥せずに素直に受けるやうにしますと、自然と小言を云ふ必要がなくなつて家庭が平和になり統一するのと同じやうに、雑念と云ふのも實は心を平和にして精神統一をする働きがあるのです。空の雲と云ふものは一見、空を曇らしてゐるやうに見えますけれども、雲と云ふものは本當は空を綺麗に澄切らす働きをするものなのです。雲が起るので空氣中の水分や塵埃が綺麗に浚へられて雨となつて取去られるのです。雲が起らなければ空氣中の水分や塵埃は中々急には取去られない。さうすると雲と云ふものは空を曇らす働きをするやうでありますけれども、本當は、空を淨める働きをしてゐることが解るでせう。それと同じやうに雑念妄想と云ふものは心を曇らす働きをしてゐるやうに見えますけれども、雑念妄想が起るので、過去から蓄積されてゐた心の塵が表面に浮び出て心が一層速かに澄んでくるのです。雑念とは何ぞやと云ひますと、過去から無意識圏内に蓄積されてゐたところの色々の妄念迷想が消えんがために意識の表面に浮び出して來ることなのです。だから、最初は神想觀をすればするほど雑念が浮んで來る。その雑念を假りに第一の雑念と名付けますと、第一の雑念は迷ひの消えんがための雑念なのでありますから、そのまゝ

で好いのです。その雜念に引つかゝつて、『これではどうもならぬ』と云ふ念を起すと『第二の雜念』を新たに起すことになります。第一の雜念は、宿念の集積の自然に戻ける働きとして起るのですから、業を淨める働きであつて、善いばかりで惡い働きはないのですが、『第二の雜念』は新たに心が引つかゝつて生ずるものでありますから、これは新たに流轉する業因を作ることになるのです。だから、神想觀中起る雜念は起るがまゝで好い。雜念の起るのは、雲が起つてやがて空氣を澄み切らす働きとなるやうに、やがて一層心を透明に澄み切らすためであると信じ、雜念は雜念で、それに心を引つかからせないで放置して、一方に於て定められた通りに、『神の生命我れに流れ入り吾が内に神の生命滿ちてそれに生かされてゐる』と撓まず念じてをれば、やがて忽然、心に實相が顯現することになるのです。雲は空氣を澄み切らす働き、症狀は病氣を治す働き、雜念は心を澄み切らす働きなのです。

南――煩惱即菩提と云ふ譯ですねえ。

荒川――我々は過去に色々『集積』があつてそれを淨めるためには色々の努力をしなければならない。一朝一夕にその『集積』が淨まらない。善くならうと思へども善くなれない憾みをうたいゝ感ずるのであります。

谷口――達磨が『悟り』と云ふことを云ひ出した爲に悟らぬ人が殖え、『大乘起信論』に無明の起源が論ぜられたゝめに『無明』はあると思つて迷ふ人が殖えたのです。『無明』なんか本來ないのですよ、集積は無いから抛つて置けば自然に消える『迷ひ』は本來無いから抛つて置けば自然に消える。『ある』と思へば引つかゝる。無いと判れば自由自在なのです。

荒川――成る程よく判りました。

谷口――『迷ふ我』があると思ふから色々と苦勞して迷ひから覺めねばならぬと思ふのですが、『迷ふ我は無い』と知つたら『迷ひ』から覺めねばならぬと苦勞する必要がない。『迷ひ』から覺めようと苦勞しないから何時迄も『迷ひ』の儘でゐるかと云ふとさうではない。心が『迷ひ』と云ふ自分の假想のものに引つ掛らなくなるから『迷ひ』が自然になくなるのです。『迷ふ我』と云ふものの考へ方に三つある。『生長の家』の考へ方のやうに『迷ふ我』は無いと云ふ考へ方はその第一。『迷ふ我』と見えるものも大生命の大きな一の流れであるから止むを得ないと觀るショウペンハウエルの考へ方は第二。荒川さんの考へ方のやうに『迷ふ我』は大生命の顯はれだけれども歪つな顯れであるから、それを努力によつて正しく修養して行かなければならないと云ふのはその第三です。努力によつて正しく修養して行かなければならない

と云ふことになりますと、吾々は不斷の努力が中々大變であつて迷はぬまでに修養を繼續して行くことが果して人間に出來るかどうかが問題なのです。『迷ふ我』と云ふものも本當は大生命の流れであるから止むを得ないと云ふ第二の説になりますと、我慾の自分をその儘のさばらせることも大生命の働きだからそれで可いと肯定することになり此の世に修羅の巷を現出することになるのです。たゞ第一の觀方——生長の家の觀方になつて『迷ふ我は本來無い』と云ふことが判りました時のみ『迷ふまい』と自力的に努力をしなくとも、無いものに引つかゝりやうがないから『迷ふ我』に引つかかりやうがなくなり、自然に『本當の自分』が顯れて來て本來の自由自在な自分が顯現し現實の上にも人間がよくなるのです。病氣でも同じことで『病氣は自分の本來の相でない』と知つても病氣の狀態の實在を認めて『治さう、治さう』と考へてゐる間は病氣に心がひつかゝつてゐて治りにくいのです。ところが、『病氣の自分は本來無い』とわかれば、病氣に引つかからなくなり、病氣が消えて了ふのです。『病氣の我』も『健康の我』と同じく大生命の一つの顯れで難有いと云ふ觀方になれば、それで難有いと云ふ平和の念を喚起して病氣が治ることもありますが、病氣の相を人間本來、生命本來の相だと肯定すること、例へば我慾の自分も大生命の顯れだとそのまゝ肯定するのと同樣になりますと『迷ひ

の自分』と『本來の自分』とを混同することになりまして何時までも迷ひの世界に流轉しなければならなくなるのです。だから、どうしても『病氣の自分は無い』と悟る『迷ふ我は本來無い』と悟る――そして常住悟つてゐる、常住健康である自分を見出すことが最も勝れた悟りであつて、病氣の中に治さうとして働いてゐる生命の力に自分の生命を觀、神を見出すのは矢張り病氣の存在を認めてゐるから最勝の悟りとは云へないので次善の悟りと云ふことになるのであります。

第二章　生活に顯れた神通妙用

場　所――某誌友邸の二階。

出席者――野田氏、谷口氏、村田氏、河野氏、大村氏、牧本氏、高橋氏、篠原氏、その他。

野田――大分人が揃つて參りましたから、先生に一場の講演をして頂いてそれを元にして自由質問、自由討議をすることにしたいと思ひます。

谷口――講演と云つて私は別に纏つて何を話さうと支度して來てはゐませんが先日野田さんが私の宅へお越しになつて自分達は××會を造つて毎日曜毎に集つて熱心に『道』の研究修行をしてゐる。その中には靈眼の見える方や、神懸りになれる方や、靈的治療の出來る方や色々偉い方ばかりが集つてゐられるから一度私にも話しに來てはどうかと云ふことでありましたので、その時それでは『來月の第一日曜日に參りませう』と不圖私はお答へしたのであります。それが今日であります。その後野田さんから『××會の人たちには七時に集るやうに知らせて置いたから、貴方は何時に大阪驛に着くか、知らし

て置いて下さればその時間には出迎へるから』とのお手紙でありましたので、私の事務所は規定の退出時間が五時ではありますが、實際は毎日六時近くになる。然し、七時に此處へ着くには六時半には大阪驛に出てゐなければ間に合はない。それで、その日だけは事務所を早く切り上げて六時半には大阪驛に出ようと思つてそのやうに野田さんに返事を書いたのであります。私は或るビルディングの二階で仕事をしてゐるものでありますが、其の日に限つて、折も折とて五時頃五階の會社の幹部の方から『急ぎの飜譯物があるから退出しないで居つて呉れ』と電話が懸つて來たのであります。私としては氣が氣でない。野田さんには、六時半に大阪驛に出ることを約束してある。しかし其の時突發した會社の急務を放つて置いて退出する譯には行かない。野田さんとの約束を破る譯にも行かないし、會社の仕事を止す譯にも行かない。私の身體は一つしかない。その時に私がしみじみ考へましたことはキリストが『汝ら誓ふなかれ』と云つたことであります。此の物質の世界は影の世界であるから、此の世界には色々の影繪が映し出される。色々の人の念がフイルムになつて色々の影が映る。私の念ばかりがフイルムになつて映るのだつたらそれは私の思ふ通りに行くかも知れないが、此の世界は全體の念が集つて

「ねばならぬに縛られるな」

出來たフィルムで映し出される世界であるから、私ばかりの思ふ通りに行くものではない。『誓ふ』と云ふことは、此の私ばかりで決めたことに執着することである。『かうします』と斷言して、ほかの成行を許さないことである。一つの行爲に凝り固まつて自分の生命の自由さを奪つてしまふことである。此のほかの事はしませんと自分の自由を限つて了ふから誓ふと云ふことは惡いのです。遠方にゐるものが見えるとか、未來に出來ることが豫言出來るとか云ふのは神通力でありますが、どんな靈覺者でも未來に起るすべての事件を一度に知つて了ふ譯には行かない。未來は出來つゝあるので固定してゐるものではないからであります。だからどんな神通力者も一つの此の事件を起らせようと一つのことに執着する限りは、此の世の中はなか／＼思ふやうに行かない。私が今日の六時半に大阪驛に出ることすら思ふやうには出來ない。六時半に必ず大阪驛に出ます。かう一つの事のほかはあり得ないと定めて了つた限り私の心は苦しまなければならない。これは私が一つのことを決めて必ずかうしますと誓つたから惡いので、野田さんにも皆さんにもお待たせして申譯のないことをしたのであります。では、吾々は何も未來のことは判らないから計畫も豫想もたてゝ置いたら不可ないかと云ふと決してさうで

障礙物の歡び

敵があるので面白い

はないのであります。吾々は何が出て來ても驚かないし苦しまないだけの心の用意をした上で、計畫を立て自信をもつて進んで行けば好いのであります。自分は鰻のやうに途中でどんな障礙物が出て來てもぬる／＼と滑り出して結局は目的地に達する、これだけのことは定めて置いても好いのであります。途中でどんな障礙物も出て來ないと考へてゐると、障礙物が出て來た場合にマゴついてしまふ。途中に石垣があつても、人が中途でグツと摑んで邪魔をしても、鰻のやうに拔け出ることが出來る。途中で障礙物がある方が、その障礙物を拔けるために自然に自分の心身の鍛練が出來て、結局は自分の生命の生長のために役立つのだ――これだけの自信があれば障礙物は障礙物でなくなる。みんなそれを攝取して自分を肥やす榮養にして了ふ。それは人生のスポーツになつてしまふ。スポーツは必ず敵と味方に分れてする。一人で勝負しても面白くない。敵があるから面白い。敵と云ふのは自分の自由の行動を邪魔しようとして色々の障礙物を置くものであるから面白い。どんな邪魔があつても、結局は色々工夫してそれを征服して勝つ。敵はどんな手で出て來るか判らない、人生にはどんな障礙物が出て來るか判らない、判らないから面白いので皆な敵の邪魔する手が判つてゐては面白くないのであります。目

的は立てゝゐるが、その目的に達する途中で出て來る周圍の一切のものは何が出て來ようが、それを皆融かして自分の生長する材料にしてしまふ。敵は自分に生長する榮養物を與へてくれる味方である。この自覺さへ出來てゐれば人間はどんなことに會つても恐れない、驚かない。私は皆さんの前で信仰の座談をする、皆さんを及ばずながら救はねば置かぬ――かう目的を立てゝ置いたら、途中で何が起つて來ても、それを皆なその一つの目的のための材料にしてしまふ。つまり私は約束した六時半に大阪驛に出られなかつた。一寸考へればこれは邪魔が入つたことである。しかし邪魔が這入つたゝめに、自分が人生について深い體驗をし、またその體驗をいま貴方たちにお話しさして頂き、皆さんにも人生を味つて頂くことが出來る、一見六時半に私が大阪へ來るのに邪魔が這入つたことは、却つて此の座談會に話す話材を與へて呉れたやうになりました。どんな邪魔が來ても驚かないで其の意味をしみ〲味ふ、その邪魔に自分の自由を奪はれないでそこに自分の生長する道を發見する、すべてを溶かして生長のほかに何もないやうにする。――これが本當の神通力であると考へます。

私が此處に來るについて實は私は話題と云ふものを豫め考へてゐなかつたのでありま

自己擴大が生活上の神通力

す。私が『生長の家』と云ふものを皆さんに宣傳し、一寸でも善いやうに『生長の家』を見せかけねばならぬとか、この『私』と云ふものを少しでも偉く見せねばならぬとか、かう皆さまから私と云ふ人間をどう思つて貰はねばならぬとか相手から求める氣持があるならば、何とか色々本でも讀んだり思想を練つたり準備をして置いて自分と云ふものに箔をつけて置かねばならぬ。かう云つたら相手から何とか思はれやしないかと恐怖やら心配やらをしなければならぬ。しかし、私は、一切自分をどう思はれたいとか『生長の家』をどう思はれたいとか、自分の方から求める心を全然拔きにして、私と云ふ人間でも皆さんのお役に立ち相談相手になることが出來れば何でも訊いて貰ひたい。何かお役に立つならばそれを差上げたいかう云ふ風に上げたい一方で求める心なしに來ましたから、割合樂な氣持でゐられるのであります。誰でも自分の方へ求める心なしに與へたい一方でゐるとその人の自己が擴大する。この自己が擴大すると云ふことが神通力であります。普通の人は肉體的區別と云ふ卵の殼のやうなものを作つてその中へ這入り込んで、此處から此處までの肉體が『自分』であつてこれ以外は『自分以外』である、自分を大きくする爲には自分の中へ他から取つて來て集めねばならぬやうに思つてゐま

す。かう云ふ風に自分と云ふものを狹く考へ、その考へで殼を作つてゐると人間は自由自在な氣持になれない――即ち神通力を失つたのであります。ところが自分の事ばかりを考へないで、他の方へ與へよう、盡せるだけのものを與へようと云ふ氣持になりますと、自分と云ふものが此の肉體だけに狹く縮かまつてゐないで肉體と云ふ境を超えて他の人のことまでに及ぶやうになる。かうなりますと今迄自分と云ふものは此の肉體の中だけだと思つてゐたのが、肉體の外の人々も皆自分であることが判つて來るのであります。自分と他人とは肉體の上から觀ますと一見別物でありますけれども、其の『眞如』即ち『神性』に於ては自他一つである。このことが、實際生活の上で他のためにしたい、他に深切を盡したいと思つてしてゐると、自分ばかりのためだと思つて我利的行爲をしてゐる場合よりも、氣分がゆつたりして何となく一層廣々とした幸福感が味はれるので自他一體と云ふ事が直感的に判つて來るのであります。此の他に深切と云ふことほど自分の氣分を生かし、幸福にし、魂の奧底から幸福にするものはありません。これは本來自分と他人とは一體だからであります。

幸福の源泉は他に深切をすること

上役との反目の解消

數日前も、ひとりの『生長の家』の誌友から質問狀に接したのであります。其の手紙に

世界は心だけのものを投げ返す

よりますと、その人は或る官署に勤めてゐられるのでありますが、上役と衝突してゐて、どうも毎日の仕事が面白くない、上役は他の人には餘り咎めないやうな失策も自分ばかりには酷く咎める。どうも不公平で、毎日の務めが面白くない。もつと毎日の務めを面白く生活する方法はないものだらうか。さう思つて色々の宗教書や修養書を讀んで見たが一向それを解決する具體的な方法が書いてない。この分で行つたら毎日の務めは面白くなくなるから、その結局の處で、自分の方がその官署を止すか、向ふから、馘首せられるかして、此の不景氣に仕事を奪はれることになり、自分は餓死するほかはないやうに思ふから何とか良方法をさずけて貰ひたいと云つて來られたのであります。この手紙に對して私が答へたところを簡單に申しますと『貴方は人から深切にして貰ひたい。上役から深切にして貰ひたいと、其の貰ひたいと云ふことばかりを考へてゐられて、一度も上役に深切を盡して上げようと思つたことはありますまい。自分が與へないでゐて、それでゐて、與へられよう與へられようとばかり思つてゐられる。だから貴方は幸福になれないのです。貴方が私に手紙をお寄越しになつたのだつて、私に求めてゐられる點ばかりあつて、私に與へようと思つてゐられる點は少しもないやうです。世界は公平で

貴方の心だけのものを投げかへすのです。これを「生長の家」では「心の法則」と云つてゐます。皆な心だけのものを貰ふ。深切をすれば深切を貰ふ。求めてばかりゐたら、自分も幾らでも求められて、たうとう遣り切れなくなる。他を不公平だと云つて審判いてゐると、お前の仕事は此處が不公平で考へが足りないとか何とか缺點を審判かれる。どうです、今日からもう上役が不公平だとか、自分の仕事と他の人の仕事と比較して見て自分の方が善いのに叱られるとか、そんなことを思はないで「生長の家」式に深切主義と、感謝主義とで行くことにしたらどうです。さうすると貴方はまた上役から深切にされ感謝される人となるのです。第一貴方は今迄にもつと上役に感謝すべきであつたのです。兎も角も貴方が今現に毎日の食事をとつて生活出來るのは、生殺與奪の權利をもつてゐるその上役のおかげです。そのおかげに感謝したことは一度もなく、毎日不平ばかり心にもつて上役を憎んでゐる。そんなことでは上役から憎まれるのは當然です。今晩早速その上役の所を訪ねて行き、今迄一度も貴方に對して感謝の心をもつたことがなかつたが、それが惡かつたと云ふ事を、今日或る動機で悟らして頂いたから、實は今迄のことをお詫びもし、今迄お世話になつたことを感謝するために來たと云つて、僞らず

誠心誠意で相手にお詫びと感謝をなし、その翌日からその感謝のしるしに、何でも好いからその上役に對して深切をする、机の上の塵をふくとか、書類を片づけるとか、感謝のつもりでなさい。阿諛追從にするのではないから一寸も自尊心を傷つける譯ではない、自分の手に合ふ手近かな深切をするやうにして御覽なさい。だん〳〵上役との間も打解けて來て、務めも愉快になれるでせう』と云つて返事を書いてやつたのであります。すると、二三日前、その人から禮狀が來て、『今迄色々難かしい理窟の修養法や宗教書を讀んだが、これほど切實に具體的に愛の實行の必要を敎へられたことはない、敎へられた通りにするつもりです。』と書いてあつたのであります。この人は、實際さう實行せられたかどうかまだ判りませぬが、深切と云ふものは空論ではなく、實行にあるので、自分が他人のために深切を盡してゐれば、また他人が自分を生かして呉れるやうになるのであります。序文みたいな話をしましたから、此の話に就ての感想や、そのほか、皆さまの實際生活上の問題を中心にして何なりと意見をいつて下さい。

失業の解決　村田――さう云ふ場合、その人が失業したとする。たとひ失業してもうろたへない。困らない。平然として自由な境地にゐなければならぬと被仰るのが貴方の御主張でせうか。

そんな場合平氣でをれないのが人情ではないでせうか。

谷口——若し失業したら平氣でをれないのが一應普通の人間の人情ではありませう。しかし私は、さう云ふやうに失業したと假定して問題を取扱つてゐるのではありません。まだ、その人は失業してゐないのです。だからその人が今後深切と感謝とで動き出したならば上役だつてその人を馘首しないやうに自然なると思ひます。馘首せられる者は、其の事務所に何か反撥する雰圍氣をもつてゐるので、その人がその事務所にゐるためにその事務所が明るくなり、その事務所に調和の氣が流れるやうであつたら、その人は決して首切られるものではありますまい。

村田——此の不景氣では必ずしも深切と感謝で仕事をするものが失業しないとも限りませんな。會社の經濟的破綻から是非共何人かを淘汰せねばならぬと云ふ場合や、會社が全然つぶれて了つたと云ふやうな場合には、どんな深切な誠のある人でも失業しないとは限りません。

谷口——たとひその會社とか官廳とかで失業したからとて、深切と感謝とで盡してゐるやうな人は、必ず誰かゞ一層よき處へ拾ひ上げて呉れると思ひます。それは天が屹度見

のがさないのです。

村田——いくらも深切なこんな善い人が失業してゐると云ふ例があると思ひます。

自由自在、強さ、豐富な偉大さ、明朗さの諸徳が人を榮えさす

氣の小さい善人は榮えぬ

谷口——善人が却つて失業して、悪人が却つて榮えてゐる。一見さう見える例もあるでせう。此の世界は心の法則で支配されてゐる。榮える人には榮えるやうな心的雰圍氣をもつてゐて財を諸方から引寄せる。『悪運盛んなれば天に勝つ』と云ふ諺もあるとほりその人がたとひ所謂る道徳の眼から見て悪であつても、諸方の財を引寄せる磁石となるやうな人には多くの資産が集つて來ます。之は自分の心の徳——強さ、豐富さ、寛いさや、明るさや、自由自在の心境などの徳のためにさうなるのです。心の徳——人間の榮える要素となるべき心の徳は所謂る狹い意味の窮屈な善ばかりではありません。正しさも一つの心の徳ではありますが、強さや、明るさや、豐富さや、偉大さや、自由自在な心境なども亦人間になくてはならぬ心の徳です。よく肺病になる人などを見ると、大抵氣の小さい善人が多いのであります。そんな善人は善であることに於て天地の道にかなつてゐるけれども氣の小さいこと、一つの小事に引つかゝつてゐて、凝りすぎてゐて心の自由を失つてゐることなどに於て天地の道に背いてゐるのです。何よりも氣の小さいと

云ふことは惡い。氣が小さいと云ふことは、言ひ換へれば神を本當に信じないと云ふことです。自分の力一つで生きねばならぬと、小さく力んでゐる人で、天地を貫いて生き通す力に押し流されて生きるやうな人でない。それ故に氣の小さい善人は肺病に罹つたり、失業したりすることがあるのです。

村田――さう云ふ難かしい心の法則の理論よりも私が訊きたいのは、何等の貯へもない人が今現に失業して、誰も雇つて呉れ手のない時にはその人はどうしたら可いか私は先生の意見が承りたいのです。首を切られても心を亂すな、餓ゑ死しても平氣で居れ、平氣で居れないのは人間の修養が足りないのだ。人間の本體は肉體ではなく靈であるから肉體が餓ゑ死にするなどの事位に恐怖を感ぜず、平然としてゐるだけの修行を積まねばならぬと云ふやうな御意見でありませうか。昔或る禪僧は『心頭を滅却すれば火も亦涼し』と云つて火焔の中で靜座してゐたら燒け死んで了つたではありませんか。この實例でも判る通り『心頭を滅却すれば空腹も亦滿腹の如し。』と云つてジツと坐つてゐれば餓死してしまふほかはないと思ひます。平然とする修行も事によりけりだと思ひます。

谷口――心頭を滅却したら火も亦涼しと云つて火焔の中に靜座してゐたのにその禪僧が燒

報恩の行爲は實生活を生かす

け死んでしまつたのは何故かと云ひますと、その坊さんは『火の中に坐つてゐなければならぬ』と云ふ一つの考へばかりに凝りすぎてゐたからです。人間は『生命』であるから本來自由自在なものであつて、何も火が其側まで燃えて來てゐるのにジツと坐つてゐなければならぬと云ふことはない。火が燃えて來れば其の燃えて來やうに從つて吾々の行動は自由自在に千變萬化しなければならないものであるのに、多分その坊さんは『坐つてゐなければならぬと云ふ考へ』に凝りすぎた爲めに生命の自由さを失つて燒け死んだのでせう。若し吾々が失業して貯蓄もない、誰も雇つて呉れ手もない、生活の資料がない、此の儘で行けば餓死が眼の前に見えてゐると云ふことになつたからとて、吾々は何も空腹を怺へて靜座してゐなければならぬことはない。もう食べるものが無くなつてもう自分は死ぬと決つたら、今迄天地間一切のものにお世話になつて生かして頂いたのであるから、せめて半日でも一日でもこの身體が生きてゐられる間だけ、今迄お世話になつた方々に對してお禮をしよう、御恩返しをしようと思つて身にかなふ働きを始めると好い、道ばたの掃除をするとか、溝の掃除をするとかでも宜しい。さうすると決して周圍の人が餓ゑ死にさして拋つては置かない。必ずその人の生きられるやうに周圍の人

々が動き出すに違ひない。この自分の動き方一つで周圍の全體が自分を生かすやうに動き出す――吾れ動けば天地動く、宇宙全體は一つの聯動裝置であつて、人間は自由意志を有つた宇宙の中心でありますから、自分の動き方一つで宇宙全體の事物の位置が變るのです。御恩返しと思つてする行ひが何故周圍を動かす力があるかと云ひますと、『我のため』と云ふことがない、我執がない、我執がなくなれば自分の神性が發揮される。自分の神性が發揮されゝば『類は類を呼ぶ』と云ふ心の法則で、周圍の人々の神性を喚び覺まします。周圍の人々の神性が呼び覺まされゝば、神性に於て人間は相手と一體であるから、今度は相手が自分を生かすために働き出すのは當然のことだと思ひます。

河野――そう云ふ感謝の心で動く人なら失業してもまた誰かゞ救つて呉れると思ひますね。

大村――一生懸命に眞面目に働いても貧乏に追ひ付かれて困る人がありますが、これはどう云ふ譯ですか。

谷口――一生懸命と云つても、どう云ふ風に其の人が一生懸命であるのか、眞面目と云つてもどう云ふ風に眞面目であるのか、それによつて說明が異つて來る筈です。漠然と總

括的なことを云はれましても、お答への仕様がありませんから、なるべく具體的に何處に斯う云ふ人があつて、どんな職業をどんな具合にやつてゐるかと云ふことを具體的に話して頂きたいと思ひますな。

野田――大村さんの場合は食料品屋なんです。

人類の喜ぶための仕事

谷口――食料品屋は到る處にある。たゞ食料品を賣ると云ふのなら何も大村さんを煩はすまでもない。大村さんが食料品屋として榮えて行くためには『あの食料品屋があるので人類が非常にオカゲを蒙つてゐる』と云つて人類から感謝されるやうにならねばならぬ。多勢の人類から感謝される店は多勢の人類を顧客に有つ店で屹度榮える店になるのです。誰も人類が喜んでくれない店はだん〳〵顧客が落ちる店です。食料品をお賣りになるのだつたら、あの店の食料品は常に質も良く品が新しくて安心して買へるとか、何時でも欲しい時に配達して呉れるので便利であるとか、朝飯の間に合ふやうに電話一つで品物が揃ふとか、なる程あの店が此の町にあるので吾々は大助かりだと町の人皆なが思ふやうになれば其の店は繁昌するのです。

大村――さう云ふ風になるべく努めてゐるのですが、どうもまだ商賣が思はしくないので

す。

葱は冬になると乾燥させる

谷口――さう云ふ風に町全體の人が喜ばねばならぬやうな特徴をあなたの店が有つてゐるにも拘らず、店が振はないと云ふのは、町全體の人がまだあなたの店の良い所に氣がつかないからなんでせう。どんな良いものでも一遍にひろがる譯には行かない。どんな好い種を今日蒔いても明日から花が咲くと云ふ譯には行かない。早く咲く花もあれば、遲く咲く花もある。ある期間は雨露に晒されなくてはならないその雨露に晒されたり、旱魃に逢つたりするために却つて一層好い花が咲く下地となることもある。葱は冬になつて土から掘り起して風にあてゝ乾して置くと、乾いて上の方の莖はカラ〳〵になつてしまふが、その球根を適當の時期に植ゑると、カラ〳〵に乾かさないで、常に土に植ゑて置いたものよりも良い葱が出來る。ダリヤの球根でも同じことである。今カラ〳〵に乾いて枯れたやうであるから、來年も再來年もズツと繁昌しないであらうと想像するのは取越し苦勞であります。私の會社にメンソレータム株式會社の經營者たるヴオーリスと云ふ西洋人と若い時分に一緒に生活してゐた人がゐます。此人に昨日も聞いたのですが、メンソレータム株式會社は今は數十萬圓の資産をもつてゐるけれども、其の始めは

今から廿五年程も前、ヴォーリスと云ふ西洋人が日本へ來て始めて近江の土地を卜して此處にキリスト教をひろめようと決心した。ところが、その地の佛教徒から非常な迫害があつて生活に困つて來た。同志社その他の方へ教鞭をとれと勸められるのでしたが、ヴォーリスは此の土地へ神の道をひろめることは神から自分に命ぜられた使命であると感じて其の勸めに乘らない。ところが到頭その日の生活に差支へるやうになつて近江商業學校の寄宿舍の生徒に君達は一ケ月幾らあれば生活出來るのかと訊いた。その頃の近江商業の寄宿舍費は一ケ月三圓五十錢であつた。ヴォーリスは其の事を訊いて『神よ私に毎月三圓五十錢だけの生活費を與へ給へ』と祈つた。すると或る日どこからともなく無名の手紙がヴォーリスの所へ屆いた。披いて見ると五十圓の爲替が入つてゐる。そして『君が傳道事業に生活を獻げてゐられるのを見て感激に堪へないので今後毎月五十圓づゝ補助させて貰ふ』と書いてあつた。兎も角このヴォーリスでも其の貧乏の狀態は數年間つゞいたので、二年や三年商賣が旨く行かないからとて、今後永久にその商賣が繁昌しないと云ふ證據にはならない。この商賣は神から自分に使命として與へられてゐるのであるから、今後必ず榮えるほかはないと云ふ斷然たる信念を持つて進んで行きさへ

すれば必ず道が開けて來る。此のヴォーリスにしても此の近江の土地は自分が傳道すべく神から使命を與へられてゐると云ふ強い信念があつたゝめに、到頭現在のやうな成功をしたのです。人から勸められるまゝに同志社の先生にでもなつてゐたら、その時は生活は樂であつたかも知れないが、今のやうな成功は得られなかつただらうと思ひます。人間の成功と否とは實に信念の如何に據るのです。

成功と否とは信念に據る

村田――併し、貴方の御説と反對な事實がありますよ。以前私の友人に小さなサラリーマンがあつた。その男はどうしたのか或る日百圓札を持つて火鉢の上で見せびらかしてゐるんですよ。『オヤ彼奴見ろ、百圓札を有つてゐるよ。あんな奴が百圓札を有つてゐるのはどうしたんだらう』と友達は皆不思議がつて口々に云ふ。本人は得意になつて其の紙幣を友達の方へ向けたかと思ふと、其の瞬間紙幣が火鉢の火の中へ落ちて、オヤと云ふ間に灰になつてしまひました。その男は今迄何年もかゝつてコツ／＼と其の百圓を溜めたのです。しかしこの長い間の勞苦が一瞬間に灰になつたので、其の男は『もう自分には金なんか溜まるものぢやない。もうコツ／＼貯蓄することを止めて派手に使はう。』と云ふ氣になつた。其の男は斯うして『もう自分には金なんか溜るものでない』と云ふ

信念を植ゑつけられたに拘らず、關東大震災前には二三十萬圓の金を拵へてゐました。

谷口――その人は百圓札を燒いた瞬間に『もう自分には金なんか溜るものではない。もうコツ〳〵溜めることを止めて派手に使はう。』と云ふ信念を有つたのに却つて金が溜つた。それは心の法則に、悖つてゐるやうで、實は心の法則に適つてゐるのです。要するに其の人は百圓札を燒いたのが動機で、今迄の出し惜しみをするケチな心から超越された。心が金から超越して氣が大きくなつたのです。氣が大きいものでないと大きな金が集つて來ないのです。ケチな心はケチ相應なものしか引寄せることが出來ないので、小金はたまつても大富を引寄せることは出來ない。それで『生長の家』では常にケチと云ふことに反對してゐる。相場をしてもケチな心の人は小さな損にビクビクしてゐるから大きな儲けを失つてしまふのです。大きな心の人は損をしても大きいし、儲けても大きいのであります。

村田――『類は類を呼ぶ』これが『心の法則で、ケチな者には大いなる富が集つて來ない、大きな豐かな心の持ち主でないと大きな豐かな富が集つて來るものでない』と云はれますが、その反對の事實があります。乾新兵衛のやうな男は實にケチな男であるけれども

大きな富を集めてゐます。

野田――本當に大きな富と云ふのはあゝ云ふ人の持つてゐる富を云ふのぢやないと思ひますね。世の中を生かすために使はれない富は、形ばかりあつて、生命のないものでせう。それは嵩は大きくても生きた血のめぐつてゐない『富』の木乃伊みたいなものでせう。謂はゞズー體は大きいが『富の死骸』ですね。乾新兵衛のやうな金を本當に生かすことを知らない男が、形ばかり大きくて、本當は生きてゐない金を引寄せてゐるのは矢張り『類をもつて集る』法則に當て嵌まると思ひますね。

村田――しかし、形の富にもせよ、ケチな心のものに大きな富が集まつてゐるのは事實ではありませんか、そこにはどんな『心の法則』が働いてゐるか先生の意見をきゝたいと思ひます。

野田――私は金は幾らあつても、生かして使ふことを知らない人は、本當は貧乏だと思ひますね。

谷口――乾新兵衛と云ふ人は金をコツ〳〵溜める人だと聞いてゐますが、交際つて見たことがないから私には本當のことは判りません。だが、金を溜めると云ふことにかけては

一心不亂には全生命が出る

名人で、ひたすらな一心不亂のところがあるのと違ひますか。金を溜めると云ふことに全生命を賭けてゐる。そのためには一切のほかのものを燒き盡してゐる。愧かしいとか、極りが惡いとか云つて、普通の人ならば躊躇したり好い加減で止めて置いたりするところを、一つの信念をもつて唯一つ金を溜めると云ふことに傍き目も振らずに遮二無二突き進んで行く、何事にかゝはらず一つの目標に向つて一心不亂に全生命を打ち込んで進んで行くものはその目標が何にせよ、全生命が出る。そこまで行くとケチであつてもケチ以上のものが出てゐる。それは一種の精神統一であつて、その精神力によつて目的とする事物がその人の周圍に吸ひ寄せられて來るのです。

牧本――私は齒科醫ですが、私のところへ來る患者で金を拂はない人が往々ありますが、さう云ふ人にどうも金を拂へと請求することを私は言ひ難くて仕方がないのです。ヴォーリスが月々三圓五十錢を與へ給へと祈つたやうに祈つてさへ置けば、さう云ふ人も請求しないでも自然に金を拂つて呉れるやうになるでせうか。

谷口――自分の弱さの爲めに金を請求するのが言ひ辛いから自分は默つてゐて神に祈つて置かうと云ふのであつては不可ないのです。ヴォーリスが『月々三圓五十錢の食費を與

へ給へ』と神に祈つたのは自分の弱さからではありません。それは實に强い信念から來てゐるのです。此の近江の國に傳道するのは自分の使命である。しかし自分の生活費を誰にも請求する所がないので神に祈つたのです。ところが貴方の場合だと請求する相手はある。相手はあるのに請求するのが何となく言ひ辛いので、相手に云はないで神に祈つて置くと云ふのであれば、面倒なところは自分がしないで神樣にして貰ふと云ふ卑怯な考へ方になると思ひますね。

高橋――金を取立てる相手はあつても、それを請求するのが云ひ辛いのは人間として金に執着のない美點ではありませんか。

谷口――宗教家は金のことを口にするのは愧づべきものだ武士は金のことを口にするのは愧づべきものだと云ふ風に昔から日本人は教へられて來た。その傳統的な考へに日本人の大多數は捉へられてゐるのです。金のことを請求するのを云ひ難いこと、愧かしいことゝ思ふのは迷信です。金そのものは汚くもなければ綺麗なものでもない。それは無色透明みたいなものであつて、それを汚く思はせ、又は綺麗に思はせるのは、これを扱ふ人間の心にあるのです。牧本さんが齒科醫院を開業せられた。この齒科醫院と云ふもの

は自分の職業であつて同時に自分の職業ではない。苟も齒科醫院を開く以上は神が商の故障で困つてゐる者を助けるために此の齒科醫院を牧本さんに開かせられたと云ふ自信がなければならない。何をするにも此の根本の心持が大切である。此の職業は自分の商賣だけではなくて『神の商賣』だと云ふことになると、その『神の商賣』を成立たせて行く上に金が必要であるならば、そのために金を集めると云ふことは神のお宮を建てるために寄附を集めて歩くのと同じやうに神聖な仕事である。何商賣をしても、これは『神の商賣』であつて、自分はその番頭さんだと云ふ根本の氣持があれば、金を出しても集めても汚い感じがしないことになるのです。金を集めて汚い感じがするのは其の自分の事業が、自分の私的事業だと云ふ感じが強くてその金を集めることに何となく心の底で我利的感じが伴ふからでせう。

高橋――それでは具體的にどうすれば好いと云はれるのですか。

谷口――先づ祈る――どうぞ此の齒科醫院が御心にかなつて榮えて行きますやうに。御心にかなつて集まるべき金を集まるやうにして下さい。入用なものが自然に與へられますやうに、相手の心持と私の心持とが調和しますやうに。かうして一心こめて祈つて、あ

とはジツと坐つてゐるのでは卑怯なのです。祈れば、自然に動く力が湧いて來るものなのです。その內から催して來る力に乘つて全力を盡さねばならぬ。かうして祈つて心を調へてから集金に行けば、自分も神樣に許されて自分は神の番頭さんだと云ふやうな樂な氣持で集金に行ける。集金する時の言葉も神に護られて樂に出る。相手と自分とが心の世界で調和しこゐるから、相手も其の人の顏を見ると何となしに惡い感じがしないで金があれば拂ひたくなる。金が無ければ拂はないでも、それは神樣の方でよいやうにして下さる。或はあまり悲慘な實狀を見た爲めに、集金するどころか金を與へたくなるかも知れぬ。それでも好い、與へても集めてもこれは神の金であると云ふ根本的自覺があれば、其處から何をしても自由自在な生き方が生れて來るのです。

大村――私の家では正月からズツと子供が二人とも病氣で寢付いて未だに快くならないのです。

谷口――大變お惡いのですか。

大村――昨日も四十度の熱があつたし、今日も三十九度からの熱があります。私が精神統一をして其の子供が嬉々として健康に遊んでゐる光景をアリ〳〵と思浮べて、その想念

に精神を統一しても治らないのです。

谷口――それで精神統一は完全に出來ますか。

大村――大分慣れましたから精神は可成り統一するやうです。

野田――精神が統一しても治す力がないのは『表面の心』が統一するだけで、佛教で云ふ阿頼耶識、――谷口先生の云はれる『習慣の心』が健康の方を向かないからでせう。

大村――その『阿頼耶識』『習慣の心』を健康の方へ向かせるにはどうしたら好いでせうか。

野田――そいつは一生懸命に練習のほかはないでせう。一心になつて精神統一の練習をする……。

谷口――自分の力で一心に『集積の心』から不健康の觀念を取り去つて了はうと思つても、誰でもさう易々と出來るものではない。出來る人は可いが、出來ない人が多い。出來ない人は矢張り一層偉大な者の力――阿彌陀如來とかキリストとかの力で今迄の『習慣の心』の中に集積してゐる惡い觀念を破壞して貰ふ方が好い。じつと祈つて、此の病的觀念を取り去り給へと念じて、賴む自分と、賴まれる無限力とが一體になつて精神統

一をする。今まで自力で遮二無二精神統一したのが、無限の力を祈り出して、その無限力と一體になつて病的觀念を取去るやうにせられると効果が多いと思ひますね。

大村――野田さんのは徹底自力主義で、谷口先生のは自力もあれば他力もあるんですね。

篠原――自力と他力とはどうしても兩方揃はなくてはならないでせう。

谷口――さうです。生長の家では、自力とか他力とか別けて云はない、自分と云ふものが本來ないのだから、自と他と渾然合して絶對力と云ふことになつてゐるのです。野田さんの云はれるのも自分を徹底して行くことによつて他力を呼び起すと云はれるのでせう。或はまた自己と佛性とは一體であるから、自己の念力は無限力の佛性と一體であると云ふ自覺によつて、その自力の精神統一も他力に一致し、此處に無限の創造力を發揮すると云はれるのでありませう。若し、言葉に捉はれて自力と他力とを別けるならば、他力に縋つて祈ると云ふことも自力と云ふことが全然ないのではない。南無阿彌陀佛と名號を唱へさへすれば好いと云つても、名號をとなへる口を動かす力は自力である。自分につかまつてをればあとは自分が泳いで彼岸に渡してあげると云つても、その泳いで渡してくれる人につかまつてゐる力は自力である。自力と他力とは相伴ふもので鐘と撞

木のやうなものである。撞木で打つので鐘がなる。鐘一人でも鳴らず、撞木一人でも鳴らぬ。二つ合して自他がなくなり絶對力が出て來る。それで自分で精神統一をしても撞木の一人ダンスで『全體の力』を打ち鳴らすことが出來ぬやうな感じのする人――自力の感が起つて宇宙無限の力と一つになつて精神統一が出來るやうな強い自覺が起らないやうな人は、やはり何か神佛を對象に置いて祈ることによつて、宇宙無限の力を自分の欲する方向へ誘導するやうにする方が適當でせう。『生長の家』では既に我らは全てを與へられてゐると云ふ。それだのに招神歌に『幸へたまへ』とか『護り給へ』とか云ふ詞があるのを變だと云ふ人がある。これは自力の感じが強くして絶對力の自覺を喚起しにくい人に、絶對者に護られてゐる感じを導き出すためです。貴方のお宅にはどんな神様をお祭りになつてゐられるんですか。

大村――先づ天照皇大神宮。それから伏見の稲荷さん。三寶荒神さん、それから家が代々佛教でありますから、佛壇には佛さまをお祭りしてあります。しかし、神さまはいづれも神格が異ふさうで、その神格によつて拜み方を變へねばならないと云ふ人があるので、その手加減が大變吾々には難かしいんです。

谷口――それは誰の御説でございますか。

大村――野田さんの御説であります。

野田――それは斯う云ふ意味なんです。神がゝりになつて稻荷さんが懸つて來たと云つて喜んでゐる人がある。靈眼で其の神がゝりを視てゐると他愛もない狐狸が憑いてゐる。それだのに本人さんは大いに神がゝりの積りで其の狐狸がゝりに三拜九拜してゐる人がある。また龍神だなどゝ云つて神憑りして來るのでも大抵は普通の低級な蛇の靈である。そのやうな低級な靈に惑はされてゐると信仰が一つに統一せぬから、そんなものは拜まずに最も高い神なる天照大御神とか阿彌陀如來とかを誠心こめて禮拜せねばならぬと云つたのです。

谷口――それは至極結構な御説であります。が、吾々が神佛を拜むのは、神佛の形によつて差別をつけて拜むのではないのであります。神佛の形の奥に宿つてゐる神性即ち眞如を拜むのであります。これはどう云ふ形をしてゐるから輕蔑せねばならないとか、これは醜い姿をしてゐるからゾンザイに取扱はなければならぬとか、そのやうな差別をつけて拜むのではないのです。どんな形のものにも、その奥の奥底には神性が宿つてゐる。

その神性を拜むのです。その神性を拜み發揚ことによつて、その拜まれた相手たる靈は一層高まつて來るのです。拜むと云ふことも此處まで來ねばウソだと思ひます。ある靈に追從や賄賂をするつもりで御經を上げたり供へ物をしたりしてゐるやうな拜み方は本當ではありません。相手の神性を拜むために聖經をあげたり、神想觀をする。拜まれた相手はそのために神性が開顯される、そこで相手方たる靈が自分の神性を開顯してくれた恩人としてその人なり家なりを守つて呉れるやうでなくては本當でありませんな。この拜み方ならどの神を拜むのでも一樣に誠をもつて一心不亂に拜んで好いと思ひます。

篠原——淨土宗では阿彌陀如來のやうな高い一つの佛さまを拜みますが、眞言宗などになりますと、形は何を拜んでも好いことになつてゐます。その形の奧にある「眞如」を拜むのですから、形は鰯の頭でも、生殖器でも好いことになつてゐます。

谷口——吾々は皆な神性即ち眞如を有つてゐる。吾々が誠をもつて一つのものを拜めば、自分に宿つてゐる神性が鏡に映るやうにその拜む宮なり佛像なりに映るのです。謂はゞ至誠の精神波動が、その宮なり佛像なりに集る。すると宇宙遍滿の神即ち至誠の精神波動がその宮なり佛像なりに感應して來るのです。至誠をもつて對せねば天照大御神のお

宮の前に祈念を凝らしても神靈が感合あらせられないし、至誠をもつて對すれば、形は何であらうと、其處に本當の神即ち眞如が顯れて來ます。だからどんな神を拜む場合にも、苟くも拜むかぎりは誠心誠意拜まねばならない。手心をして半分は輕蔑して拜むと云ふやうな必要はない。そんな拜み方をしてゐると祭つてある神の中には不平を云ふ者も出來てくる。自分は今迄此の家を守護してやつたのに、あのぞんざいな不敬な態度は何だ！　と云つて憤慨する神も出來てくる。そんなことになると其の家は良く行かないのです。一寸考へると、相手の位階が低いからゾンザイに取扱つても好いとか、相手の容貌や服裝が惡いから輕蔑して取扱つても好いとか考へ易いのでありますが、これはブルジョア的な考へ方でありまして、かう云ふ人間の扱ひ方をしてゐますと日常生活でも相手を怒らせることになるのであります。誰を取扱ふのでも相手の神性を認めて、その神性を拜むのが好いのです。『生命の實相』中の『生長の家』の生き方のところに禮拜主義とあつたのはそれです。大村さん、今思ひ出しましたが、あなたの子供の病氣をお治しになるには『生命の實相』の中の聖經『甘露の法雨』を病人に毎日一時間位づゝ片手を患部に輕く當てながら讀んで聞かせてあげるのが宜しいと思ひます。あれには眞

理が書いてある。眞理をさとると災厄の靈も守護の靈にかはるのです。ずつと前に父が肺結核で寢てゐるので、父の病氣を治してやりたいと思つて神想觀をやつて見るが、自分自身が胃擴張で、腹に息を吸ひ落すと苦しくて堪らないで迚も三十分と續けてゐられない。何とか樂に自分も治り父も一緒に治ると云ふやうな好い方法はないか――かう云つて尋ねて來られた方がありましたが私はその人に答へて、それでは、神佛の祭壇の近くに父の寢床を移し、その祭壇の前で毎晩一時間位づゝお經の代りに聖典『生命の實相』の中にある聖經『甘露の法雨』を讀みつゝお父さんにも祭壇の諸靈にも『甘露の法雨』を讀んで聞かしてあげるやうにして下さいと云つてやつたのであります。すると近頃快方に赴いたと云ふ消息に接したのであります。篠原さん、貴方は僧職の方でゐらつしやいますさうですが、佛教の方でも大般若經を上げると惡靈が悟りを開いて病氣が治るなどゝ云ふことがあるのでせう。

篠原――あります。

大村――病人が子供で、お經をあげても、『生命の實相』を讀んでも意味が解らなくつても効くんでせうか。

幼児に讀み聞かせても念の感應で効果がある。

谷口――それは効きます。一つは念の感應で効きます。こちらが解つて讀めばその悟りの念が感應するのです。それから人間の意識は幾層にもなつてゐて『表面の心』は教育されたことだけしか知りませんが、奥底の心は今迄幾度も生れ代つてきてゐる靈魂の意識ですから、現世で教育されないことでも知つてゐます。

野田――奥底の心は『守護神』の心のことだと思ひますが。

谷口――奥底の心の中には守護神の心もあり、自分の靈魂の潜在意識もあります。

高橋――表面の心には理解出來なくとも奥底の心が理解すると云ふことになれば、般若心經の棒讀みでも効果がありませうね。

谷口――無論効果がある筈ですが、讀み手が理解して讀むと一層効果があります。

高橋――お經の意味が解つて効果があると云ふ説でありますが、丁度それと反對のことがあります。或る所に御加持をして非常に上手に病氣を治す婆さんがあつたが、その御加持に唱へる眞言が『油虫共處退け』と云ふのだつたから、或る人がそれは『阿尾羅吽欠娑婆訶』の間違ひだと教へてやつた。それ以來婆さんは正しく教へて貰つた眞言通りを唱へて加持するやうになつたが却つて病氣を治す靈力がなくなつたと云ふ話がありま

す。

谷口――阿尾羅吽欠娑婆訶を『油桶底ぬけ』と云つて病氣を治したと云ふ話もきいてゐます。

篠原――『尻々、マカ尻、尻々、ソワカ』と云つて病氣を治した人もあります。これは『修利修利、摩訶修利、修修利、娑婆訶』の間違ひであります。

谷口――御經を理解して讀んだら相手に感應して病氣が治ると云ふのは讀む人の眞理の念波が感應するのです。今迄御加持に使つてゐた眞言が間違ひだつたと解つた時に其の婆さんの御加持が効かなくなつたのはお婆さんの信念が動搖を來して強い信念の念波を相手に與へ得ないからです。要するに此の世界は念波の世界です。治ると云ふ信念があれば御經が間違つてゐても治るのは、鰯の頭でも信ずれば御利益があるのと同じですが、信念がなければ、治らないのは阿彌陀樣の前に坐つてゐても信念のない人は救はれないのと同じでありませう。本來お經をあげて病氣が治ると云ふのはお經そのものゝ意味を病人の潜在意識が理解し得て治る場合とお經をあげたりお題目を稱へたりする人の悟りの念波が感應する場合と、單に「これで治る」と云ふ信念の強さが波及して効く場合と

があリまして、信念さへあれば、キリストも云つてゐるやうに芥種の如き信念だにあれば此の山に彼處に移れと云つても、それが實現するのです。だから信念さへあればどんな兜文を唱へてもよいし、又唱へないでも好いのであります。それから又、お經の治病的要素としては、このお經は有り難いと云ふことを人類の何割かが知つてゐる。それは意識の表面には現はれてゐないけれども、さう云ふ信念の波は宇宙に滿ちてゐる、その信念の波に丁度感合するやうに其の經をあげると人類の何割かの信念の波が其處に具象化して病氣が治ることになるのであります。もう一つは、佛教の經典にはそれを護持してゐる佛靈がある、神道の經典にはそれを護持してゐる神靈がある。その佛靈なり神靈なりが感應して來て病氣を治す場合もあります。

高橋――さうすると何も生長の家の聖經『甘露の法雨』でなくとも般若心經を一心にあげても可い譯でありませう。

野田――般若經を棒讀みにするのでは專門の坊さんのほかは意味が判らないでせう。聖經『甘露の法雨』は同じ眞理を極解りやすく書いてあります。

高橋――『表面の心』は般若經の意味が解らなくとも吾々の『奥底の心』は意味が解ると

被仰るのではありませんか。

谷口――吾々の『奥底の心』は『表面の心』の知らないことも知つてゐます。併しそれは全能の神性のことではありません。全能の神性なら、何も眞理を讀んで聞かして貰はなくとも、眞理そのものだから眞理を知つてゐるのです。吾々が此處で奥底の心と云ふのは野田さんの被仰るやうに守護神と云ふのもある、また本人自身の靈魂の潜在意識もある。それは一個の幾度も此の世に生れ代つて出て來たことのある靈魂であつて、肉體の知らないことも知つてゐますけれども、全然眞理を知り盡したものでもありません。やはり解り難い言葉よりも解り易い言葉で聞かして貰ふ方が解り好いのです。それに讀んで聞かして貰ふ病人が大人である場合は、肉體の意識の方も意味が解つて眞理を悟る方が可い。殊に、重要なのは讀む人の心が、讀んでゐる間ぢゆう眞理を悟らしめられ、高められて、その高められた平和な確信に滿ちた精神波動を病人に送ることになることです。御經を棒讀みにするのでは、專門の坊さまは別として讀む人だつて意味が判らないから、こんなことで効くのだらうかと思つて頼りないし、讀む人自身が眞理がさとれず平和な確信に滿ちた精神波動を病人に送ることが出來ないでありませう。かうして古い

御經では現代人には信念が高まり難い。神は救うてやりたうても信念が高まらねば救ひやうがない。そこで神の救ひの攝理として『生長の家』が現代に適するやうに出現したのであります。『生長の家』の聖典『生命の實相』を讀んで病氣が治ると云ふ事實は古今を通じ各宗を通じた眞理が新しい迫力をもつて現代人の心を打つやうな形をもつて出現したからだと思ひます。從つて各宗の諸神諸靈が聖典『生命の實相』を護持してゐられると云ふやうな事實もあります。

大村――或る靈學者の說によると病氣の殆ど全部は、惡靈の災ひで、黴菌や災難も皆な惡靈が武器として使ふものだと云ふぢやありませんか。

谷口――それは成る程、一面の眞理であります。醫者は惡靈が武器として使つた黴菌を征服する方法を考へてゐます。心靈療法家は、その惡靈と正面から戰うて退治る方法を考へてゐます。『生長の家』ではその惡靈と共鳴するやうな惡精神波動を起さないやうにして、惡靈がゐても害をすることが出來ないやうにするのです。惡靈は魚みたいなものです。迷ひの精神波動はその魚の泳いで來る波のやうなものです。その波を干上らしてしまへば惡靈が禍ひをしようと思つても水のない魚のやうに禍ひが出來なくなるのです。さうさせるのが生長の家の『神想觀』であり、聖典の一章の每日讀誦であります。

第三章　生きる道の座談會

場　所——生長の家出版部樓上。

出席者　大川氏一行三名、宮岸氏、野田氏、河内氏、村山氏、佐々氏、水谷氏、政山氏、藤野氏、村山氏、遠山氏、谷口氏。

大川（兄）——ある人の說によりますと『神想觀』の招神歌は單に精神統一の手段だから、別にあの通り唱へなくとも好い。『松の木、松の木』と唱へても『一二三四』と唱へても同じことを何遍も唱へてをればそれで好いと被仰いましたが、私は『松の木、松の木………では滿足出來ん、矢張り神樣を招ぶ歌でないと可かぬやうに思ふ』と云つて爭つたことでしたが、先生の御意見を伺ひたいと思ひます。

谷口——招神歌は精神統一の單なる手段ではありません。それは精神統一のたすけにもなりませうが、精神統一をして何も考へなくなると云ふことは別に大して結構なことではありません。何を對象として精神を統一するかと云ふことが肝腎なのです。すべてのものを生かしてゐる神、生きとし生ける者を生かしてゐる神、これにひたすら精神を統一

精神統一せる心の鏡に何を映すかゞ肝腎

して『神即ち我』の自覺に入ることが肝腎で、これこそ『神想觀』の目的なのです。『松の木』と云ふ言葉に精神を統一して『松の木か、我か、無差別』の境涯に入つたとて何にもなりません。假りに、吾々は精神統一をすれば好いのであるからどんな言葉に精神統一をしても好いと云ふことになれば、吾々は『病氣、病氣』と云ふことを唱へて精神統一をしても好いと云ふことになるでせう。さうなると病氣と云ふことばに精神統一をして『病氣か、我か、無差別の境涯』に入れば、どうなると思ひます。その人は病氣になつてしまふでせう。今、世の中に病人が多いのは、人類の多くが『病氣』と云ふ言葉に精神を統一してゐるからなんです。新聞を一心に讀んで精神統一狀態になつてゐるときに、賣藥の廣告などで『病氣の實在』と云ふことを心の鏡に映されたがために病氣になつてゐる人が世の中にどれほどあるでせう。單なる精神統一を非常に結構のやうに思つてゐる方がありますが、精神統一そのものは可もなく、不可もなく、澄んだ鏡のやうなもので、それに如何なる念の影を映すかと云ふことでその價値がきまるのです。『松の木』と云ふものに精神を統一すれば『松の木』だけの價値しか發揮されぬし、『病氣』と云ふものに精神を統一すれば、『病氣』だけの力しか發揮されぬのです。『大實在たる

無限の生命』に精神を統一するとき、吾々は無限の力を發揮することが出來るのです。これこそ『神想観』であつて、單なる精神統一は野狐禪に終ることがあります。

大川(兄)――『神想観』をして無我になつて何もわからなくなつたと云ふ人がよくありますが、何もわからなくなつて可いのなら寢てしまつたら可いと私は云ふのです。

谷口――何も判らぬどころではない、眞理をはつきり解つての上での不動の心境でないと本物ではありません。眞理即ち『神に生かされてゐると云ふこと』を知るために精神統一をするのです。精神統一は人間を石にすることではない。無感覺になることが、そんなに好いことなら、死んで了ふか、石になるかするが好いのです。

逃れる道は覺めるにある

大川(兄)――私は『神想観』をしてゐる最中に『病氣はどうしたら治るか、教へて下さい』とお願ひすると、突然、濛々たる火焔のやうな雲のやうなものがあらはれて私を包んだ、私はその時非常に恐怖心を起して叫んで逃げようとすると、『覺めよ』と云ふ大來の聲が聞えて來た、すると忽ちその火焔が消えて、私はもとの平和の心境に歸つた。その時私は病氣とは、此の火焔のやうなものである、それを逃れる道は遁げることではない、唯『覺める』ことだと理解を頂きました。

谷口――好い理解を頂かれましたなあ。本當に病氣を治す道は覺めれば好いのです。病氣はないのですから。幻に火焰に襲はれて燒け死なうとして苦しんでゐる、これが病氣です。

大川(兄)――多くの誌友はまだ病氣が無いと云ふ意味が克く判らぬと云つてゐます。私は『生長の家』を讀むまでは腎臟病に罹つて每日試驗管に尿をとつて檢尿してゐました。さうすると、いつまでたつても蛋白がなくならない。それから同時に神經衰弱にかかつてゐて弱つてゐました。ところが『生長の家』を讀ませて頂いてから、眞理をさとつて、病氣を恐れなくなつた。もう尿の檢査もしなくなつた。すると忽然、私の病氣は治つてしまひました。

谷口――坊ちやんが病氣だつたさうですが、その後はどうですか。

大川(兄)――もうすつかり宜しい。親の慾目で見ると、少しばかり發育が、他家の子供より遲れてゐるかと思ふ位です。はげしい疫痢で一時は四十一度以上の高熱だつたので、醫師は『もう到底助からない、私はこんな子供を一萬人ほど手掛けた經驗があるが、こんなになつてから救かつた者は一人もない。たとひ救つても白痴になるか、どこかが不

隨になるかにきまつてゐるから救からない方が、君、好いだらう』とまで極言しました。私は何事が起つても神様が私をお試しなさるのであると思ひ、心を亂さずに生長の家の神に祈つて一生懸命に『神想觀』をしました。すると奇蹟的に治りました。醫者もこんなのが治つたのは不思議だと云つてゐました。治ると治らぬとに拘らず、あんな時に心を亂さずにゐられたのは全く『生長の家』のお蔭です。

大川（弟）――あれが治つたのは本當に奇蹟だつたですなあ。

大川（兄）――本當に奇蹟だつたな。森本さんも『それは貴方が熱心に生長の家のお世話をなさるからお蔭を頂かれたのだ』と云はれました。

谷口――森本さんも隨分熱心ですねえ。

大川（兄）――えゝ熱心です。ラヂウム溫灸器を賣つて居られましたが、私が勸めて今月から止めて貰ひました。そんなものを賣つてゐると、心が不純になつて『生長の家』と兩立しないと云つて止めるやうに私が勸めました。すると、それもさうだなあと云つて止められました。時々、私と意見が衝突することがあるのです。元來非常な菜食主義者で人間は肉食するから長壽をすることが出來ないのだと云つて一切肉食はされません。

私の子供が病氣になつたどきにも、それは君があまり肉食をするから、子供がさう云ふ病氣になるのだと、云はれました。私は人間は心で病氣になるのだから、そんなに窮屈に衞生々々と云つて捉はれるには及ばない。心が自由になれば病氣にかゝらんと申すのです。ところが森本さんは人間と云ふものは心と肉體とをもつてゐるから、肉體も大切にしなければならんと云つて非常に衞生を守られるのです。毎朝冷水摩擦を缺かされたことがない、食事はと云ふと玄米の團子を一食二三個に野菜少量と云つた風に非常に質素なのです。その癖、公けのことだと云ふと少しも金を惜しまれない。『生長の家』の例會にお寺を借りた時にも、そのお寺の借り賃を一人で支拂はれました。〇〇寺で集りがあつた時にも、其處まで三里も歩いて行かなければならない處ですから集まつた人たちが其處で食事をしなければならない。森本さんがお米を炊いて、私がほかの材料を持つて行きました。

谷口――本當にいろ〳〵お世話になりますね。(中略)人間が肉食すべきであるか菜食すべきであるかは、それが衞生に適するとか適せぬとかの爲ではありません。衞生に惡いから何をしては不可ない、これをしては不可ない――と云ふやうな考へ方になられますと、

人間の生命と云ふものは、「衛生」と云ふ外の物の支配を免がれない弱い者だと云ふ自覚を深めることになります。外の物に人間の生命が支配されるやうな弱いことになつてはならないのです。人間の生命は何を食べても、どんな不衛生なことをしても、少しも害されることもない自由自在な相なのが本當の相である。と云つて無理に不衛生をする必要はない。衛生とか不衛生とか、そんなことは迷ひの世界の法則である、そんなものを超越して、たゞ神の子のすがたのまゝに生きる、神の子のすがたのまゝに生きるとき自然に生活のすがたが整ふ。すると、すること爲すこと自ら正しくなる。外から觀れば衛生家に見えるかも知れぬし、また反對に無茶をするやうに見えるかも知れぬが、そんなことはどうでも好い。唯ひたすら神の子としての相をこの世に生きることだけが、吾々の選ぶべき道でなければならぬ——さうすると、あとは自然に整ふ——肉食をしないと云ふ事だつて、不衛生とか衛生とかを問題にしてではない。たゞひたすら神の子にふさはしい生き方をしようとするとき、自然にさうなる、それならば本當です。神は愛であるから、苦痛を感ずる動物を憫れむと云ふ上から、それを食べないと云ふのなら、萬物の靈長として動物の上に君臨する人間としての愛深き生き方ですけれども、肉食をした

ら衛生に悪いと思つて食べないのなら、人間の方が動物の肉に敗けたことになります。何を食べても食べ物に敗けるやうでは本當の人間ではない、本當の人間は何物にも敗けない自由自在な圓滿完全な生命である。これを自覺した上での生活が『生長の家』の生き方なんです。

大川（兄）――森本先生は博學多識でありますから、相手に從つて色々のちがふ說明をして、あまり云ひ過ぎでないかと思つて時々冷りとさせられることがあります。『心の力』を說明してゐられるかと思ふと、『心で心が治せる筈がない』など〻『生長の家』と反對のことを云はれることがあります。

谷口――心で心が治せないと云ふのは、『迷ひの心』で『迷ひの心』が直せる筈がないと云ふことなんでせう。『迷ひの心』でいくら力んでみても『迷ひの心』は治せません。『迷ひの心』を治すのは『眞理を知つた心』のみです。

大川（兄）――成る程、それでわかりました。『迷ひの心』では『迷ひの心』を治せない。なる程、そこですな。そこを云はれたのですなあ。

谷口――『迷ひの心』で『迷ひの心』を治すことが出來ないのは當り前です。迷ひを治す

のは眞理のみです。暗を照らすのは光のみです。暗で暗を照らすことは出來ません。心が病氣になつてゐるのに、その心で病氣になるまいと思つても駄目です。なるまいと云ふ心は『迷ひの心』です。病氣と云ふものが在ると云ふ信念を前提として病氣に成るまいと云ふ心持が生ずるのです。世間の多くの人は皆な病氣になるまい、なるまいと思ひながら病氣になつてゐるのです。『迷ひの心』は『病氣になるまい』と云ひますが『眞理を知つた心』は『病氣は無い』と云ふのです。病氣は無いのだから『なるまい』などゝ思ふ必要はない。病氣にならうと思つても本當の人間は神性だから病氣になりやうがないのです。病氣になるのは本當の人間でないものがなる。病氣と云ふのは、其處に本當の人間が自覺されてをらぬことの表はれなんです。病氣とは本當の人間から正しき自覺をマイナスしたものなんです。『生命の實相』第一卷にある『生長の家の神人論』にはそのことが書いてあつたのです。

大川(兄)――あの章は誰も、むつかしいと云つてゐました。

谷口――五官で感じられ、五官に視えるものばかりを實在だと思ふ人が多いからです。

大川(兄)――河野さんも『病氣はない』と云ふことが、どうも判らないと云つてゐられま

した。あの方の奥様の病氣はまだハッキリしないで近頃は平田式の心療法を受けてゐられます。

谷口――あの方は私の宅へ來られたことがあります。病氣は無いともつとハッキリ判つたらその瞬間から病氣は消える、病氣は信仰の程度を肉體にあらはしてゐるのですから、あの方の信仰ではあの程度の治り方は已むを得ますまい。

大川(兄)――河野さんが歸つて來ての話に谷口先生のことを信念の強い人だと賞めてゐました。

谷口――あの方の奥さんは始め腰髄カリエスで、カリエスに罹つてゐる腰椎骨から少し下部にあたる骨盤のところの左右に膿が溜つて一時苦しまれたんださうです。楠木病院ではそれを切開したら一生その傷口はふさがるものではない。快方に赴くやうならその儘吸收するし、快方に赴かぬものなら切開したとて何にもならぬと云はれたが、大阪の整形外科の專門醫住田博士に相談せられると、こんなもの位ゐ切開出來ないでどうする！と云ふ意氣込で切開せられました。ところがその傷口が楠木病院で云はれたやうに中々ふさがらない。その傷口の名稱を流注と云ふのださうで、名前の通りいつまでたつても

膿が流れ注ぐのださうです。或る日その奥さんが用事があつて自動車に揺られて少し遠路を行かれたところが喀血した。恐れてゐたものが愈々來たぞと云ふことになつてそれ以來身體は毎日のやうに、衰弱する、腸も惡くなつて何をたべても下痢する、ラヂウム溫灸器で治療しても『わかもと』を飲んでも下痢がなか〱とまらない。醫者はこの容態では迚も難かしからうと首を傾けた。その頃、河野さんははじめて森本さんに『生長の家』のことを聞かれたのださうです。一週間ほど『神想觀』を遠隔でこちらから河野さん御夫婦に指導してあげました。すると、それを轉機として健康がよくなつて、熱も下がるし、一時カリエスのため腰椎の屈む自由が利かないで、腰をかゞめて下のものをとることが出來なかつたのも、あたり前に腰をかゞめてものをとることが出來るやうになられ、たゞ時々、咳が烈しく出るほかは、別にほかから見て病人と見えないほどになられたのです。楠木病院で生涯ふさがらないと宣言された流注と云ふ膿の出る孔も右側は全くふさがり、左側も殆どふさがつて時々かすかな漿液が出る位になつたと云つて、先達て河野さんが來られたときには自分で大變喜んでゐられたのです。八月に醫者から危なさうに云はれた病氣が五六ケ月であそこ迄治つた。もうあとはあの方自身の一息の

信念ですなあ。心で病氣が重くもなれば輕くもなると云ふ事を悟るのは碁で云ふなら初段に六目と云ふ所で、誰でも行ける所ですが、病氣は無いと云ふ所をさとるのは名人の階級に屬するのです。一寸、普通の人の行けぬ境地で、行けるとこれ位自由な境地はないのです。さうさう、貴方に聞かうと思つてゐましたが、貴方のところに『神想觀』をして、神懸りで、自分が勉強したこともない試驗問題をスラ〳〵答へて及第した奇蹟があつたさうですなあ。

大川(兄)――あの方は武內靜子さんと云つてまだお若い、二十一か二十二歳の方ですが、三年ほど前から肺を病んでズツと寢てゐられて、勉强する暇がなかつたのださうです。ところが『生長の家』を讀み『神想觀』を實修し、肺の方も治られて產婆の試驗を受けて見る氣になられた。『神想觀』をすると大變精神が統一するさうです。病氣をしてゐられて勉强がしてないので多分今年は駄目だらうと思ふには思はれたが、兎も角も試驗を受けて見ることにし、自身の口頭試問の時間が來るまで『神想觀』をしてゐられた。周圍の人が何をするのだらうと思つて自分の方をながめるので、最初は一寸恥かしかつたさうですが、思ひ切つて、自分の名が呼ばれる迄『神想觀』をつゞけてゐられた。そ

自分の知らぬ問題に解答が出來る

の効果は覿面で試験官の前へ出ると、自分の全然知らない問題が出たのに、吾れにも非ず、自分の知らぬ答を滔々としやべつて及第したので、自分ながら夢ではないかと自分の身體を叩いて見られた位だと云はれました。

谷口――そんなこともあるべき筈です。『神想觀』の功德は實に無限です。

大川（兄）――その『神想觀』の奥儀を一般に頒布される聖典『生命の實相』に何らの會費も傳授料もとらないで、たゞ書き流してある。そこが『生長の家』の實に尊いところだと森本さんも被仰つてゐました。これはもつと弘がるべき性質のものです。私は『江間式心身鍛練法』を習つたことがありましたが五十圓からとられました。それに『生長の家』の『神想觀』は印刷の實費だけしかとられない。實に尊いことですなあ。

谷口――『神想觀』は神が私にたゞで授けて下すつたのですから、私もまたたゞでお取次するほかはないのです。神のものは神にかへせですなあ。お禮をしたい人は神さまの道をひろめてお禮をするほかに仕方がないでせう。精神統一の手段ならほかにもある『神想觀』は必ずしも精神が統一しなくとも好いのです。精神統一するに越したことはないが、招神歌で神を招ぶのですから、精神が統一しなくともたゞあの形式通りおやりにな

れば神徳が得られるのです。精神統一が出來なければ神徳が得られないだらうと云ふ心が邪魔になつては、却つて神徳が得られないことになる。本當は神徳を得てゐるのだけれども、氣がつかないから現れない。おかげは得てゐる。吾々はたゞ氣がつけば好いのです。……何かほかに御質問になることはありませんか。

宮岸――私はどう云ふものか、宗教が好きです。以前に平田式心療法を習つて遣つて見ましたところが、或る病氣には可成り効果があるやうでやつてゐましたが「生長の家」を讀んであんな道具の必要はないと思つて止しました。知合ひの子供に歯痛で苦しんでゐるのがあるので神想観の招神歌を心のうちでとなへて掌をあてゝ暫くしてゐましたらそれ切り治つて一度も歯痛を訴へません。實に不思議だと思つてゐます。どうも私は宗教に非常に心を引かれるたちです。聖書の講義を聴くとか、佛典の講義を聴くとかして、本當に安心の深い生活に入りたいと思つて心掛けてゐるのです。

谷口――何か煩悶がおありですか。

宮岸――いゝえ煩悶と云つても別にないのですけれども。以前に一度「一燈園」に入れて貰ひたいと思つたことがありましたが「一燈園」は宗教でないので止めました。本當に

神さまなり、佛さまなりを知つてドン底から落付いた生活に入りたいと思つてゐるのです。何教の教會も村の近くにありませんので、お寺の方なら割合近いから、其の方へ行つてお經の講義を聞かせて貰ふことにしたいと思つてゐます。

宗教は講義の中にはない

谷口――それも結構ですが、宗教と云ふものは、お經や聖書の講義の中にあるのではありません。無論、お經や聖書には眞理が書いてある。だから甚だ有り難いのです。しかしその解釋に到つては、その人、その人のサトリによつて色々に解釋されるのでありま す。親鸞聖人と日蓮上人とはいづれ劣らぬ名僧でありながら、釋迦のお說きになつた佛法を全然ちがふやうに解釋された。親鸞聖人が『たゞ念佛さへとなへればほかの行は何一つせいでも好い』と云はれると、日蓮上人は全然反對に『念佛など稱へてゐると無間地獄へ墮るぞ』と云はれた。どちらも偉い名僧で學問は衆に秀でてゐる、どちらもお經の一字一句の意味が解らぬと云ふ人ではない、それだのにお經の說き方は全然別になつた。だからお經の一字一句が判つたとて、本當のサトリが得られるにはきまつてゐないのです。日蓮上人の說き方が正しいか、親鸞聖人の說き方が正しいかは、日蓮以上、親鸞以上の名僧でないと判別することが出來ない。本當のサトリと云ふものはお經の語義

道を指し示す教へが宗教

の中にあるのではない。あなたは『一燈園は宗教でない』と云はれましたが、一燈園でも立派な宗教です。『生長の家』もまた見方によれば宗教です。宗教と云ふものは御經の文字の講義をしたり講義を聽いたりすることではない。道に隨うた生活をするのが宗教的生活で、道と云ふものを指し示す教へが宗教である。道は必ずしも何々教と云ふものゝ中にはない、何々教と云ふ立派な名義の中にゐて、お經やバイブルの講義をどんなに立派にしても、道をはづれた行ひをする人は宗教家とは云へない。それは宗教業者です。既成宗教は駄目だと云ふ聲が聞えるのもそのためである。既成宗教が駄目なのではない、宗教業者が宗教を形ばかりにして生命のないものにしたのです。これに反してお經の一字をも解釋し得ないでも、道にかなうた行ひをする人は宗教生活者です。だから宗教の開祖にはずゐぶん無學な人が多い、天理教祖でも、金光教祖でも、大本教祖でも、みんな無學である。無學の人が『道』にかなうた行ひをした。そこで無學の人と、天地に滿ちてゐる『道』とが一體になつた。そこで『道』と云ふものが、その無學の人を通して眞理の響を奏でる、これが宗教と云ふものです。教祖が無學な場合には一絃琴のやうに簡單なことばで『道』を說かれた。しかし『道』と云ふものは、天地にミチ、

すべての人の眞心の內にミチてゐるので、眞心をハツキリさせてゐる人なら必ず共鳴する。そこで多數の人々が共鳴して信者となつて集つて來る、集つた人々のなかに學者があれば、教祖が簡單な單純な言葉で傳へられた『道』を色々學者ぶつた有り難さうな複雜な言葉で說明する、そこで表面は益々嚴めしくなり立派になつてくるけれども、それを說く人の生活が道にかなはないと、段々、本當の『道』が奥の方に埋もれて來るのです。はじめに權威のあつた宗教がだんだん權威がなくなつて來るのは、大抵さう云ふ經路をとるものです。

野田――私は先日一寸東京へ往つたついでに、四谷に門戸を構へてゐる○教々祖△△△師を訪れましたが、會ふと直ぐ『貴方は身體に病氣があるでなし、心に煩悶があるでなし、○教の教義を聞きに來られましたな』と圖星を指されました。教祖と云ふのは六十八歲位の澁皮のむけた老人で、世の中の酸いも甘いも嚙み分けた親分肌の感じのする人です。が、こんなことを云つてゐました。『今、この東京に七百何十軒の神の教を說くところがあつて皆な相當に信者を集めてゐるが、かう云ふ神の教へを說く所が流行るのは、人間が人間の道を步くのを面倒臭がつて、もつと樂な神の道と云ふものを求めてゐ

る證據である。ところが、神の道と云ふものは、人間にとつては人間の道しかない。人間の道とは、神が定めた人間の道であるから、これが神の道である。だから人間は人間の道を歩むやうにしてゐさへすれば天の親様が守つて下さるから不幸や災難に會はないでも濟む。ところが人間が人間の道を歩まないで、電車道や自動車道を歩くから怪我をする』と云つてゐました。

谷口――なか〳〵善い教へではありませんか。宮岸さん、さつき貴方にも話したことでしたが、宗教生活と云ふものは、『道』にかなつた生き方をすることであつて、お寺や教會の說教の中にあるのではない。〇教の教祖もやはり同じことを云つてゐられる譯ですねえ。どの教へでも、本當の教へならさうでなければなりませんな。

野田――その教祖は神懸りのある人で、自分で天から遣はされた天使の一人だと云つてゐました。まあ或る點では天使の一人には相違ありませんな。

谷口――昔から色々の宗教がある。それはどの時代にも色々の人間がありその性質や素養や傾向が異つてゐる、それで、神は各々の時代や、色々の種類の人間に向くやうに色々の教へを、それに相應はしい人物を通して天降される譯ですねえ。甲の宗教で救はれぬ

人も、乙の宗教では救はれる。甲の宗教ではどうも說き方が古めかしくてピツタリ心に來ぬと云ふ人のために、また新しい乙の宗教が出現して來る。いゝもとの救ひの神は一つであつても、救はれたい人間の種類が色々あつて、その色々の人間の魂がどうぞ是非とも救うて下さいと暗默のうちに神を呼んでゐる。『求めよ、さらば與へられん。呼べよ、答へん』ですなあ。神は人間の魂の切なる求めの聲を聞いて、その色々の人間に相應はしい救ひの放射光線を天上から投げかけられる。この救ひの放射光線とも靈波とも云ふべきものを靈眼で見れば、その姿が象徴化されて天使の姿にも見えれば、古代の裝束をつけた神々しい神樣にも見える、その救ひの靈波の意味を感受して判りやすく人類に傳へるのが色々の宗教の教祖です。いづれも救ひの神はもとは一つ、求める人間が異つてゐるから、色々の教へが出て來るのです。

野田――その天教ではどう云つて拜むかと云ひますと『天の親樣』と云つて拜むんださうです。お宮も何も祭つてはない。はじめはお宮も祭り宣詞もあげてゐたが、數年前からお宮は祭るに及ばぬ宣詞もあげるに及ばぬ、たゞ『天の親樣』と云つて拜めと『天の詔勅』があつたのださうです。机の上に日本紙が堆く積んであつて、教へを聞きに行く人

に「天の詔勅」と云ふのを書いて與へる。私も書いて貰ひましたがなか〳〵達筆で、書いてあることには日常の心得書きのやうなものや、汝の前世は何であつたとか、汝の靈魂は何遍生れ更つたものであるとか、そんな風なことが書いてあります。「天の詔勅」を書いて貰つても謝禮は一文もとらぬし、月に一回か二回ある例會には何か道のことの說教をした上で、信者に折詰めなどを持たせて歸す。困つてゐる信者には時々二三十圓の金はくれてやる。それでゐて賽錢も謝禮も何もとらない。時たま神樣にお供へ下さいと云つてお金を包んで出す人があると、當方には神さまはお祭りしてありませんと云つて返す。何んでも、金の必要があれば兜町へ出かけて相場で千圓位の金は直ぐ引つつかんで來るらしいのです。信者にきいて見ると、人を助けてゐられますから、神さまからそれだけのお當てがひがあるんでせうと云つてゐました。相場の高低などは自分で神通力で判るらしいのですが、信者に相場師などがあつて、唯今買つたら好いでせうかなどゝ云つてきけば、大抵きまつて、今は手出しをしてはなりませんと云はれるさうで「先生の云はれる通りにしてゐると、全然手出しをする時期がありません」と云つてゐました。

谷口――信者から金をとらない却つて與へるばかりだから、綺麗サッパリしてゐて、無慾恬淡な先生だと尊敬される。その代りその費用を、神通力を利用して相場の高低を知つて、其處からつかんでくると云ふことになると、なかなか景氣の好い話ですが人間らしい努力と云ふものがなくて普通の人間としては踏めない道、つまり神の定めた人間の道でないと云ふことになりはしませんでせうかね。なか〳〵此の金の問題は宗教家にとつてはニガ手で、信者からお賽錢も供養も謝禮も一切とらないでたゞ與へるばかりにしてゐると、自分の生活費は何處から來ると云ふやうになるのです。そこで信者からはとらぬかはりに兜町へ出入りをして相場で金を掴んでくると云ふ道をその教祖は開いた、そこに一つの吾々の考へるべき問題が殘つてゐるのです。一燈園などでは、兜町などへ往つて金をつかんでも來ないし、また月給を貰ふ譯ではない、たゞ默々として奉仕の生活をしてゐる、自分の出來る仕事で人のためになると思ふことなら、どんな小さな仕事でも汚い仕事でも厭はずに無報酬で働く、すると、あんなにあの人は働いて氣の毒だと思つて誰からか生活に必要なものを供養してくれる、これは自分から欲しいと云つて求めたのではない、どうぞこの供養を取つて下さいと云つて頼んでもつて來るものだから、

その供養を受けてゐると云ふ風に一燈園では說明してゐます。その說明はとも角、現在の經濟組織が存する限りに於て、人間は生活費又は生活の資料を何處からか得なくてはならない、自分が生活をしたほかに、まだ他に與へるやうにしようとすると、その與へるものを何處からか生み出して來なくてはならない。そこで其の生み出す方法に何か勿體ぶつた名前をつけて氣取らうとするやうになるのです。私はこの金の問題はそんなに氣取る必要はないと思ふのです。自分は與へてゐるぞ、與へてゐるぞと云ふことを見せびらかしたい心持があるから、信者から折角有つて來たものを一方では突き返して置いて、また一方で相場でもしなければならなくなるのでせう。或はまた實際貰つて置きながら、どうぞ貰つてくれと向ふから賴むから貰ふのであつて、向ふから賴まねば貰はぬのだと高調子な考へ方をするやうにもなるのでせう。本來『我』に屬するものは何もないのであつて、皆な神さまから頂いたものであるから、一體、吾々は貰はずに生活出來るものではないのです。貰はないぞ、貰はないぞ、お前たちの世話にはなつてはをらないぞ、私は世話をするばかりだぞ私は與へてゐるばかりだぞ——かう考へてゐると、世の中に自分が一等恩をきせてゐるやうで景氣の好い話ですから、氣取り屋や、お天狗さ

與へることも與へられることも難有い

んは兎もすれば斯う考へたがりますが眞理ではないのです。此世の中は持ちつ持たれつの世界であり、互ひに融通し合ひ助け合ふやうに出來てゐる以上は與へることも與へられることも兩方とも難有い結構なことでなければならないのです。世話になつたと思ふと自分が急に小さくなつたやうな氣がし、世話してあげたと思ふと急に自分が大きくなつたやうな氣がするやうでは本當ではないのです。人間は世話になつてもそんなに小さくなるものでもなく、世話をしてもそんなに大きくなるものでもないのです。人間の大きさはそんな處にあるのではない。人間の大きさは、人間が神の子である點にあるのです。その人間の『神の子』としての神性があらはれた結果として、世話する働きともなり、世話される働きともなる、そこで世話するものも世話される者も一如だと云ふことが解つて、其處に何とも云へぬ難有さが湧いて來る。これが本當の難有さなんです。吾々が有り難いと云ふのは世話されたから有り難いと云ふのでは我の有り難さなので本當の眞理を知つた有り難さではないのです。そんな有り難さなら、世話されない時には有り難くなくなる。それでは本當の有り難さではない。世話する人も世話される人も皆な一つの神から出てゐるその神性の自覺から出發した有り難さでないと本當の有り難さだ

とは云へないのです。若し人間が他を世話したときには自分が偉くなつた氣がし、他に世話されたときには卑屈な小さな氣がしなければならないのであつたならば、他を世話することはそんなに善事ではなくなるでせう。何故なら其の人は、他を世話するたび毎に、自分の心が傲慢になり、相手の心を小さくし卑屈にして行くことになるからです。ところが本當の世話と云ふものは『私』が『彼』に世話すると云ふやうなものではない、本當の世話と云ふものは『私』と『彼』とを超越した一層大きなものがして呉れるのです。それで世話してゐるものも世話させて頂いてゐると云ふことになり、世話しても自分は傲慢にならず、また相手も卑屈にはならないで、どちらの心にも、たゞ有り難さの心が殘るのです。

宿命論の矛盾

野田――東京へ參りましたついでに觀相の大家櫻井大路氏に或る人の紹介で會つて來ました。みづから天下一の觀相家をもつて任じてゐます。觀相より得た體驗から、人間萬事宿命に支配されてゐる。伊藤公の遭難でも原敬の遭難でも今度の濱口首相の遭難でも、すべて人相にあらはれてゐて、ずつと以前からそれを自分は豫言してゐた。人間の運命は如何に避けようと云つても避けらるべきものではない。人間は努力しても成功するも

のではない、成功する人は成功するだけの人相を有つてゐる、そんな人は努力しないでも成功するやうに自然になると云つてゐました。そこで『あなたのお說は宿命論ですね』と追求しますと、『宿命論です』と斷言しましたから、『そんなことを發表なすつたら世道人心に害がありませう』と云ひますと、『それは害があります。あなたが追求して來られるから已むを得ず答へたのですが、普通の人には發表しないのです』と云つてゐました。

谷口――大分あなたの質問につり込まれた形ですなあ。宿命論を發表したら世道人心に害があると云ふことは、それを發表すると發表しないとで、人間の運命が左右されて來ると云ふことですから、結局、宿命と云ふものは努力で變化して來ると云ふことになり、宿命論はそれみづから破壞されたことになるぢやありませんか。

村山――ヴェツテリニの靈告には人間の運命は半分は宿命で半分は個人の努力だとありましたね。

野田――ヴェツテリニの靈告と云ふのは何ですか。

谷口――フランスの美術家コルニリエーがそのモデルの少女を靈媒として實驗したとき

に、可成り高級な靈魂と認むべき『ヴェッテリニ』と稱する靈人があらはれて色々出生前や死後の消息を教へたのです。これは、私が嘗て讀んだ幾十の世界の心靈研究書中最も面白く最も合理的に頷けるやうに書かれてゐるので、私の最近の著述『出生前・生・死・死後の研究』に詳しく紹介しました。（全集第五卷に收錄）その靈告によりますと、人間の運命は三分の一は宿命、三分の一は個人の努力で自由に出來、殘りの三分の一は靈界の高級靈の修正を受け得ると云ふのです。自分が心にサトリを開くとか、行ひに精進努力して運命を切り拓き得る部分があるのは當然のことですが、或る神を祈つて――この場合『神』と云ふのは高級靈のことですが――その神の靈力で運命が變化すると云ふのは、此の靈界の高級靈の修正によると考ふべきだと思ひます。

人相を超越する話

河内――私は櫻井大路はどんな偉い觀相家か知らないが、石龍子の方が偉かつたと思ひますね。どこが偉いかと云ひますと、石龍子は自分の著した觀相の本の中にこんなことを書いてゐます。支那の遠了凡と云ふ人の著に『功過自知錄』と云ふ遠了凡の自敍傳のやうな本がある。その本によると遠了凡は若い時に觀相家に見て貰つた。するとその觀相家は名人であつて何年何月には如何なる事件が起るとか、何年何月には進士に昇進する

とか、何年何月にはどう云ふことになるとか詳細を極めた豫言をした。ところが、その豫言された事件が月日も違はず的中して出て來て、つひに遠了凡の晩年になつたのです。彼は世の中のことはすべて宿命に支配されてゐると云ふことを、自分の生涯によつて體驗しましたので、もう焦つてもどうもならない、たゞ出て來るものをそのまゝに受けるほかに道はないと云ふ一種の徹底的な諦めに到達してしまつたので、少しもアセリのない泰然自若な心境に到達したのであります。その頃、遠了凡が或る禪僧の會合に列席しましたところが、禪僧は遠了凡の泰然自若たる態度に感心して禮を厚うして、「貴方は到底私如きの及ぶ人ではない、如何にも安祥としてサトリを開いた人のやうな泰然とした相をしてゐられる。どうぞ私に教を垂れて下さい」と申し上げた。すると遠了凡は「私はそんなに貴方に尊敬されるやうな人間ではない。實は私は若い時に人相見に觀て貰つた結果、その豫言が月日も違はず出て來るので、人間の生涯の事件と云ふものは悉く宿命に支配されてゐて自分の自由には決してなるものでないと云ふことを悟つたので全然アセルと云ふことがなくなつたのでこんなに泰然と落付いてゐます」と答へた。すると、そのとき禪僧はカラ〱と打ち笑つて「貴方はもつと偉い人かと思つてゐたが、

心の修養で運命が左右される

案に相違の凡人ぢや。運命と云ふものはそんなに一定したものではない、自分の心の修養によつて變化するものぢや。その修養法をお敎へ申さう』と云つて遠了凡はその禪僧から敎へられた通りに修養した結果、それから自分の運命が其の觀相家の云つた通りには出て來なくなり、五十三歳で死ぬと豫言されてゐたが、つひに八十數歳までも生きのびたんださうです。この事實を書いて石龍子は、心の修養によつて運命が左右されると云ふ事實に至ると自分は自分の觀相學を捨てゝも決して惜しいとは思はないと結んでゐます。この點が石龍子は櫻井大路よりも偉いと思ひますね。

谷口――『生長の家』で『眞理を悟れば因緣を超越す』と云つてゐるのがそれですね。眞理を知らない間は、因緣に縛られてゐるから、因緣通りに運命が出て來るほかはないのです。

野田――櫻井大路氏に云はせると、自分の運命と云ふものは何十萬年の前からの代々の先祖の業のつもつたものであるから、人一代位の努力では迚もどうにもならないと思つてゐるらしいのです。

病氣は無い

遠山（醫師）――私は病氣はないと云はれる『生長の家』の主張がハツキリまだ分らないの

です。大人が色々と病氣を恐怖して病氣になると云ふやうな場合には、その病氣は恐怖の念の影だとも云へますけれども、生れて間もない子供、まだ病氣の何たるかを知らない子供が病氣になるのは念の影だとは云へないやうに思はれます。

谷口――念と云ふものを、いま心に何か考へてゐる、その考へてゐる念だけを自分の念だと思つてゐられるからさう云ふ疑問が起るのです。吾々は何も心に考へてゐない時にも、吾々を今在る通りの形にあらしめてゐるところの念が、吾々の肉體の背後にあるのです。吾々の肉體と云ふものは、その念が影をうつして斯う云ふ形をあらはしめてゐるのです。念と云ふものがフイルムであつて、そのフイルムを透して生命の光線が射して來てスクリーンにそのフイルム(念)にある通りの影を映す。その影が肉體なのです。だから病的觀念のフイルムをかければ肉體は病氣になるし、健康觀念のフイルムをかければ肉體は健康になるのです。先日も誌友から『病氣は心の影で實在ではないと云ふなら、健康も心の影であつて實在ではないではないか』と云ふ質問が來ましたが、無論『健康な肉體』も念の影であつて實在ではないのです。實在でないからこそどんな健康な肉體でさへも百年二百年とは存在しないで消えてしまふのです。實在でないものは皆な自滅

するやうに出來てゐるのです。吾々は肉體を實在だと思つては可けない。實在だと思ふからこそ捉はれるのです。捉はれるから心の自由を失ふ。心の自由を失ふから、その念が圓滿でない歪なものになるのです。念が歪になるから、念のフイルムを透つて映つて來る肉體が歪んだものとなつて來るのです。これが病氣です。元はと云ふと皆な心が肉體と云ふ不自由なものを實在と見てそれに心が捉はれたところから來るのです。お醫者さまに對してこんな說敎をするのは變なものですが、お醫者さまは、念のフイルムを治さないで、肉體と云ふスクリーンに映つた影の方に心を集中し、スクリーンに病氣の映畫が映つてゐるからと云つてはスクリーンに補布をあてたり、鋏で切つて見たり、墨で塗りつぶして見たりして色々工夫してゐるやうなものです。しかしスクリーンにどんな工夫をしても、フイルムの方の繪(念像)が變らない限りは、スクリーンには又しても同じ病像が映ります。ところがフイルムの方の繪(念像)をかへるのには「心」に病氣の肉體を描かないのが一等好いのです。心に病氣の肉體を描かないやうにするのには、病氣の肉體をわすれてしまふのが一等好いのです。肉體と云ふものは影ですから、それを忘れてしまつた時に、一等完全に生理作用を果すのです。心臟の存在を忘れてゐるときに

病氣を起す根本的迷ひは人間を物質的存在と誤信すること

心臓は最も完全にその作用を果し、胃袋の存在を忘れてゐるときに胃袋は最も完全にその作用を果すのです。こゝに心臓があるな――と判つたときには心臓が悪いし、こゝに胃袋があるな――と判つたときに胃は悪いのです。元來吾々は『生命』である。躍如として生動する生々の靈なんです。それを肉體だと思ひ、物質だと思ひ、固定した物質的な不自由なものだと思ふ――さう思ふだけで既に、躍動する『生命』本來の相から吾々は大變墮落をしてゐる譯です。自由自在の生命が、不自由極まる物質だと自覺する、これほど生命にとつて大きな墮落はありません。その自覺の墮落が肉體と云ふ映畫はあらはれるとき病氣となるのです。私は病氣のことを一度も考へたことはないのに病氣になつたと反駁して來られる方がありますが、自由自在の生命が、自己を不自由極まる物質だと自覺したなら、それは既に病氣だと自覺してゐると同じことです。現代の生理學や醫學では人間を物質だと教へるでありませう。若しさうなら、それは自由自在の吾々の生命をその本當の自由自在な相に於て自覺さす妨礙をし、汝は不自由なものだ（即ち病氣だ、死すべきものだ）と逆の暗示を與へてゐることになつてゐるのです。だから、醫學愈々盛んにして、病氣も愈々盛んなのです。ところが『生長の家』では、醫學とは反

對に人間は物質で出來てゐるものだと云ふ觀念を擊破し、そして自由自在な生命だと云ふ自覺をつぎ込むのです。聖典『生命の實相』や『久遠の實在』を讀むだけで自分が自由自在な生命であつて物質ではないと云ふ自覺が出來るだけでも現代醫學で難治だと云はれてゐる病氣が治る實例が澤山あります。最近胃癌が治つたと云ふ手紙が來てゐます。

（當時の誌友雜信にある實物の手紙が回讀される）

野田――私は谷口先生の教へを受けて以來人間は肉體ではないと云ふ說明をかう云ふやうにしてゐます。吾々の肉體は日々に新陳代謝して、止まるところを知らない。幾ケ月かすると、吾々の肉體細胞は殆ど全部、幾ケ月前の肉體細胞とは別の細胞になつてゐるのでせう。若し肉體と云ふものが『私自身』であるならば、幾ケ月前の肉體の方が『私』か、現在の肉體の方が『私』か判らなくなるでせう。又たとへばこの皮膚は毎日擦りむいても又新しいのが出來る、この擦りむく皮膚そのものは『私』ではない、皮膚を中から新生さして來る、目に見えない『生命の力』――これが本當の自分だと斯う云ふ風に說明してゐます。

谷口――目に視えるものを實在だと思つては可けない、肉體の五官に見えるものを實在だ

と思つては可けない。それでは靈眼で見るものを實在と認むべきであるかと云ふと、本當の實在は靈眼でさへも見ることが出來ないものです。だから『生長の家の歌』には『本當の實在は五官も六感をも超越してゐる』と示されてあるのです。五官で見るものを實在と見るものは五官に捉へられて生命の自由自在の相を發揮することが出來ないと同じやうに、第六感や靈眼で見るものを實在だと思つてゐるときには、また第六感の世界に縛られて生命の自由さを失つてしまふのです。よく靈眼がひらいて靈の姿の見えると云ふ人がある。惡靈や、亡靈や、動物靈や、怨靈の姿を見る、これらの靈魂の姿は實際あるかと云ふと第二義的意味では實際ある。しかし第一義的意味では無いのです。それは病菌は有るかと云ふと第二義的意味では有る。微生物は顯微鏡で見れば歴々と見える培養すれば繁殖する――然し病氣を起す菌としては存在しないのです。病菌としては存在しないと云ふのは、神は決して病氣をおこす不調和なものを造り給はないからです。神の造り給はないものは無い。その無いものを在ると思ふ、それが迷ひであり、迷ひが客觀化して展開して來た存在だから第二義的存在なのです。それと同じやうに、惡靈と云ふやうな害を與へるものを神は決して造り給はないから惡靈は第一義的には存在

しないのです。すべて第一義的存在ばかりを見、神の造り給ひし調和した世界ばかりを見る。これが「生長の家の生活」なんです。ところが靈眼の見える人は、顯微鏡をもつた醫學者が動もすれば病菌を見て如何にも氣味が惡く恐怖するのと同じやうに、靈眼に見える惡靈に心をとらへられ、それを恐怖して病氣になつたりすることがあるものです。この點では靈眼が開いて惡靈の見える所謂靈視者は、靈眼が開かないで惡靈の見えない人よりも或る意味では不幸なのです。病菌の見える文化人は、黴菌の存在を知らない野蠻人よりも病氣に對する抵抗力が弱い場合があるのと同じです。見えるから在ると云ふ――普通の人は五官に見えるから在ると云ふ。けれども五官に見えるものは實在ではないと「生長の家」では云ふのです。五官は念の影を見る道具なのです。あり〳〵と此處にあるやうに見えてゐる、この歴然とした存在さへも實在ではなく念が形に顯れたものなのです。靈眼でアリアリと見えてゐる靈の姿も同じことで、念が姿をあらはしたものであつて實在でないと云ふことは寧ろ當然すぎる程當然のことなのです。（机をさして）此處に机がある、皆さんにも机があると見えてゐる。しかし龜井三郎氏を靈媒として實驗した例によると、この机はこんなに固いものではなく、水の這入つたコップがスウー

とこの机を透過して下へ落ちる。つまり此の机は龜井三郎についてゐる司配靈（モゴールと云ふ印度人の靈魂だと云ひますが）にとつては通過すること自在なものであつて何もこんなに固い存在ではないのです。此處に龜井氏の司配靈モゴールが密閉室の壁を貫いて物品を引寄せたり、机を透過したりする手品的な心靈現象の出來る種があるのでせう。種と云つても物質的な仕掛ではなく、靈界に屬する靈魂が吾々の念とは異る「念」の世界に住んでゐる。この念の相異こそ此の靈的手品が出來る種でありませう。私が此處に云ふのは物質透過現象だけを云ふので他の心靈現象を云ふのではありません。さてこの机が吾々にこんなに固い存在に見えてゐるのは、吾々の五官が自分の念で固いと信じてゐて、その固いと云ふ「念」を此處に（机を指す）反映して固く感じてゐるのです。だから、それを固いと信じない念をもつたモゴールの靈魂などにとつては透過することが自在なので机にコツプを拔け通らしたり、密閉した室の壁を貫いて物品を引寄せて來たりするのです。しかし、そんなら机はこゝに存在するやうに見えてゐるけれども全然存在しないものであるかと云ふとさうでもない、机を机として感ぜしめてゐるところの念の波動が其處に在るのです。「机」そのものが在るのではなく、机の顏をしてゐる念

の波動があるのです。物質ではなく念の波動だから念の異ふ境涯にゐるモゴールには拔け通つて通過することも出來るのです。病氣でも、病氣そのものは無い。病氣の顔をしてゐる念の波動があるのみです。だから病氣を治す祕訣は病念の波動を取り去ることにあるのです。聖典『生命の實相』や『久遠の實在』を讀んで『人間は本來、神の子であつて病氣は無い』と云ふ眞理を知れば胃癌でも治ると云ふのは、病氣は無いと知れば病念がなくなる、病念がなくなれば病念が形をあらはしてゐたところの病氣そのものが消えるのは當然です。『生長の家』の聖典を讀んでも好い加減に讀んで、病氣が無いと云ふ眞理に通達しなかつたり『病氣は有る』と云ふやうな世間並の考への方をヨリ強く有つてゐられると、病氣の念を有つてゐることになるので、その病氣の念が、形の世界に顔を出して病氣とあらはれて來る譯ですから病氣は治らないのです。念でおもへば、念の通りに自分に形をあらはすのが、自分の肉體とか境遇とか云ふものですからねえ。だから私は人に云ふのです、『生命の實相』や『久遠の實在』の聖典は幾回でも交替に繰返して讀むべきものであつて、一回位讀んで書いてある事の意味だけが解つた位では駄目なんです。讀むたび毎に自分の病念を破碎して、最後の無にまで、その病念を破碎し切

つたとき、忽然と其の病氣が消える。或は今後病氣にかゝると云ふ可能性がなくなるのです。活動寫眞で云へばフイルムに病氣の繪が全然なくなつたとき、舞臺の方でも病氣の映畫が消えるのと同じです。だから心のフイルムに描かれて潜在してゐる病念が悉く完全に消え去る迄は幾回でも繰返して讀んで頂かねばならぬのが「生長の家」の聖典であります。

野田――肉體が念の顯現であると云ふことを知るのは何と云つても體驗ですね。私は近頃ひどい病氣もしませぬが一寸した病氣になつたときに谷口先生の云はれる原理を應用して、精神統一をして自己生命の本來の病氣のない狀態を念じてゐますと、或る時間後にその念の通り肉體が健康になつて來るのでその體驗を得てゐます。他人の病氣を治すときには病人と兩手をつなぎ合はして對坐して精神統一してゐると病人の患部と同じ場所の自分の肉體に感應があります。その人の病氣がお腹ならば自分のお腹にその病的波動を感じて變に痛くなつて來たりするのです。ところが、その痛みは實際はない、病人の痛いと云ふ念の波動が自分に感應してゐるのですから、今度は「病氣はない、痛みはない」と云ふ觀念に精神を統一してゐると「病氣はない、痛みはない」と云ふ念の波動の方が、

「病氣は在る、痛い」と云ふ念の波動に打ち勝つて、痛みが感ぜられなくなつて恍惚として來ます。するとその時には病人の方の痛みもとれて、輕い病氣なら一度で病氣が治つてゐます。この體驗でも、病氣と云ふものは念の波動のアラハレであつて念の波動を自己本來の無病狀態にかへれば治ると云ふことが判りますね。時に、皆さんは近頃の朝の五時二十分からの遠隔指導の神想觀實修はやつてゐられますか。最近、私は早朝の遠隔指導を受けますと、自分で自修する時よりも手にピリ〳〵感じて來る靈感が激しいのでした。その掌の靈感が遠隔指導の終る六時が終るとその瞬間スツと消えるから靈波の感應と云ふものゝ體驗が得られて誠に結構でした。

第四章　基督の偉さと奈翁の偉さ

場　所――生長の家出版部樓上。
出席者――谷口氏と野田尙道氏。（最初の革表紙の聖典に就て語る）

野田――聖典結集の計畫は私も提議した一人ですから、折角お作りになつた部數が賣れないで餘るやうなことがあれば私もまた責任を感ずる次第でありますが、現在の確定讀者に必ず一冊づゝ割當てると云ふことになさつては如何でございませうか。創刊號から引續いて讀んでゐる讀者なら、いづれ何らか、たましひの上に恩惠を受けてゐる人でせうから、この聖典結集の計畫には贊助し幾分でもお助けするのが本當だと思ひます。

谷口――私は誌友の方に押付けがましいことを一切しようとは思つてゐません。『生長の家』は誌友が助かるために出現したのであつて、私の生活費が助かるために出現したのではないのですから、誌友が自分で進んで聖典を欲しいと申込まれるのでなければ送らうとは思ひません。さうでないと義理に縛られて聖典をとると云ふやうになられると『生長の家』で說く道が立たなくなるのです。誰かの爲になると云ふことが、その爲に

なつたことを云ひがゝりにして、あとで其恩義で其人を縛るやうなことにでもなると、始めから其の人の爲めに盡さずにゐればよかつたと云ふことにもなるのです。『生長の家』の生きる道は人間を縛る道ではなくて、色々のものから縛られてゐる其の縛りからその人間を解放する道なんです。醫學や衛生に縛られてゐる人なら醫學や衛生から解放する、人相や家相に縛られてゐる人なら人相や家相から解放する、因緣に縛られてゐる人なら、その因緣から解放する。職業に縛られてゐる人ならその職業を乘り超えて尙生きる道があることを示す。かう云ふやうに人間の生命を縛つてゐるあらゆる束縛を解き放つて『生命』本來の自由さを奪還させるのが『生長の家』の道なのですから『生長の家』が誌友に對して少しでも押し付けがましいことをすれば、たとひ聖典の賣行はよくなり、經濟的に、『生長の家』が大きくなつても『生長の家』の道が立たなくなるのです。

野田――先生としてはご尤もの御意見だと思ひます。それではもう少し印刷部數を少くして、若し賣れない場合の危險率を少くなさつてはどうでございませうか。

谷口――『生長の家』には危險と云ふことはないのです。危險のありやうを考へたことがありません。儲けようと思つてゐる仕事には、損をすることは危險かも知れませんが、

最初から儲けるつもりで無い仕事には損をすることは危險ではないのです。何か、それに危險を感ずるのは、自分の方に求める心があるからです。自分は求めないで、求められゝば與へようとねがつてゐたら、危險の感じやうがないのです。『十里の公役を強ひられゝば二十里を行け』ですね。『生長の家』の聖典を出すのも、はじめから私が進んで出すのではない、誌友たちがそれを要求してゐるから出すことになつたのです。皆が聖典を結集して出して呉れと云つてくれられる、其の要求が切實であるから、結集して聖典を出さずにゐられなくなつて來たのです。呼ぶものがあつて應へるものがあると云ふ譯ですね。呼ぶものと應へるものとは一體である。其處が有り難いのです。今明かに文書をもつて申込んでゐられる數はまだ少いですが、私は多くの人類が『生長の家』の聖典を呼んでゐる隱れたる魂の呼ぶ聲を聞くことが出來ます。『生長の家』はもつと廣がる性質のあるものです。それは現在の讀者がどれ位に魂の底から喜んでくれられてゐるかでわかります。一人で聖典を十冊を申込まれた方もあれば、七冊申込まれた方もあります。何十萬の讀者を擁する雜誌でも大抵は實用半分娛樂半分で讀者を吸收してゐるにすぎないのです。ところが現在の讀者の數は少くとも、その人が讀者である限り、

魂の底から喜んで、清められた心で知人に配布するために舊號を合本したものを一人で十冊も希望されるやうな雜誌は此の世界にそんなに澤山例はありますまい。現在この雜誌の讀者の數がまだ多くないのは人類がまだこの『生長の家』を知らないからです。知れば必ず人類は喜ぶのです。やがて十萬、百萬の讀者を獲得するでせう。

野田――今度、合本して聖典が出ると云ふので、私は今迄祕藏してゐた『生長の家』をすつかり知人に分けてやりました。ほかの誌友も私の例にならつて、今迄祕藏してゐた『生長の家』を一冊あて皆な手紙を添へて別々の知人に送つてやつて『生長の家』の存在を知らせてやることにし、若し共鳴したら創刊號からの神誌が系統的に結集されて聖典として出ることになつたから讀めと云ふ手紙を添へてやることにしたら、一人の誌友が十數人の知人に『生長の家』を知らしてやることになつて、その中には隨分救はれる人も出來大いに功德を積むことになると思ひます。

谷口――成る程、それは功德になるお考へです。貴方にならふ方もあると思ひます。既に貴方に限らず『生長の家』の讀者は今迄から隨分感激してをられて、知人に見本雜誌を送つては此の道を宣傳してゐて下さつたやうです。知人に遣つたので第何號が缺號にな

つたから淋しいから送つてくれとよく云はれます。ところが『生長の家』は月の十日頃にはもう其月の雜誌が品切になつてゐて無い場合が多いのです。

石川武美氏と語る

野田――先日『主婦の友』の社長石川武美氏に會つて『生長の家』のことを話しましたら、石川氏は一人一業をモツトーとしてゐるので『生長の家』の生き方を說く谷口氏が他に職業を有つてゐて、その餘暇に『生長の家』を發行してゐられるのでは一人一業ではない、それでは『生長の家』に全生命を賭けてゐるとは云はれない、一人一業になり切らないとき谷口氏は『我れ此の生長の家と云ふ雜誌によりて生くるものなり』との氣分を缺いてゐると云はねばならぬ。『生長の家』のやうに生命を說かうとする雜誌は自己の生命と融一せねばならぬ、自己の生命と融一さすためには片手間でやるやうではならぬ。全生命をかけて『我れ是れによりて生くるもの也』との意氣に燃えあがり、雜誌と共に生死を共にするやうでなければならぬ。私から、谷口氏の『生長の家』に對する態度を見れば『我れこの雜誌によりて生きず、他に生きる道あり』としてゐられるやうで、そこに隙がある。谷口氏が自分のやうに一人一業主義になり切り、我れこの『生長の家』と云ふ雜誌の經營によりて粥でも汁でも絞り出すと云ふ覺悟を持たれたならばど

うだらう。讀者は一層增加して救へる人々の數が殖ゑて來る。一人一業――すべての退路や逃げ路を斷ち、背水の陣を布いて此れこそ我が生命を賭けた全事業だと云ふ實を示されるこそ、本道ではないか。これこそ『生長の家』に說いてある『生長の家の生き方』ではないか。『生長の家』の說く處は、實に主婦之友の經營が步んで來た道が其儘書かれてゐるので感心してゐると云つてゐられました。

谷口――本當です。全生命を一つのものに賭けるとき誠が出るものです。それは『生長の家』に私が常に說かして頂いてゐるところです。けれども私にとつては何に全生命を賭けるかと云ふことが問題なのです。主婦之友と生長の家とは其の目的が異ひます。凡ゆる手段を講じて雜誌の讀者を殖やす實業――私はこんなことに全生命を賭けてゐるのではないのです。そんなことを生涯の目的とする生き方をする人は別にあります。私は雜誌の外形の伸びると云ふことよりも、雜誌の內容が本物になると云ふことに生命を賭けてゐるのです。キリストは自分では雜誌を一冊も出さなかつた。時々閃めくやうに出て來る靈感的な言葉をその短い生涯に於て其の兄弟たちに語つた。たゞそれだけです――けれども其の靈感的な言葉に感じた人たちが、キリストの言つた言葉を集めてキリスト

生長の家は雜誌業に非ず

の雜誌即ち『新約聖書』を造つた。いま全世界に此のキリストの雜誌即ち『新約聖書』の讀者が何千萬あるか、或は何億あるか、併しキリスト自身は此の聖書の經營によつて粥でも汁でも絞り出さうとしたのではない、我れこの雜誌によつて生くと云ふ氣分があつたのではない。キリストは粥でも汁でも絞り出さうとせずに唯默々として十字架の苦杯を飲んだ。キリストの『聖書』が全世界に擴がつたのはキリストが『聖書』を經營してそれからパンを得ようとしたからではない。若し私が『生長の家』と云ふ雜誌の經營によつて粥でも汁でも絞り出さうとするのであれば、それは『われこの雜誌によりて生くるもの也』であるかも知れぬが、本當は『我れこの雜誌に賴りて生く』と云ふことになつてしまひます。それは人を救ふための雜誌ではなくて自己がパンを得るため、又は事業を成功さす野心をのばすための雜誌になつてしまひます。もし『生長の家』が人を救ふための雜誌でなくなつて、自己がパンを得たり雜誌業を大きくするための商賣になつてしまふならば、たとひ何百萬の讀者が出來ませうとも『生長の家』はその魂に於て滅びたと同じです。

野田――石川武美氏の云はれるのは、その反對です。『生長の家』が先生が他に職業を有

内容の生命と經營の生命とは異ふ

十萬の讀者があれば思想革命が成就する

つてゐてそれから、資金を提供して維持されてゐるならば、先生が其の職業を若し失はれたら『生長の家』は滅びると云ふことになつてしまふ。それでは『生長の家』はそれ自身で自立した存在ではないと云ふことになつてしまふ。他に職業を有つて居て賣れたらよし、賣れなくともよしと云ふやうな生ま溫き態度では、生命を打ち込んだ經營法とは云はれない、生命を打込んだ經營振でなくては、その記事に生命があつても、讀者を呼び寄せる力が稀薄になる。谷口氏の現在の態度——會社へ勤めてをつて雜誌を出す、買ふものは買へ、買はぬものは買ふな、雜誌を賣るのが商賣ではないぞと云ふやうなこの態度は立派ではあるがそこに經營に隙があつて讀者を增加さす力が少い。谷口氏が『生長の家』の讀者を增さうと思はれるならば會社を止めなくてはならぬ。この雜誌は廣告で賣れる性質のものではなく、人から人に傳ふべき性質のものである。谷口氏が專心經營せられたら一萬の讀者を得るのは難かしくない。この雜誌が若し十萬の讀者を得るならば、これが讀める階級の人々は思想界の中堅になる人だから一人に十人は感化せられる、さうすると十萬の讀者があれば日本國内の思想革命が成就する、かう云つて賞められたが、それほど此の『生長の家』の内容には生命があるけれども、惜しいかな谷

口氏の會社生活の片手間だから雜誌製造そのものには生命がない。雜誌の記事に生命があるのと、雜誌製造に生命があるのとは別である――石川氏の意見はかう云ふ興味のある意見でした。

谷口――成る程それは雜誌經營者としての玄人の意見として大いに尊重して好いと思ひます。だが、私は『生長の家』の讀者を殖やしたいとは思つてゐますが、それは雜誌の經濟を立ち行かせるために望んでゐるのではありません。救はれる人が一人でも多からんがためにそれを望んでゐるのです。雜誌の讀者が少い爲に私が飯が食へないで困つてその結果、別に會社へ往つてゐるやうに思ふ人があれば、それは大變な感違ひです。『生長の家』の讀者が殖ゑないために困るのは多數の人類であつて私ではないのです。どんな時にも困らないものが人間すなはち神の子である、神の子は困りやうがない。――この眞理を明かにするために出してゐるのが此の『生長の家』なんです。私はもうどんな時にも困らない道を體得したのです。石川氏は『生長の家』は私が會社へ行つてゐる片手間に出來てゐるから私の全生命を打込んだのでないと云はれるかも知れませんが、その批評は當れるが如くにして『生長の家』の精神をつかんではゐないのです。この『生長の

家』の抑々の最初の成立ちと云ふものが、雜誌製造業そのものを事業とするために生まれたのではありません。私は今現に人類の大多數がそれを生活してゐるところの最も普通な境遇にある勤勞階級の生活をしてゐます。私はかうして多くの時間を所謂る職業のために縛られてゐながら、その片手間にすら尚且つ人類のための光りとなる仕事が出來る、と云ふ道を切り拓いたのです。そこに私は神の子たる人間の無限性を開發する道を見出したのです。『生長の家』の生活はどんな職業を有つてゐる人にも出來るので尊いのです。雜誌製造業にならなければ生きる道がないと云ふ。そんな手本を示すやうでは『生長の家』を宣傳する必要はないのです。如何に人間は職業と云ふ荒繩で縛つても縛つても、なほ手を出して人を救ふことが出來る。縛られてゐて縛られてゐない生活を事實に示し得る處が非常に尊いのです。大多數の人間はみんな職業にしばられ職業に沒頭し、職業の中に溺沒してしまつて、人を救ふやうな生命の餘裕は自分にはないと思つてゐる。ところが、實際はさうではないぞ、縛られてゐても、人間はどんな職業をもつてゐても人を救ふことが出來るぞ、私を見よ、私は縛られてゐながらかうして人の光となり、人の相談相手となり、人の病を癒やし、その傍ら雜誌の原稿を書くことも出來る、

それは生命は無限であるからだ。人間は神の子であるからだ。生命を出せば伸びるやうに思ふのは迷ひである。出せば出すほど伸びるのが『生命』である。かう云ふ眞理を實例によつて示すために生きてゐるのが現在の私の生活なんです。一人一業主義は事業發展法としては一つの金科玉條でありますが、私は此の一業に生命を注いでしまつて、ほかに注ぐべき生命は殘つてゐないからどんな善いことを頼まれてもそれは出來ぬと云ふやうになつてしまふと『生命』が融通のきかない自由な所のない小さなものとなつて了ふのです。先日も××縣の女の方から手紙で訴へて來られました。それによると、自分は養蠶を家業とする家へ嫁いで來たものですが養蠶と云ふ仕事は夜も殆ど徹夜のやうに徹夜しなければならないので數年前から神經衰弱になつて困つてゐます。晝は頭が呆然として氣分が暗くて、何だか自分が人生の敗殘者であるかのやうに思はれる。身體がこんな陶梅なので、この二三年來姑さんに徹夜をして頂いて自分は養蠶に遠ざかつてゐますが、それでは姑さんに許り辛い目をさせてゐるやうで、心が辛くて却つて病氣を惡くするやうに思ひます。養蠶をやつて徹夜しても病氣に惡いし、さうかと云つて養蠶に遠ざかつてそのため姑さんに對して心で辛い目をしても病氣に惡いし、進退谷まつて

ゐる次第です。自分は養蠶のやうに夜業を續けなければならぬ仕事よりも、もう少し和洋裁縫を研究して、裁縫で身を立てゝ行くやうにするのが自分の適業だと思ふ、先生どうしたら好いでせうかと云ふ譯です。私が此人に對して與へた答へは何だつたと思ひます。『死ね、生きる』と云ふ言葉だつたのです。此の言葉が出たのは私自身が死んだ上で浮び上つて來た生き方をしてゐるからです。私は自分で會社へ行くことを本來適業だと思つてゐない、けれども今私は適業でなくとも安らかに會社に行くことが出來るのです。貴女は適業々々だと云はれるけれども今大多數の人類は皆な適業を有つてゐない、自分の好まない生計に縛られてゐる、だから、吾々は自分だけが適業を見出して安易な生活に耽つてゐると云ふやうな生き方をしてゐるのでは、大多數の人類に適業がなくとも更に生きる道があることを示して、大多數の人類をして苦しみの中にも光明を見せしめることが出來ない。人類よ、お前も生計のために適業でないものにたづさはつてゐるのか。兄弟よ、それを嘆くな、お前の生命のうちの何時間を生計向きの事が奪はうとも吾らは嘆くに及ばないのだ。『十里の公役を強ひられれば二十里を行け』とキリストが云つてゐるのは其處だ。死んでも死に切れないものがある、奪はれても奪はれても、外

死ね、生きる

適業でない職業を有つ人の生きる道

十里の公役を強ひられなば二十里を行け

から結び切れないものである、それが『本當の自分』であり、生命である。そのほかのものは論ずるに足りないものである。——かう私が人類に向つて云ひ得るのは私が十里の公役を強ひられて二十里を行つてゐるからなんです。貴女の嫁いだ家の家業が養蠶であつて、家業が貴女に養蠶を強ひるならば、その養蠶は強ひられたる『十里の公役』である。そしたらあなたは『二十里を行け』ばよいのである。さきの十里は相手に與へてみづから死に、あとの十里はみづから進んで獲得した十里である。そこに喜びがある。自分に二十里を行く力がないとは被仰るな。こゝに私と云ふ手本がある。神の子たる人間にはこれ以上は力が出ないと云ふ限度はない。吾々の生命は地下無限の水脈に通ずる井戸のやうなものであつて、汲むに從ひ、必要に從つていくらでも出て來るのです。此の井戸の水は底まで一尺しかない、井戸の直徑は幾らしかない。井戸の水深と直徑とから算出すれば水の分量は何斗しかない、これを使へば水は忽ちなくなつて了ふ、さう思つて水を使はねば井戸の水の分量は、その人が思つた通り有限な實に少いものとなる。けれどもその井戸の水脈が地下無限の水脈につゞいてゐることを信じ、毎日安心して汲み出せばまた汲み出すだけの分量あて水は湧き出てくるのです。凡そ『生命』とは此の

氣がとがめるのは全力を出し切らぬから

井戸水の如きものなんです。計るものには分量は實に少く、計らずに汲むものには無限なのです。貴女が神經衰弱であるのは、心に自分は人から喜ばれてゐると云ふ自信がなく、人が何とか自分の事を惡く思つてやしないかと不安に思つてゐるからです。人が何とか自分を惡評してゐはしないかと思ふのは自分が百の力を百ながら出し切つてゐると云ふ自信がなく、自分で批評しても好い點數がつけられないので、他からはサゾ何とか惡く思ふに違ひないと氣がとがめるのです。氣がとがめるのは自分で自分の力の出し方に滿點がつけられないからです。力の出し惜しみをするために、氣がとがめると云ふ逆に働く精神の間斷なき勞苦があり、その爲に精神が過勞して神經衰弱になるのです。力の出し惜しみをするのは、自分の生命力は有限だと計るところにあるのです。計らずにいくらでも出す。十だけ出せと云へば二十だけ出す。すると姑でも誰でも喜んでくれるから一日中氣がとがめると云ふことがなく氣が樂になるから神經衰弱はひとりでに治るのです。――私はかう云ふ意味のことを書いてその婦人の方に差上げました。此の婦人が『生命』と云ふものを依然として計つてゐられるならば、分量や尺目で計つてゐられるならば、この婦人は今も依然として神經衰弱でゐられませうが生命を計らずに汲むこ

「ゐるから」と「ゐてさへも」との相異

とを覺られてゐますならば今頃はもう神經衰弱を超越せられてゐることだらうと思ひます。

それから石川さんは『生長の家』の發行が私の別途の職業より得るところの資金で維持されてゐる以上、私が別途の職業を失ふとき『生長の家』は滅びるかも知れぬと云はれたさうですが、それは觀察点が誤つてゐます。他に職業を有つてゐるから『生長の家』が出來るのではなく、他に職業を有つてゐてさへも、人に光を與へる生活が出來ると云ふ實證の一つの顯れとして『生長の家』が出來てゐるのです。いま私は雜誌を出す經費を儲けようと思つて會社員になつてゐるのではない、私は前から普通の會社員であつた會社員では人を救ふことが出來ない、何々業では人を救ふ餘裕が出て來ない、世間の人は普通さう思つてゐる。私も前にはさう思つてゐた、その時分には會社を度々逃げ出さうと思つた。ところがふとしたことからこの迷信が破れた。そしてどんな激務を有ちながらでも人を救ふことが出來ると云ふことを解らせて貰つて『生長の家』が出ることになつたのです。だから今は、もう會社を逃げ出さうとも思はないのです。このまゝで人を救ふことが出來る。それから何も人間を救ふのに雜誌を出さねばならぬと云ふことも

ない、出せたら出す、出さねば出さぬで人間に道を傳へることが出來る。雜誌を出して遮二無二お粥でも啜つて行かねばならぬ、そのほかに私の『生命』が生きる道がないと云ふやうになつて了ふと、人間の『生命』の自由な發露の一つとして雜誌を利用して人を救つて行くと云ふことにはならないで、人間の生命が雜誌の發展に都合のよいやうに奴隷になつて了ひます。雜誌さへ伸びたら好いと云ふのだつたら、俗受けさへすればどんな下らない記事や廣告でも載せるが、俗受けせねばどんな善いものでも紹介しないと云ふやうにもなりませう。これでは人間の生命が雜誌發展の奴隷になつたのです。そんな事では人を救ふことは出來ません。『生長の家』の發見せる眞理のうちの大なる一つは、人間の生命は何物にも縛られない自由奔放無礙自在なものであると云ふことです。人間の生命が、雜誌だけにくらひついて生きると云ふことになれば、それは實に人間の生命を狹い窮屈なものにしてしまひます。それでは道を傳へるどころか道そのものが崩れてしまふので傳へる機關ばかりが大きくなつても何にもならないのです。雜誌が出ねば人を救ふことが出來ぬと云ふやうなら、全世界の人類大多數は雜誌を出して居らぬから、人類の大多數は互ひに人間を救ふことは出來ぬと云ふことになつてしまひます。そ

生命は地下をも潜れば天空にも飛翔する

ころが人間の『生命』と云ふものは何も雜誌にかぢり付かなくとも、どんな生活をしてゐながらでも互ひに兄弟に光を與へることが出來るのであつてこそ、さう云ふ生活なら萬人に傳へてすゝめることが出來るのです。『生命』と云ふものは、こちらの出口をふさぐと彼方から流れ出る。あちらを押へるとこちらから辷り出る、それは水のやうに地下をもくゞれば雲霧となつて天空にも飛びあがる、かう云ふやうに、どんなやり方をしてでも、どんな境遇におかれてゞも、閉口して了はず人を救ひ得るところにあるのです。私は本間俊平氏が脱ぎ捨てられた草鞋の片足づゝを拾つて歩いて、草鞋がなくて困つてゐる人に一足揃へて差上げて非常に喜ばれたと云ふ話を尊いと思ひます。あの行爲が尊いのは本間氏が草鞋を拾ふと云ふことを事業にせず之によつてパンを得てゐない處にあるのです。草鞋を拾つてこれを賣ることによつて、粥でも汁でも絞り出さねばならぬと云ふのであれば、それは自分自身の悲劇であつて人に光を與へることにはならないでせう。パンを得るための草鞋拾ひならば紙屑拾ひと同樣で本間氏に俟つまでもないでせう。パンを得るための雜誌業や野心を滿足さすための雜誌業なら、私でなくとも出來るのです。本間氏の草鞋拾ひの貴とさはどこかへ行くその旅行の本當の目的のほかに何

奈翁の歐洲全土征服も本間俊平の一足の草鞋に及ばない

その片手間にすら善き行ひを見出してしたところにあるのです。それは自己のパンや榮達を得る爲にではなく爲される行爲だからこそ光つて見えるのです。キリストは『兄弟のいと小さき者へなせる愛の行爲は我れにしたのと同じことである』と云はれてゐます。人間の生命の偉大さは、その仕事の形の大いさで計らるべきものではないのです。歐洲全土を征服したナポレオンの事業よりも、本間俊平氏が困れる人に與へた一足の草鞋の方が尊いのです、ナポレオンの生き方には無論推奬すべき美點をもつてゐます。その意志の強さや、自信の強さや、目的に對して一路邁進する勇氣や――それは實に『生長の家』の生き方に適つてゐるところがあります。だから時々『生長の家』誌にも引用して、やゝもすれば挫折しようとする人類の意氣を鼓舞する範例にいたしてゐます。しかし、ナポレオンの意志の強さ、自信の強さ、その強剛なる邁進力が向けられた方向が間違つてゐました。彼はこの尊き性質を、たゞ自己の野心を滿足せしめるために使つたのです。與へるために使つたのではなく、奪ふために使つたのです。野心が如何に強くとも、一時如何に偉大に成功したやうに見えようとも、それは『迷ひの心』であり『我の心』ですから、やがて壞れる時が來るのです。『迷ひ』は實在でないから迷ひの心に支

奪ふために來れるに非ず、與へるために來れるなり

へられたものは滅びる。小我は實在でないから小我で突つ張り通したものは滅びる。ナポレオンが好い證據です。彼はウオーターローの戰ひに一敗する一ケ月前にゲーテに向つて、依然として『我が前に不可能はない』と云つて自信の福音を說いてゐたと云ひます。ナポレオンの自信の强さは好い、しかしそれは『我の自信』でした。『我の自信』はいつかは壞れ、くづれた後には唯敗殘が殘るのみなのです。ところがキリストは『わが來れるは人に役はれんがために來たので人を役ふ爲に來たのでない』と云つてゐます。キリストは奪ふために來たのではなく與へるために來たのでした。彼は世界を征服するために來たのでなく征服せられて土臺石にならんがために來たのでした。彼は自分で云つてゐるやうに『我れは父のみこゝろを爲さんがために來た』のであつて、『我意』で遮二無二突き通すために來たのでありませんでした。そこが、ナポレオンとキリストの異ふところです。『生長の家』がこの世に臨つたのも雜誌を經營したいと云ふ我を主張するために來たのではなく、『父のみこゝろを爲さんがため』に來のです。さうであつてこそ天使の守護があるのです。

野田――それでは先生は永久に會社員の生活と雜誌の方をいつまでも二重におやりになる

つもりなんですか。

谷口――『生命』は生きる！　それだけは定つてゐますが、どう云ふ形で生きねばならぬと形をきめて了つたとき、『生命』はその自由さを失つて了ふのです。『生命』は境遇に從ひ、相手に從ひ、觀世音菩薩のやうに千變萬化しながらも尙人々を救ひ得る所が尊いのです。『生長の家』の生活が『我の生活』なら私の定めたやうに進んでも行きますが、

神の聖意を行はんがための生活

聖意を行はんがために出現した生活であるこの生活は神のみこゝろに從つて千變萬化するほかはありません。我で貫きとほす自信と、大生命にバックされて大生命の流るゝ儘に動く自信とがあります。ナポレオンの自信が前者ならば、『生長の家』の自信は後者です。時が來れば私は會社員生活を止すことにもなるでせう。また止さないかも知れません。いづれにせよ、それは雜誌を大きくすると云ふ野心のためにするのでは普通の雜誌業者になつてしまひます。私が今會社員であるのは、人類全體が今はまだ私に普通の會社員生活をしながらでも、自分も生き、人をも助け、萬人に光を與へる生活が出來ると云ふ範例を示してくれと望んでゐるからです。もうそんな範例は充分見せて貰つたから、今度は會社員でない生活も見せて欲しいと云ふ人類の聲がより多くなつてくれば

自然に神隨しで私の生活は變つて來るのです。それは自然に神隨しにです。『我』で變へるのではないのです。『生命』はどう云ふ形で生きねばならぬと云ふことはない。大生命に押し流されて生きる時最も自由なのです。形の方は『執して執せず』です。形と云ふものは影であるから執する必要はないのです。『生命』が主です。『生命』さへ吾れ斯くの如くして生きると云ふ筋道が立つてゐるなら、形は千變萬化しても好いのです。その反對に形は一つを貫いてゐても、形を維持することに『生命』の方が支配されてゐてはその人の生活は生きたものでありません。さうかと云つて形の方を無闇にやり方を終始かへて行くのかと云ふとさうでもないのです。しつかりと自分の魂の底に死んでも死なない生き通しの生命が自覺されて來ますと、自然に時に應じた最も適當な生き方が出來て來るのです。『我』の力で焦る生活、力む生活、かうでなければならぬと形を極め過ぎた生活は、ある時期は大いに生長してもやがては行きつまるのです。幸ひにしてその人が死ぬ瞬間まではゆき詰まらないにしても、その愈々の瞬間には行詰る。ナポレオンも行詰り、豐臣秀吉も行詰つたのです。死ぬ時には世界統一の夢も朝鮮征伐の夢も捨てなければならぬ。况んや雜誌經營などの夢は捨てなければならないでせう。吾々

生命の過ぎ行く時、必ず美しい像を宿す

は死の時になつてさへも行詰らない生活をしなければならないのです。形には執して執せず、たゞ吾々の『本當の生命』が影を映して進む生活なら、死んでさへも行詰らないのです。『生命』は圓い鏡には圓い影を、四角な鏡には四角な影を、一滴の露の玉にはまたそれに相應はしい小さな影を映して進みます。それを一定の形の影しか映すまいと力むとき、その人は我に捉はれたのです。形を定めて置かないでも生命が環境を通り過ぎるとき必ず其處に『生命』の影たるに相應はしい美しい像を宿すのです。どの影も善い、どの影も美しい！　それは恰度、寒風が霧の中を通りすぎるとき、どう工まないでも六稜形のさまざまな美しい雪の結晶を造るやうなものです。人生とは『生命』がそれぞれの環境の鏡に生命の影を映して進むことなんです。たゞ吾々は『生命』それみづからの本物の影さへ投げかけて進めば好いのです。すると美しい生活の結晶は自然に出來る。そのためには自己の生命そのものゝ完全な本性を自覺するのが第一です。形を生命だと見ちがへないことが肝腎です。形を生命だと見ちがへるとき、それは迷ひです。形は影であるから必ず消える。形を生命だと思つて執着し切つてゐるとき、形が消えたときその人は躓くのです。だが、雪の六稜形の結晶は消えてもその結晶を六角ならしめた

大乗も小乗も説いてあ

生命は滅びないのです。これが肝腎です。『生長の家』の生き方には大乗も小乗も説いてありますが、今日は大分『生長の家』の大乗的方面を説きました。貴方になら解って貰へると思つたからです。

第五章　戀愛・相性・方位・家相

場　所――生長の家出版部の客間。（家が前景と變つてゐる。谷口氏は會社を止めてゐる。）

出席者――Ａ氏、Ｂ氏、Ｃ氏、Ｎ氏、島本氏、野田氏、楠野氏、生野氏、谷口氏その他。

結核が治る

楠野――私は此の春、御承知の遠山醫師に連れられて先生にお目に懸りに來たことがあります。會社にゐて咽喉の氣持が變なものだから洗面所へ往つて含漱ひして見ると喀血した。驚いて歸つて遠山さんに罹つて次第に快方に赴いてゐたのですが、心に一抹の不安がある、動くとまた血が出るやうな氣がする。その時、遠山さんが先生を紹介して下さつた。その時の先生のお話により、病氣に罹らぬ心の持方を知り、それ以來會社へも斷じて出勤することにし、藥も斷じて飲まぬことにしましたが、それ以來ずん〳〵元氣が回復して來て現在のやうな健康狀態になつたのであります。

谷口――さうですか、それは結構でしたねえ。先達て遠山さんがお越しになつての話に、或る日楠野さんがヒヨツコリ診察室へ這入つて來られたので、注射でもして貰ひに來ら

れたのかと思ふと、今日は注射はいらない『生長の家』の一寸解らぬところを尋ねに來たと云つて『實相の人間』と『肉體の人間』との關係などを話して歸られたと云つてゐられたことがありました。

楠野――今日參りましたのは其の話のつゞきなのであります。私が時々遠山さんを訪問してゐますうちに、遠山さんの姪になる婦人が遠山さんのお宅に來てゐられる、その婦人と私とが親しくなつたのであります。その婦人は一度結婚したことがある方ですが、結婚した先の良人の行ひが惡かつた。素行が亂れて妻のほかにあちこちに女を拵へてゐて少しも良人らしいところがない。それでその方は一度毒を嚥んで死なうとせられたことがある。二三日昏睡狀態でゐられてそれから恢復せられたのでありますが、たうとう良人と別れて現在遠山先生のお宅に身を寄せてゐられるのでありますが、兩親のない方で實にさびしい氣の毒な方なんです。表情を見てもどこか暗い打ち沈んで思ひに惱んでゐられるやうなところがある。私は其方（そのかたの名前は民子と申します）の心持をもつと明るいものにしてあげたいと思ひました。此の世界はそんなに窮屈に思ひ惱んでゐるものではない、人生はもつと明るく生活すべきものだと云ふことを知らしてあげたいと

思ひました。それで時々お誘ひして　キネマへ同行したり、寶塚や杭瀬のダンス・ホールへ連れて行つたりして生活をお互ひに明るく明るく築いて行かうと致しました。そのうちお互ひに趣味やら氣持やらがピツタリと會ふことがわかつて、たうとう二人は互ひに戀愛を打明けるやうになつたのです。無論私は×××大學の豫科にゐるころから隨分放蕩もしました。童貞でもありません。それを卑怯に隱して私は女に近づかうとしたのでもありません。私の過去の素行を皆民子さんは知つてゐる。民子さんの過去の生活も私は知つてゐる。すべてを知り、すべてを赦して二人は新生活を創造して行きたいと思ひました。私は父にも說き、母にも說いてその許しを得ました。ところが遠山さんが此の結婚には大反對になられたのであります。遠山さんが非常に信賴してゐられる靈學の先生にP先生と云ふ方がある。その方に遠山さんが相談せられますと、P先生が云はれるには楠野の家は此附近でも舊家であり名家である、その舊家であり名家である家の長男の初緣に再婚の婦人を入れる、而も年上の婦人を妻にすると云ふことは、正しい日本精神に反するものであるから、純日本主義の心靈學者の立場としては贊成出來ないと云はれたのださうで、遠山さんは其のP先生の御指導をお受けになつて、生活の萬般を、

先生の被仰る通りに委せてゐられますので、先生がこの結婚に反對せられる以上は、この結婚に贊成することは出來ないと云はれるのです。それで私は、生長の家ではどう云ふ風にかう云ふ問題を御解決になるか、御意見をお伺ひしたいと思つて參上したのです。

自分の運命には自分で無限の責任を負へ

谷口――此の問題は先生から私もちよいと承はつたことがありますが、私としては深い事情を知らないので、どうせよと云ふことは、輕卒な判斷は下せません。私として云ひ得ることは毎度『生長の家』で説いてゐる通り人間は自身で蒔いた種子は自分で刈り取るものであるから、人間の運命は自分自身で決定すべきものであつて他人がどう云つたからと云つてそれに左右せられるべきものではない。また何人も横合から這入つて往つて、貴方は斯うしなければならないと強制し得る權利をも有つものではないと思ふのです。人間は誰をも強制する權利もないと共に強制せられることもない――そこに自分の運命に對する無限の責任を自分で負ふと云ふことになる。たゞ吾々は自分の知つてゐる意見や材料を提供して、本人の參考になると云ふことは出來る、併し、最後の結着は自分自身でつけなければならない。貴方が自己の戀愛を顧みて、それが純なものであると

云ふことを自覺し恥づることがないと信ぜられたならば、その戀愛を成就するやう突進せられるのは決して惡いことではない。たゞ自分自身を正視して、自分自身を欺かずに眞に純な戀愛であるか、暫く假りそめの色香に迷つてゐるのではないかを見極める必要がある。そして貴方の戀愛が假りに純な戀愛であるとしたならば、周圍を傷つけず、周圍と調和してその戀愛を成就する道を作り出さねばならぬ。それが貴方に課せられた課題である。眞に貴方達の戀愛が純な戀愛であるとしたならば、私はP先生の被仰るやうに、再婚の婦人を長男の初縁に迎へることは日本精神に反するとも思はない。また肉體の年齢が、女の方が年上であることは陰陽調和の道に反してゐるとも思はない。『生長の家』の立場は非常に自由な立場にある。肉體の年齢は假の年齢であつて、本當の年齢ではない、本當の人間の年齢はその靈魂の年齢である。靈魂の年齢とは、どれだけその人間が眞理をさとつたか『實相の人間』に近づいたかと云ふことで定まるのです。P先生が云はれた反對論は表面はさう云つてゐられますけれども、實際は、何か別に反對せねばならぬやうな理由があつて、そのためにさう云つてゐられるのだらうと思ひます。貴方の御心持は唯今の貴方の御話でわかつたが、女のかたの本當の心持と云ふものはまだ直接

きいて見なければ判らない。双方の心持を聞いて見た上で、どちらも純眞の戀であると云ふことが、それでも私に得心出來たら、私として何とか盡力させて頂きませう。とも角、それでは民子さん自身に會つて本心を訊いて見たいから、呼んで來て頂けませんか。貴方が呼んで來られるのに都合が惡ければ、遠山さん宅へ私から電話をかけて見ませう。

楠野――いえ、僕が呼んでまゐります。（楠野氏退場）

姓名學は信頼し得るか

生野――先日、相性の吉凶、日の吉凶、方角の吉凶の話は承りましたが、姓名の吉凶はどうでございますか。私はある親友から姓名學をきゝました。個々人の姓名によつてその運命を支配する即ち數理によつて運命が成立し支配されて居ることです。そしてよく的中します。知人の二・三を判斷させるにその過去とその人の生涯の成行きが可成りよく的中します。この姓名判斷なるものゝ數理に對する懸念を強めます。この姓名判斷に對する先生の御見解は如何で御座いますか。實は私の弟が目下病氣で靜養中です。名前が惡いと云ふものですから氣にかゝつてゐるのです。

谷口――姓名がよくないので病氣に罹るのでしたら、姓名も何も改めないで『生長の家』や『生命の實相』をお讀みになるだけで自身の病氣が治つたり自分がお讀みになる爲に

家人の病氣が治つたりする事實を何と御解釋になりますか。これは吾々の生命の實相が神より出でたものであつて、本來自由自在な圓滿完全なものであると云ふことを自覺なさつたならば人間はどんな形にも縛られなくなり、生命本來の完全な相を形にもあらはすからです。有名な人相家石龍子も『人相は信仰生活に入らない迄の人には的中するが、信仰生活に入つた人には的中しない』と云つてゐます。人相も、姓名も、家相も、體相も、健康狀態も、凡そ形なるものは、吾々の過去からの念の集積の形象化したものであります。『念は形に化す』これは『生長の家』で說かれてゐる眞理でありまして、過去からの念の集積は形に化して、肉體となり、人相となり、家相となり、姓名……等々となります。一切形あるものは、念の集積の形象化であるからです。だから姓名が人間を健康にしたり、病氣にしたりするのではなく、貴方に潜在する念（運命の原動力）の集積が、一方では姓名となり、他方では健康狀態とも顯れてゐるのでありますから、姓名と云ふ形相も、健康狀態と云ふ形相も、元は一つのものゝ顯れでありますから、互ひに相互的關係があるので、姓名と云ふ形相を見て健康狀態を卜することも出來るのであります。人間は生れると一定の姓名を與へられ、また大體一定の人相も備へてゐますが、

生命は自由創造の主體

これはその人間の靈魂が現世に生れる迄の過去生活に於て得たる念の集積（業とも云ひます）が形に出てゐるのであつて、業と云ふものは自動的に流轉する一種の波動ですから、吾々が自身の生命の實相を自覺し、眞理を悟つて超越しない限りは業の自轉する力によつて吾々の運命は生れた時には既にその大體が定まつてゐると云つても好いのです。だから人相を見てその人の運命を云ひ當てることが出來る、姓名を見てその人の運命を云ひ當てることが出來る――これは當然であります。ところが病氣とか不幸とかを起す念は妄念であるが、妄念に捉はれてゐる人から觀れば儼然たる存在でありますのは夢見てゐる人にとつて夢が確固たる存在である如くでありますが、眞理の上から云へば根柢のない存在であります。何故なら神はそのやうな病氣とか不幸とかを造り給はないから、それを起す念も眞存在ではなく、僞存在、空しき虚の念、妄念なのであります。だから眞理を知り、自分の生命が神の子であつて自性圓滿なものであると云ふ實相を自覺すれば、業の流轉から超越することになるのです。さうなりますと、その人の運命は人相家が觀ても當らない、姓名判斷の大家が觀ても當らない。自分の「生命」が自由な眞理の世界へ出て過去に捉はれない自由創造を續けて行くからです。この自由創造の働

人相は固定せず精神内容によつて變化す

きとして人相もそれに追隨して變つて來ることもあり、姓名も自然に變へたくなり、變つて來ることもあります。或る名優は舞臺で上演する役々によつて、此の肉體の人相の上にまで實際の變化を及ぼし、敵役をやつたのちには舞臺を下りて數時間のちまでも惡い人相を有ちつゞけ、善役を演出したのちにもまた舞臺を下りて數時間その善き人相を有ちつゞけるので、觀相家を驚かすことがあります。或る名優が知人の觀相家を訪れたところが、その名優が危險身に迫るやうな人相をあらはしてゐるので、觀相家はそれを相手に云つてあげようか、云つては却つて氣を惡くして可けないだらうと、とつおひつ思惑つてそれを云はずにゐたところが、又、次の日にその名優がその觀相家に出會つた。觀相家がしげ〳〵相手の顏を見るとその名優は前日に引きかへ今日は非常に寛厚な善い人相をしてゐるのである。あまりその變り方が激しいので益々不思議に思つて、現在の人相の非常に善いこと、前日會つた時は非常に人相が險惡であつたことを話すと『あの時には舞臺で惡役をしてゐましたが、今は忠臣藏の藏之助をしてゐるからです』とその名優が答へたさうです。これは小林參三郎氏の著『自然の名醫』中に載せられてゐる實話です。この例でもわかるやうに人相は固定したものではなく、精神内容の變るに從つ

て變るものです。此の現在惡しき人相をしてゐる人も悲觀するに當らず、善き人相をしてゐる人も慢心するに當らないのです。家相でも地相でも同じことで、ちよいとした樹木の植ゑ方、石燈籠の位置家具の列べ方などの變化によつても善い家相が惡くなつたり惡い家相が善くなつたりするものですが、それを一生懸命に研究して善い家相の家に移轉しようと頑張つて見たところが、自己の精神内容が貧弱であり、善い家相に住むに相應はしい精神内容に達してゐない時には、善い家相の家が見付かつても移轉出來ない事情が生じたり、たとひ移轉できまして一寸した造作の具合で、善い家相もその實、惡い家相になつてゐて、それが心づかなかつたりするものです。心をあとにして形ばかりを追うてゐるものはトンダ失敗を演ずるものです。心が整ひ、自然に人相のよくなるやうな人は、また自然に善い家相に住むやうに事情が運つて來、善き家相があつらへたやうに見つかるとか、今迄の家に住んでゐても、自然に、物のならべ方や造作の仕方などにも、生き生きとした光明が見えて來、家相が一變してしまふのであります。だから、此の變化はどこ迄も眞理を知つた上での自由創造の働きとしてさうなつて來るのでなければ力がありません。『人間の生命は形に縛られるものだ』と云ふ迷ひに捉はれてゐる

生命は主、姓名は従

結果、姓名を變へられるやうな方は、如何に姓名を變へてもやはり不幸が附隨しますので、此の姓名も缺點がある、あの姓名も缺點があると云つて、始終轉々として姓名を變へながら尙安住を得ないで、その不安の念が更に次の不幸を起す集積となることがあります。姓名が『生命』を支配するのではなく、凡ゆる形象は『生命』が進軍して行く際に周圍に投影した念の影でありますから『生命』こそ主なのであります。生命の自由創造として人相が自然變るならば、それもよろしい。生命の自由創造として善い家相に住むやうになれば、それもよろしい。生命の自由創造として改名したくなつたり新しい屋號や假名や雅號をつけたくなるならばそれもよろしい。併し如何なる場合にも、吾らは『生命』が主であつて、一切の形相は從だと云ふことを知らなければなりません。

（楠野氏歸つて來て沈んだ容子で着席する）

楠野――實は遠山さんが昨夜午前三時頃までも民子さんに說いて、鄕里へ歸らせたのださうです。丁度私が先刻此處へ寄せて頂いてゐる間に宅へ電話がかゝつて來て『都合で一寸故鄕へ歸つて來るけれども、私の心は變らないから、それを信じて、貴方は貴方の信ずる道に突進して下さい』と云ふ傳言があつたと云ひます。

谷口――本當を云ひますと、P先生が貴方たちの結婚に反對してゐられるのは貴方の過去の素行が周圍の人達の貴方に對する心象を非常に惡くしてゐるのですよ。そのために

…………

楠野――過去に於て犯した私の罪は既に私も先刻先生に告白したところであり、それに對してはどれだけの償ひもしようと決心してゐるのでありまして、過去に犯した罪があるから、今度の戀愛も不純なものであらうと斷定されるのでは、私の立場がなくなるのであります。

審判く資格はない

谷口――私は何も斷定しようとはしないのです。誰も審判く資格のある者はありません。しかし世間は過去によつて、今後をも推測し斷定しようとする傾向をもつてゐるものであると云ふことは、これまた已むを得ないことでありませう。それに對して貴方が「さうでない」と云ふことを、いくら言葉だけで主張なさつても、それを周圍に信じさせる力がなければ仕方がないでありませう。私は、前から此の問題をうす〳〵聞いてゐますが、遠山さんが日頃信頼してゐるP先生に御相談になつたのです。ところが、P先生の奥さんは貴方のお父さんをよく知つてゐられる方である。それからそれへと問合はす手

懺悔は言葉でしても行爲に現はれねば

蔓があつて、貴方自身の學生時代の面白くない素行なども色々と詳しくわかつて來た。それが判つて來た以上、今迄あまり面白からぬ風評のある貴方と結婚しなさいとP先生は被仰る譯には行かない、其處でお斷りになることになつたのだけれども、貴方の素行とか何とか云ふことを問題にするのは氣の毒であるから、楠野の家名をたてると云ふことにして、初縁の長男の嫁として、再婚の年上の婦人を差上げるのは古來の日本精神に反するからと云つて御遠慮申上げることにしなさいと云ふことになつたのです。それで遠山さんは貴方に對して、あまり宅へ來ないやうにして呉れとお斷りになつたけれども、貴方は幾ら斷られても毎日のやうに出掛けて往つて民子さんを連れ出さうとせられる、貴方は過去の行ひは惡かつたと言葉は懺悔せられるけれども、懺悔は言葉でしても行ひにあらはさなければ何もならない。ところが貴方のやうに保護者の反對にも拘らず何處までも女を引張り出さうとするやうな行ひには、どこにも懺悔が認められない矢張り過去の不良少年のつゞきだと認められても仕方がないやうなところがある。先日も民子さんを連れ出してダンスに往つて一緒にどこかで外泊して來られたさうぢやありませんか。

楠野――それは先生が私の心持を御理解下さらないからであります。民子さんと私との親密さが度を加へて行くに從つて急に遠山さんの態度が、吾々の會ふことを警戒するやうになられ、二人の間を出來るだけ割かうとせられて世間の手前もあるからもう來て下さるなと云はれましたが、吾々二人はもう其頃はお互ひが離れてゐては迚も明るい氣持になれないやうな間柄になつてゐました。民子さんは『叔父さんがあゝ云はれるけれども、私は淋しくつてならないから是非來て下さい。叔父さんは午后には往診に往つてゐなくなるから、その時間に來て下さい』と云はれる。それで、私はその時間を見計つて行つて會ふ。會つてゐると遠山さんは往診の都合で早く歸つて來られて顏を合はすやうな時がある。その時の私の氣持の心苦しさつたらありません。けれども民子さんが、淋しい思ひつめたやうな表情をして『また是非來て下さい』と云はれると行かずにはゐられなくなるのです。私を遠山さんが恥知らずだと思つてゐられることは私も知つてゐます。さう思はれることを知りながら、その非難を押切つて行かねばならなかつた私の氣持に、キ一本な思ひつめた眞劍さがあることを知つて頂きたいと思ひます。二人が外泊して來たと云ふのは、夏の夜の月が明るい晩でした、民子さんは友達の家へ行くと云つ

て家を出て、途中で私と細川君と一緒になつて寶塚のダンス・ホールへ行きました。ダンス・ホールでダンスの時に民子さんが細川君の相手になつて踊る。細川君と云ふのは友達仲間でもなか〳〵女好きのする男なんです。私は二人のダンスの樣子に窃かに眼をつけてゐました。すると私は迚も見るに堪へないほどの嫉妬を感じて來たのです。二人が抱擁してダンスする有樣には、唯のダンスのパートナー以上のなれ〳〵しさがあるのです。私はカツとなつて來たのです。それで私は民子さんとダンス・ホールを早く出て、『何故あんな嬌態を細川君に示すのだ。お前は僕を愛してゐないのだ。僕を欺いてゐたのだ』と責めますと、民子は『貴郎が浦瀨さんと親密な容子をしてゐらしたから、私も嫉妬から當てつけて貴郎に見せるために、わざと細川さんに甘つたるい容子をして見せたのです』と云ふのです。それで私は『口ではどんな辯解でも出來るから證據を見せなさい』と云ひますと『どんな證據でも見せます。貴郎の安心をさせるためになら私の身體はどうなつても關はない。その代り、私と結婚すると誓つて下さい』と云ふことになつたのです。さう云ふ結果になつたのは私たちの修養の足りない處でせうけれども、戀するもの同士の心理がさう云ふ場合に亂れて行くと云ふことは到底避け得らないものだ

戀は愛ではない

五官の樂しみには本來無い

と云ふことも先生に理解して頂きたいと思ふのです。そこに吾々の突きつめた眞劍な心持があることを知つて頂きたいのです。

谷口――さう云ふ場合に戀する心が激しければ激しいほど嫉妬の焔で心が苦しめられます。それは當然のことであつて、『戀』と云ふものが決して『愛』でないと『智慧の言葉』に書いてあつたのはそこです。『戀』と云ふものは相手を自分に奪ひとらうとする盲目的な力です。そのために相手がどう云ふことにならうとも顧みない執着です。『戀』は迷ひであるから五官を樂しませなければ滿足出來ないのです。それは愛でなくて渇慾です。眼に見なんだら淋しくなる、五官に觸れ側にゐなければ苦しくなる。すべて五官で感ずる世界は實在の世界ではなく『迷ひの影の世界』であるから、五官によつて樂しみを得、淋しさをまぎらさうとするものは必ず無をつかみ、苦しみをつかむのです。五官の世界は究極的には存在しないのであるから、觸れてゐる間、感じられてゐる間だけは、在るやうに感じ、如何にも確實な存在であるやうに感じるけれども、ひとたび感じなくなり、觸れなくなると、もうその存在が疑はしくなり頼りなく不安になつて來、それが在ると云ふ證據を再びもとめたくなる、しかし證據は求めても求めても、求めたものを

本當の明るさは眞理と智慧と愛とのみより來る

本當に愛するとは

得たのちは、まだそれでも滿足出來なくなる。貴方がたの戀愛がだん〳〵肉體的に近づいて來たのはそのためです。本當を云へば貴方がたが最初、五官の樂しみによつて、明るい世界を創造しようとしてゐられたのが間違ひだつたのです。本當の明るさは、常に『眞理』と『愛』と『智慧』とから來るのみであつて、『感覺の世界』からは來るものではないのです。『感覺の世界』から明るさを得ようと思ふものは必ず暗さをつかむのです。貴方は民子さんを『生長の家』のやうな精神的會合に連れて來て眞理をきかすことによつて根本的の明るさを與へると云ふことはせずにダンスやらキネマやら感覺の世界へ連れて行くことによつて明るくしてあげようと思はれた。そこに貴方の根本的迷ひがあるのです。感覺の世界に明るさをもとめて走るものは光に背を向けて明るさを追うて走るのと同じことです。ダンスしてゐる間、戀を語つてゐる間は如何にも明るくなれたやうに思へたが、その他の時間は一層暗く一層淋しいものになつて來た。貴方は民子さんを愛してゐると思つてゐられる。併し本當に愛すると云ふことは、與へると云ふ事であつて、相手から證據を强要して、相手の心を惱ましめると云ふことではないのです。貴方が本當に民子さんを愛してゐられたならばもつと愼しみ深くならなければな

らないのです。もう貴方は一旦貴方のお父さんにも打明けて、すべての斡旋をお父さんに頼まれた。その上は、もう何事もお父さんに托して、靜かに民子さんの運命が幸福になるやうに祈つて待つてゐられるが好いぢやありませんか。

楠野――併し皆は二人を別れさせようとしてゐるのです。私は苦しいのです。

谷口――苦しいのは貴方ばかりぢやありません。この事件に關係した人は皆一樣に苦しんでゐます。貴方の親御たちも苦しんでゐる。遠山さんも苦しんでゐる、民子さんも苦しんでゐる。自身だけの苦しみを云ふのは卑怯です。今迄の貴方の生活が惡かつたので、そのために皆の人は貴方を信じられない。そして事件の順調な進行が阻まれて、皆が苦しむことになつてゐるのです。そこで貴方は今迄の過去の生活に對して惡かつたと云ふ懺悔の心が眞に起るならば、言葉でなしに、行ひにその懺悔の實を示さねばならないのです。よろしいか、行ひにですよ。じつと落付いて民子さんのために、遠山さんのために、この事件で不幸に陷つた人のために祈つてあげて下さい。眞に貴方と民子さんとが誓つたとほりに純情で愛し合つてゐるのならば、二人の心は一年や二年離れてゐるだけでは變らないでせう。今民子さんを遠山さんが郷里へ歸されたのは遠山さんの心で

は、貴方達の戀愛が本當の永遠性をもつたものであるか、一時の浮氣の熱病であるかを判らせるためなのです。別れてゐるうちにお互ひに氣が變るやうでは浮氣な出來心で本當にそれは神の結び給へる縁ではなかつたのです。そこに貴方たちの前にテストが置かれてあるのです。今貴方たちは貴方たちの幸福のためにこのテストをパスしなければならないのです。

楠野――(切なさうに) 一年も二年も、二人は私達の愛が永遠性のものであると云ふことを人々の前に實證する迄は會へないですか。

谷口――戀する同士が逢ひたいのは無理もない。其の時期はもつと早く來るでせう。貴方は倉田百三の戯曲『出家とその弟子』を讀んだことがありますか。あの戯曲のなかで、唯圓坊と『かえで』とが戀をする、戀して二人は會ひたくてたまらないけれども相手の幸福を希つて逢はないで耐へしのんでゐる場面がある。會ひたくて會ひたくてたまらぬけれども、相手の幸福を欲して會はないでゐる心持には、會ひたくて會ふ心持よりも、一層深い愛と美とが輝いてゐる。肉體の會ひたさに打克つてゐる。唯圓坊の心持には、一層深い靜かな喜びが感じられてゐる。それには感覺的な騷がしい美はないけれども、

深の靜かな業がある、こゝからのみ本當の明るさが來るのです。かうして魂が整つてから、その心の反影として肉體の世界が整ふ。かうして得られる男女の結ばれ方が本當の結ばれ方なんです。

櫛野——よく解りました。目が覺めたやうです。行手がハッキリして來たやうです。先生の被仰つたやうに努めます。（小聲で）皆様失禮いたします。（退場）

第六章　念の集積・業の流轉・念の憑依

場　所――生長の家出版部、前景に同じ。
出席者――前景より楠野氏退場し、青年細川氏及び平井氏出席す。

C――楠野と云ふ青年は割合眞面目なやうに思はれますねえ。

谷口――私もさう思ふのでありますが、P先生のお考へによりますと、P先生はあゝ云ふ嚴格な純日本主義の古武士のやうな方である。だから、父兄が許さないのに戀をすると云ふやうなことは人倫に反することであると信じてゐられてゐる。だから『相手たる女性と云ふ方が、生活を叔父さんの保護の下において、現在修養中の身分であるにも拘らず、その叔父の目を盗んで逢引をしたり、ダンス場へ往つたり、勝手極まる振舞をしてゐる。それは實に長上を踏みつけた行ひである。その行ひには現在世話になつてゐる叔父夫婦に對して感謝の念が明かに見られない』と先生は云はれるのでありまして、世話になりながら其恩に對して感謝の念がハツキリ見られないと云ふことが、此の戀愛の順調なる進行に一つの妨げをなしてゐるのであります。此の點をP先生は指摘せられま

して、だから、此の戀愛は正しくない、正しくないものを成就させるのは惡を成就せしめるものだから宜しくない。と強く私に主張せられたのであります。

C――それで谷口先生はどうお考へになるのですか？

谷口――P先生の被仰ることも尤もである。一粒の米、一椀の食にも感謝するのが神の道である。『生長の家』の生活はこの感謝の上に建てられた生活である。戀愛も感謝の念の上にそれが築かれるときその戀愛は生長すべきものである。よく、世間には、叔父叔母の家とか兄姉などの家に姪や甥や妹などが世話になりに來ることがありますが、これが他人を世話したのでありますと、一椀のご飯を頂いても感謝するのでありますが、それがなまじつか親類であるがために、親類の世話になるのは當り前だと云ふやうな氣になつて感謝の念がなくなつて了ひ其爲に親類仲が惡くなるやうなことがあり勝でありますが、遠山さんの一家に起つた戀愛事件が妙な紛糾した相をとることになつたのも一つには此の感謝の念の缺乏と云ふことにあるのであります。無論、世話をする人から云ひますと、神の子の兄弟を世話させて頂いてをるのでありますから、世話する側から感謝を強制すべきではありませず、世話させて頂くのも神德でありまして、此の世話をさせ

親類同士感謝のないのは間違である

て頂ける上から、色々の問題にぶつつかつて、その起つた問題について自分の心の上に浮ぶ色々の心の動きを「これは『本當の自分』が動いたのである」「これは『ニセ物の自分』の惑はしである」と判斷して、自分の心の動きの中から『ニセ物の自分』を捨て、『本物の自分』を生かして行くことによつて、自分自身の魂の生長に深さを加へて行くのでありますが、世話される側から云ひますと、世話して下さる人に感謝の念をもつてゐますと、それがたとひ純眞な熱烈な戀愛であるにしましても、その世話になつてゐる保護者の目を盗んでダンス場へ出掛けて愛人とダンスをすると云ふやうな無節制なことは起らなかつたに相違ないと思はれますね。

細川――楠野君の此の問題に就ては私も責任がありますので、懺悔かたがた御話して置きたいと思ひお邪魔に上つたのであります。楠野君にダンスを教へたのは私であります。遠山さんも醫學的見地から明るい生活の及ぼす心理的影響が楠野君の健康に好いといはれましたので、私は最初、遠山さんのお宅で遠山さんや楠野君にダンスを教へたのであります。すると、遠山さんは、丁度來てゐられた民子さんも過去の生活の續きから暗い氣分をして常に鬱いでゐられますので、ダンスでもしたら明るい氣分になれるかも知れ

心で認めたことが存在に入。

ぬと云はれまして、結局民子さんも一緒にダンスの仲間に這入ることになつたのであります。ところがダンスもダンス場で正式にやる方が興味もあり、上達も早いから一度ダンス場へ皆なで一緒に行かうと云ふことに話がまとまつて皆で一緒にダンス・ホールへ往つたのであります。それから後には、遠山さんはお醫者さんであるから往診に往つてゐられて差支がある時には、私と楠野君と民子さんと三人切りでダンス場へ行くこともありました。或る日三人でダンス・ホールで落ち合ふやうに約束して置いたのです。ところが私はその日に差支が出來ましたので、ダンス・ホールに行けなかつたのであります。私が約束をたがへてダンス・ホールへ行けなかつた、そこから事件が展開したのであります。私が行かないので楠野君と民子さんとは二人切りでダンス・ホールで會つたと云ふことになつたのです。何心なく二人がダンス・ホールに集つた人たちとダンスをして、さて歸るとなると、二人切りであることに氣がついた。どちらも同じ方角に歸るので、歸り途も二人連れ立つて歸ることに氣がついたのであります。此の氣がつくと云ふことが人間の運命を左右することになつたのであります。『若い男女二人切り』と云ふことも氣がつかなければ何でもない。氣がついた時に何だか二人はお互ひに變な氣持

がしたのであります。どちらから云ふともなしに「斯うして二人でダンス・ホールへ行つて二人切りで歸ると云ふのは變ですねえ。」「さう云へば變ですねえ。」「人に訊かれたら細川さんもゐて三人連れだつたと云ふことにして置きませう。」と云ふことになつたのであります。それから一週間ほど後に遠山さんのお宅へ私が行きますと、遠山さんと楠野さんと民子さんとが話してゐられる。其處へ私が往つたとき、私は何心なく「先日の土曜日はダンスに行けないで失禮しました、實は……」と云ひかけますと、サツと三人の顔色が變つたのであります。楠野さんと民子さんとは、遠山さんにあの時、私も混へて三人でダンス・ホールにゐたと話してをられたのですが、今聞けば、三人で往つたと云ふのは僞であつた。そして、自分を僞つて、若い男女が二人で會つてゐたのだ、二人の間の關係が正當な純な、疚しい關係でないものであるならば、別に三人で往つたと自分を僞る必要はない。ところが自分を僞つて三人だと稱して二人切りで往つた所に、二人の間には何か疚しい關係があるに違ひない、かう疑ひの目をもつて遠山さんが兩人をお疑ひになられるやうになられたのも人情の當然であつて無理のない所であります。かうして二人の關係が疑ひの目をもつて見られてゐるやうになりますと、二人は次第に周

圍の眼を避けて逢ふやうになられたので、考へて見ますと、最初私がダンスを皆さんにお教へしたことゝ、私が約束の日にダンス・ホールに出られなかつたことゝが今度の事件を惹起する原因になつたので、實にこれは私も罪を感ずる次第であります。

谷口――細川さんのお話を承りまして、事情が一層明瞭になりまして嬉しく思ふのであります。今細川さんの被仰つた、二人切りでダンスをしても何ともなかつたが、氣がついた時變な氣持がしたと云はれたのは「生長の家」で說く「心の法則」を說明して非常に面白い事實だと思ふのであります。すべての事は氣がついたとき、即ち心で認めた時に實在に入るのでありまして、「二人切りでゐるのが變だ、何だか戀人同士のやうだ」と氣がついたとき二人は戀人同士になつて了つたのであります。それを更に周圍の人々がそれを認めて「どうも二人の關係はタヾならぬ關係である」と心の世界に認めたとき、二人は客觀的にも主觀的にも、兩方から認められて、眞に二人は現實的にも戀人同志の關係になられたのであります。其處には不可抗的に働く、過去の「業」の流轉があるのでありますが、その「業」の不可抗的な流轉も――周圍に對する感謝の念があり、その感謝の念によつて、この「業」の流轉を統制して行くことに致しますと、この業の流轉

が淨まつた相であらはれ、周圍と調和した狀態で此の戀愛それ自身も生きて行くことになり、激情に支配されないで周圍を生かし、自分も他もとも〲調和した狀態で生きられる道を發見しようと努力し苦心するところに、自己の生命の生長が認められるのでありますが、自分だけ戀愛を滿足したら好い、ほかの人はどうなつても好いと云ふやうになると、それは『愛』ではない、それは我慾である『愛』と云ふのは周圍を生かさなければならないのであります。

愛は我慾ではない

細川――P先生は楠野君のこの戀愛は周圍を無視した我慾であるから正しくない、正しくない戀愛を成就することは惡を成就することになるから可けない。かう被仰つたさうでありますが、谷口先生もまた同意見でありませうか。

谷口――『生長の家』ではさう云ふことは言はないのであります。惡と云ふものは本來ない、それは假りそめの業の流轉で起つたものであるから、それが正しくなくとも歪んでゐても、それを眞直な相に見直し聞き直して行ひ直して行くところに、本物の神の實相が出て來、業障の消滅、淨化が出來るのであります。だからたとひその出發點に於て多少正しくないところのものがあつても、それを見捨てず正しい結果に直してすべてを生

かす圓滿な解決を得させてあげたいのが私の念願であります。

平井――先生、甚だ恐れ入りますが、丁度話が戀愛の問題に入りましたので、私の差し迫つた惱みを申上げて解決して頂きたいと思ひます。自身にてもつと修養し解決すべきですが何分にも差し迫つた事柄であり、永い病床生活で頭が整調を缺き解決に自信がありませんのです。私は昭和二年大學の入學試驗を受ける時に、或る易者に占つて貰ひ方角が惡いと云はれましたが、あまり氣にもかけずにN醫科大學に知人があるので卒業後の研究の便宜を思つて入學致しましたのです。當時私の家には遠い親類に當る家の娘I子と云ふのをこちらの學校で勉學の爲世話して居りました。私の兩親としては此娘の性質を見てその上で私の許嫁にと云ふ心を持つて居られたのであります。かうして昭和三年三月I子さんは學校を卒業しましたので、兩親は易者に占つて貰ひました處、相性が大層惡いからと云ふのでI子さんはその儘歸してしまひました。I子さんは此時分から私に心を寄せて居た樣です。私としてはI子さんに別にどう云ふ感情も動かした譯ではなかつたのですが、單なる易者の言葉で縁談を破られたので、心が平かでありませんでした。そのことを兩親に御話し致しますと、それなら自分で占つて貰つて見なさいと云は

れますので例の易者に占つて貰ひに行きますと、「これは相性が悪い、安珍清姫だ。けれども逆の手があるから、」との事であまり易者の云ふことも氣にも止めませんでしたが、強ひてと云ふこともないので兩親の云ふことに從つておきました。その年の夏休みには心が亂れたまゝ歸鄕を止めて運動でもして慰まうと乘馬の練習に千葉の兵營に行つてしまつたのです。こゝでの過度の運動がたゝりましたのか、その九月から肋膜炎を患ひ、昨年九月の肋骨カリエスの手術後五回も手術臺に上らねばならぬ樣な悲慘極る病床生活を四ケ年間も送りました。その間「日光療養所」「手のひら療治」等あらゆる療法、凡ゆる賣藥まであさり盡して是以上仕方ないとあきらめるまでになつて居りました。自分の專攻が醫學でありながら醫學に精神的治療の缺けて居るのを痛感し精神的治療の道を求めて其の方向へ行かうとしましても數多くの宗教があつても皆排他的で何れに眞理を求むべきか先づ迷はされたものでした。死ぬるか生きるかの大決心の下に九月には大手術を斷行しましたが、その時惠まれた事には忘れもしません、十月十五日小森先生から『生長の家』御發行の小冊子『生きとほし』を御惠與に與り大感動を以て貪り讀ましていただいてから一週間にして今まで續いた三十七度以上の微熱が七度以下に降つて了

つて、それ以來七度以上に昇つたことなく經過も急速に快方に向ひ年末に退院することが出來ました。『生長の家』の誌友にしていたゞき心の法則を知るにつれて今までの悲慘事は皆當然のことの樣に思はれます。迷ひにつぐに迷ひ、迷ひ迷つて迷ひ拔き苦しんで居たのであります。

が御蔭樣で此のやうに私の身體が快方に向ふにつれ、I子さんのお宅の方からI子さんが未だに私に心を寄せて結婚もしないでゐるから、私の病氣が治つたについては、本人が婚期であるから貰つてくれるかどうか、早く返答をして欲しいと私の兩親の許まで云つて來たのであります。私の體がこんな病氣にかゝり學校も中途で廢した、そこで私の親の考としては、今後さあ嫁をと云つて求めても急に得られないだらうし、I子さんも氣に入らない娘ではなし、そんなに思つて居るなら可哀さうだ。それに私の弟の緣談が今進行して居りますので世間體もあり、兄の話を先につけて置くのが順序だと云ふことになり、相性なんてことは迷信で氣にしないでいゝから、是非親の云ふことをきいてI子さんとの婚約を承諾してくれと再三私は云はれたのであります。私は病床につく樣になつてから四年間I子さんの事はすつかり忘れようとつとめ、最近まで忘れて居り

ましたが、こんな話が出て來ますと迷ひにとらはれたとは云へ易者の言葉が耳について仕方がないのです。此易者の占ひがよく的中して居る例が他にもありますので、こんな悲慘な出來事は全く學校の方角が惡かつたためか、或はI子さんとの相性が惡かつたのか知らん、I子さんさへ自分の周圍に現はれなければこんなことにはならなかつたと思はれてなりません。かうして實際に恐ろしい出來事を經驗して見ると體驗した恐怖と結付いて何としても易者の云ふ相性が考出されてなりませんのです。易者の云つた安珍淸姫の故事も思ひ出されて恐しくなります。ところが、兩親は私が何と云ひ張つても生活費は見てやるから承知しろと强要するのであります。

私は現在I子さんに對して愛憎の感情何れもなく、迷信による恐怖があるばかりです。私自身反省しましてもI子さんに對して道德的責任を感じません。今病氣から恢復したばかりで結婚は時期でなく又こんな事を考へる能力もない、又學校も中途で職業も未定で自分の力で生活費を得ることさへ出來ない。これらの點を自分の良心から考へて拒絕することが正しいと思はれるのであります。併し、一方あまり强く私が拒むと兩親の前後の主張の矛盾をせめる樣で心苦しくもあり、兩親の御心を惡意に突張る樣でもあり、

I子さんの愛に對してもすまぬ氣がするのです。今まで病氣で兩親に非常な心痛をかけて居りますので、どんな無理な要求にでも服從するのが道ではないかとも考へられ、相反する二道の何れをとるか全く迷つてしまひます、退院以來こんなことで心勞したくないと思ひながらも、傍から兩親にせめられるので毎日惱んで居ます。

『神想觀』をしてよく心が澄んだ時に考へますと、我を捨てゝ親に從へと云ふ聲をきゝます。一方以前氣にも止めなかつた迷信による恐怖は生々しい體驗の苦しみと結びついて底知れぬ恐ろしさを呼び一思ひに拒絶してすべてを淸算して新らしく生きた方がよいとも思はれます。この考の方が平常頭にこびりついて居ります。相性と云ふこともその後自分で調べて見ましたのによると私が二十九歳で六白、I子さんが二十三歳で九紫で相性大凶と出て居るのです。大凶と云ふ字が、心の法則を考へると空恐ろしくなりますが、心に思はない様にしようとすればする程思はれてなりません。此の點になると全く神經衰弱の如くなつて早く決定してしまはないと折角恢復した健康まで危くなりさうであります。私はどうして好いか判りません。私がどの道を進むべきか、何事でも先生の御判斷にお委せして私はどの道へでも從ひます。人の轉住に方角の吉凶、男女の相

性の吉凶生年月日による吉凶、事を始めるのに日の吉凶があるものでせうか？

人間は宇宙の中心

谷口——人間は皆神の子であつてひとり〳〵が宇宙の中心でありますから、どの距離へ對しても無限でありまして、本來東西なく南北もないのであります。だからどちらを向いても、みんな善い方角であるのが眞理なのであります。周圍が如何に暗くとも吾が行く先に光明を必ず見る、吾れ自身が光明であるからだと云ふのが『智慧の言葉』にありますが、その通りでありまして、人間は神の子でありますから、どちらの方角を向いても皆善い方角なのであります。また『思ひ立つたが吉日』と云ふ諺が昔からある、この諺は眞理を穿つてゐるのでありまして、人間は思ひ立つたときに恐るゝ所なく斷行する、この恐るゝ所なく斷行する所に鬼神も避くる誠が出て來るのであります。貴方は最初易者の云ふことを、氣にかけなかつた即ち恐怖しなかつたに拘らず、易者の云ふが如き不幸災厄を招いたと思はれませうが、最初から全然氣にかけなかつたならば易者に觀て貰はれる筈もないのでありますから、表面の心は別に氣にかけなかつたけれども、心の奥底では氣にかけ恐怖してゐられたのに相違ないのであります。**方角の吉凶も、日の吉凶も皆な自分の心に在る。**出かけしなに、今日は惡い方角へ向いて行かねばならぬ、

どの日も吉日
どの方角も吉方

何か惡いことが起らねば好いがと不圖思ふ――あとは忘れて別に氣にかけないでも、最初に『今日は惡い方角へ向いて行く』と思つたときに、心の力でその方角が惡くなつてゐるのであります。日の吉凶もその通りで『今日は惡い日だ』と思へば心の力でその日が惡くなるのであります。その代り『今日は好い日だ』と思へばその日は必ず善くなる。『智慧の言葉』に『天氣の小言を云ふな』と書いてあります。『日の小言』も同じことである。神のお創造りになつた日に、惡い日などと云ふものは一日も無い。どの日も皆善い日である。方角でも皆な善い方角である。世間では人間には健康者と病人とがあると云ふ。併し『生長の家』では凡ゆる人間は神の創造り給うた神の子であるから、みんな健康者であつて病人は無いと云ふ、人間に病人があると云ふのは迷信だと云ふ。人間が病氣に見えてゐるのはその迷ひが影を肉體と云ふ鏡に映してゐるのだと云ふ。そして眞理をさとらして人間本來無病完全の神の子だと云ふ眞理を悟らしたとき今迄どうしても治らなかつた病ひが消える、其の實例は『生長の家』の誌友の中に澤山ある。平井さん、あなた御自身でも四年間煩つて五回も手術しても治らなかつた病氣が、眞理を知つたとき、始めて心の平靜を得て最後の大施術以後今迄に見ない急速な治癒を見られた

心に角を立てねば相性は皆好い

のでありませう。世間で人間を病者と健者とに別けてゐた迷信を『生長の家』が打ち破つたとき、その眞理を信ずる者には現實に病が消え、人間は健者のみとなつたと同じやうに、世間で、方角に吉凶あり、日に吉凶ありと思つてゐる限り、方角にも日にも吉凶のあるやうな外觀を呈してゐるけれども、ひとたびその迷信を打破つて、神の創造りたまひし世界ではすべての方角も日も悉く吉であり、善であると云ふことを、善なる神に對する信仰を基として肯定するやうになりますと、あらゆる方角、あらゆる日取りが吉となり善となるのであります。男女の相性でも其の通りで、相性と云ふものは合はして行くやうにすれば、悉く善い相性となるのであります。合はして行くと云ふのは、角を突き合はさぬやうにすることであります。昔から女には八本の角があるとか十三本の角があるとか云ひまして、嫁に行くときは角隠しと云ふものをして祝言する。結婚したならば決して角を出さないやうにすれば相性がよくなると云ふことを象徴つたものであります。角と云ふのは別に形の角ではないのでありまして、心の角であります。心に角が立たぬやうにする、つまり小我を出さずに相手に合はして行くやうにする、此の相手に合はして行くやうにすることが相性でありまして、合はして行く心がなければ相性が

全體としての調和の美

悪くなる、合はして行く心さへあれば相性がよくなるのであります。人間の美と云ふものは個人だけでも美しいのでありますが、だん／＼人間の生命が大きく生長して來ますにつれて、個人だけの美しさではなく、全體としての調和の美があらはれて來るのであります。繪でも野蠻人なら、簡單な赤一色、黄一色と云ふ風な個々の色の美しさを尊びますけれども、だん／＼人間が進化し向上して來ますにつれて、複雜な色彩が集つて出來た繪全體の中に、一つの統一ある美を認めるやうになる。それと同じことで、人類も進化し生長して來るにつれて、個人だけの生命を發揮するほかに、全體としての生命、個々の人が調和した渾一體としての調和の生命を發揮することになる。生物でも下等動物は單細胞動物であつて、たゞ一個の細胞としての生活を營むに過ぎないのでありますが、高等動物に至るに從ひ、多數の細胞が、互ひに自分と云ふ一個の我を捨てゝ全體の生命として調和して生きてゐると云ふことになるのであります。この全體として調和した生活を營むと云ふことが即ち『愛の生活』『生長の家の生活』でありまして、一人だけが好き候な生活を營む事をせずに、全體としての調和の生活を送るとき、個の生命が全體の生命にまで擴大し、そこに自己擴大の歡びが感じられて來るのであります。初め

は小我の角を突き合はして狹い窮屈な生活を營んでゐましたが、小我を殺して相手に合はして行くやうにすると「全體としての我」――大我が生きて來て、ひろ〳〵とした世界に出られる、このひろ〳〵とした世界が家庭の中に生きて來れば、それが相性の好い家庭となり「生長の家」となるのであります。相手に合はして小我を殺すことの出來ない人は、事毎に自分の小我が衝突して、自分の住む世界が狹いものになつて了ふ。自分の考と一寸でも違ふことがあると心が不快になつて眉を顰める。これが習慣になつて了ふと不快な原因がなくとも常に眉を顰める癖が顏について了ふ。どんな美人でも眉を顰める習慣のある人を奧樣に貰ふと、餘程男の方が修養の足りた人でないと相性が惡くなり良人の運命が惡くなるのであります。眉の間の晴やかな暗い處のない婦人なら何の歳生れの人でありませうとも假令ひのえうまの婦人でありませうとも必ず相性が旨く行くのであります。眉の間を常にしかめてゐる人は常に不快な感情を自分で味つてゐるのでありまして、必ずその人は不健康か、不運なのであります。皆さん此處で實驗をして御覽なさい。一分間でよろしいから出來るだけ眉の間に皺を寄せて其の間の氣分をよく味つて下さい。冗談でなしに本當にそれをやつて下さい。何も體驗ですから斯うして眉

良人の放蕩の原因

根に皺を寄せるのです。（皆々眉間に皺を寄せて見る）どうです、眉根に皺を寄せてゐる間の氣分は不快なものでせう。自分自身不快で、他から見ても不快なのであります。かう云ふやうな習慣的表情の婦人を奥さんにしますと、その奥さんの思ふ通りに行く間は良いが一寸でも自分の思ふ通りに行かぬことがあると、眉が皺み、そこから不快な氣分が放射されて來て、家庭が面白くなくなつて來るのであります。世間にある良人の放蕩と云ふやうなことも、事業の失敗と云ふやうなことも、多くは奥樣の此の眉の間の皺の如何にかゝつてゐるのだとすると、現在奥樣である人も、これから奥樣にならうとする人も、なか〳〵眉の伸ばし方一つが大切なのであります。だから吾々は一日に三回位は鏡に對つて出來るだけ平和な表情になるやうに眉の伸ばし方を稽古し、眼にニコヤカな表情をもたす稽古をし、その時の感じを覺えてゐて、常に四六時中さう云ふ明るい表情を續けてゐるやうに努めねばなりません。夫婦と云ふものは時には爭ふことがありますが、時偶ま爭ふと云ふことがあり、どちらも暗い表情になることが一時あつても、自分から先き明るい表情になつて機嫌が直つたら負けたやうな氣がして、相手が折れて出るまで不快な顏をしてゐなければ損だと思ふ方もありますが、それは偉い見當違ひで、

早く機嫌の直つた方が勝利者

眉に皺を寄せない工夫が肝腎

早く機嫌の直つた方が修養の足りた勝利者であるのであります。常に眉を顰めてゐられる方は癖になつて、自身には自覺されないかも知れませんが、先刻皆さんに實驗して頂いたやうな不快な波動を放散してゐるのでありますから、『類は類を呼ぶ』心の法則に從つて、宇宙に浮動してゐる惡靈波、不幸の靈波、病氣の靈波、と云ふものを感受して、それが次第に現實化することになるのであります。別所彰善と云ふお醫者さんは慢性の胃病にかゝつて、商賣柄凡ゆる醫學上の治療法を試みたけれども治らなかつた。或る日ふと鏡に映つてゐる自分の顏を見ると眉を顰めて實に不快な顏をしてゐる、こんな顏でゐては他人でも屹度不快な感じがするに相違ないと思つて、眉間を氣をつけて伸ばすことにした。しかし習慣性になつてゐるので、兎もすれば眉間に元々通りの皺が出來て氣がつかない、それを何とか氣がつくやうに絆創膏を眉間の兩脇からコメカミへ貼付けて、眉間の皮膚を兩方から引分けるやうにして、眉に斷じて皺を寄せない工夫をした。すると性格も日々に明るくなり、宿痾の胃病も治つて、今では物質的醫療を捨てゝ、自分の體驗に基く精神療法の指導をしてゐられるのであります。眉一つと云ひますけれど、此の眉をのばすと云ふことは精巧なラヂオの受信機の捻子を一つ廻せば、その捻子の廻し

具合で、そこにそれ相應の電磁波が發生し、それに波長の合つた宇宙に漂うてある電磁波をBKでもAKでもFKでも夫々適當に感受するのと同じことで、人體も一つのラヂオの受信機と同じことでありまして、眉間一つの動かし方で、其處に電磁波ならぬ心的靈波が發生し同一波長の心的靈波を受信し、それを現實化して音に聞え形に見える姿にあらはすのでありまして、その姿が吾々の幸運ともなれば不運ともなり、健康ともなるのであります。だから何歳生れの人であつても眉間の伸々として色艶の好い婦人を娶れば必ず幸運が向いて來るのであります。さうすると眉間の暗い表情のある婦人を奧さんに貰つては不可いかと云ひますと必ずしもさうではない。指導宜しきを得、また自分でも、それを是非改めたいと努力すれば、別所彰善氏と同じやうに自分で自分の表情を善くすることが出來るものでありますから、暗い表情の婦人でも奧さんに貰つてからその表情を改めさし、運命を改善することも出來るのであります。だから眉の間に暗い皺のある婦人でも好きな方がありましたら奧さんにお貰ひになつても宜しい。その婦人が素直な婦人であつて良人の云ふことをお用ひになり、みづから努力して眉を伸ばして、すべてに於て『生長の家』の生き方になるやうに努力せられるやうであれば、本來人間

に不運と云ふものはなく不運は假りに『集積』と云ふ三角硝子を透して出て來る七色の虹のやうなものでありますから『集積』の淨化してくるにつれて運命がよくなつて來るのであります。

『神想觀』をする時にも、精神を統一すると眉を顰める習慣のある人がある。かう云ふ人は自己の放散する靈波が暗いから兎もすれば低級靈の靈波を感受致しますから、今後は眉を出來るだけ伸ばすやうにして精神統一をし、自分自身より放散する心的靈波を朗かなものにして一層高い明るい靈波を感受するやうにせられるのが、神に近づく道であります。眉と云ふものは人間と云ふラヂオ的受信機の捻子のやうなものでありますから眉をひそめて、神想觀なり鎭魂なりしてゐる方の樣子を見てゐますと、その肩のところや頭の後ろのところに悪靈波の客觀化したのが見えることがあります。

B――それが、或る先生に伺へば狐狸の靈が憑いてゐると云はれるものでありますか。

谷口――實際狐狸の靈が人間に憑くと云ふことは神の子たる人間の實相にはあり得べからざることであります。人間は萬物の靈長でありますから、斷じて動物の靈に支配されると云ふことはないのであります。憑靈と云ふのは大抵『念』の形象化であります。『念』

悪念の凝縮、變形、象徴化作用

と云ふものは形に化して現れる傾向があるものである。催眠術をかけて置いて、此處は地獄だと暗示すれば別に細々と説明しなくとも細々と地獄の形が見える、このやうに、觀念は細々と形象化するのであります。精神分析をして見ても、一つの迷ひの念が客觀化して、物質的にも目に見える肺病ともなり、胃癌ともなつて現はれてゐるのと同じことで、感受して來た迷ひの靈波が、その地方に獨特な迷信と結合して、人間についた狐狸の靈姿に客觀化してワザをするのであります。醫者は肺病はある、胃癌はあると云ふ、併し『生長の家』では肺病も胃癌もない、唯、神の子たる健康な人間のみがあると云ふ、それでその信念を得たときに肺病も胃癌も治つて了ふ。それと同じことで心靈學者は狐狸の靈が人間に憑いて人間を病氣にしたりすると云ふ。靈眼で見ると狐の姿や、狸の尻尾も時には明瞭に見えたりする。しかしこの狐や、狸は山野に棲息してゐる狐や狸の靈魂であるかと云ふと、中には罪もないのに故意に殺されたやうな場合には山野自生の狐狸の怨靈の憑依することもありますが、それは、さう云ふ恨みのある祟りの靈が襲撃して來る場合は別として、恨みも由緣もないのに野生の狐狸の靈魂が感應憑依するものではない。恨みも由緣もないのに人間に感應して來る狐狸の靈と云ふものは、實は野生の

狐狸の靈波ではなく、人間から發する善からぬ念波が、其地方特有の迷信に則つて凝縮作用、變形作用、象徴作用によつて形象化したものが類似の念を有する人間に感應して、その姿をあらはしてゐるのであつて、人間の念同士だから最も感應し易いのであります。先刻も云ひましたやうに吾々の心は象徴化と云ふことを好むものでありまして、胸に不快な思ひを溜めてゐたらそれが肉體化して胃病になるとか、もつと自由な境涯に出たいと思つたら飛行機で空を飛ぶ夢を見るとか具體化して見せますが、その飛行機も胃病も觀念の波として心の中に存するだけで、心の中の觀念をとり去つたら胃病も治り、飛行機で飛ぶ夢も見なくなりますと同じやうに所謂狐狸の靈も心の迷ひを消せば消えて了ふのであります。審神者が狐狸の靈を祓へば其の時だけ狐狸の靈は去つてゐる、併し本人の迷が去らねば、やがて狐狸の靈はまた感憑してゐて次の時靈眼で見れば見える。狐狸の憑依すると云ふ迷信のない西洋では心靈現象はあつても狐狸の憑依は殆どないのであります。ところが、狐狸蛇及び天狗憑依の迷信を傳統的に有つてゐる日本では鎭魂でもして憑靈を招び出すと、大抵、狐、狸、蛇、天狗の靈と稱して出て來るので、それが何の緣故もないのに憑いてゐる。動物の種類は多種多樣あるのにこれらの靈

象徴的憑依

念は內的には業として自己が擔ひ、外的には念波として他に作用す

魂ばかりが、無暗に多く憑依して出て來ると云ふのは、それは實在の狐、狸、蛇、天狗などの靈ではなく人間の病的な念波が、地方的な傳說に則つて象徴的に形象化したものであるからであります。それは感受した念の象徴化でありますから、その象徴化に一定の法則があつて、狡るい懶け者の人に感受した念は狸の形に象徴化せられて出て來る、賢しく敏捷で化粧好きな人に感受した念は狐の形に象徴化されて見える、執念深い人に感受した念は蛇の形に象徴化して見える、高慢な人に感受した念は象徴化されて鼻の高い天狗に見える。併し形象化した以上はそれ〲個性的に獨立した働きをするので、靈眼にも見え、喋らせればペラ〲喋つたりしますが、本來それは無いものですから、その棲家やら、生年月日やら色々分析して追及して行きますと次第にその答が支離滅裂になつて、結局、何も無いと云ふことになつて了ふのでこれを私は象徴的憑依と稱してゐます。私たちが或る念を起しますと、その念が或る事を有形無形に作爲して了つた後にも其念は集積して內的には吾々の內に業として潜在し、或る方向に向つて絶えず動かうとする力を保持して居りまして、生を更へ生れかはつても其力は個生命に伴うて居りまして、同方向に働く新しき念の發生を待つて其の機會さへあれば直に

その業が流動流轉して來るのです。それが人間及生物流轉の眞の機因であつて、佛敎ではこれを業と名付けます。吾々の個性も、宿命も、皆此の業の作爲する所です。これは內的には其の念を發した個生命自身が擔ふ所の潜在する力ですが、個生命から念が外に發せられた場合、その念の力が或る目的を果さうとして果さなかつた場合は、其の儘其の念波を以て或る期間流轉せんとする力を包藏して居て、その包藏された念の力は、一つの波動でありますから、其の念を原發した個生命はもうそんな念を發しなくなつてゐましても、一旦發せられた念が波動である限りに於て、ラヂオ、テレヴイジョンのやうに具象化して或る感覺鋭敏者には耳目に觸れる可能性がある、それが象徴的憑依となり、幻聽幻覺となつて顯る場合があります。斯う云ふ象徴的憑依の場合には、念を發した本人は知らないのに、その念だけが獨立して業をなしてゐるのであります。生靈などには斯う云ふ場合が多い。生靈が獨立して働きをする證據には生靈が寫眞にとれた例もあります。吾々が念を發すればその念は內的には自分自身に印象されて、自分自身の擔ふ業となり、外的には外に放射されて單なる漠然たる念波として他人に作用したり、凝縮作用により獨立した個性的生靈になつたり、象徴作用により、象徴的憑依を起し、

怨靈、障礙靈などゝなります。

靈術で病氣を治す弊害

伊東――私は法華の修驗者として以前に多數の病人を治したことがありますが、私の師匠になる方から靈術で病氣治しをした者の末路は必ずよくないから止す方が好いと敎へられ病氣治療を止しました。それ以來諸方の靈術家の末路と云ふものを考へて見ると大抵よくない。或る靈術家は友達と一緒に河豚を食つて自分だけ食傷して死にました。或る靈術家は腕に肉腫と云ひますか、女の尻程の大きな瘤が出來て死にました。これなどは確かに靈術で退散せしめた惡靈の怨念に祟られるのだと思ひます。

野田――それは法力で病氣を治すだけで病人に眞理を知らせて治さぬためにそんなことになるのでせう。眞理を知れば、そんなことはない。病人が眞理を知り『生命の實相』を知、障りをする惡靈の波長と合はなくなつて病氣が治る段には惡靈は障りをする事が出來なくなるに違ひありません。

伊東――本人に惡靈が感應しなくなるだけで、その惡靈そのものを敎化することが出來なければ、その惡靈はまた他の人に感應して禍ひを起すに違ひありませんから、私は、惡靈は何よりも敎化しなければならんと思ふのです。日蓮宗の方では第一鑑定、第一敎化、

るかこれを鑑定しなければならない。『教化』と云ふのは、その惡靈を靈媒に招靈して、よく教へを說いて聞かし、改心して再び禍ひを起さなくさせるのです。『經文』と云ふのは經文を讀んで佛力によつて惡靈を救ひとるのです。

谷口――靈術で他人の病氣を治した者の末路がよろしくないと云ふのは自然の大法を破るからであります。一人の人が或る時期に病氣になる、この病氣になると云ふ事は自然の大法でさうなるのであつて深い因緣のあることである。それは病氣と云ふ『迷ひの自壞作用』を起して、この自壞作用によつて始めてその人の神性が幾分でも磨き出される自然的過程になつてゐる――その自然的過程を妨げるから不可いのです。その人にとつて、病氣と云ふものは神性開顯の學校の課業のやうなものである。それに橫合から往つて本人が眞理も何も知らないのに、突然その病氣を治すやうなことをすると、學校の課業が難かしいと云つて苦しんでゐる學生に、深切めかしく學課を許してやると云ふのと同じ事になる。そのために一時病人は樂になるけれども眞理を知ることが出來ない、病氣が不思議に治つた！　あの人が術を施して呉れると忽ちよくなつて靈的膏藥でも貼つ

てくれると同じだ。』などと考へてゐる。病人は依然として眞理を知らず、自己の生命が神の子であることを知らず、靈術と云ふ一種の按摩とか膏藥とかを信賴することになる。かうなれば病人を治しながら却つて相手の向上を妨げたことになる。『迷ひの自壞作用』として眞理を知らす自然の過程として起つて來た病氣がその意義を完うせずして捨てられる。これは因果の法則を破つたことになる。こゝに病氣を不法に治した人の責任が問はれねばならない。だから私は直接治療で法力で患者を治すと云ふことはしないのです。そんなことをしなくとも本を讀むだけで、神想觀をするだけで、眞理を知れば、それだけで、病氣は治るのです。諸種の靈術家の末路が惡いのは一つは斯う云ふ關係でありますが、その病人の病氣が、怨靈とか、障礙靈とかによつて起つてゐるのでありますと、吾々が其の病人を治すのに或る種の靈術を用ひ、法力と云ふ强制力によつて其の惡靈を退散せしめますと、『盗人にも五分の理』と云ふ諺もあります通り怨靈その他の障礙靈にもそれ相當の理由があつて病人を惱ましてゐるのでありますから、それ相當の理由で不平があり、憤りを發して、その憤りによる害惡の念波が、常にその術者を襲つてゐる譯でありますから、術者の心が眞理を知らず、ちよつと隙が出來たとなると、そ

の害惡の念波が術者を襲ふことになり、心靈術家の末路は面白くないと云はれるやうになるのでありまして、これは一面から云へば因果の大法を破つた報いであり、他面から云へば、障礙靈の復讐を受けたことになる、生長の家では本を讀んで眞理を知つて自分で治るからそんな弊害はありません。

愛念の具象化が觀世音菩薩と顯はる

井上――名古屋高等商業の平田教授が數年前腸チブスに罹つて重態で寢てゐられると、或る晩、幾度目をさましても枕頭に觀世音菩薩のお姿がじつと立つてゐられるのが見えた。その翌日信心深い知人がたづねて來てくれたので、その瞬間、この人が昨夜自分のために祈つてくれたのに相違ないと云ふ氣がした。で、平田さんはさう云つて訊いて見ると、其人は果して護摩をたいて其の晩平田さんのために祈つてくれたのだつたさうです。それ以來平田さんの病氣はずん〳〵よくなられたのださうですが、これなどは、謂はゞ愛の念靈で、救ひの靈波が客觀化したものだと思はれます。

伊東――病氣と云ふものは自分の『迷ひ』で作る病氣と、神の造る病氣とがあると思ひます。これは私自身の體驗からどうしてもさう結論しなければならないと思ふことがあるのです。

谷口――病氣になつたゝめに其の人が自己を靜かに反省して見て眞理をさとる機會を得ると云ふやうな場合、それは救ひの攝理としてやつて來ることがあります。これは「迷ひ」の方から云へば『迷ひ』の自壞作用であります。そして眞理の方から言へば救ひの攝理です。

親の執愛が娘を病氣にする

伊東――私の體驗と云ひますのは、私に一人の娘があるのです。一人娘であるのですから非常に愛着を感じてゐて手離したくなかつたのです。先日少し遠方の所から縁談が持上つたのでありますが、どうしても急にそんな遠方へ手離すことは淋しい氣がして嫌やなのでありました。そのうちに娘が何處が惡いともなく大儀がつて發熱して三十七度五六分と云ふ處を上下してゐてどうしてもスツキリ解熱しなくなりました。醫者に診て貰ふと肺尖加答兒だと云ふ診斷です。醫者の勸めもあり、それではこんなに空氣の汚れた大阪のやうな所にゐては善くないと云ふので、五里程の處を自動車にのせて田舍へ轉地させました。田舍道の隨分デコボコの所を自動車で走つたものですから、本當の肺尖加答兒ならその激動で一層惡くなりさうな筈ですが、その田舍の親類の家に着くとその時から不思議に娘の發熱がスツカリひいて了つて、今迄何となく身體が大儀で動けなかつた

のが、身體が輕くなり、快活に其の家の手傳などをするやうになつたのです。醫者は肺尖加答兒だと診斷して靜養を勸めたのですが、それ以來靜養どころか大車輪でその親類の家の仕事を手傳つてゐると云ふ手紙が來てゐましたが、最近ではそんなに健康になつたらもう結婚してもよからうと云ふので遠方へ嫁にやりました。今、その經路を振り返つて考へて見ますと、私は娘をそんな遠方へ手離したくない、それで神さまが一時そんなに遠方でない郊外まで、その娘を引離すやうに病氣にならせて置かれて、私が娘と離れて淋しさに慣れるやうになつてから、娘を遠方へやられたやうに思ひます。つまり私が娘と一時に遠く離れる悲しみを徐々に慣れさせて輕減させてやらうと云ふ神さまの慈悲深いお計ひだと思はずにはゐられないのです。

谷口――さうお考へになることも出來ますが、それは寧ろ貴方自身のお心がお孃さんに反映してお孃さんを病氣にならせてゐたのでありませう。人間の心と云ふものは實に不思議な微妙な働きをするものでありまして、娘に嫁入り口がある、それを嫁入らせるのは娘の幸福のために必要である、併し自分はその娘を嫁に入らせては淋しくて叶はぬと思ふ。「表面の心」は娘の幸福のために、自分の娘への愛着を捨てなければならぬと思ふ。

しかし『奥底に隠れてゐる心』は、自分の離れたくない愛着のために娘の前途を犧牲にしたいと思ふ。しかし、自分の愛着のために娘の前途を犧牲にしたとあつては『表面の心』の道徳性が承知しない。それで奥底の潜在意識は『表面の心』の道徳性に觸れないやうに、裏面から細工をするのです。自分の執着が原因ではなく娘自身の病氣が原因で他家へ緣付けないんだつたら、何も自分が娘を犧牲にしたことにはならない、さう云ふ譯で別れともない親たる貴方自身のお念が、娘の緣付を妨げるためにお孃さんを病氣にする事もあり得るのです。一家のうちの病氣と云ふものは實に不思議な心のコグラカリで起るものでありまして、自身が病氣になりたい心や、自身の家族を病氣にしたい心や、實に複雜な心的葛藤で起ることがあります。

野田——私の出る會にも、神樣の話がきゝたい、達者であると家庭の事情で會へ出席出來ない。それで、身體のどこか彼處かに病氣をつくつて、その病氣を治して貰ひに來ると云ふ形にして會へ出席になる方があります。これは決して本人がわざと假病を作つて來られるのではなく、本人は本當に病氣を治したいと思つて來られるのですが、本人の隱れてゐる心が細工をして本人を病氣にさへして置けば神樣の話が聞けると思つて、本人

を實際病氣にして置くのです。

治りたくない心

谷口――本人の『隱れてゐる心』が治りたくないと思へば、一時治つたやうに見えてもまた病氣があらはれて來るのです。謂はゞ病氣を造るのです。また一家族の中で此の病人の病氣が治らぬ方が都合が好いとか、病氣の爲に我を通して好いとか思ふ人があれば折角こちらから愛の思念を送つても、その思念をその反對念のために妨礙せられることもあります。或る所に行者がありましたが、その行者が數回般若心經を誦すると、どんな硬直した死骸でも柔かくなるのですが、或る日招かれて往つて般若心經を百回以上もあげても、どうしてもその死骸の硬直が治らないのです。すると、その家の奥さんが、『それ見たか、そんなお經で死人の硬直が治るものか』と云ふ風な輕蔑するやうな表情をするのです。

逆念の効果

唯物論者のその奥さんには、行者の祈りがきかないことが自説の肯定になつて自己滿足出來るのです。その時、その行者の靈耳に『祈りは逆念に食はれて了つた。死んだ者に直接云へ』と云ふ聲がどこからともなく聞えて來た。その意味は『お前がそんなに祈念しても、此の席にそれと反對の念があつてそれを打消して了つてゐるから何にもならぬ、それよりも、死者の靈に直接話しかけよ』と云ふ となのです。それ

で、行者は、誦經を止めて、心のうちで死者の靈に呼びかけ『こんなに汝の肉體が硬直してゐては棺桶へ入れるために、暴力によつて無理に汝の死體を拉し曲げねばならぬ。汝も汝の肉體がそんな目に會つては、死者として恥かしめを受けることになるから、そんな恥かしめを受けないやうに直に汝の死體の硬直を解け』と默念しますと、直にその死體は硬直がとけて柔くなつたのであります。このやうに念の力と云ふものは默念でも感應して色々な禍ひをしたり、或はそれが善い念であつたら幸福や健康を與へたりするものでありますが、また、此の『念』は或る人から放射された時だけ働くのではなく、一旦放射された『念』が一定の場所や物に蓄積されてゐまして禍を與へることもあります。或る品物についた念とか或る家に蓄積されてゐる念とか云ふものもあります。私は以前住吉の某所にゐたことがあります。それはまだ私が因緣を超越する眞理を悟つてゐない前でしたので、その家に這入つてゐる間中私は不健康でした。まだ私が『生長の家』の眞理を發見しない以前でしたが、どうも不健康で死ぬやうな氣がする、その時丁度生命保險の勸誘に來た人がありましたので或る生命保險會社へ申込みましたが、診査醫が診て身體が不健康すぎると云つてその保險加入を謝絶せられました。その家と云ふ

のがその前にゐた主人が肺病で死に、その前の前にゐた主人も肺病で死んだのだつたさうですが、私はそれを知らないでゐましたが、不健康に悩んでゐました。家内は近所の人にそれを聞いて心配して引越す家を探したりしてゐたさうです。丁度新しい家が見付かつたので私は其の方へ移轉しましたが、私の引越した後へ轉居して來た人もまた家人が肺病になつて死んだときゝました。今ではその家を壞して別にそのあとへ立派な家が新築されましたが、その後數年まだ誰もその家に這入つてゐません。

井上――私の知つてゐる人が新築の家に這入りましたが、家人が三人迄つゞいて死にましたので、或る巫女に鑑定してもらひましたら、その礎に使つた石の一つが古い墓石であつて、その墓石に靈が憑つてゐるので、その靈の災ひだと云ふ判斷でありました。あとにもう家族は二人しか殘つてゐないのですが、別に移轉する家もないので現在その家にゐられますが、それ以後は災ひはないさうです。祟りの靈と云ふものも、或る程度まで祟つてその怨讐を晴らすと祟らなくなる場合があるやうですな。

念は如何にて消えるか

谷口――念は、念を發した個性生命自身は、その念を自分自身に蓄積して業として擔ひますが、外に放射されて、もう本人から遊離して了つてゐる念は、その念が滿足されたら

中和して力を失つて了ふものです。精神分析で判ることですが性慾——此れは異性と結び合ひたい念ですが——この性慾でも不自然に抑壓しておくと、本人の意志に反して色々の形式に相をかへて色々の病的症候がその性慾の象徴的滿足になつて顯はれることがあります。それを適當に滿足させればその病的症候が消えます。これと同じやうに怨念と云ふものは眞理を知りサトリを開いて消える場合と、その怨讐を適當に滿足させれば、それ以上害をしなくなる場合もあります。しかしこれはその墓石なら墓石に憑つてゐる念の強さによることで、強烈な念靈でありますと、悟りをひらいて成佛しない限り末代までも祟るやうなのが稀にあります。

井上——念は自己から發射されて自己を放れて了ひ、恰も發射されて彈丸のやうに自己から獨立した念波は、彈丸が物に當つて動物慣性がなくなるやうに、目的を達した後は自然に消えて了ふと云ふことは解りますが、念を發したならば、自己自身がその念の印象を受けて、それを業として背負はねばならないと云ふことを承りますと、私には此の問題の方が重大です。此の自己自身が業として背負はねばならぬ念の印象、念の習慣性と云ふやうなものは實に恐ろしい氣がします。此の業の解消法と云ふものがありました

ら、それを詳しくお教へして頂きたいと存じます。

谷口――業と云ふのは例をとつて云ふならば、吾々の聲が、音樂を歌ふとか演說をするとか、或るハタラキをしたのちにも、蓄音機のレコードとなつて蓄へられ、これに機會を與へれば幾回でも同じやうな聲を出させ得ると同じやうに、吾々の想念は或る瞬間物を思うて或るハタラキを濟ました後にも吾々の『個生命の心のレコードの上』に一種の『因』として必ず蓄積せられてをり、これにある機會(緣)を與へれば、恰も蓄音機のレコードが鳴り出すと同じやうに、その蓄積せられてゐた想念の痕跡から或る振動を發して、嘗て思うた想念と同じ形式のものが五官に觸れる形なり、病氣なり、境遇なりとなつて現實化して來る其の潜在力を云ふのです。つまり、業とは『念』の蓄音機的レコードです。吾々が想念を一度發射したら、發射された想念の彈丸は目的を達してその運動慣性は消えたにしても發射した本人自身は益々射擊が旨くなるやうに、射擊の印象は永く蓄積されて消ゆることなく、恰も蓄音機のレコードに聲が殘つてゐて、機會ある每に蓄音盤が鳴り出す如く、吾々の一度發した念の印象も機緣に觸れる每に嘗ての無形なりし吾々の想念が具體的な形を有つて顯はれようとしつゝあるのであります。言ひ換へると

吾々は常に念の種子を蒔きつゝ心に蒔いた種子を何時かは必ず刈り取らねばならないことになつてゐるのです。吾らは斯くの如き意味に於ては一點一劃もつぐなはずして許されると云ふことはないのです。假りに吾らが心で或る瞬間に人を憎む、そして次の瞬間に憎んだことを忘れて了ふかも知れない。そして放射された外的念波も消えて了ふかも知れない。けれども一旦憎みの念を放送した以上はその憎みの精神波動は自分の心のうちに念の蓄音器的レコードとして印象されてをり、必ず、その憎み相應の出來事を形に具體化しようと、その機縁の來るのを待つてゐるのです。

『生命の實相』觀行篇の二十六頁以下に私が『心の根本的調律法』と題して述べて置きました所で私は『習慣の心』『傾向の心』と云ふものは醒めてゐる運轉手が一度自動車のハンドルを或る方向へ向けて置いたならば、その運轉手が居睡つて居る間にも自動車は一度向けられた方向へと常に突走つて、街路樹に衝突して是を仆すやうなものだと説明して置きました。此の習慣の心、傾向の心がよく分りますと、業の流轉の理解に大變役立つと思ひます。『習慣の心』と云ふ意味は念と云ふものは或る動機を與へて方向轉換を行はない限り最初與へられた或る一方に習慣的に働くと云ふ意味であります。人間

は嘗て或念を發しますと念は一種のコトバ即ち心のバイブレーションでありますから一度發しましたら、其の念の目的とする行爲を果しました後も、蓄音器のレコードに聲が蓄積されてゐますやうに其の念がエネルギーを殘して居りまして、絶えず縁あらば其最初の時と同方向に働きかけようとして居るのであります。そして次に同種類の念の發せらるゝ場合、若くはそれにそれに聯想し易い或る念を發しますと、それが縁となりまして、今迄潜在して居た過去の念力が動いて參りまして、五官の世界にそれ相應の形をあらはしてまゐります。是すなはち『業の流轉』であります。かく潜在して居つた業が働いて來るためには『縁』と云ふものが必要である。『縁』がなければ、過去の業は蓄積されてゐるにしても、蓄音器のレコードはあつても、蓄音器も針もないのと同じく、その蓄積された業は五官の世界には現れて來ないのです。最初は偶然の念が業となつて蓄積され、それが『縁』に從つて再現すると云ふことを日常生活の例を引いて說明して見ますと、子供が母親に連れられて百貨店へ來て變つた玩具を見て大變欲しいと思ひ母に賴んで幸ひに買つて貰ふ事が出來ました。それだけで其の事件は終つて、其の子供はそれ切り何にも思ひ出しません。ところが、後日、又同じ店、又は類似の店の前を通ると、

貴婦人の萬引も業の流轉で説明が出來る

その子供は必ず何か變つた玩具はないかと氣を働かします。そして又新しい玩具を見付けたら、また欲しい衝動を起します。これは同じ店又は類似の店と云ふ『緣』に觸發されて、子供に潜在する業が流轉して形の世界に顯在となつたのです。斯う云ふ作用を繰返してゐるうちに類似の念の集積は增大して類似の場合に出會しますと、又珍しい玩具を買つて欲しい衝動が一層强く起つて來るのです。そして其の子供が長じて父となり母となりました時、その又子供を百貨店に連れて行きますと、自然と變つた玩具を買つてやりたくなります。貴婦人の萬引なども此の『緣』による業の流轉で説明できます。子供に對する叱り方などでも、子供自身が親になつた場合に、自分が子供であつた其時に叱られたと同じ言葉で其子供を叱り付けてゐる自分に氣がついて驚くことがあります。今一つ例を引きますと、寒い時に、母親は幼兒に『外へ出ては風邪を引きますよ』と注意しがちです。而るに幼兒が生長して成人少年となりました時、外でふと寒い風に當りました時に心の底から知らず識らず流轉して具象化して來るのが、此の數十年前、母から聞いて聞流した『風邪を引きますよ』と云ふ念であります。はつきり意識しませずとも、此の念が蓄積して業因となつてゐたのでありまして『寒い風』と云ふ緣に觸れて此

の業因が流轉して來て其の大人は風邪を引く事になるのです。一旦茲で風邪を引きますと、更に業はその習慣性を加へて來て一層力強き潜在力として働き出しまして、次に寒いと感じた時に、速かに其の業が流轉して又風邪に罹ると云ふことになるのです。斯う云ふやうに『業』と云ふものは蓄積された『念の潜在力』でありますが『業が深い』と云つて惡いばかりが業ではない。吾々の持つて居る善い方面、即ち知識、經驗、道德、教育、學問、感情、勉強、相互扶助、是等も悉く業であります。善い方面の業は善業でありまして、これは吾々の實相即ち神佛と同體の『本當の生命』より眞直に歪まずに來るものでありまして『本當の生命』は自由自在に働きまして、少しも天地の法則に外れぬものでありますから、其發する念も、亦自由自在でありまして其儘善なのであります。吾々の『實相生命』は本來本源たる大生命の分流であつて、始なき始より、終なき終につゞく無限に完全なる大實在でありますが、その實相生命が現象界へ投影して顯れるところの地上一切の生命は絶えず其のバイブレーションを代へて居ります。人間で云へば念々刻々その肉體細胞は交替し、更に肉體細胞は靈體細胞と交代し、更に肉體世界に生れ更つて出て來ます。併し人間の生命は地上に於て始めて生じたるものではない。否生

不生不滅不增不減

現象界一切の生命は波動と變化す

命は絶對のもの既に完全のものであつて生きるとか死ぬとか進歩するとか向上するとか云ふ事はない。唯現象界と云ふものは時間空間の縦と横とのあるスクリーンに無限時間を通して實相生命が投影されるのですから活動寫眞に映る映畫の光線の波動が絶えず變化してゐるやうに、現象界一切の生命はヴアイブレーションを變へてゐるのです。このヴアイブレーションの蓄積を業と云ふのです。恰度映畫はそのスクリーンに映畫され終つた後にも、そのフイルムは捲き收められて何處かに蓄積せられてゐて、また映寫機にかけて銀幕に映し出せば何時でもその映畫が映し出されるのと同じやうに、現象界一切の生命は、念々刻々起しつゝある念の波動をその個生命に『業』として蓄積してゐて、それが因となり、縁によつて觸發されてまた類似の運命が現象世界にあらはれることになつてゐるのです。で、吾々の現象生命は、此の地上に顯はれる前世に於て何の何某として生活し、矢張り澤山の業を集藏し來つて居ます。其の業の中には實相生命の神そのまゝの波長に調和したものもありませう。これが善業であります。併し澤山の業のうちには實相生命の波長と調和しない業がある。それは活動寫眞のフイルムの製作技術が拙いので、スクリーンに現れる姿が本當の人間のやうに完全に出て來ないやうなもので

あつて、さう云ふ場合にはフイルムの修正淨化と云ふことが必要である。此のフイルムの淨化に當るものが業の淨化であつて、現世で淨化し得ない業は死後靈界の修行によつて淨化し、そこで出來るだけ淨化して、またも生命が再び殘れる集積を提げて此の現世に顯はれたのが地上の吾々です。ですから茲に私共は生れながらに或る業を擔つて居るのであります。斯うして吾々は生れながらにして、色々の業を有つてゐる、此の業の內容と云ふものは蓄積されたる過去の念でありますから、赤兒はまだ病氣と云ふものを思つたことがないのに病氣してゐるから、病氣と云ふものは念のあらはれだと云ふことは承認出來ないと云はれる人があつても、それは見當違ひで吾々が生れながらにして色々の業を有つてゐると云ふことが解れば、疑問が氷解するのであります。此の業は幾度も生れ更つた靈魂ほど現世、幽界を度かさねて淨化作用を營んで居ります。で現幽兩界の境を超ゆる時、及び幽界にて淨化を遂げる中、又再び幽界現界の境を潛つて現世の新しき生活に入る時、此各段の節々に於て、神の攝理によつて業の濾過作用が行はれてゐるので、此の業の濾過作用の一つは過去世の記憶の一切を拭ひ取られて來ると云ふことであります。ですから吾々の小兒時代は比較的清らかでありますが、必ずしも幼兒の心は

キリストの云つたやうに天國の心ばかりは有つてゐないで、生れつきの意地惡や、盜竊なども持つてゐます。是は過去世の業を持越してゐる證據です。過去世の業の中、善くないものとして吾々の主として持ち越して來るものは、(一)個我をありとする念、(二)物を有りとする念の二大業であります。之が我慾の根本となり、大抵の人は本能的に個我を有りとして愛するがために『物』本來ありと思ふがために『我』に少しでも『物』を所得せしめて置かなければ自分自身を保護することが出來ないと思ひ、己を愛し己を保護せんとして遮二無二突貫して行きますから、自分自身を愛するのに邪魔となるもの、自分から『物』を持去らうとするものに對しては、それを憎む念、憤る念を誘發し易い傾向を持つて居ります。此れを業の催しと申します。愛他的の仕事の時は仕事その物の性質上、かゝる惡業を誘發する『緣』を與へませんが、仕事が自己の利益問題に關する事でありましたら直に此の前世持越の自愛の業が流轉して來て影響を加へ、業の力は更に重荷して遂に貪慾、我利の所業を遂行せしむに到るのであります。此の業の催しの中心力となるものは『個我を有りとする念』と『物をありとする念』とでありますが、本來吾々は大生命と一體であつて、個我は無い。實在する一切は靈的大生命の所現

であつて、『物』は無いのでありますのに、何故、『個我』をありと思ふ念が起り『物』をありと思ふ念が起つたかと申しますと、現象界と云ふものは、時間空間の縦横組合せのフイルム上に映し出されますので、立體寫眞的に寫され、フイルムの一駒々々中の映像を空間的に實在すると思違ひしやすいのです。その結果は一駒々々を全體としての一つの流れに溶込まし流れ込ますことを惜しく思ふのであります。フイルムの一駒々々は、一駒々々としては生命がないのであつて、全體として流動して始めて、スクリーン（即ち現象界）に完全な淀みなき生命的映畫が展開するのでありますのに、一駒々々に執着して一駒々々を放たないときは、フイルム全卷の回轉流動はギゴチなくなり、現象界と云ふスクリーンに映寫し出される光景は頗る變な不調和な世界となるのであります。つまり、個我と個我の所得に執着するときは、現象界は善い具合に順調に運ばないのであります。それで釋迦は『個我は無い』『所得はない』『無我』『無所得』と云ふことを強調されたのであります。無我、無所得であることが悟れて、個生命が我執で執着しなくなつたとき、現象界のフイルムは自働的に淀みなく回轉し、一駒々々のフイルムは全卷のフイルムの中に溶け込んで一體となり、そこに現象界なるスクリーンには完全な

る生命的映畫が映ることになるのであります。一駒々々のフイルムが全巻のフイルムに融け込むとは、無我になつて全體のために、又は愛他的のために奉仕すると云ふことです。人を救ひ國の爲に盡す時の吾々の心持の何物にもたとへぬ快さはこゝから來るのであります。此時には、過去の持越の自利的我欲的な業に緣を與へませんから、さう云ふ業の催しは起らず、一旦かゝる善業を積んで置きますと今後同樣の緣が與へられる場合には前の善業が働き出して比較的容易に全體奉仕又は愛他的の行爲が出來ます。特殊の宗教的天才とか、靈智靈覺者とか、又特異の人格を持つて居る人は、皆前世の善業が流轉し出たものです。だから、キリストの肉體的年齡は三十歳であつても彼は善業を積み來つた上から云へば非常の年長者なのです　彼は更生に更生を重ね、永き年月の中に高度にその念が淨化され、殆ど實相生命その儘の完全な姿が現象界のスクリーンに映じ出された結果、三十歳の青年にして、かくの如き高貴の人間を顯したのです。釋迦も佛となつて法を說くまでには驚くほど度々生れ變つて業を淨化したことが『過去現在因果經』には說いてあります。以上說いた處で、業と云ふものは念波的存在であつて、實相生命が現象界へ投影する際に、時間空間のフイルムを通して展開する結果、時間的流れを

通して繼續しなければならないので、始終ヴアイブレーションを變へつゝ連續してゐることがお判りになりませう。併し業と云ふものは斯くの如く變化しつゝ流轉するものでありますけれども、それは鏡の中の投影の如く、實相生命の投影であり、鏡の屈折反射によつて或は實相生命の如く完全に或は實相生命とは似も似つかぬ不完全さに顯れてゐるだけで實體はないものですから、業は實際に於て何處にも實在するものではありません。實在しないにも拘らず、鏡面の映像の如く、鏡の裏の、實體は少しもありもせぬに拘らずガムシヤラに在るかの如く顯れんとする力であります。佛教の業と稱するもの、ショウペンハウエルの『世界を形成する盲目的意志』と稱するものは是であります。此の業、此の盲目的意志が動いて地水火風空を起し、因緣假和合して現象宇宙を生成し、現象人間を發生し、現在地球上の文明を完成しつゝあるのであります。現象宇宙は既に完成せる實相宇宙が時間空間の縱橫の額緣內に嵌められた鏡に映つた連續映畫でありますから、又常に變化し、進化し、生長し、破壞し、新生して已むことがないのであります。それで現象世界にあらはれてゐる所のエネルギーと云ひ、光と云ひ、熱と云ひ、鏡面に映像の如き波動でありますから、本來實體なき力でありながら、時間空間の觀点

より見るときは常に潜在的に或は顯在的に動き動かうとしてゐるのであります。潜在せる業が如何にして顯在的に動き顯れるかと云ふに是を顯在的に流轉せしむるのは矢張り『緣』即ち新しき念の力であります。潜在的に動かんとして居ても同種の新しき念が起らぬ中は外には動きませぬが同種の新しき念が起る時是と同方面若くは聯想し易き性質の業が流轉して表面にあらはれて來るのであります。例へば吾々は四月の候、或場所で櫻花の美事なのを觀た記憶即『業』を有つて居ります。二月三月の頃は何でもありませんが、四月に入りまして陽春の候になりよい時候だと思ひますと、過去に櫻花を見た『業』が流轉して來まして櫻見にゆきたくなるのであります。お互ひに何も心付かずに居りますればつまらぬ事でありますが、凡ての迷の起るのも、罪の起るのも考へれば皆、同形式によつて業の流轉に誘はれるのであります。業はどこにある。捉へんと欲しますれば、鏡にうつる波動的映像ですから何處にも本來ありません。本來無いものでありながら波動であるが故に何千年何萬年を經ましても其の力の流轉を繼續するものであります。石炭の燃燒するのは、實は數百萬年前の木材の業の流轉であります。是業の流轉こそ、現象宇宙進化の大原動力ともなるのであります。人間も業は恐るゝに足らず、業が

集積し流轉し是によつて現象人間が進化するのであります。だから悪業を積む、病氣になる、心が神に向ふと云ふやうな經路によつて高められる人が多勢あるのであります。それは何故か。業の流轉の奥には必ず實相があるからであります。鏡面の中に映像が映るのは源に實體があるからである。映像は次第々々に實相の完全さを映すやうに運命づけられてゐるのであつて、決してショーペンハウエルの云つたやうな盲目的意志に導かれてゐるのではありません。業を恐れず、業を淨めつゝ業を積んで行く時、人生は唯光明への旅路となるのであります。

第七章　念の病氣に及ぼす力

場　所――生長の家の假見眞道場。

出席者――大澤夫人（友の會の役員）、藤島夫人（某大電力會社の發電部長）舟橋作二氏（醫師）、北村乘三氏（道場修行者）、西條修治氏（道場修行者）、谷口雅春氏。

大澤――二三日前から生長の家の先生にお話を承りましたら、それ迄子供が頻繁におしつこをしましたがそれ切り出なくなりました。夜も必ず縮尻りますのですが、それも止まつて了ひました。

藤島――アラ、私のところでも子供が寢小便をするのでござんすよ。

注射で寢小便を起す

大澤――天坪さんに注射してお頂きになつてからではありませんか。

藤島――さうです、天坪さんに三四回注射をして頂いてからでござんすが。それはどう云ふ譯でござんせうか。

大澤――生長の家の先生に伺ひますと、不要なものを血液の中に注射するから、自然の治

療作用でおのづからその不要のものを出して寢小便をするんださうでございますよ。さう伺つて見まして、振返つて考へますと、宅の子供も天坪さんに三四回ツベルクリンの注射をして頂きましてから急に寢小便をするやうになりましたのでございます。

藤島――まあ左樣でござんすか。

大澤――阪神の友の會の奥さんがたのうちには大變天坪さんを信用してゐる方がございまして、誰も彼も子供を天坪さんに連れてまゐりまして、ツベルクリン注射をしてお貰ひになるのでございます。私も子供が肋膜炎をわづらひまして、それは治りましたが、お醫者さまは子供の肺尖が惡くなつてゐると申されましてレントゲン寫眞などをとつて頂いたのでございますが、肺部のところどころに斑點がございまして、これが結核に犯されてゐるところだと說明されるものですから、何だか氣味が惡くて心配でならない際でございましたから、天坪さんの注射を受けると可いと云ふことを承りますと、早速その注射を受けに參りましたやうた譯でござんす。

藤島――私んとこの子供もその注射を受けましたが、一體何の注射か、名前を被仰らないのでござんす。お尋ねしましても、この注射は殺菌的效果もあるし、免疫性をも與へる

し、身體を強健にもするのだとお醫者さんはお答へになるばかりでありますから、或る日、その藥局にゐる方が極懇意な方でありますので、藥局へ押しかけて往つて『それはツベルクリン注射でせう』と云ひますと『まあそんなものだ』とのお答へでござんした。

腎臓及び膀胱を害する異常成分の注射

谷口――斯う云ふやうに二人の坊ちやんにどちらもツベルクリン注射をした結果、二人とも寝小便をすると云ふやうになつたと云ふことは大變興味ある結果ではありませんか。どうも私の觀察によりますと、ツベルクリン注射は腎臓及び膀胱を害するやうです。一昨日、この話を今井楳軒先生のところで座談の際にお話し申しますと、今井先生の奥様が云はれるのに『あゝそれで判つた。私も臺灣にゐる頃ツベルクリン注射をして貰つたことがあります。流行感冒にかゝつたあとで醫者が、私に肺尖が悪いとか申しまして、この注射をしておけば大丈夫だと云つてしてくれたのがツベルクリンでしたが、その後まもなく腎臓炎にかゝつて長い間くるしみました。尤も私は以前に腎臓炎にかゝつたことがあるので、その時はさう云ふ注射に關係なく、身體が弱つたので腎臓炎が再發したのだらうと思つてゐましたが、今そのお話をうかゞつて始めて、それがツベルクリン注

射の副作用であつたとハツキリ判りました。』と云はれました。要するに大抵の薬物は一つの病氣を治すために、他の病氣を作るのです。醫者がその點を充分考慮して呉れると好いんですけれども、大抵の醫者は『この薬物はこの病氣を治す』と云ふ點に研究と注意を拂つて、その薬が、他病を起すと云ふ副作用の方への研究が行き屆いてをらないのです。

A——一つの病氣を治したら、その醫者はよく治すと云ふ評判になる、それと同時に、薬劑の副作用によつて他の病氣を起すとか、他の病氣に罹りやすくならせて置くとかすれば、それでまた其の醫者が繁昌すると云ふことになりますから、醫者としては、副作用の方の研究は餘りしないで一時現在あらはれてゐる症狀を減退させる方法の研究の方が重大なのでありませう。

谷口——さうまで醫者は意識的に副作用の方を研究しないと云ふのでもありますまいが、現在の症狀を驅逐するに熱心なあまり副作用の方面の研究が自然おろそかになつて來るのでありませう。

藤島——宅の主人は永らく腎臟炎をわづらひまして大阪醫大の特等室の一號室に入院して

ゐましたのですが、段々惡くなつてまゐりました。林社長は靈媒術の熱心な研究者でござんして、病氣と云ふものは心でどうにでもなるものであるからと被仰つて主人の入院に反對の御意見をもつてゐらしたのださうでござんすが、押し切つて入院したのでござんした。するとベツトの枕元に診療箋がブラ下げてあるんでござんせう。主人は數學的な、統計的な、どちらかと申しますと、人から見て明晰すぎると云ふ程の頭を持つてゐるのでございますから、何でう、そのカルテを見逃がしませう。醫者はカルテを獨逸語で書いたら、患者の枕元へそれをブラ下げて置いても患者にはそれが讀めないから判らないだらうと思ふのでござんせうけれども、主人は醫者がカルテへ書く程な簡單な獨逸語位は讀めるものでござんすから、毎日蛋白質の排出量が幾ら、チリンデルが幾ら、脈搏がいくらと云ふ風に、カルテに書かれた容態書きに從つて自分の手帳に統計をとつて行つたのでござんす。すると蛋白質の排出量が段々殖えて來る、尿中圓柱體の排出量が殖えて來る。カルテに書いてある數字を統計して、それを曲線にあらはして一目瞭然病氣の經過がわかるやうにしたものでござんすから、その曲線によつて、入院以來自分の病氣が惡くなる一方であると云ふことが判然わかりますと、大變昂奮致しまして

『院長を呼べ』と云ふ騷ぎなのです。そして院長が來て下さいますと、その統計表を示して『僕は入院以來二ケ月になるが病氣は依然としてよくないどころか、この統計表の示す通り段々惡くなつてゐる。これを見たゞけでも現在君の採用してゐる治療法が僕の病氣を治す能力がないことは明瞭である。それだのに君の病院では僕が入院した當時と同じ療法を續けてゐる。その同じ療法で段々惡くなつて行きつゝあるのに依然として同じ療法を採用してゐる。同じ人間の同じ病氣に對して同じ療法で段々惡くなつて行きつゝあるのに依然として同じ療法を採用するほかに道はないとは何と云ふ君達醫學者は無能なのだ。現代の醫學と云ふものはそれほど幼稚なものではあるまい。君達の無責任にも程がある』――斯う申しまして、君達は微分積分と云ふやうな高等數學を習つたことはないのか、高等數學と云ふものはどう云ふものか敎へてやらうかなどゝ昂奮の果てに申したのださうでござんす。

谷口――ところが現代醫學は、同じ人間の或る病氣に或る療法を施して、それが不結果であつたからとて、ほかに幾らでも確かに特効ある療法があると云ふ程には進歩してゐないのですよ。すべての物質的療法の効力はあるやうで無いやうで、多少とも不確かの域

を脱しないのです。それは病氣の治療と云ふことには藥物の効力體を壓倒して了ふほどに患者の精神的要素が強く働くものだからです。藥物はたとひ腎臓炎に特効のある藥物を用ひ、療法はたとひ現代發見された唯一無二の腎臓病特効療法でありませうとも、患者の精神が反對に悲觀的に働くときにはその療法の治癒的効果よりも、悲觀精神の增惡的効果によつて病氣は一層惡くなるのです。大阪醫大病院だからとて腎臓炎の療法を知らぬと云ふことはないのです。恐らく大阪醫大では醫學界最近最良の療法を行つてゐるのでせう。貴女の御主人はその療法を行つてゐながら段々容態が惡くなるからもつと良い療法を求められたのでありませうが、醫者の方から云へば、最新最良の療法を使つてゐればこそ、患者の容態が益々惡くなつてもやはり其の同じ療法を繼續するほかに道がなかつたのでありませう。其處に、物質的療法のほかに療法のあることを知らない醫師たちの嘆きがあるのです。彼らは最良の物質的療法を使つたら、それで好結果が出ない場合には患者に施すべき道を知らないのです。それは、患者の容態を支配する精神的要素を知らないからです。貴女の御主人の病氣を惡くしたのは、病床の枕元にぶら下げてある診療簿の精神的影響であつて、療法が不完全なためではないのです。そのこと

に醫者は氣がつかないのです。病氣と云ふものが治るのには不自然な狀態が自然に復するのですからその復するとき必ず何らかの動搖が起らないではゐない。痛むとか發熱するとか發汗するとか、尿に蛋白が出るとか、チリンデルが出るとかするのです。その變動が、今迄身體に不自然なところがあつたのを治す働きとして起るのでありますが、身體に異狀が起ればその異狀を病氣の症狀だと名附けて、それをもつて直ちに病氣が重くなつた尺度とする傾向が現代の醫學にあります。そのために、生じつか現代醫學を齧つた患者にその症狀を明記したカルテを見せて置くと、症狀が輕くなつたときにはヤレヤレと思ふが、症狀が少しでも激くしなつたときには病氣は增惡したのだと思つて恐怖すると今度は本當に人間自身の活力が減じ、血液中には毒素を生じて、その毒素のために腎臟も害されて尿中の蛋白量も殖えて來るのです。最初は自然の療能過程として起つてゐた身體の異狀が、今度は恐怖のために一層その症狀を惡くするのです。毎日貴女の御主人が枕元のカルテを眺めて、昨日は一昨日より蛋白が餘計殖えた、又今日は昨日より蛋白が殖えたとカルテを見て惡い〳〵と云ふ印象を日毎に心の中に印象して行きますと『生長の家』で常に說いてをりますやうに肉體は心の影でありますから、どんな良い

どんな良藥を使つても

醫者に委せよ

藥を飮んでも、醫大一番の療法を行つても、そんなものゝ治す力よりも、心の病的印象によつて惡くする力の方が強いのですから、藥も療法も効かずに病氣は段々惡くなつて行くのです。患者に體溫曲線を作らせて見たり、呼吸や、脈搏の表をつくらせて見たり、血液の沈降速度や、血壓を計つて見てその結果を患者に知らせるやうな醫者がありますが、その結果は、患者が症狀に對して一喜一憂、常に心を神經過敏に動搖するやうになりますから、病氣の治療がはか〴〵しく行かぬやうになるのです。患者は醫者にかゝる位ならば、此の醫者ならばと信賴し得る醫者にかゝり醫者にまかせ切つて、一々の症狀についてその醫學的解釋などを知らうとしない方が治病的効果が多いのです。

藤島――先生のお話を承りまして、成る程と頷ける事實がございます。主人は唯今申しましたやうな譯で日毎に症狀が惡くなる、毎日醫者の無能を罵りまして、毎日憤慨して、毎日惡くなつて往つたのでございますが、そんな信賴出來ない病院からは一日も早く退院したいと思ふのですが、阪大の醫者はもう二ケ月間は絶對安靜にしてゐなさいと云つて退院する事を許さないものですから、主人が阪大以外の醫者に立會ひ診斷させると云ひまして、神戸の田村博士と云ふ方に來て頂いたのです。田村博士は主人のところへ來

ますと、主人は激昂してゐまして『阪大の醫者は自己辯護のためにどんな好い加減な嘘を告くかも知れませんから、阪大の醫者が來るまでに、此の二ケ月間のカルテを見て下さい。入院して二ケ月、少しもよくならないのに、依然入院當時と同じ療法を續けてゐて、施すすべを知らないのが此の阪大の藪醫者です。』と非常な權幕で主人が云ふものでござんすから、田村博士は『貴方一寸手を斯う上げて御覽なさい。』と云はれます。主人が斯う手の指を擴げて上げますと、ビリ〳〵痙攣するやうに手が顫へてゐるのでござんす。『あなたの手は顫へてゐるでせう。貴方はひどい神經衰弱にかゝつてゐるのです。蛋白尿が出るのは腎臓病でなくとも神經衰弱からでも起るのです。心を昂奮させることをやめなければ、いくら藥を飲んでも蛋白尿は治りません。さあよく診てあげませう』かう田村博士は云はれまして主人の身體を仰向けにしたり俯向けにしたり、口を開かして咽喉を見たりなさいました。さうすると主人は大變喜びまして、最近此の病院では絕對安靜だと云つて、いつも仰臥のまゝ診察するだけで、俯向けになどして深切に診察してくれたことがない。それに田村博士は俯向けにして丹念に診察してくれたと申しまして、『先生、何故貴方は私の咽喉を診察せられましたか。腎臓病に咽喉が何の關係があり

ますか』などゝ質問いたしました。田村博士は『扁桃腺の疾患のために腎臟炎を起すことがあるから』とお答へになりましたが、それが主人に大變氣に入つたのでござんした。『さうですか、さう云ふ樣に扁桃腺と云ふものが腎臟病に關係があるのに、此の阪大では入院二ケ月間たゞの一回だに咽喉を診察してくれた醫者がありません。實に亂暴な醫者たちです。私はこの病院を早く退院した方が好いと思ひますが退院しては可けませんか。』『此處の醫者が信賴出來ないなら、無論退院なさる方が好いでせう』かう田村博士が被仰いますと、主人は『先生は私を治すと云ふ自信がありますか』と眞向から問うてかゝるのでござんした。田村博士は『治しますとも、二十日間したら屹度會社へ出勤出來るやうにしてあげます』と斷乎として答へて下さつたのでござんす。『二十日間で屹度會社へ行けるやうになりますか。此の病院の醫者はもう二ケ月間は絕對安靜にしてゐなければならないと云ふのですが、絕對安靜を守らないで自動車に乘つて自宅へ歸つて養生しても差支へありませんか。』『差支へありませんとも。』かう云ふ鹽梅で愈々退院することになりましたが、仰臥のまゝで擔架にのせられて病院を出ます時には、その隣室に病室友達で矢張り腎臟病で入院してゐる人がありまして、どちらも病氣が永びいてゐた

のでござんしたが、その人の室の前を通ります時には、病人とは思へないやうな大聲を出しまして『××君、僕はもう退院するよ。よくなつて歸るのだつたらお祝ひしなければならないのだが、入院して却つて惡くせられて退院するのだから今はお祝ひも出來ないが退院して屹度近いうちによくなつて此處の醫者に目にもの見せてやりに來るから、その時にはまたお目にかゝるよ。』などゝ、まるで氣狂ひなんでござんした。無論、田村博士の被仰つた二十日間には全快は致しませんでしたが、今迄主人がカルテを見て『病氣が重くなる、重くなる』と云ふ觀念に捉はれてゐましたのが、田村博士の斷々乎たる口調で云はれた『二十日間で會社へ往けるやうにしてあげる』と云ふ言葉の力で、病氣が重くなると云ふ觀念がとれ、ずん〱快方に向ふことになり、二十日たつた時にはまだ實際は會社へは行けない狀態でありましても、大變快くなつてゐるのに、田村博士に『貴方は噓を被仰つた』と小言を云ふ譯にもまゐりません。田村博士は『二十日間で全快しないことは判つてゐるけれども、あの時にはあゝ云はなければ君は助からないから、あゝ云つたのだ。』と後で笑つてゐらつしやいました。

谷口――その御醫者さんは名醫ですね。最新最良の物質的處方よりも、その『言葉の處方』

の方がよく効くのです。

舟橋――田村博士には近頃お目にかゝりました。大橋式淋巴療法に熱心に興味を有つてゐられまして、淋巴療法の講習會でお目にかゝりました。私は以前は軍醫でありましたが、軍隊などでは二三種の一定の藥劑をどの病氣にも使ふのでありまして、それを飲ませて次の診察の時が來ると『どうぢや、もう治つたらう』と命令のやうに怒鳴りつけると、兵卒などはその瞬間氣を呑まれて氣を付けの姿勢をして、間髪を容れず『ハイ、治りました。』と答へる。『治らない』などゝは絶對に云はせない。『治つた』と此方からも云へば、彼方からも『治りました』と云ふ。兩方の言葉の力で治してしまふ。治らないなどと云へば嚴しい一層痛い治療法を受けさせられる。『軍人たる者が、これ位の病氣で弱ることがあるか！』と一喝される。いやでも治つたと云ひ、また治つて了はなければならぬ。治らないと損だから治つて了ふのであります。

病氣に對して妥協するな

谷口――さうです、病氣に對しては寸毫も妥協するやうな氣持があつてはならないのです。病氣である方が何らかの利益があるとか、都合が良いとか、その病氣と云ふものを口實にするやうな氣持が少しでも潛在意識の底にあつてはその潛在意識が病氣を製造す

治れば損だと思へば治らぬ

ることになるのです。先日、山口縣宇部支部の三隅さんが來られての話に、宇部に或る藥劑師の奥さんがある。體格は立派な人でありますが、腎臟が惡くて、常に尿中の蛋白質の分量ばかり氣にして檢量してゐるのです。ところが最近、腎臟病に大變好い藥が發見されたからこの藥を一ケ月間是非用ひて吳れ、そして腎臟病が治つて蛋白質が出なくなつたら、藥代として三十圓頂くし、治らないで依然蛋白質が出るやうだつたら藥代は要らぬと云ふ申込があつたのです。其處で、その奥さんは每日その藥を飲んでは檢尿してゐました。尿中の蛋白質はだん〴〵減つて來るのです。治らなかつたら金は要らぬと云ふ程の確言をする藥ですから、その確言の暗示力がきいて來たのでありませう。その藥を飲んで二十八日目、二十九日目と云ふ頃になると尿中の蛋白質は愈々減つて殆ど檢出しなくなつて了つた。此の分なら腎臟は全快した譯であつて、明日は愈々藥代を三十圓拂はねばならぬと云ふことになつたのであります。するとその三十日目になると俄然尿中の蛋白質が殖えて來ましたので、その三十圓を支拂はずに濟んだと云ふ實談をせられました。斯う云ふやうに吾々の潛在意識と云ふものは、治らないでゐる方が利益だと思ふ時にはその病氣を治らせない力があり、治つた方がよいと云ふ時には治らせる力が

あるのです。大抵の人は自分で病氣になつてゐる方が都合が好いから、その人の潜在意識が病氣にならせてゐるのでありますから、自分自身を深く見つめて病氣でゐる方が都合が好いと云ふ心がどこかにあるのを取去つて了ふやうにするとその病氣が治るのであります。

A――病氣でゐる方が好いどころか、私などは病氣であれば困ると思へば思ふほど病氣になることがあるのですが、それは何故でございませうか。

恐れる物は皆來る

谷口――それは病氣を恐れるからです。病氣であれば都合が好いと思ふ心も、病氣を恐れると云ふ心も、どちらも病氣を作る心です。それは病氣を心に描くからです。病氣を心に描いて恐れる、また病氣であれば都合が良いと思ふ。どちらも同じこと、病氣を描く心です。それから自分自身の病氣が必ずしも自分自身だけの心から來るのではなく、他界にゐる靈魂からの念波の影響によつて病氣になることもあります。無論さう云ふ念波の影響を受けるのは自分の心にさう云ふ隙があるのですが。一つ西條さんのお父さんの靈魂が一家を救つたと云ふお話を致しませう。西條さんは十二月の十日に始めて此道場へお越しになつたのでありますが、どうも私の直覺ではお父さんの靈魂が迷つてゐる、

其の靈魂から來る念波の影響を受けてゐるやうに思へるのであります。それで、その事は何も書かずに、十一日は今井先生の神戸心靈相談所の集りの日でありましたから單に『西條さんの憑靈を靈媒により御解決を乞ふ』と書いた紹介狀を書いて、それを持たせて今井先生の自宅へ伺はせたのであります。すると、丁度今井先生のお宅へ折橋氏と被仰る廣島縣のお醫者さんで靈媒になれる方が來てをられましたので、その方に西條さんのお父さんの靈魂を招靈して御覧になつたのであります。

舟橋――折橋さんが、もう靈媒になれるのでありますか。その折橋と云ふ醫者に糖尿病で痩せ細つてゐられましたのですが、私が『生長の家』を一冊贈呈しましたのが機縁となり、今井先生のところへ往つて鎭魂を受けられました。身體が斯う云ふやうに靈動しまして嚴島の龍神が守護してゐると云ふことが明かとなり、神靈の實在を確認すると共に生死を超越せられまして、その結果糖尿病がズン〳〵快方に向つて、あんなに元氣にお肥えになつたのであります。

北村――あの肥つてゐられる方が痩せ細つてゐられたのですか。

舟橋――ひと月前に會つたときには痩せ細つて元氣のない顏をしてゐられましたが、ひと

月後には見違へるやうになられました。ところで、その折橋さんは旨く靈媒になれましたか。

北村――私は西條さんと一緒に今井先生を訪問してその場にゐたのですが、どうもまだ徹底した靈答が得られないやうでした。そこへ女醫の大政先生がいらつしやつて靈媒になつて下さいました。大政先生の靈媒状態は隨分手に入つたものです。

舟橋――どんな状態でしたか、詳しく話して頂けませんか。

北村――まるで『生命の實相』に書いてある通りのことが實演して見せられたやうなものです。

舟橋――どんな状態です？

肺炎で死んだ靈の招靈實驗

北村――西條さんのお父さんの靈魂が大政先生の身體に招靈されますと、大政先生は二三回苦しさうに咳をして『水を飲みたい』と云はれました。今井先生は『貴方は肺が惡いのだな』と被仰つて本當に大政先生に水をお飲ませになりました。

舟橋――西條さんのお父さんは本當に肺が惡かつたのですか。

西條――肺炎で亡くなつたのです。

舟橋――なるほど。それで咳をして口が渇いて『水を飲みたい』と云はれたのですなあ。

北村――今井先生は『貴方は自分の肺が惡い、口が渇いて苦しいなどゝ思つてゐるけれども、君はもう死んでゐるので肉體はないんだよ。肉體はないのだから、肺炎も無い。無い病氣をあると思つて苦しんでゐるのだ。觀念で自分で描いて苦しんでゐるんだ』と斯う被仰つたら、その靈は『イヤ肉體は現に此處に斯うして苦しんでゐる』と答へるのです。すると今井先生は『お前は男か女か』とお尋ねになる。『男です』と答へると、『男なら、自分の肉體を觸つて見よ』と被仰る。すると、その靈は變な表情をして大政先生の身體を色々と撫でたり觸つたりしてゐました。『どうぢや、お前は男だのにその肉體は女だらう。此れはお前の肉體ではない。お前の肉體はもう無いのだ。お前の肉體は死んで、お前は靈魂になつてゐるのを、女の肉體の靈媒に招んだのだ。』『どうもわからない。』『ずゐ分、解りの惡い靈魂だなア。』と云ふやうな押問答がありました。要するにまだ『肉體の死』の自覺のない靈魂なんですなあ。

迷へる親の靈魂の愛着の念は子供を害す

西條――僕は親の靈魂ともあるものが、子供を病氣にするやうな念波を送ると云ふ道理が解らないのです。

谷口――父の靈魂は決して子供を病氣にするために念波を送つてゐるのではないのです。たゞ自分の肉體が死んで了つてゐると云ふ自覺がない、自分が靈界に屬してゐてこれから靈界の修行にいそしむべきであると云ふ自覺がなく、飽くまで自分自身が現實界に屬してゐると思つてゐるから現實界に執着がとれない。執着がとれないから現實界へ執着の念を送る。ところが、その念が苦しんでゐる人の念、病氣の人の念ですから、それを受けた人が病氣になるのです。

北村――お父さんの靈魂の次には狸の靈があらはれて來まして「西條のお父さんは此の息子が一等可愛かつたから、是非その息子に逢ひたいから靈界へ連れて來てくれとお父さんの靈に賴まれたから、どうしても此の西條を殺して靈界へ連れて來なければならぬ」と云つてゐました。

谷口――自分が『肉體の死』の自覺がなく、靈界にゐる自覺のない父の靈が、自分の息子に會ふために息子を殺して靈界へ連れて來て呉れなどゝ賴む筈がないぢやありませんか。

北村――父は唯息子に會ひたいから、會はせてくれと狸の靈に賴んだのです。ところが、

狸の靈は父が靈界にをり、息子は現實界にゐるので、これを會はすには、現實界にゐる息子の方を殺すほかはないと考へたのでせう。

谷口――貴方は人間が狸にものを頼んでゐるのを見たことがありますか。人間は現實界にゐて狸にものを頼まないから、靈界に往つても、ものを頼まない筈です。人間は靈界へ往つても現實界にゐたときの知識と個性との大部分を依然として繼續して有つてゐるものだからです。

北村――それでは、父の靈が、息子に會はせて吳れと頼んだと靈媒が云ふことをどう解釋すべきでせうか。

谷口――それは靈媒の潛在意識が、擬人化し、劇的化してさう云ふのです。事實は、苦しんでゐる父の靈が息子に會ひたいと、その惱みの念を息子に送る、すると、惱みの念に同種類の迷ひの念が『類は類を呼ぶ心の法則』で自然に感應して來る。それが擬人化されて『狸の靈が頼まれて憑つて來た』と云ふやうに靈媒が劇的化して云ふのですよ。『頼まれて』と云ふのは『同種類の念が引寄せられて』と云ふ意味ですよ。誰が人間が狸に頼んだりするものですか。頼まれなくとも、惡念を放送したり、その放送を受けた

りしてゐると頼んだと同様に、悪念をもつた同種類の靈波が感應してくるものです。これを分りやすく擬人化して云へば『頼まれた』と云つても差支へないでせう。一人の惡念の放送が、數多の惡靈波の感應を誘導し、家庭を破壞に導き家族を病氣にすると云ふやうな實例は往々あります。一つ、西條さんの父さんの靈魂の冥福を祈る意味で、西條さんのお父さんの靈魂が或る一家を救つたと云ふ實話を致しませう。迷へる靈魂尙且つ人を救ひ得ると云ふ實例であります。それは丁度、西條さんたちが今井先生宅から歸つて來て、靈媒に出てきた西條さんの亡父の靈魂が、なほ死の自覺がなく、現實界に生きてゐると信じてゐたと云ふ話をしてゐた時でしたが、一人の婦人が一人の青年を連れて此處へ訪ねて來られたのであります。これら二人の方は『希望社』の後身たる『興國同志會』の人たちでしたが、先日、希望社々員たちの修養會で、その青年が肺病の末期に喉頭結核を患つて死に瀕してゐる人の話をされたので、其の婦人がさう云ふ方があるなら、是非その『生長の家』へ紹介して病氣の治るやうに祈つて貰つてあげたいと思つて、その青年がスタ〳〵足早にお歸りになるところを追ひすがつて『生長の家』の話をし、一緒に往つて、都合によつて、その病人のところへ私を迎へて祈つて欲しいと云ふつも

りで、二人同道で來られたのでした。私はその病人の話をきいてゐましたが、その病人の肉體が治るやうな感じがしないのです。その病人の救はれる唯一の道は肉體死後にも人間の生命は存續してゐて、依然として生きてゐると云ふ事實を話してあげるほかはない、病氣は本來存在しないと云ふ眞理を悟つて死ねば、死後その病氣は治つてゐるけれども、意識と云ふものは肉體の産物だと思つてゐて、肉體が死ねば意識がなくなるものだと思つてゐる人が死後靈界に於て意識を回復したときには、自分は生きてゐると思ひ、肉體もあると思ひ、自分は病氣だつたと思ひ出すと、靈界に於ける自己の狀態は自己の念の客觀化でありますから、自分の身體（この時は、もう肉體ではなく幽體でありますが）、矢張り病氣だつたと思つてゐるのです。『この方のお父さんの靈魂でも死んでから十年にもなつて、今もやはり肺炎だと思つてゐるのです』斯う云つて私はその希望社の人たちに西條さんを紹介しました。『だから、さう云ふ病人の救はれる道は死後の生命を說いて聞かせてあげて『死』と云ふことはない、それは現實界から靈界への轉任である、その轉任の時機は神の御手にあるのだと云ふ眞理を悟らせてあげることが第一です』と私は云ひました。さうすると、その青年は『その人がそれを信ずることが出來れば救

はれるでせうが、肉體ばかりを『自分』だと思つてゐるなら、その人は救はれないでせうか』と訊かれました。私は『信ずる時期が來るまでは救はれないでせうが、何よりも、貴方が今日此處へ來られたのは、其の病氣の方よりも貴方たち御自身の救はれるためですよ。どうぞして其の病人を救ひたい、治してあげたいと思ふ愛の心その愛の心を貴方がお起しになつたために、貴方達は今日此處へ來られることになり、人間が死を超えて永遠に生きる眞理を知らされることになつたのです。愛は空しくは消えない、愛はそれを與へる者を却つて先づ生かすのです。こんな話を申し上げてゐましたら、その話がほぐれて來まして、其のかたは御自分の家庭の事情をお話しになつた。その婦人は御自分が聖典『生命の實相』をお讀みになつたゝめに、光明思念が一家に照り渡ることになつて、今迄家族中全體が取つかへ引きかへ病氣であつたのがすつかり近頃は病氣がなくなつたのですが、先達て偶々風邪を引いた、どう云ふものか中々咳がとまらない、主人は醫者に見せよと云はれるけれども『咳は自然療能の癒す働きとして惡いものを排泄する働きとして出てゐるのであつて、その咳が出てくれるので痰が出てそのあとは痰が切れて樂になる』とその婦人が申されると、其の御主人は『それは理窟だ。そんなことは

ない。醫者に藥を貰つて咳の出るのを治さなければ不可い』と申して肯かれないのです。餘り御主人がさう被仰るので、其の御婦人は二三日醫者に藥を貰つて飲んで見たが、元より藥の無力を知らされてゐる此のかたには効がないし馬鹿らしくて間もなく藥を止めて了はれた。すると其の主人は『お前は我が強くて可けない。どうしても俺の云ふことが諾かれなければ、離縁するほかはない』と昂奮して申された。それから色々といきさつがあつて今日に到つてゐることを私の前で事細かに被仰つたのですが、その御婦人は咳が中々とまらないと御自分で被仰りながら、私と對談中ちつとも咳をなさらないのです。それで私は『貴女は咳が出ると被仰るけれども、咳はちつとも出ないではありませんか』と云ひますと『えゝ、此處で話してゐると咳はちつとも出ないのですけれども、主人が歸つて來ると、咳を出してはならないと思ふ程、咳が出て來ますので、『お前は醫者にかゝらなくても治ると云ふけれども、ちつとも治つてゐないぢやないか』と叱られるのです』とかう被仰るのです。その時、私は或る事を直覺しましたので『貴女と主人との間を割いて貴女を離縁して了ひたい先妻の靈波が感應してゐるのですよ』と申しました。その話から其の婦人も『成る程』と感得されるところがありました。と云ふの

先妻の靈波の感應

は、其の御婦人の主人の先妻と云ふのは、自分の生んだ女の兒の姙娠月が合はないために、貞操に疑ひをかけられ産後興奮のあまり、お七夜の晩に短刀で自殺して亡くなられたのです。爾來その御主人は、女の兒を里子に出し、自分は六年の間獨身で淋しく暮してゐられましたが、或る人が世話して唯今の奧樣が、淋しく暮してゐられる人を救つてあげたい氣持で結婚されたのであります。ところが其の奧樣が或る晩、夢を見られた——その夢によると一人の見知らぬ婦人が格子戶をあけて這入つて來た、其の奧樣が其處にゐるのに『お前そこにゐるか』とも云はないで、まるで其の奧樣を無視して階段をトン〳〵とあがつて行く。と、二階から自分の夫が首を出して、その見知らぬその婦人に、如何にも狎れ〳〵しい招くやうな表情をして、その婦人と一緒に姿を消したのです。奧樣はその夢の印象があまりハツキリしてゐるので醒めてからも氣がかりで仕方がない。それで懇意にしてゐる坊さんにその話をして相談なさると、『それは誰か佛樣の御催促ではありませんか。命日とか年忌とかの廻つて來てゐる佛樣がないか調べて御覽なさい。』と其の坊さんが敎へて吳れた。それで、お調べになつて見ると、自殺した先妻の丁度七回忌に當つてゐる。戒名などもわからないし、先妻の話をすると良人が不機嫌にな

るので、あから様に訊くことが出來ないので、横濱の菩提寺へ問合せたり、良人の手文庫を調べたりしてをられると、手文庫の中から一枚の寫眞が現はれた。その寫眞を見ると其奥樣は驚かれた――自分が見た夢の中で、良人に狎れ〳〵しくしてゐた其の見知らぬ婦人の寫眞なのです。一體これは誰の寫眞だらう。夢の中で見た婦人は、夢の中でたゞの妄想が描いた形ではなくて、現實の寫眞に符合する婦人だつたのです。それで奥樣は良人が歸つて來ると、その寫眞を示して其れが誰であるかと訊くと、それが先妻の寫眞であると云ふことが判つたのです。その話を其の奥樣はされましたので、私は『夢の中でその先妻が、眼の前にゐる貴女に挨拶もしないで良人のゐる二階へあがつて往つたのは當然ぢやありませんか。その先妻にとつては、貴女と云ふものは餘計な存在なのです。成るべく其處にゐてくれなければ好いと思ふのです。だから、貴女に離縁話を持ち上らせたり、良人がゐるときに限つて咳を出させたりする力は、貴女に好意を有つてゐない先妻の靈が逆念を送つてゐる結果ですよ。』と云ひました。その奥樣は始めて氣がついたやうに『さう云はれて見ますと、思ひ當ることがあります。』と云つて談し出されました。それは里子に出してあつた娘を、この奥樣は後妻に來てから半年ほどたつてから

先妻の亡魂のの怨念の感應に反抗して、後妻に反抗する妹

引寄せたのですが、その娘は此の後の母の顔を見た刹那から、もう反抗してゐました。『どうして斯うなのであらう。私の誠が足りないのだ』と此の奥樣は思ひまして、出來るだけ誠をもつて愛することに、努力せられまして『私は貴女の亡母さんの親友であつたのでお母さんの亡くなりになる時に貴女のことをくれ〳〵も頼まれて貴女を守つてあげるために來たのです』などゝ色々說き諭して、辛つと娘と自分の仲を回復せられたところが、今度は預つてゐた主人の妹が此の奥樣に反抗し出して色々男女間の交際で行ひが亂れてくるやうになつたのです。奥樣が說かれゝば說かれるほど反抗的に行ひを亂すのです。それで、奥樣はその妹が非常に信賴してゐる女學校の先生に賴んで一度說いて頂きましたが『何故、貴女はそんなに義姉さんに反抗なさるのです』と先生が尋ねましても『何故か知りません。たゞ姉さんの顔を見ると反抗したくなつてその被仰る反對のことがしたくなるのです。譯は私にもわかりません。』と云つて泣くばかりだつたさうです。考へて見ますと、本人に反抗の感じが起つて來る理由が分らなかつたのも道理です。靈界にその妹さんの心持を操る先妻の靈魂があつて、後妻への『反抗の觀念』を送つてゐるのですから。或る日その義妹は義姉に對する反抗が愈々つのつて、側の見る眼も憚

るやうな態度を或る希望社の一青年にしかけたさうです。義姉即ち此の後妻なる奥様は其晩、妹の行動を捉へて、強く、しかも愛のある熱情をもつて面詰せられました。其の奥様の愛と熱情とは義妹の迷へる心を覺ましたのですなあ。妹は『姉さん、私が惡うございました。私は夢を見てゐたのです。夢を見てゐたとより考へられません。どうして私はそんな氣になつてゐたのでせう』と涙を流して謝罪られましたが、それ以來行ひがすつかり變つて了ひました。いくら靈界から惡念を送つても、心が愛と熱情とによつて淨められて了つた妹さんの心を左右することは出來なかつたのでせう。併し、靈界にゐる先妻の靈にとつては最初は自分の娘を、次には良人の妹を利用して後妻に反抗させてゐたのですが、娘も妹も共に後妻の誠に化せられて了つたから、今度は良人に惡念を送つて良人と後妻との間を割くやうに工夫し出したものだと見えます。その時以來、良人の態度が薄情に冷淡になり、會社から自宅に歸つて來ましても、默々として一語も發しないで食事を終へると、プイと外出して近所の麻雀倶樂部で麻雀を夜の一時頃までもやつて、家人が寢靜まるのを待つて歸つて來て一人で奥樣を避けるやうにして眠ると云ふやうな始末になつて來たのです。その間に家族中が取つ換へ引きかへ不思議な病氣

にかゝつて、家族の一人は必ず病院に入院してゐると云ふ程のことが數年續いてをりました。或時など、その妹が指が一本づゝ腐る病氣に罹つて、一本を治療して治すと、その次の指が腐り、それを治すと又其の次の指が腐り、到頭十本とも腐つたと云ふやうな事さへありました。それが、聖典『生命の實相』を此の奧樣がお讀みになられましてから家族中健康になられまして、最後に此の奧樣の咳だけが殘つてゐる譯で、後妻たる奧樣を逐出すには、靈界の先妻が此の點にのみ念を集中し初めたものと見えて、此の咳の一點が中心となつて、先刻申しましたやうに離緣話まで持上つたのであります。だから良人が歸つて來ると、良人に聞き咎められ見咎められる爲に咳を出す工夫をしてゐる。私の前では咳が出ないのであります。斯う云ふ譯で、私が西條さんのお父さんの靈魂は十年前に肉體が死んでゐながら肉體の死の自覺がなく、生きてゐられる話を致しましたので、その奧樣も『成る程さうであつたか。私の家にも肉眼には見えないけれども一人の家族があるのだ。それに自分は氣がつかなかつてないがしろにしてゐた、濟まないことである。一家を救ふには先づこの迷うてゐる靈魂を救つてあげねばならない』と思はれました。それで私は、その奧樣に勸めて、その先妻の名前をとなへて吾々と一緒の食

先妻の靈への供養で良人の日常生活が變る

事を靈前にお供へすることにし、その先妻が生前信仰してゐた宗教の經典をあげて慰めてあげなさいと申し上げたのでありますが、奥様は先妻が生前にどんな宗教を信仰してゐたか判らないので、考へて見た末に、先妻は何でも橫濱のミッション・スクールを出て、英語が上手でタイピストをしたこともあると云ふことが記憶にありましたからこれは基督教の祈りを捧げてあげるのが好いとお思ひになつた。幸ひ手許に天主教の祈りの本がありましたので、それにある『夕べの祈り』と『靈魂の祈り』とを毎夜佛壇にある先妻の靈にあげることにし、毎朝『朝の祈り』と『靈魂の祈り』とをあげて、生ける人に對するが如く御飯は勿論、色々の料理や漬物までもお供へすることにせられました。

それが十四日の日から始まつたのですが、十六日は祥月命日ではないが、先妻が死んだ日である。その十六日の日になると今に今迄冷淡であつた良人の態度が急に變つて、優しく奥様に物を云ひかけることになられ、夕方麻雀倶樂部へ出かけられることは出掛けられたが直ぐに歸つて來て頗る機嫌が好いのであります。翌日には、もう麻雀倶樂部へ出かけないで、ニコ〳〵してゐて機嫌が好い、こんなことはこの一二年來ないことなのであります。その翌日が今日十八日で今朝其の奥様が此處へ來てその話をされたのであ

りますが、此處へ來るときにも御主人に『洋裁塾へ往つてからその序でに『生長の家』へ往つても好いか』と訊かれましたら、さう云ふ修養團體へは一切出入りをしないと云ふ約束で、離縁話が辛つと中止した程の良人樣でありますのに『あゝ好いともユックリ往つておいで』と快く許して呉れたので、これも又近年にないことなのださうであります。斯う云ふやうに一家の家庭的亂れと云ふものが、一人の迷へる靈魂を導くだけでこんなにも改善されて來る場合があるのであります。だから、先祖とか親類縁者の祭祀と云ふものは決して忽諸にしてはならないのであります。此の祭祀に幽齋と顯齋とがありまして、顯齋とは形の上で御宮とか佛壇とか各宗で定められた一定の形に顯れた方式で祭るのであります。幽齋と云ふのは心を以て心に相對するので、精神統一をして實相を念じ、人間の實相が圓滿完全であつて惱みも病ひもないと云ふ念を靈界の諸靈に放送してあげて念波によつて、靈界の諸靈の苦惱を除いてあげるのであります。これは相手たる靈を生前の名前で呼び出して置いて、一緒に神想觀をするつもりでやられても好い。念だけで頼りなければ、言葉で眞理を說いてきかすが好い、それには聖典の實相篇を讀んできかせてあげるのがよろしい。

第八章　治す念波の話

場　所――前神戸市醫師會長醫學博士山本治郎平氏邸。
出席者――山本博士父子と谷口雅春氏とのみ出席。

山本（畫家、山本博士の息）――僕には神様があると云ふことがどうしても解らないのです。それが解つたら安心出來ると思ひます。

神とは生命力

谷口――自分のそとに神様を求めるから解らなくなるのです。自分の内にある生命力――これを神様と見てをれば大體間違ひがないのです。自分をアミーバーのやうな小體から、現在のやうな複雜微妙な人體に造り上げた不可思議な生命力――この生命力は、どんな醫學者、生物學者よりも偉大な力をもつてゐる。どんな醫學者、生物學者でも胃袋の一片をも製造することが出來ない。學者は、此の不思議な生命力の歩いた足跡を調べて見るが、それは不思議な生命力の行く先に色々實驗的に何物かを置いて見て、斯うすればその生命力はどう云ふ風に歩みを變へるかと觀察してゐるに過ぎないのです。學者は觀察する、たゞそれだけです。創造るのは神のみです。自分の内に宿る生命力のみです。

山本（醫博、畫家の父）――成る程 There is no God,I am God（神は餘所にはない、自分が神だ）と云ふ譯ですねえ。三十年も以前に私はインディアン・コイン(印度貨幣)を手に入れたことがあります。大分古いものですか、四角な銀で造つたものでして、それに梵語で何か書いてある。それを二人の外國人に飜譯させて、兩方比較して見て誤譯のないことを確かめて見たのですが、それは『神は餘所にはない、自分が神だ』と書いてあつたのです。『自分が神だ』――私は餘所へ交渉に出かけるやうな時には、この印度貨幣を時計の鎖にブラさげて出ることにしましたが、その印度貨幣を持つて出ると必ずその交渉に成功する、妙なものですねえ。『自分が神だ』と云ふ觀念があるので、心に自信力が出來て、心の力で成功するのですねえ。

自分が神だ

谷口――さうです。『自分が神だ』と云ふのが『生長の家』の信仰なのです。『自分が神だ』と云つても何も傲然と構へて相手を輕蔑する譯ではないのです。自分が神だと解つたら、他も神だと解るのです。だから他をも尊敬するやうになれるのです。皆人に『自分は神だ』と自覺させるやうにするのが『生長の家』の教へなのです。或る宗教では神を自分と懸け離れた手の屆かないやうな非常に遠い處にゐられるもので、どんなに修行

しても近づけないもののやうに說いてゐますし、或る一派ではキリストだけが神の一人子であつて、他の人間は神の子ではないやうにも說いてゐますし、また或る宗敎では、その宗祖だけが神の顯現であつて、他の人間は下らない無價値な凡夫のやうに說いてゐますが『生長の家』では皆なに『自分は神だ』と云ふメタルをぶら下げさせるのです。そのアイ・アム・ゴッドの印度貨幣は大變結構な護符ですねえ。

山本（醫博）——（畫家の息子に）お前にそのアイ・アム・ゴッドの貨幣を遣ることにしようよ。そして、その貨幣を常に身邊にぶらさげて、『アイ・アム・ゴッド』と思ふことにするんだな。

谷口——それは非常に好いことです。人間は皆な神であると云ふのは、人間は、自分自身で自分の運命の創造主であるからです。健康を思へば健康が出て來る、病氣を思へば病氣が出て來る、成功を思へば成功が出て來る。『アイ・アム・ゴッド』（私は神だ）と唱へながら仕事の交渉に出掛ければ必ずその交渉が成就する。要するに『自分』と云ふものの創造主が自分自身の中にあるのですからねえ。

山本（畫家）——僕は熱が出るのが恐ろしいのです。熱が出たら又病氣がブリ返したと思つ

て悄氣てしまふのです。熱を恐れまいとするほど恐れるやうになるのです。

谷口――熱を恐れまいと思つても恐れるのは當然です。それは熱の恐るゝに足らない眞理を知らないからです。それは子供に、幽靈を恐れるなと云つても、幽靈の恐れるに足りない理由を知らないから恐れるやうなものです。眞理を知らなければ恐れまいと思つても恐れるし、眞理を知つて顛倒妄想がなくなつたら、恐れよと云つても恐れられないのです。般若心經にも、顛倒夢想を遠離すれば恐怖心の起りやうがないと書いてあります。それで『熱を恐れるな』と單に云つても何らの効果もない。『恐れるから病氣が惡くなる』などゝ云ふと『此の恐れたのが惡いのだ』と思つて一層恐れるやうになる。それよりも熱は結構な有難いものであると云ふ理由を知らせてあげる。すると熱を恐れなくなるのです。熱と云ふものは最も無毒な解毒劑なのです。黴菌が人體に侵入すると早速人體は熱をあげて黴菌を弱らせ、同時に黴菌の生産毒を解消させようとするのです。それを解熱劑などで人體の温熱中樞を痲痺させて熱を下げると、黴菌に對する抵抗力が弱つて來るから、却つて病菌を人體内に蔓延せしめる機會を與へ、病氣を長びかせることになるのです。熱はこの點では、他の殺菌劑の注射が幾分の殺菌力を有ちながらも、同時

に人體に有毒な結果を與へるのと比較して、全然無毒な殺菌的効果を與へる點で一層有りがたいのです。だから熱が出たら、自分に宿る大自然――即ち神様が最も無害な殺菌劑を注射して下さつたのだと思へば好いので、此の眞理が解ると、熱が出たら却つて有難くて、恐れるなどゝ云ふことは出來ないのです。

山本（醫博）――最近の醫學界では熱病に解熱劑を用ひるなどと云ふことは絶對にやりません。熱は黴菌を殺すと云ふほどの事は出來ないが黴菌を衰弱させて食菌細胞などゝ戰ふ場合、黴菌を窮地に陷れる効果があることは事實です。

山本（畫家）――熱が高いと心臓が衰弱するとか、腦膜炎を起すとか云ふことはありませんか

心臓衰弱の根本原因

谷口――熱が高いと心臓が非常に餘計働かねばならないのは事實ですが、自然の力は心臓の負擔に耐へないほど熱をあげるものではないのです。心臓を衰弱させるのは、不安、恐怖、悲哀、驚愕の感情です。斯う云ふ感情を起すと、心臓は健康な人でも非常に衰弱するのです。だから、熱が高くて心臓が餘計に働く必要があり、そのため心臓に負擔の多いときに、不安、恐怖、驚愕等の感情で心臓を衰弱させると、心臓は、高熱だけでは何ともないが、高熱プラス恐怖と云ふやうに負擔が自乘して來ると、つひに耐へ切れな

體温計を挿むだけで體温が昇る

くたつて心臓麻痺を起したりするのです。また腸膜炎を起すのは熱のためと云ふよりも、發を誘熱した黴菌の誘毒生産物のためと、本人及び看護人の恐怖の精神波動で腸膜に異狀を起すのです。醫者がよく患者に體温表を造らせる人がありますが、多くの場合に於て患者に好影響を與へるものではありません。私の知つてゐる人に體温計を腋に挿むだけで體温の上昇を豫測して身慄ひすると云ふ人がありました。要するに病氣と云ふものは症狀を目に見えるやうな罫線その他の形にあらはして、それが病氣であることを心に具體的に印象深くするならば却つて惡化するものです。宇治電の熱電部長をしてゐる人で腎臓病を患つて阪大に入院した人がありましたが、病床の枕元にある毎日の容態書を見て、尿中蛋白質の分量の統計表を造つて毎日その蛋白質の量を心に印象して往つたゝめに二ケ月間入院して一層惡くしたが、神戸の田村博士が『君のは神經衰弱だよ』と云つて阪大を退院させ蛋白量を見せないことにして心機を一轉せしめましたら病氣が暫くのうちに快方に赴いた實例があります。

山本(醫博)――田村博士は腎臓病専門の中々良い醫者だが、必ずしもさう好成績ばかりは現はしてもをらないよ。現に天兒博士が腎臓病に罹つてゐて、田村博士が治さうと思つ

て努力してゐるんだが、醫者が醫者を治さうとすることになると、尿中の蛋白質を患者に見せない譯には行かないのだらうが、毎日一回尿を檢査するどころか、毎日數回も愼重に尿の見本をとつて其の試驗管をズラリと枕元に列べたりしてゐる、その精神的暗示もあるだらうが、なか〳〵快くならないやうだ。

醫術も私的な成心を以てしては効かぬ

醫者と云ふものは、有名な醫者の先輩を治して見せて、自分の名を擧げようと思つたり、富豪の大病を治してウンと金儲けをしようと思つたり、兎も角も、或る私的な成心をもつて患者を治さうとする場合には、一生懸命に到れり盡せりの用意を以て現代醫術の粋を盡して治さうと努力するのだけれども、却つて治らないことが多いものだ。どうしても醫術と云ふものは一切の私的な成心を脱却して、虚心坦懷、一種の精神統一をもつて、神のみ心を其處に實現するつもりで患者に臨まなければ難かしい病氣は治らないものだ。此處に到ると、吾々醫學も精神療法と異る處はない。

長田秋濤氏の思出

心で病氣が重くなつた實例としては、貴方は早稻田出身の古い文士で長田秋濤と云ふ人を知つてゐますかね。

谷口――本人に會つて話したことはないが名前は知つてゐます。

山本（醫博）――あの長田秋濤君が腦梅毒を煩つてゐたのを治療したことがあります。當時

長田君は垂水に住んでゐて私の病院に通つたものです。無論梅毒だからサルバルサン注射で治るのに極つてゐる。治らないのが不思議な位だ。ズン〳〵よくなつて、これなら大丈夫と云ふことになつて京都に長田君の妾がある。『ぽんた』と云ふ藝者で、その間に一人の子供がある、その子供が自分の病氣中に亡くなつてゐたのを知つて非常に嘆き悲しんで、幾日も泣いてゐたさうですが、その感情昂奮のために梅毒が再發して、こんどは醫療の道なく死んで了ひました。これなどは『生長の家』の學説を證據だてる一つの材料になると思ふ。

山本（書家）――悲しんだ位で病氣が再發するものですかねえ。

山本（醫博）――再發するとも。病菌と云ふものは、心で先づ打擊を受けて弱つてゐる所にだけ繁殖するものだからな。

治す念波を受ける道

山本（書家）――甲南高等學校の先生で河合と云ふ方があり米國へ留學などした方ですが、今は商大の先生をしてゐられます。その人は一人子供が生れると、その記念出版として一冊宛書物を出版されますのでその書物の一冊を貰つて讀みましたがその人が米國にゐたときに聞いた話として書いてあるのに、ミセス・フイールドと云ふひどい全身神經痛

腹を立てると病氣が再發する

で十數年間一歩も動けず病床にゐた人がありましたが、ある日聖書に顯れたキリストの奇蹟のことを考へてゐました。キリストがあゝ云ふ風に奇蹟的に病氣を癒やしたと云ふ事實が實際あつたと假定するならば、さう云ふ病氣を治す念波と云ふやうな神祕な力が宇宙に充ちてゐるに違ひない。さて、さう云ふ神祕な力が宇宙に充ちてゐると假定して、その神祕な力を受け入れる工夫をすれば、その神祕な『治す念波』と云ふものが自分に流れ込んで治して呉れるに違ひないと思つて、安臥の形式など工夫して、出來るだけ心を靜かにして、宇宙に滿ちてゐる『治す念波』を感受することに努めたのです。すると、一週間目にはベッドの上で半身を起すことが出來るやうになり、歩いて見るとボッボツ歩けるのですね。間もなくその十數年間の痼疾が全快したのですが、ある日腹の立つ出來事が起つて非常に腹を立てたところが、忽ち病氣が十數年前に逆戻りして激痛で動けなくなつたので『これは惡いことをした、怒るのではなかつた』と非常に後悔して、心を平靜にするやうに努めて漸く病氣を回復したのですが、それ以來、そのフイールド夫人は腹を立てることが恐ろしくて迚も腹を立てられなくなつたさうです。此の本は知人に貸してありますが、取寄せて置いてまたお見せしませう。

谷口――宇宙に『治す念波』が充ちてゐる――これは事實です。神の大きい生かす力が此の『治す念波』です。誰でも、自分のうちに此の『治す念波』を有つてゐて、此の自分の内に宿る『治す念波』は、宇宙に滿ちてゐる『治す念波』と結びついてゐるのです。心を素直に開いて『宇宙に滿つる治す念波』を受けるやうにすると、自分のうちに宿つてゐる『治す念波』が清まつて生氣を得て、本當に治す力を發揮するやうになるのです。吾々個人の内に宿つてゐる『治す念波』は、それは丁度室の中にある空氣の樣なものです。室の中にある空氣も外の空氣と或程度までつながつてゐて、吾々を生かす力がある。そして、吾々の吐き出す炭酸瓦斯などの毒瓦斯で穢されると生かす力が少くなるから、また戸障子を解放して大氣を部屋の中へ導き入れねばならぬ。それと同じやうに、吾々の内に宿つてゐる『治す力』も、ある程度まで『宇宙の治す力』とつながつてゐて吾々を生かす力があり、吾々を治す力があるのですが、心が素直に平和に伸び〱しないで人を怨んだり憎んだり恐れたりしてゐると、丁度吾々が室内に炭酸瓦斯を吐き出すやうに心の中に毒瓦斯が出來て『治す力』『生かす力』が濁つて來る。そのために、健康な者も病氣になつたり、病氣のものは回復力が鈍つたりするのです。部屋の中に炭酸瓦

斯が籠つたら吾々は戸障子を開いて大氣に解放するでせう。それと同じやうに吾々は吾々の心のうちに色々の不純な念がたまつて自分のうちに宿つてゐる『治す力』が鈍つて來た時には、大生命に向つて心を開く。河合さんの著述にある、ミセス・フイールドもこれを行つたのでせう。淸宮術では『大空に懺悔する』と云ふさうです。要するに心の戸障子を開放して大生命の河原から生きる力を汲むのです。この方法が『生長の家』の神想觀です。

全體を生かす
神はあるか

山本（畫家）――人間に生きる力が宿つてゐる――その力を神と名付ける、各人が皆一個の神である。さう云へばさう云へぬことはないとは思ひますが、宇宙にも神があると云ふこと、全體を生かしてゐる神があると云ふことが、どうも解らないのです。

谷口――自分のうちに神祕な生命力が宿つてゐる、それは認める。それならば他の內にも神祕な生命力が宿つてゐる。それをも認めなければならなくなるでせう。その自分のうちに生きてゐる生命力と、他人のうちに生きてゐる生命力とが、一つの源の一層大きな生命力から來てゐると云ふことは、吾々の內に生きてゐる力が、彼と我と同じ相似の働きをしてゐるのでも知ることが出來るでせう。誰でも胃袋があり腸があり、心臟があり、

精緻である。その細部の構造設計までも似てゐる。別に或る人が發明した『人體』と云ふ機械を、他の人が眞似をして拵へた譯ではないのに、その細部の構造設計までが一貫した一つの同じ原理で出來上つてゐることを思へば、吾々各個人に宿る生命力は、各個人の肉體から出る個々別々の力ではなく、全體の生物を一貫して生かしてゐる、共通的大生命力と云ふやうなものを認めずにはゐられないでせう。此共通的大生命力——これを稱して吾々は本源の神と呼ぶので、吾々には此の本源の神の生命力が宿つてゐて、色々生きた活きをしたり、物を考へたりしてゐる。その『活きてゐる自分』と云ふものは此の『本源の神』が宿つて『自分』となつてゐるのですから『自分は神だ』と云ふ事になるのです。此の『自分は神だ』と云ふ眞理が判り、そして一層大きな生命に結ばれてゐると云ふことが判ると、吾々は吾々自身の内に宿つてゐる大きな生命力に信頼することが出來、安心が其處から湧いて來、大きな自己癒能も其處から湧いて來るのです。

山本（畫家）——さう云ふ吾々に共通した大きな生命がある。その大きな生命に繋つてゐると云ふことが解つても我々はやつぱり死ぬのが恐しい氣がします。さうした生命の海と云ふやうなものに沒し込んでしまふのは恐ろしいですね。

死の恐怖を超克するには

谷口――死ぬのが恐ろしいのは、この肉體を人間だと思つてゐるからでせう。貴方は死ぬのが恐ろしいと云はれますが、人間は決して死なない、生き通しのものですよ。これが解れば人間は死ぬことが恐ろしくなくなる。死なない者に『死』を恐れる筈がない、死なないから、死を恐れやうがないのです。貴方は此の肉體が死んだのち、吾々の生命が『生き通しの生命の海』の中に沒し込んで個性が無くなるやうに思つてゐられますが、吾々が『生き通しの生命の海』に沒してゐるのは、今この儘でも『生き通しの生命の海』に沒してゐるのです。そしてその『生き通しの生命の海』から常に間斷なく生命を供給されてゐる――それだから吾々は生きてゐるのです。吾々は、肉體が滅びても滅びなくても、依然として『生き通しの生命の海』の中に生きてゐるのです。肉體が生きてゐては『生き通しの生命の海』の中に溶け込んでゐないと思つたり、肉體が滅んでから始めて『生き通しの生命』と一つになれると思ふのは間違です。吾々は今も、これからも、永遠に『生き通しの生命』の中に生きてそれに繋つてゐるのです。それならば、此の『肉體の死』と云ふことは何であるかと云ひますと、貴方は畫家ですが、肉體と云ふものは、吾々の『生命』と云ふ畫家の描いた繪の一つです。肉體が死ぬと云ふことは、その繪の

『靈魂は生命が描いた畫布』

一つの繪が終ると云ふことであつて、畫家自身が死ぬことではないのです。吾々は一つの繪を書き終つたら、また他の畫布に描くのです。肉體は吾々が『現界』と云ふ畫布に描いた繪です。吾々は『念』と云ふ手法で『現界』と云ふ畫布に繪を描く。それが吾々自身の現實の肉體であり、現實の境遇であります。それが終つたら吾々は畫布を變へて『靈界』と云ふ畫布に同じく『念』と云ふ手法で繪を描くのです。畫布が異つてゐるから繪の表現も異ふ。一方は現界と云ふ粗い畫布に描くから『肉體』と云ふ粗つぽい繪が出來る。一方は靈界と云ふ精練された畫布に描くから『靈體』と云ふ精緻な繪が描かれる。併し要するに『體』と云ふものは吾々自身ではなく、吾々の描いた繪であるから、幾ら現界、幽界、靈界と畫布を變へても、自分の『念』と云ふ手法が變らない限りは、同じやうな出來榮えの繪が出來るのです。現界で病氣であつて、死んだら肉體はないから病氣はないと思つて自殺する人もありますが、肉體が死んだ後も靈魂は存續してゐる。靈魂は死の刹那のショックで意識を失ふが、靈界で意識を回復すると、何でも周圍が見えるものだから『自分は生きてゐる』と思ふ、さうして其の次には『自分は病氣だつた』と思ふ、すると『自分は病氣だ』と云ふ念によつて、その靈魂體に病氣をあらはす。先

日もさう云ふ例がありました。或る靈媒に十七年前に亡くなつた人の靈魂があらはれて來ましたが依然として十七年前の臨終の苦しみを繼續して苦しんでゐました。

十七年間、靈界で臨終の苦しみを繼續せる靈魂

山本（畫家）――さう云ふことは、私には見ても信ぜられさうにありません。

谷口――信ぜられなくとも、四十人からの目撃者がその光景を見てゐるのですから、事實を否定する何物もあり得ない。その靈媒は龜井三郎と云つて、印度人モゴールの靈魂が龜井さんの守護靈となつてゐて、その印度人の靈魂が龜井靈媒のエネルギーを利用して色々の物體を手を觸れずに浮揚させる。本人の龜井氏は自分のエネルギーを利用される間ぢゆう昏々として意識を失つてゐるのです。

印度の行者の不思議

山本（醫博）――印度人には色々神通力を發揮する者があるやうですね。僕の知つてゐる外人に千葉中學で英語教師をしてゐたロビンソンと云ふ英人がありましたが、この人は正直な男で決して嘘を告くやうな男ではない。長らく印度にゐたのですが、印度の婆羅門の行者には、これから何年間『定』に入ると云つて、靜座する、すると世話役が口に何の藥液か知らないけれども注いで呉れる、本人は精神統一の極、もう脈搏も呼吸も觸知し得る程度にはない。所謂る假死狀態と云ふべきものですが、それを石棺に納めて何年

何月何日之を開くと書いて、何年か一定の時期が來るまで地下に埋めて置く、一定の日限が來るとその石棺を掘り出すのですが、その時はまるでお祭り騒ぎで多勢の群衆が集つて來る、その混雜を警戒するために英國の官憲が出張して銃劍をつけて護衛する。だから英國人で印度人が一度『定』に入つて再び甦ると云ふ事實を疑つてゐるものは一人もない。石棺を掘り出して蓋を開くと、依然として棺の中の印度人は『定』に入つた姿勢をして坐つてゐる。それに世話役が口を開かせてまた何の藥か知らないが、口に含ませ、それからマッサーヂのやうなことをすると、數年間呼吸をせずに假死狀態に這入つてゐた其の印度人の肉體が柔かくなり、呼吸を吹き返して再び以前と同じ人間生活に歸つて來るのです。これなどは面白い現象だと思ひますね。

假死狀態で肉體が腐敗せぬ理由

谷口——中には何十年と云ふ間さう云ふやうに『定』に入つてゐて甦るのがあるさうですが、肉體がさう云ふ風に假死狀態で長年月續いてゐて、それが分解腐敗しないのは何故かと云ふと、その肉體から『念の心』が去つてゐないからです。吾々の肉體が腐敗分解しないで、斯う云ふ一定の形態構造を保つてゐるのは、肉體そのものゝ維持力によるのではなく、吾々自分の『念の心』によつてさうなつてゐるのです。肉體の死とは何であ

るかと云ふと肉體から『念の心』が去ることです。『念の心』が肉體から去れば、その瞬間から肉體は腐敗分解し始めるのです。此の『念の心』を靈魂と云ふのであつて、假死狀態の時は『念の心』の大部分は靈界へ行き、其一部分が『念體の紐』によつて肉體に繋がつてゐるのです。此の『念體の紐』が切れたら『肉體の死』であつて、それが繋がつてゐる間は肉體は腐敗分解しないのです。血液を循環さすのも、呼吸をさすのも、病氣を起すのも、肉體の分解を防ぐのも『念の心』の如何にあるのです。肉體それ自身は物質だから病氣を起す力も炎症を起す力も喀血を起す力も、凡そ自働的に生命現象を起す力は何もない。病的な生命現象を起す力さへ、物質である肉體にはないのです。物質なる肉體は、それから『念の心』が去つて了つたらたゞ物理的化學的の法則に支配されるだけです。それが物理的化學的法則以上の『病氣』とか、苦痛とか、病毒に對する生理的反應とか、凡そ生命現象を起すのは吾々の『念の心』が肉體を支配してゐるからなのです。だから『肉體は心の影だ』と『生長の家』では云ひます。吾々の『念の心』が眞理を悟り、大きな無限大の神の生命力に繋がつてゐるものだと云ふことが解つて來ますと、『念の心』が強くなり肉體が完全に支配されて物理的化學的法則ではどうしても

肉體も破壊しなければならないやうな時にも破壊しないでゐるのです。昔から仙人とか行者とか云ふものがあつて、全然食物をとらないで生きてゐたり、呼吸をしないでも肉體や生命を保つてゐたりするのは此の原理によるのです。

印度の仙人の話山本醫博）——印度ではその仙人と云ふやうな人間が澤山あつて、痩せて殆ど食物もとらない位にして、それで一種の神通力をもつて山中や樹上で生活してゐるさうですねえ。その英人が僕に話してくれた處によると、或る仙人が、仙人と云つても、印度の仙人は肥えて童眼をしてゐるさうですが、それが或る樹木の上に樹上生活をしてゐましたが、その樹木のある土地を英國の或る豪商が買つて其處に大きな邸宅を建て、これは自分の買つた土地だから立退いて呉れと其の仙人に要求したのです。仙人は『お前は土地を買つたか知らないが、此の樹木はわしの棲居だから、立退くことは出來ぬ』と頑張つた。仙人は頑張つたけれども、その英人は、彼を仙人だなどゝは思はないで、乞食だ位に思つて、暴力をもつて立退かせたのです。すると仙人は『覺えてをれ、お前は私の呪ひによつて一年以内に死ぬ』と宣告して立退きましたが、その英國人はその翌年隣國へ旅行しましたが、その旅行先で或る雷雨の晩、雷に打たれて死にました。

フトを操る者は靈界の不可知の手

谷口――成る程。それは確かに神秘の手に操られる運命でしたね。實際人の生死は、時間にすれば唯十三秒間の相違、位置にすれば唯一間の相違で極まるのです。三十秒間早く、何の理由なしに、そこを動いたゝめに雷に落たれる人と、打たれない人とが生ずる。吾々でも、何の理由もなしにフト部屋の一隅から他の一隅へ行くことがありますが、吾々の運命の多くは、此の何の理由もなしにフト行動したその行爲によつて定まるのです。此のフト行爲するところの『フト』を操るものこそ吾々の運命を司るものであつて、その『フト』は往々靈界の『靈』の念波によつて操られる。恐らく其の仙人などと云ふものは靈界の或る『靈』と交通してゐて、その『靈』を操つて、その英國人を落雷する位置へ誘つて行つたのでありませう。醫者は病菌と云ふ肉眼の視得ない世界に病源を見出しましたが、病菌のほかにも肉眼の見得ない世界に病源があります。それは念波の世界です。この念波の病源を解決するのはこれからの時代の醫學者の役目だと思ひます。

第九章　『みんな一體』の信仰を語る

場　所――生長の家出版部の奥座敷。

内　容――昭和七年七月十九日に於ける生長の家誌友會の席にて問答されたる中より實在と影との問題、悟りと迷ひの問題、眞信仰と神社崇拜と偶像崇拜を始め信仰と實生活と切實に關するものを纂む。

一、影と實在

岩村――新參の私が出しやばつて皆さんのお妨げをするかも知れませんが、私は質問をもつて參りました。

谷口――どうぞ、何なりとお尋ね下さい。お尋ねして頂く方が話しよくて結構でございます。誰か代表的な方があつて皆の代りに質問して下さる、それで皆が却つて眞理がわかつて助かる譯でございます。

岩村――『生長の家』第二輯の六號を茲に有つて來たのですがこれに疑問がございます。

（その第二十九頁を讀まれる）

死なゝくとも、死んでも、生きても『生長の家』は今このまゝで吾々は如來だと云ふ眞理を發見したのであります。皆いま如來である。みんないま佛である。如來でないものは一人もない、佛でないものは一人もない、死なければ如來となれないとか、佛となれないとか云ふのではない。死ぬとか生きるとか云ふ此の肉體は吾々の念の影に過ぎない、影が消えるか、現はれてゐるかによつて、實相の世界に於ける本物の自分の價値が下つたり上つたりする筈がない……

と、かうありますが、此の肉體と云ふものは、『幻の如く顚倒より生ず』と『維摩經』にもあり、パウロも『我が肉のうちに善の宿らぬを知る』と云つてをりますし、先生も亦神誌の到る所で『本當の人間は肉體の人間でない』と云つてをられますが、此の肉體は顚倒より生じたと云ふ理由を說明して下さい。

谷口――人間は本來『神の子』である、佛敎的に云へば『佛性』である。神こそ人間であり、佛性こそ人間である。ところが神は靈であつて肉ではありませんから、神の子たる人間も靈であつて肉體ではない、その肉體でない人間が自分を肉體だと顚倒した念を有つから、その顚倒した念が『迷ひ』であり、その『迷ひ』の影が此の肉體と云ふ譯であり

ます。

迷ひが消えたら肉體は消えるか

岩村――肉體が『迷ひの影』であるとすれば、肉體が消えたときが迷ひの無くなつた時でございませうか。

谷口――必ずしもさうではありません。肉體は念の影ではありますが、肉體が一つの世界で消えても念が消えたと云ふ譯には定まつてゐません。この肉體と云ふものは吾々の念が現界と云ふ鏡に影を映したときに現はれた影であつて、この『現界と云ふ鏡』から一轉して『幽界と云ふ鏡』に自分の有つてゐる念を映したときには幽体となつてあらはれるのであります。

岩村――成る程、それでは吾々人間が全然顚倒念と云ふものから解脱したときには此の現實世界はどうなりますか。

谷口――此の現實世界は念々に消滅してゐます。この肉体を例にひいても一刻前の自分は一刻後の自分ではない、汗となるものもあれば尿となるものもある、血球の位置も全部變つてゐる、この變ると云ふことは前のものが消えて後のものが現れると云ふことである。吾々の念が顚倒妄想からはなれて正しい念を有つやうになると不健康な肉体が消え

て健康な肉体があらはれます。それと同じやうに吾々が顚倒妄想をはなれゝば不完全な現實世界は消えて實相世界そのまゝの完全に調和した世界がやがて此の現實世界に現出して來ます。即ち、み心の天に成るが如く地にもなります。

岩村――吾々の此の不完全な肉體は『迷ひの影だ』と云ふことは解りますが、天地萬物、樹木とか天體とか云ふものは其の儘で神の創造し給うたその儘のものぢやありますまいか。青空の淸らかさ、樹木の綠の美しさ、そこには邪念と云ふものが少しも無いやうに見えますが。

實相世界と現象世界

谷口――如何にそれが淸らかに美しく感じられませうとも、五官に感じられる此の五官で觀える世界はすべて、影の世界です。此の世界をその儘で『實相の世界』であり實在の世界であると思ふのは間違ひです。成る程、青空は透明で淸らかである、樹木は綠で美しい。其處には實相世界の反射はあります。しかし『實相世界』の美しさはとてもそんな不完全な美しさではありません。實相世界の美しさが迷ひの世界に不完全に反射してゐる、それが現實の世界なのです。そこには光と暗とが入り混つてゐるのです。吾々は神の子であると云ふ自覺は光です實在です。吾々を肉體と云ふ物質だと認める『迷ひ』

は暗です虚です。光と暗、實在と虚とが入り混つてゐるのが此の世界です。若し五官に感じられる自然萬物が神の造り給うたそのまゝの實在ならば、蛙を食ふ蛇も、羊を食ふライオンも、神の造り給うたまゝの狀態であり、すべて弱肉强食の鬪爭の此の世界も神の創造り給うたまゝの實在の世界であると云ふことになります。それでは神は愛の神とも調和の神とも云へなくなりませう。すべての創造者たる善なる神があると云ふ說は、五官に觀える世界をもつて直ちに其儘神の創造の眞世界だと認めるとき自己撞着に陷つて破壞してしまふのです。

岩村――此の不完全な五官で感じられる世界は神の創造したまうた其の儘の世界ではない、それは『迷ひの世界』に實相世界の光が反射してゐるのだとしますと、その『迷ひの世界』とは一體何でありませうか。

「迷ひの世界」は本來無い

谷口――『迷ひの世界』は本來無いのです。無いものが在ると見せかけてゐる、それだから『迷ひ』なのです。在るものが在る顏をしてゐるのならば本物であつて『迷ひ』ではありません。本來『迷ひ』そのものは無いのです。それは本來『無いもの』が『在る』顏をしてゐるのですから、眞理を知れば『迷ひ』は消滅するのです。

岩村――無いものを在ると迷ふ――その迷ふのは誰が迷ふのですか。

谷口――これは佛教でも『無明起源論』と云つて、なかなか難しい問題であります。まだ全世界の學者は、此の無明が何處から如何にして起つたか、滿足に說明し得た學者はありません。『忽然念起』と云つて『ヒョツコリ念が起つた』など丶說明してゐる人もありますが、これでは完全な說明とは云ふことは出來ません。私が考へますのに、『迷ひ』と云ふもの本來無い。無いもの丶起源をたづねることが本來間違つてゐる。起源をたづねるのは在ると云ふことを前提してのことである。無いものを根掘り葉掘りしたところがその根が出て來る筈がない。

迷ひが無いと云ふ說明

岩村――それが無いと云ふことはどうして判るのですか。

谷口――吾々が『迷ひ』は何處にある、何處から來た、と根掘り葉掘りしてゐる間は無いと云ふことは判らないのです。無いものは無いとして、それは其の儘ほつて置き、本當にあるもの――吾れ『神の子』なりと云ふ此の莊嚴な眞理を自覺したとき、迷ひはひとりでに無の本性を暴露して自滅するのです。このほかに『迷ひ』の無を證明する方法はありません。たとへば此處に泥棒がゐないのに、泥棒の這入つた夢を見てゐる夢遊病者

が、泥棒が何處かにゐるのであらうと泥棒の在所をさがしてゐる限りは、その人は心の中に空想で泥棒をこしらへあげて恐れてゐなければならないのです。しかしその人が嚴重に締まつたまゝでゐる戸締りを手で觸つて見て、どこにも自分の家には泥棒が這入る餘地がないと云ふ實相を悟つたとき、もう泥棒が此家に這入つてゐると云ふ夢は消えるのです。無明も此の泥棒と同じことです。戸締りを手で觸つて見るやうに、自己の『生命』の實相そのものに生命で觸れて見て自分は神の子である『不完全』の這入る餘地はないと云ふ眞理をパツと直感したとき、ひとりでに『迷ひ』は消えるのです。此の生命の實相そのものに生命それ自身で觸れて知ることを實相覺と云ふのです。パウロが『御靈みづから我らの靈と倶に、我らが神の子たることを證す』と云つたやうに、吾が靈みづから自己が神の子たる實相を自覺自證する、さうすると、迷ひはひとりでに消えるのです。

二、神社と信仰

岩村――大分わかつて來たやうに思はれます。わたしは以前に、某教にゐた事がありますが、その後感ずるところがあつてキリスト教に轉じました。キリスト教になつたときに

偶像を拝するなと云ふことが聖書に書いてあります。それで、某教の神様をお祭りしてゐるお宮を毀つて中の御神體になつてゐる鏡を子供の玩具に與へ、其のお宮は焼きました。或る人はそんな不敬なことをしたら罰があたると云ひましたけれど、罰はあたりませんでした。パウロは『朽つることなき神の榮光を易へて朽つべき人、および禽獸、匍ふ物に似たる像となす、この故に神は彼らを其の心の慾にまかせて彼らを恥づべき汚れに付し給へり』と云つてゐます。神は朽つることなき榮光そのものでなければならないのに、造られた箱の中に入れて拝するのは間違つてゐます。しかし其のためにとて、神が人間をば『恥づべき汚れに付し給へり』と云ふのはどうも判らなかつたのです。それが『生長の家』を讀んでゐると忽然と判つて参りました。神は決して人間をば『恥づべき汚れ』に付し給ふやうなことはない。『恥づべき汚れ』などは神が創造り給はないから存在しない、それはたゞ自覺の虚の狀態である、神の限り無き榮光を知らないでゐる狀態そのものが、『恥づべき汚れ』であつて、神が人を『恥づべき汚れ』に渡したり、『罪』に定めたりするものでないことが判つて來ました。この事が解つて來たとき私は、行き詰つてゐた信仰の門が開いて光が射して來るやうな氣がしました。あなたが何時か、大

阪急ビルの清交社で講演なさつた『ひとりでに病氣の治る話』と云ふ講演筆記の話で私は雑誌『心靈と人生』で見たときには病氣なんかどうでも好いと思つて最初は讀まうと云ふ氣がしなかつたのです。それでほかの所をスツカリ讀んで了つてもまだ暫く讀まずにゐたのですが、閑があるのに、折角書いてあるものだからひとつ讀んで見ようと云ふ氣になり、讀んで見ますと、今迄信仰上釋然としなかつたところ、かうでなければならぬと思ふのに、誰もさう說いて呉れないところが說いてあるので、引きつけられて五度ばかり立てつゞけに讀まされて、感心して、さて何處に感心したのかと思つてもう一度調べて見ましたが、どこにも感心するやうな難かしい文句も使つてないのです。(此の講演は『生命の實相』第一巻に輯録しました)それで其の晩眠りましたが、翌日起きて見ると、宿痾の痔が全快とまでは行きませんが、今迄西式などもやつても一寸も効目のなかつたものが、急に自覺出來るほど快方に赴いてゐるので妙に思ひましたね。これが私の『生長の家』の誌友になつた最初の動機です。

谷口――神は宮の中にゐないと云ふことを知ると共に、本當の人間――『神の子』即ち眞人は肉體の中にゐないと云ふことを知ることが肝腎なのです。それでは肉體の人間は本

物でないから、他人にでも其の肉體に不親切にあたつてやつても好いかと云ふと、さうではないでせう。肉體は『眞の人間』ではないけれども、吾々は隣人を愛するのに、その隣人の肉體を通して愛し、隣人をいたはるのにその隣人の肉體を通していたはるしか愛を表はす道がないでせう。愛とはその肉體を象徴として肉體ならざるもの、隣人の神性に敬禮するにあるのです。それと同じやうに吾々は神が靈であつて宮の中にゐないのを知る、知るけれどもその宮を象徴として神の靈に敬禮するために宮の前で敬禮をするのです。この境地に達すると宮は毀たなくとも何の障りにもならないのです。宮はあつてもよく、なくとも好い。ある前にも敬禮するし、無い前にも敬禮するのです。キリスト教は神殿を偶像だと云つて輕蔑しますがキリスト自身は神殿を尊敬して、エルサレムの神殿の境内で鳩を賣つたり兩替する商人を神社の境内を汚すものとして、彼らを縄の鞭で逐ひ拂つたりしました。

キリストは宮を尊敬した

三枝――その點は死んだ川面凡兒先生などは偉かつたと思ひますね。川面先生は禊會の會長として神道に屬する人であつたにも拘らず、基督の教會の前を通ると敬禮せられました。その理由を問ふ人があると、何教にもせよ人を救はうと思つて働いてゐられる

川面凡兒先生

教へは神の働きであるから敬禮せずにはゐられぬと云つてをられました。

谷口――さうです、人を救はうと云ふ働きは神の愛ですから、教會の形をしてをらうと、寺院の形をして居らうと、其處には當然神があらはれてゐる筈です。

三枝――川面先生は自分のお母さんが亡くなられたときに、お母さんが佛式で葬つてくれと云はれましたので、弟子が『神道の大家ともあるものが母親を佛式で葬つては權威にかゝはる』と云つて反對しましたけれど『かまはない、母親さんの好きなやうにしてあげてお呉れ』と云つて佛式で葬られました。その點では非常に超脫したところがあつたやうで、今でも尊敬してゐます。

谷口――何教でなければ救はれないと云ふのは、人間の生命の實相を知らないからです。どんな祭り方でなければ、神の氣に入らないと云ふのは、神の實相を知らないからです。或る一定の祭り方で祭つて貰はなければ腹が立つと云ふやうな神なら、それは『神』ではなく『迷ひ』でありませう。つまり社とか儀式とかによつて估券をつけて貰はなければ、自分の『生命の實相』に威嚴が出ないと思ふからこそ、祭り方の如何によつて腹も立つのでせう。それは何か他のものを外から附け加へて貰はなければ、自分が完全になれ

ないと云ふ弱味があるから、その外からの附け足しやうが悪いと腹が立つのです。ところが本當の神の威厳と云ふものは、神さま御自身の本質に備はつてゐるのであつて、外から附け加へて貰ふ必要はないのです。神は神であるから尊い、神は神であるから自由自在である、神は神である圓満完全である。その尊さと、自由自在さと、完全さとは、外からの附け足しによらず、それ自身の本質にあるのです。人間の生命の尊さも神の子たる自身の本質にあるのですから、何教でなければ救はれないと云ふことはないのです。佛教よし、基督教よし、神道よし、何でなくともよく、何であつても好いのです。人間の生命が救はれるのは外の力によるのではなく、それ自身の本質が『神の子』であるからです。それ自身の本質が『神の子』でなかつたら、外からどんな力を加へても救はれる筈はありません。

岸一太博士の明道會

安藤――明道會の岸一太博士は保釋になつたさうで手紙が來てゐます。明道會では、人はその氏の祖先たる氏神を祭らなければ神の守護を受けることが出來ない、天の大神と云ふやうな高い神は人間を直接守護するものではない、氏の祖先たる氏神だけが人間を守護するのだと云ふやうに說明してゐますが、私は最初これは善い教へだと思ひ、つひふ

ら〳〵入會して私の氏神と稱する神樣のお宮を授けて頂いて祭つてゐるのでありますが、だんだん明道會のやり方に腑に落ちない所があり、近頃は何だか嫌やになつて、明道會本部へ其のお宮をお返ししようと思つてゐるのです。一旦祭つた神をお返ししても神罰は當らないものでせうか。

谷口――岩村さんは先刻、某教でお迎へした神樣の宮を燒いて、その御神體になつてゐる鏡を子供の玩具にしたけれども神罰は當らなかつたと云はれました。

岩村――えゝ神罰は當りませんでした。

谷口――本當の神樣なら神罰は當らない筈です。本當の神樣は神の宮の中にゐられないから神の宮を毀つても神御自身は汚されやうがないのです。神は神の宮が毀れたり、立派になつた位で、自分の神聖さが殖えたり減つたりするものではない、だから神にとつては神殿の立つも毀れるも同じことです。それ程の神樣であつてこそ尊いのです。金光教祖も『神が宮の中にゐたら人民を守護することが出來ぬ』と云はれました。それにも拘らず人間は大きな神殿を金光教の神樣のために造つてゐます。また金光教祖御自身もお宮を祭つて禮拜せられてゐたやうです。吾々が神殿を拜するのは自分の信仰を外に出し

て形に顯してそれを拜むことになるのです。丁度、吾々が繪を描くのは自分の『心の中にある美』を一旦外に出して客觀化的な繪と云ふ形のあるものにしてその美を樂しむと云ふのと同じです。繪と云ふ形になどあらはさずとも、美は自分の心のうちにあるから、自分は心の中でそのまゝ『實在の美』を樂しむことが出來ると云ふ人には繪の具で描いた繪は要らないでせう。しかし心の中にある美を外界へ映し出して鑑賞したいと云ふ切なる要求は繪となり彫刻となつてあらはれずにはゐないでせう。それと同じく心の中にある信仰を外界へ投影して拜みたいと云ふ人間の要求が宮を作り神殿を構へ、神體を按置することになるのです。人は繪が美しいと云ふけれども、繪の具と云ふ物質で出來た繪は畫家の心のうちにある美の影なのです。本當の實在の美は心の中にある物質ならざる美です。實在と影とを間違へてはなりません。實在の神は靈であつて物質に憑るものではありません。その宮は、人間が實在の神を我が心に反射して、外の形ある姿に飜譯し客觀化したのです。畫家が『實在の美』を感得する程度にも色々あり、その程度に從つて繪の形が變つて來るやうに、人間が神を感得する程度にも色々あり、その程度に從つて、神の宮や、神體にも色々形が相違して來るのです。吾々が神を祭祀するのに

一點「私」の姿を映さないで、立ち向ふものすべてを自分の内に映す「鏡」を御神體として拜すると云ふことは誠に意義あることだと思ひます。神はすべてを包容して無相であると同時に、拜む人の心の通りに顯はれ給ふのですから、鏡を以て象徴するのに相應しいのです。

三、心靈現象の價値

安藤――明道會の詐欺事件と云ふのは信者の守護神の心靈寫眞をとつてやると云つてその心靈寫眞撮影料をとつたところにあるのです。寫眞に成る程御光のやうな圓い光が寫つたりして、それが守護神さんだと云ふのださうですが、官憲の調べたところによると、(心靈寫眞と云ふのは暗室で寫すのですが) 豫め寫す人が坐る座の背後に圓い鏡を掛けて置いて、寫す時にマグネシユームを焚くとそのマグネシユームの灯が鏡に反射して後光のやうに寫るやうにしてあつたやうです。

井上――心靈寫眞と云ふのは白晝でもとれるのぢやありませんか。

谷口――どちらでも撮れるやうですね。龜井三郎の心靈寫眞や、外國の心靈の物質化現象は暗室で、やはりマグネシユームの閃光で撮つてゐるのが多いやうですね。要するに

靈そのものは寫眞に撮れないのですから幾分物質化して始めて靈の寫眞がとれるのです。その物質化を行ふのに白晝で出來る靈と、暗室でないと出來ない靈とがあるやうですね。

岩村——私の友人で今神戸にゐて太靈道の靈子術治療をしてゐる人は、實際ある日寫眞師のところへ行つて寫眞を寫して貰つたら、いつまで經つても、その寫眞が出來て來ないので、寫眞屋へ催促に行かれました。すると寫眞屋は『實はかう云ふ妙な寫眞が寫つてゐるのです』と云つて寫眞の原版を見せて呉れた。それを見ると、自分の姿の背後に實に物凄い女の幽靈の姿が立つてゐるのです。最初は誰だか自分の知らない女の幽靈のやうでしたが、あとで調べて見ると自分の親戚に當る人の死んだ先妻の通りの顏をした幽靈だつたと云つてゐます。これは本當の話ですが、此の御影師範學校の先生にも幽靈寫眞のとれる先生があると、その太靈道の友人が云つてゐました。名前は今忘れましたが聞いて來てもよろしい。

谷口——念と云ふものは一種の波動である。音波がラヂオによつて再現され、光波がテレヴイジヨンで再現される今日、念の精神波動が幽靈寫眞や、生靈寫眞となつて撮影され

ても不思議ではないでせう。

三枝――心靈寫眞を撮影するのには、佐久間俊一氏と云つて、非常な名人が東京にあります。此の人の心靈寫眞には二種の寫し方があります。カメラを向けるのと、カメラを使はないのとどちらでも撮れるのです。私も寫して貰ひましたが、膝の上に寫眞の乾板をたゞ抱いて坐つてゐるだけで寫りました。此の佐久間先生の心靈寫眞には因縁寫眞と云つて前世の因縁のことまで六枚續きの寫眞になつて寫つたりします。佐久間先生がよく云はれました。『神樣の寫眞は寫しても好いけれども、幽靈の寫眞は決して寫してはならない。幽靈の寫眞を寫すには幽靈を呼ぶのだけれども、私なら撮影がすむとすぐ幽靈を祓ふけれどもお前達は能う祓はぬと幽靈の災ひを受けるから。』と云はれました。弟子の中で禁を破つて面白がつて幽靈寫眞をとつた人がありましたが、間もなく其の人も死に、家族も引續いて死にました。

谷口――神樣の寫眞と云ふのはどう云ふお姿が寫りましたか。

三枝――後光のやうなものや、靈波のやうなものです。ハツキリした形はありません。

谷口――さうでせう。さうあるべきだと思ひます。神樣が吾々にあらはれ給ふのは救ひの

靈波としてゞありますから。

井上——心靈現象を起したり、心靈寫眞をとつたりする靈媒になる人には、隨分人格にいかゞはしい人があり、何の不可思議現象も起さない人に人格の高い人がありますが、あれはどう云ふ譯ですか。

靈媒の人格と心靈現象の成績との關係

谷口——心靈現象と云ふのは、名前は心靈現象でも、實は半物質的現象なんです。全然心靈的である場合には吾々の五官にそれが見えて來ないのですから、心靈現象は成立たないのです。そこで心靈現象はその實、半物質的現象であるとしますと、この現象は物質的性質を多分に有した靈魂——云ひ換へると、物質的執着を脱け切らないでゐる靈魂が色々の藝當をやつて見せることになるのです。さう云ふ物質的執着を脱け切らないでゐる靈魂と、人格の低い靈媒とは親類筋になる譯ですから『類は類を呼ぶ』の心の法則により、人格の低い靈媒には物理的心靈現象を起す靈魂が兼ね感じて來るのです。

三枝——靈魂とは實際人間にかゝつて來るのでせうか。『生長の家』の創世記の解釋によりますと、人間は萬物の靈長であるから如何なる靈魂にもかゝられるものでないと云ふやうなことがありますが。

谷口――それはかゝると云ふ言葉の定義如何によります。第一義的大自覺に入れば、人間は、神の子でありますから、如何なる惡靈にもかゝられると云ふことはないのです。第二義的には、惡しき靈に憑られると云ふ信念を有つことによつて、惡しき靈の波長に合ふラヂオ的受信機となり惡しき靈の靈波を感じて、惡しき靈の聲を出し、惡しき靈の姿を演ずるのです。それはＪＯＢＫの波長に合ふラヂオの受信機がＪＯＢＫの聲を出し、その放送者と同じ言葉を喋るのと同じです。それは放送者と同じ言葉を喋るけれども、何もＪＯＢＫのアナウンサーは茲に實際此の受信機の側まで來て喋つてゐるのでありますまい。それと同じで、惡靈が憑いて狐つきのやうな言葉を喋つたりしましても、惡靈は實際人間に憑いては居ないのです。たゞ其處には惡靈が在ると云ふ夢と、惡靈に憑かれると云ふ夢とがあるばかりです。すべて此の世の惡しきものは神の創造の反射ではなく、迷ひが反映した白日夢です。

三枝――さうすると寫眞に寫る物凄い怨靈のやうなものも實在ではないのでせうか。

谷口――さう云ふ御質問が出るのは、五官に感じられるものを實在だと思ふ考へが脫け切つてゐないからです。蚤が來て吾々の血を吸ふ――是は五官の感覺で感じられる事實で

すが、かう云ふ不調和な事實はたとひ寫眞にとれても、私は實在ではないとするのです。人間は『神の子』であつて血液ではない。血液でない人間が蚤に血を吸はれると云ふやうな不合理なことはあり得ないのです。大涅槃經に『たとひ無量百千億の魔も如來の身血を侵すこと能はず。故は如來の身は血肉、筋脈、骨髓にあらず、如來は眞實にして實に惱壞なし』とあるのは此處です。この眞理がわかつたとき、物凄い惡靈も、人間の血を吸ふ蚤の黴菌も、非實在の一形式に過ぎないと云ふことが判然として來るのです。『神の子』である人間が惡靈につかれると云ふことは、本來血肉で出來てゐない靈なる人間が蚤に血を吸はれると云ふのと同じであり得べからざる不合理なことです。釋迦はその眞理を知つてゐたので『無量百千億の魔も如來の身血を侵す能はず』と云つたのですね。

三枝――だけど人間が蚤に食はれる事實が存在するのと同じ程度に惡靈の存在と云ふこともあるのでせう。

谷口――たとひそれはあるにしても第二義的の存在であつて『存在の實相』ではないのです。人間は蚤に食はれる、蚤に食はれたと信じてゐる。けれどそれは何時の間にか治

つてゐる。それは何故かと云ふと蚤に食はれたと云ふ事實は、神の創造りたまひし「存在の實相」でないから、やがては朽ち消えるべき運命をもつてゐるからです。心靈現象を吾々が研究するのはそれが五官に感じられない靈的實在が儼存すると云ふ眞理への入門となり、吾々の生命の本質は不滅のものであつて、蚤に食はれたり、外力で傷けられたりするものではない金剛身、不可壞身であると云ふことを自覺し、無畏無恐怖の狀態に入るためにするのでなければなりません。それだのに、心靈現象を研究したがために心靈現象に捉へられて、恐怖すべき世界が吾々にとつて殖えて來る――幽靈の世界や惡靈の世界が殖えて來る――と云ふことになると、結局吾々は何の爲に心靈現象を研究したか譯がわからなくなるのです。抑々心靈研究家が靈魂は寫眞にとれる、暗室で机を浮揚さすことが出來る、こんな物質的な働きも、あんな物質的な働きも出來ると云つて、靈魂と云ふものを五官の世界へ持ち下げてくるのは、一度無形のものを有形の世界へもつて來て、その實在を證據だてるためであつて、靈魂とは物質に類似したものだと云ふ結論を下すためではあつてはならないのです。有形の世界へ靈を引下げて來て、その實在を證明した以上はもう一度それを無形の生命の世界へ持ち上げて行き、この形と云ふ

ものは本當の自分ではない、もつと金剛不壞な自由自在な生命が本來の自分であると云ふ眞理に到達して、一切の恐怖を遠離した狀態になるものこそ本當の行き方ですね。

心靈現象研究は靈界入門の鍵

三枝――天行居の友清さんが何時か旨いことを云つてゐました。心靈現象と云ふものは吾々が靈界に入門するための鍵である。その鍵によつて靈界の門に這入つた以上は鍵は捨てゝ了つてズンズン靈界の奥へ進んで行かなければならぬ。何時までも色々の心靈現象ばかりを漁つて歩いてゐる人は、鍵ばつかり穿鑿してゐて、門の入口にゐて中へ這入つて行かない人だと斯う云ふ論法です。

心靈現象を踏臺にして生命の本質の世界へ躍入せよ

谷口――成る程それは一理ありますね。兎かく心靈現象研究家は、その心靈現象と云ふ奇術的な異常現象に興味があつて、あの心靈現象は斯う、この心靈現象は斯うと現象そのものに興味をもつてゐて、概ねその現象より一歩奥深く突き進んで生命の本質への世界へ這入つて行かない憾みがあります。ちやうど、今あなたが被仰つた鍵の例をとつて見れば、いつまでも鍵の形に興味を有つてゐて、斯う云ふ形の鍵もあれば、斯う云ふ形の鍵もあると云ふやうに鍵の形ばかり研究してゐて、生命の本質の寶庫へ這入つて行かないやうなものですなあ。

三枝――ところで、一時私は熱中しました心霊写眞のとれる東京の佐久間先生の熱心な信者として佐久間先生の神懸りの神示を筆記したりしてゐましたが、その時代が済むと鞍馬山の毘沙門さまに帰依しまして、一時修験者のやうな者を家に引張り込んだりしてゐましたが、そのうちに私自身が神懸りになりました。耳に何か神託を聞かせたり、私の口から神託らしいものを喋つたりしまして三ケ月と云ふものは夜の目も碌に眠らせて呉れないので、苦しくて苦しくてこれは神懸りで自分は殺されるのではないかと思ひました。三ケ月ばかりしますと、その神が『大分肉體を傷めたやうだから癒して置いてから離れる』と云はれましたが、それから次第に神懸りの發作が少くなり、今では積極的に神の方から神懸りしてくると云ふことはありませんが、精神統一をして神懸りのしやすいやうな狀態を作ると、すぐ、その神が懸つてまゐります。三年程前にも、その神が懸つて來て、今度は前のやうな激しい狀態ではなく、靜かに自働書記を始めました。ひとりでにスラ〳〵手が動いて思ひもかけない教が書かれてゐたりするのです。中には一寸善い教へも書いてあります。但馬の地震の時には一年前から豫言しました、それはたゞ一日だけ日が違つたゞけで的中しました。善い教へを時々聞かせて呉れたり、豫言も

當つたりしましたが、結局その神はそんなに高い靈でないと云ふことが判つてまゐりました。神みづから自分は或る階級の靈であつて高い神ではないと或るとき不圖云はれました。そして今後靜座や精神統一と云ふやうな種類のものには一切關係するな、お前の身體は靈媒となるのに都合が善いので、さう云ふ修行をしてゐると低級な惡靈が色々とお前にかゝつて來て災ひを起すことになると云ひました。それで私は『神想觀』の修行もやりたいけれども、精神統一をすると、すぐ以前の其の靈がかゝつて來て『神想觀』の修行の邪魔をするのです。

谷口――貴方の被仰る精神統一とはどう云ふ意味ですか、無我になると云ふことですか。

三枝――さうです、無念無想になるのですな。

四、神想觀と精神統一

神想觀は無想觀に非ず

谷口――『神想觀』の精神統一は無念無想になるのとは異ふのです。普通精神統一は無念無想になるやうに云ひますけれども、『神想觀』は『無想觀』ぢやないのです。ひたすら精神をあつめて神なる自己の本質を想ふのです。ボカンとしたり、ボンヤリして意識が

傀儡となるのとは異ふのです。無念になり無想になり、自分で自己を支配する權利を抛棄してしまふから、他から來る靈波に支配せられるのです。『神想觀』はそれとは全く異つて自己の全意識を完全に自個の支配の下に置くのです。意識を明瞭にして一つのことに精神を集中してゐたら低級な靈にかゝられると云ふことは斷じてありません。

三枝——それはさうかも知れません。神懸りで苦しんでゐた最中ですら、會社の仕事に精神を集中してゐる最中は神懸りもなく滿足に仕事をやつて行けましたから。

谷口——つまり貴方が仕事に意識を集中してゐられて、所謂無念無想でポカンとしてはゐられないときには精神に虚がないからどんな他の靈にも乘じられないのです。

三枝——さうでせうな。私は神懸りの發作が息んでしまつた後に一度熱病にかゝつたことがありましたが、私が高熱で心がボンヤリしてゐるために、例の靈が私を襲つて來るのが私にわかりました。

谷口——『神想觀』と云ふのは心を集めて『生命の實相』を想ふことですから、必ずしも靜座せねばならぬと云ふこともないのです。『生長の家』を讀むだけでも感激に滿ちてそれに書いてある神の子としての自己生命の實相がピッタリと心に自覺出來れば好いの

です。『生長の家』を讀むだけで病氣が治るなどの例があるのは其の爲めであります。

釋迦は菩提樹下で靜座してゐる間中、惡魔波旬に襲はれてゐた。所が、尼連禪河で沐浴して心がサツパリした刹那、『何ぢや「生命」はどんな行もしないでも、このまゝで完全ぢやないか』と自己の『生命の實相』――神性が自覺出來た。すると惡魔波旬は逃げてしまつた。こゝが肝腎ですね。貴方のやうに、靜座式のものをすると、直ぐ、常に憑りつけの靈が憑つて來て『神想觀』の出來にくいと云ふのは、靈がまた憑つてくるであらうと云ふ豫想や恐怖があるためにさうなるのですから、さう云ふ人は、釋迦が菩提樹下の靜座を捨てゝ、沐浴一番、自己の『生命の實相』を自覺した例に倣ふべきですなあ。釋然と自己の『生命の實相』さへ自覺れるなら、その方法はどれでも好い譯でせう。常に聖典『生命の實相』を讀むことを怠らず、我慾を捨てゝ他の爲めに働いて働いて生活全體が捧げ切つたものとなられるとき自分と全世界とが一體だと云ふ『生命の實相』がわかつて來ます。これが一等穩健な自己の神性の自覺の仕方ですなあ。

五、祖靈祭祀の形式

安藤――私は明道會の神樣をお迎へしてお祭りしてあつたけれども、今では明道會が信じ

られなくなつたのは先刻申しました通りです。ところが、自分の祖先の靈を日道會で招魂してお宮に祭つて私方へ送つて貰ふまでになつてゐましたが、信じられない所で祭つて貰つた祖先奉齋のお宮を祭るのも變なものですから、もう私方へ送らないで置いて呉れるやうに二三日前に手紙を遣つたところです。それで承りたいのは祖先と云ふものは實際如何なる形式で祭るのが本當だらうかと云ふことです。

悟つた靈魂には墓は要らぬ

谷口――第一義的には人間の靈は神の子である。神の子はそれ自身で完たい。外から何物かを附け加へて貰ふことによつて始めて完全になるやうなものではない――これが第一義的眞理なのです。神の子たる人間の靈が外からお宮を附け加へて貰はないと生活に困るやうではそれは迷ひに捉はれてゐるのです。お宮を建てゝ貰はねば生活に都合が惡いとか、お堂を建てゝ貰はねば生活に都合が惡いとか云ふのでは、その靈は神性の自覺が足りないのです。それで、神性を自覺した靈にとつてはどんな形式によつて、祭つて貰ふ必要はないのです。今井楳軒翁の話に翁は關東大震災で東京にあつた先祖の墓が破壞されてから其儘にほつて置かれたが氣にかゝるものだから靈媒に自分の父の靈を招喚して『墓を造らうと思ふが、どうしませう』とお聞きになつた。すると父の靈は『そんなもの

は造るに及ばぬ。靈に墓は要らぬ。肉體の人間界では人口が殖えて土地が狹うて困つてゐるのに、墓のやうな不生産的なもので土地をふさいでしまふことは要らぬ』と仰せられた。そこで今井楳軒氏は『さうでは御座いませうが、子として祖先を祭らないでは氣が相濟みませぬ』と申上げた。すると父の靈は『さうか、それなら造つても可いが、それは人間が自己の愛敬の情をあらはすためにすることで、靈からそれを求めるのではない』と仰せられたと云ふことです。この實例でも判ります通り、神性を自覺した靈にとつては物質で拵へたお宮や墓やお堂は不要なのです。

安藤――だけど、多くの祖先の靈の中には今井翁の父の靈のやうなサトリの境地に達してゐない靈魂もあることでせう。さう云ふ靈魂はやはりお宮や墓が要るのではありませんか。

祖先一般に對する道

谷口――第二義的にはさうなつて來るのです。『食を欲するものには食を與へ、藥を欲するものには藥を與へ』と云ふやうに、宮を欲するものには宮を與へ、佛壇を欲するものには佛壇を與へてこれに供養して誠をつくすと云ふことが、之が祖先に對する道となつて來るのです。川面凡兒先生が神道の大家でありながら、母が生前に佛式で祭つてくれ

と云はれたから佛式で祭ることにせられたのは、川面凡兒先生が眞理を知つてゐられたからでありませう。迷ひのない神性を自覺した靈魂ならば祭つて貰はうとは思はれないが、祭つて貰ひたいと思ふ靈魂ならば、どう云ふ形式で祭つて貰ひたいと云ふ生前の希望や執着がある、そこでその希望を滿たしながら徐々に本當の悟りに導いてあげるために祭祀に一定の形式をとることになるのです。それで『生長の家』では祖先を祭るには祖先の信じた宗教的形式を傷けずに存すると云ふことになつてゐます。

子孫が祖先と異る宗教を信じた場合の祭祀の形式

安藤――子孫が祖先の有つた宗教と同じ宗教でなくなつた場合にはどうなるでせうか？私の祖先は曹洞宗だつたのですが私は曹洞宗はきらひなんです。現在の境地としては日蓮主義に心をひかれてゐます。祖先を祭るにも出來るならば日蓮宗で祭ると自分の氣持とピツタリすると思ひます。

谷口――曹洞宗の悟りも日蓮宗の悟りも結局は同じ事です。曹洞宗の悟りは結局『實相』を把握するところにあるのでせう。日蓮宗の根本は吾が生命を妙法蓮華經の『妙』と云ふ大實在に歸するところにあるのでせう。吾が生命は『妙』と一體である。靈妙不可思議な自由自在なものこそ吾が生命である。日蓮宗の『妙』と云ふものが、祖靈自身の生

命の上に把握されたら『生長の家』で云ふ『神の子たる生命の實相』が把握されることになるので、誰にどんな形式で祭つて貰ふ必要もなくなるのです。或る一定の形式で祭つて貰はねば遣り切れないと云ふやうでは自由自在な吾が『生命の實相』が把握された譯ではないのです。併し人間は皆が皆までその境地のサトリに達してゐる譯でない、完全なサトリは圓相であるけれども完全でないサトリは何處かに片寄りがある、その偏寄が流派となり宗派となつて現れるのです。この偏寄がある限り、靈魂になつても一つの宗派をもつてゐる、靈魂も吾々同樣一個の人格であるから、生前にもつてゐた宗派を死後の悟りの程度によつて改宗することもあります。子孫が切實に一つの他の宗教に改宗したい內的要求に驅られる場合には、祖先の靈魂の思念が子孫に感應して來てゐる場合も多いのです。さう云ふ場合には貴方の內的要求にピツタリする宗派の形式でお祭りしてあげれば宜しいが、貴方が曹洞宗が嫌ひで日蓮宗が好きだと云つてゐられる間はまだ信仰に偏寄があると思ひます。

岩村――私はキリスト教でありますから、今迄キリストの聖名を通してのみ祈つて來ました。ところが神想觀を實修しようとしますと、招神歌のなかに『生長の家大神、護りま

せ』と云ふ言葉があるので、ちよつと心の中で矛盾を感じて困つたのであります。キリストは『人格の神』である。いつもその『人格の神』に賴んで置きながら又別の『人格の神』に賴むと云ふことになると人間で云ふならば何だか不人情だと云ふ感じがするのですね。

谷口――それではキリストの名に於て神想觀をおやりになつたら好いぢやありませんか。一寸も構ひません。

岩村――さう大きく出られますと安心します。けれども、今度生長の家の神さまが人類光明化運動を起すためにお顯れになり、特に神想觀を指導せられると云ふことですと、その神想觀の指導だけは生長の家の神さまにお願ひしなければならぬやうな氣持がするので、私は『キリスト及び生長の家の神、護りたまへ』と云つて神想觀を實修しました。しかし矢張り心の中では幾分ピツタリしないものを感ずるのでございます。

谷口――生長の家の神さまを祈るのと、キリストを禮拜するのと心のうちに矛盾をお感じになるのは、神に關する考へ方に偏寄りがあるからです。個人の人間靈は別として、救ひの神は一つだと云ふことが本當に自覺出來てゐないからです。神はイスラエルだけの

キリストの神と生長の家の神

神ではない、日本だけの神でもない、キリストが出て來られない前にも人類は救はれたのである。それ迄は人間を救はずに放つて置くやうな神ならば本當の神ではない、イエスのまだ生れない以前や、イエスの名の及ばない世界のどんな僻鄙にさへも救ひの手のとどいてゐる神であつてこそ、本當の神である。あらゆる空間とあらゆる時間とを包容して救つて下さるものこそ本當の神である。神の方は一つであるけれども、地上の人間の方は、國々及び時代によつて習慣や風俗や思想に色々變化がある。そのために、神はその各種各樣な人間が救ひを受け入れるために時代及び國々によつて色々異ふ神となつてあらはれなければならぬのです。舊約時代の神とキリストの神とは大いに變つてゐる。これは神が進化したゝめではなく、人間が進化したゝめに神がそれに相應しい姿で顯れられたのである。時代が變つて來て今迄の宗教では迷信臭くて入れぬと云ふ人のために同じ一つの神ではあるけれども顯現を異にしてお顯れになつたのが『生長の家の神』であります。キリストの神と『生長の家の神』とが互ひに相容れないやうにお考へになるのは、キリストの神を全包容的な神とお考へにならないで、他の神と對立的に存在するやうな小さな神だとお考へになつてゐる傾きがあるからです。全包容的な神なら

生長の家の神は全包容的の神

ば、自己のうちにすべての神佛を包容して少しも矛盾を感じない神でなければならぬ。生長の家の神さまは、どの神を拜んではならぬとは仰せられない。どの神も同體であるから、どの神を通して拜んでも可いと仰せられてゐます。排他的な神は、本當の神でなくて、執着をもつた人靈の顯現であるか、さうでなければ本當の神をば信者が勝手に人間的に解釋して、人間同樣排他的に傳へるのです。此の點に於てキリストの神の眞髓を傳へてゐるのは『生長の家』です。此の點に於て佛教の本當の眞髓を傳へてゐるのは『生長の家』です。一切包容のすべての宗教の眞髓をつたへるために靈界に顯れられた一個の天使が――言ひ換へると一つの救ひの靈波が――生長の家大神であるとすると、キリストの聖名と一緒に生長の家大神の聖名を稱へても一向矛盾を感じないのは當然ではありませんか。

井上――私は觀世音や阿彌陀の佛像の前で『生長の家』の歌をとなへても少しも矛盾を感じません。

谷口――本當の眞理は皆な一體と云ふところにあるのです。人間も形の上では個人々々別々に分れてゐるけれども『皆な一體』と云ふ眞理がわかれば爭ひが無くなるのです。國

家も『皆な一體』と云ふ眞理がわかれば戰爭の必要も軍備の必要もなくなるのです。宗教も神々も『皆な一體』だと云ふことがわかれば、宗教上の爭ひが無くなるのです。ユダヤの神、印度の神、日本の神と區別して、彼の國の神は邪神だなどゝ云つてゐるのでは斯くの如き信仰を奉じてゐる人が如何に迷ひに捉はれてゐるかを暴露してゐるのです。全包容的な神の前には邪神として其の神に對立し得るものはないのです。皆な一體——神も一體、宗教も一體、人間も一體、國家も一つ、別れてゐるのは迷ひであると云ふのが『生長の家』の根本的教へになつてゐるのです。

六、業の淨め方を語る

水田——私は今まで神さまと云ふものは近付き難いほど尊い高いところにゐられる方で、どんなに人間が努力してもなか〳〵神樣のところへ近付けないやうに思つてゐました。それに色々の宗教で云ふ神さまとか佛樣とは云はれる方が、みんな別々のやうでありまして、宗派ちがひの神樣を、拜んではならないと云ふやうに說かれる宗教家が多い。まるで神樣と云ふものが一つの宗教に立て籠つてゐて排他的に爭つてゐるやうなんです。そこに非常に矛盾を感じて苦しんでをつたのであります。ところが『生長の家』を讀む

神は吾がうちに在る

と神様はもとは一つと云ふことが書いてある。そして千變萬化せられて境に從ひ人に從うて救うて行きなさるために色々の宗教、色々の神に顯はれておいでになると云ふ事が判つた。それで今までのやうな排他的な神さまの間に挾まつて苦しむと云ふことがなくなつたのであります。それに難有いことには、今迄神樣は遠いところにあるとばかり思つてゐたが、神樣は吾がうちにある、神さま！　と一念を起せば、そのまゝに通じ、神が我がうちに生きて來る。それは丁度ラヂオのスヰッチを一つ押せば東京の放送でも直ぐ自分の內に來て響をたてると同じやうなものであることを悟らせて頂いて非常に難有く、常住座臥つねに神と偕にある難有さを感じさせて頂いてこんな結構なことはないのであります。もとから、私は胃腸が常に弱くて色々の藥を試みましたが効かず、最近〇〇〇と云ふ大蒜製劑を用ひましたが一層惡くなるばかりでした。最近も下痢してゐまして、一旦下痢をすると平常は半月位は止らないで非常に身體が衰弱するのでしたが、今度『生長の家』を始めて讀まして頂きましたところ、下痢をするのは病菌を排泄する作用だから自然の自療作用に委せよと云ふ事が書いてありましたので、成る程さうだ、これは善いことをきいたと氣がつきまして藥をやめまして自然の生命力にまかせる氣に

心の悟りで下痢が止る

なりました。すると、その日尚二回きれいに下痢しまして、あとは、スツカリ止まつてしまひました。そのあとのお腹の氣持の好いこと！　それ以來すつかり多年の胃腸の宿痾が治つて了ひました。それから支部の先生をお訪ね致しまして色々お話を承り御指導を頂いたのであります。其の時、十二歳になる孫が夜尿で醫者にかけても治らず困つてゐますと申上げますと、伴れて來て見よ治してあげると云はれるので、伴れて往つてお世話になつたのでありますが、言葉の力位で治るものかと實は幾分疑つてゐたのでありますが、支部の先生に三回思念して頂きましたがそれ以來孫は夜尿はなくなりました。前には眠りについてから一時間半位には起して便所へやるのですが、それでも、もう縮尻つてゐることが多かつたのです。思念して頂いてから、夜中に起して便所へ行かせては治つたのか治らないのか判らないので、試みに近頃はほつて置きますが、尿を催したら勝手に目を覺まして便所へ行くやうになりました。まことに難有いことであります。

七、人は老衰するか

人は老衰するか

牧本――私は病氣はないと云ふことが判りましたが、老衰と云ふことはあることでせう

か、ないことでせうか。老父が『もうこんなに年をとつたらあかん』と云ふものですから老父に說明してやるのに困つてゐるのです。

谷口――『迷ひの世界』では老衰はあり、『實相の世界』では老衰はないと云ふことになります。老衰と云ふものは歲をとれば弱ると云ふ念の遺傳的な集積でありますから、この集積を解消して了はない限り老衰するのであります。だから『人間は神の子であるからその生命は無限であり、生命無限の人間は年をとつても老衰するものではない』と云ふ反對の念を強く主張して『年をとれば老衰する』と云ふ遺傳的觀念を中和するやうにすれば次第に老衰しなくなるものです。

野田――老父さんに人間が本來老衰しないものであることをお話しになるには『生命の實相』の中の參考篇にある、失戀して狂氣して、自分の年齡を忘れてしまつたゝめに、それ以來その人の肉體はいつまでも二十歲の容貌をしてゐて、七十歲になつて尙妙齡の婦人と肉體的には同じことだつたと云ふ實例をお話しになつてあげると好いでせう。

谷口――このやうに『もう自分は何歲だ』と思ふ念がなくなつたら年をとらなくなるのです。だから、もう自分は何歲だと思はぬやうにして、茲に自分が今生れてゐる――その

生れてもつてゐる力を働かすやうにしてゐれば、何時までも若い精力が湧いて來るのです。本來吾々の肉體の細胞は念の影でありますから常に生れ滅して更新してゐます。吾々の肉體は學者の說によつて多少の相違はありますが、八年ほどすると全體が新しい細胞にかはつて了ふ、人間の肉體のうちに八歲よりも年寄つた細胞はないのに、自分の年齡は八歲だとは思はないで、六十歲だとか、七十歲だとか思ふ。その思ひが肉體にあらはれて八歲以下の肉體は六十歲のやうに皺を寄せ、力を弱らせてゐるのですから、第一は年齡の觀念をとり去ること、次には愛すること、生命は『愛』ですから怒りのない愛を生かすやうにすれば人間は若返ります。之に反して何物をも愛しなくなれば人間は老衰するものです、人間でも動物でも植物でも愛する實をあらはさねばなりません。それから、生命の本然のすがたは『動』ですから、働くと云ふことが若返る一つの要素になるのであります。仕事を愛すると云ふこと——これは愛と働きとを兼ねてゐて非常に結構なことであります。

愛の心は人間を若返らせる

水田——私は印判の彫刻師でありますが、もう八年も前から自分で彫刻することを止めて、仕事は全部店の者に委せてあつたのですが、『生長の家』を讀んで悟らせて頂きまして、

また近頃自身の手で印判の彫刻を始めました。やればやれるもので、最初はちよつと彫刻刀が思ふやうに動き難かつたものですが、それも段々元々通り自由に動けるやうになつて、仕事にも面白味も加はり、こんな結構なことはないとお禮を申したいと思つてゐたのであります。

谷口――それは結構なことでありますなあ。謂はゞ八年前にお若返りなすつた譯ですなあ。

野田――それは水田さんは實に好いお庇をお頂きになつた。病氣は治る、若返る、仕事が樂しめる。さう云ふ技術商賣の方では主人が仕事がお出來にならぬと本當に職人が働かないものです。床屋さんでも雇ひ職でも出來るが、主人が時々その水際だつた手腕を働かせて見せないと本當に働いてくれないさうですね。

水田――私は出來るだけたび〳〵かう云ふ會に寄せて頂いて、神樣や、自分の本質の生命を深く考へさせて頂くと云ふことは非常に結構なことであり、生命の若返りにもなると思ひます。平常は自分の生命は『神の子だ』と云ふことなど考へなかつたものですが、かう云ふ會合に寄せて頂くと、それがハツキリ判らせて頂けるやうに思ひます。

河本――まつたく心の洗濯でございますなあ。

野田――私はいつも人に話して云ふのです――『貴方は月に幾度も入浴して身體をお洗ひになるでせう、さうしたら心もたび／＼入浴してお洗ひにならないと垢がたまります』かう申しますと、中には私の云ふ意味がどう云ふ意味だか判らないで怪訝な顔をなさる人もありますが、第一、心の洗濯をするとは、常に自ら反省して此れにはニセ物の自分である、此れは本物の自分であるとよく批判して、ニセ物の自分の心の働きを捨て去り捨て去りすることです。又、斯う云ふ道の話の會にたび／＼出ることも、『生長の家』や『生命の實相』を讀むことも皆な心の洗濯であります。本が讀めない人はどうしたら好いかと云ひますると、一種の『神想觀』を勸めます。即ち、何んでも自分の信ずる神佛の前で毎日一回は必ず坐つて目をつぶつて手を合はせて『南無阿彌陀佛』でも『南無妙法蓮華經』でも好い、靜かにとなへながら、神樣なり佛樣なりが、今自分の業を淨めて下さると思つて、一回三十分位心をそれに一心に統一してゐなさいと申します。

村上――私は時間がなくて『神想觀』をしたいと思つても出來ないことが多いのです。

野田――私は電車で往復する車中で『神想觀』をやります。目的地へ着くまでは誰も私を騷がせないと定つてゐますから落付いて精神統一が出來ます。私自身の經驗から云へば

朝は今から仕事が始まると云ふ氣がするので氣ぜはしくて精神統一がしにくいやうです。どんなに眠くても夜必ずやるやうになさると可いと思ひます。

谷口――眠りしなに十五分間『神想觀』をなさつたら、その眠りが深くなつて數時間睡眠時間が助かりますから、忙がしくて睡眠時間の足りないやうな時ほど却つて神想觀をすべきものでありますのに、忙がしいから出來ないと被仰る方は睡眠時間と云ふものに捉はれてお出でになるからです。睡眠時間の多いこと必ずしも健康に良いとは云へない。少眠健康法と云ふのすらあります。

林野――私は電氣局につとめてゐるものですが、車輛の故障や線路の故障で二晝夜位不眠でぶつ通して現場の監督をしなければならないことがあります。さう云ふ時には翌朝家へ歸つてくると御飯が一日中殆ど食べられないで身體の衰弱を感ずるのが常でしたが『生長の家』を讀ませて頂くやうになつて以來、翌朝の御飯も當り前に食べられるし、身體も元氣で少しも衰弱しなくなりました。此の體驗によりましても睡眠不足で身體が弱るのは、睡眠不足そのものゝためでなく睡眠不足すれば身體が衰弱すると云ふ迷ひの念によることが判ります。それにもう一つお庇を頂きましたのは夏痩せをしなくなつた

不眠でも疲れなくなる

夏痩せしなくなる

ことです。夏になると極つて一貫目位は體重が減ずるのでしたが、それが無くなりました、實に不思議です。

谷口――貴方のやうな御達者な方はほかの事でなら兎に角、健康上では別にお庇を附け加へて頂く必要のない方だと思つてゐましたが、そんな結構なお庇をお頂きになつたと云ふことを聞いて『眞理』の力――一面から見れば生長の家の神樣のお導きと云ふものは非常に汎い全體的な、小さい所にも餘す所のない救ひを與へ給ふものであることが判るのであります。

八、反省の仕方

林野――今野田さんの被仰つた心の洗濯の一方法のうちに自己を常に反省すると云ふことがありましたが、これは『本物の自分』が働いてゐるのである。これは『ニセ物の自分』が發動してゐるのであると云ふことはどうしたら判るのでございませうか。

ニセ物と本物の自分の鑑別

野田――ニセ物の自分の働きであると云ふことは、その働きが『小我』から出てゐる、小我の小さな利害關係で起つてゐると云ふことでわかります。小我から出てゐる働きには朗かな魂の歡びが伴はない、全體が連絡した働きでないからどこか不安なコセ〲した

苛々したところがある、本物の自分は大我即ち『全體としての我』から出るものですから全體的に調和した感じを受け、自己の魂が平和な朗らかな伸び伸びした生長の感じを味はへるので判ります。

山瀬――先生がたのやうになられますと常に朗かな『本當の自分』ばかりが生きると云ふ風にまゐることでありませう。

野田――常にさう云ふ風になれた方は古今を通じて釋迦、基督位なものでありませう。釋迦基督でさへも常にさう云ふ境地にあられたかどうかは疑問です。私にしましてもかう云ふ席上に於て、少しも自分の利害と云ふ考へを思はず、ひとのために吾が身をさゝげ、他の喜びの上に自分の喜びを融かし込んでゐますときには『本當の自分』が伸び伸びと流露してゐて非常に氣持が好いのであります。私共が一言話したことが悟りの原因になつて皆さんが心の悩みから解脱されたり、長い間の病ひから癒やされる――自分を通じての働きが他を生かしてゐると云ふ事實が非常にハツキリしてゐますので、そこに生き甲斐が感じられ、自分ならぬ自分――一層大きな自分――本當の自分が生きてゐることの自覺が非常に明瞭なので嬉しいのでありますが、どうも自宅にゐますときにはさう云

ふ譯に行きにくい、一家の利害關係と云ふものが紛糾つて來易いのでありまして、さう云ふ時には『過去』に於て同樣の利害關係のあつた場合に作爲した業が流轉して來て腹の立つこともあり、苛々することもあり、心が亂れることもあります。私は自らこの惱みを反省しまして、かう云ふ『業』の流轉から是非とも超越するやうになりたいと常に苦心してゐるのであります。

谷口――吾々が或る念を起しますと、その念が集積し潜在してゐて、次の念を起す原動力になつてゐます。それは丁度時計のゼンマイのやうなものであつて、過去にゼンマイを卷いてあるので現在時計が動き出すのであります。時計の針が廻つて或時間が來ると時報が鳴るのはこのゼンマイのもどけるためでありますやうに、吾々が或る機會が來ると、心に或る波を起す、或は腹が立つたり悲しんだりする、これは過去にゼンマイを卷いてあつた念の力即ち『業』がもどけて來るために、目覺まし時計の鐘の鳴るやうなものであります。だからゼンマイが戻けて色々の音が鳴り出さなければゼンマイの業はとれないのであります。この色々の音を出す、怒りとか悲しみとか色々の音を吾々が出すのは、過去にそれに相應する業のゼンマイが卷かれてゐたからであります。だから吾々が怒り

業の催しは業の戻げる作用

反省以上の生活

とか悲しみとかの念を起すのは業のゼンマイがもどけるのでありますから此の意味に於て尊いのであります。時計でもゼンマイのもどける儘に放つて置けば二週間巻きの時計でも二週間すれば止つて了ふ。それと同じやうに吾々の業でももどければ止まるのであります。ところが大抵の人は業のもどける最中にまた巻き直す。だから、その悪い業の力がいつまでも消えないのであります。此の業のもどける最中に巻き直すと云ふのはどう云ふことをするかといひますと腹が立つてゐる最中『自分が腹が立つてゐる』と思つたり、『自分は腹を立てるやうな悪い者だ』と反省的に或は何の氣なしに思ふ、つまり自分の悪さを肯定して自分自身に自己暗示的に其の悪さを注入するからであります。普通、『自分は悪い者だ』と自己反省することが宗教的に或は道徳的に善いやうに思はれてゐますが、『自分は悪い者だ』と云ふ其の『自分』は無いのであります。悪い自分は無い。これが『生長の家』の根本的人間観であります。すべて人間は神の子でありますから、誰でも皆善いのであります。さうすると此の悪いのは誰が悪いのであるかと云ふと、自分が悪いのではない。過去の業がもどけてゐるに過ぎないのであります。言ひかへると業がもどけて業が滅しつゝあるのであります。だから眞理を知る人は、腹が立つたり色

「惡をする自分は無い」と知るのが最高の悟り

々の惡い念を起しても、『自分が惡い』とは思はないで、『これで業が滅しニセ物の自分が滅して本當の自分――圓滿完全な神の子たる自己の眞性が顯現しつゝある。今度からは斯う云ふ惡いことを思つたりしなくなる』と觀じて業の力がもどけて自壞するのにまかすのであります。かう觀ずることによつて吾々は再び惡業を繰返す業の催しの衝動の力を弱くするのであります。ポーロが『吾れみづからを審判かず』と云つてゐるのは斯う云ふ意味でありませう。『ニセ物の自分』即ち本來の神性に融合せぬ業は假相であるから、やがて自消する非存在であるから審判くに當らない。唯省みて捨て去れば好いのであります。本當の自分は神の子であるから、これまた審判くことは出來ないのであります。

河本――業の力がもどけて自壞してゐるのだと好い氣になつて惡い心に迎合すると更に惡い業を積むことになり、いつまでも業が消えないことになりませんか。

谷口――『惡をする自分』は無い、存在しないと知ると、その『無い自分』に迎合する考へもなくなるのです。酒を飲むのでも酒に支配される自分があると思つてその自分を押へようとするからその癖が止まないのですが、酒に支配されるやうな自分は無いと本當

本物の我と、ニセ物の我との區別

に悟れば酒に支配されなくなるのです。神想觀をして『酒に支配されるやうな自分はない。』とニセ物の自分を心に深く否定すれば酒に支配されなくなります。先刻『本當の自分』と『ニセ物の自分』とはどうして區別するかと云ふ御質問がありましたが、物質に支配される自分はニセ物の自分であり、物質を支配する自分が本物の自分であります。又自他一體の働きは本物の自分でありまして、本物の自分を生かす道は實に小さな日常の行ひの內にある。日常の些細な行ひの中に愛を生かす。この愛が神であつて、大事件ばかりを待つてゐると一生のうちに本當の自分を生かす機會が一度も來ないかも知れない。そして大きな仕事、目覺ましい仕事を望む心のうちには『ニセ物の自分』の虛榮心――他に打ち勝ちたい虛榮心が混りがちです。併し小さい事に『本當の自分』を生かすのだつたら今でも出來る。朝起きて顏を洗ふ、この洗つた水を如何に何處へ捨てるかと云ふやうなことにも愛があらはれる。こゝへ捨てたら澤山蟲が死んで可哀想であるとか、こゝに流したら植木が喜ぶであらうとか、この小さなことの中に『親切丁寧』を生かす。この『親切丁寧』を生かすことが『神』を生かすことであります。さればこそ金光教祖は『實意丁寧』と云ふことを第一の德として誰にも勸められたのであります。

九、『戰ひの哲學』と『戰ひ本來無しの哲學』

（昭和八年六月三日大阪の誌友塚田氏が金光教十三教會長高津榮三郎氏を伴つて『生長の家』本部へ來られた。その前月、一燈園の西田天香氏、『生』の高橋正雄氏などが大阪で落合はれたときに『生長の家』の話が出て、それ以來高津氏は一度谷口先生に會ひたいと云つてゐられたのである。）

谷口――貴方が高橋正雄さんの雜誌『生』で時々お名前の出る大阪十三教會の高津さんでいらつしやいますか。

高津――さうです、私が高津榮三郎と申します。

谷口――高橋正雄さんの信仰は大變善い境地まで這入つてをられる。『生き通しの生命』を摑んでゐられるやうですねえ。

高津――『生き通し』の生命を悟ることは最高第一義のことでありますが、私は近頃、肉體死後に於ける個性生命の存續と云ふことに興味を感じてゐます。貴方などは心靈研究の方は夙うに御卒業になつてゐられますが、私は一年半ばかり前から心靈現象の研究をやつてゐるので、時々は淺野さんの心靈科學研究會へも出入りします。

谷口――どう云ふ動機で心靈現象を御研究になることになりましたか。

高津――最初私は保健法として『生氣術』をやつてゐました。

谷口――靈動を起す石井少將の生氣術ですか。

高津――さうです。あれをやつてゐますうちに自働書記現象を起しまして教養のことなど書き始めました。そんなことで、阪急沿線に樫尾さんと云つて觀音さんが神憑りになる人がありますことを承り、其處へ往つて私の守護神を見て貰つたりしました。それから又一昨年父が死んだ後に中西靈媒に父の靈魂を呼び出して話して貰つて見たことがあります。

谷口――一昨年なら審神者は今井楳軒先生がおやりになつたでせう。

高津――さうです。最初の一回は今井楳軒先生の審神者だつたのですが、二回目は誰だか名前を知らぬ人でした。第一回に父の靈魂を招び出して貰ひましたが『今暗い處にゐる』と父の靈魂は云つてゐました。『どの位の暗さです』と云ふと『薄暗い夕方のやうな暗さだが、神樣が暫くこゝで休養してをれ、そのうちに明るい處へ出られるやうにしてやると云つてゐられる。』と云つてゐました。その『神樣』と云ふのは、今から考へると守護神の事を云つてゐたのだらうと思ひました。私は『お父さんは祈つてばかり來ら

れましたが、私は今も教への話ばかりをしてゐるが、それでよろしいか。』と尋ねますと、『お前はお前の性分、わしはわしの性分だから、それで好い』と申しました。『今、宅には××さんと××さんとを同居させてあげてゐますがそれも宜しいか。』とたづねますと、『それは結構なことぢやが、家の經濟はもてるか』と云ひましたところなど父の性格が出てゐると思ひました。それから後に小林靈媒に父の靈を招靈して貰ひましたが、今度は父は明るい所にゐると云ひました。その頃、名古屋の教會に金光教祖の靈が神懸りする人がありましたが、その人は『教祖の靈が物言はれると云ふのであるから自分では勿體なうて「研究」などと云ふことは出來ぬけれども、貴方が研究なさるのなら研究なさつて下さい』と云ふことでした。その人の所へ參りまして父の靈魂を呼び出して貰ひましたが、父は矢張り『明るい所にゐる』と申しました。『教祖樣のお側にゐて、皆のために祈らせて貰つてゐる。難有い嬉しい感じがしてゐる』と申すのです。『私の顏が見えますか』と尋ねますと『まだ眼が開かないから見えない』と申すのです。『それでは明るいと云ふことはどうして判るか』と尋ねますと、『眼を閉ぢてゐてもパーツと明るい感じがする』と申しました。それから後に安藤靈媒にまた父の靈を招靈して貰ひまし

たが父は今度は『矢張り晴い所にゐる』と申すので、靈媒の靈告と云ふものでは本當のことが判らないと失望しました。それに、招靈して憑つて來た靈に名前を尋ねますと、自分では少しも名前を云はないで、こちらから『誰々さんですか。』と云ふと頷くのです。最初から此の點では疑問を挾んでゐたのですが『現在の靈媒は普通、固有名詞は云はないと云ふ事になつてゐる』と聞いて『それなら止むを得ない』と思ひました。一度、龜井靈媒で空中談話で招靈して見たことがありましたが、此の時は龜井靈媒としては惡い成績だつたさうですが、私にしては好い成績で固有名詞を云ひました。それから人間には皆、守護神と云ふものが憑いてゐると云ふことですので、それを調べたいと思ひまして、數名の靈媒によつて調べましたが、いづれの云ふ所もそれは鎌倉時代の武士であつて、神道と佛教とを研究してゐたものであるが、金光教は神道にも佛教にも當りさはりのない宗教なので、私の肉體について數年前から修行してゐると云ふのでした。樫尾さんは私の守護神は鎌倉時代の武士ではない鄕士のやうに見えると云ひましたがこれは大同小異でありました。

軍備は取越し苦勞か

塚田――（話を轉じて）軍備と云ふことも取越苦勞であるから廢すべきであるとの說があり

ますが、どうお考へでございませうか。

谷口――軍備が惡いとか善いとか、そんなことは議論の問題ではありません。向ふから石が飛んで來ると、吾々は手をあげてそれを拂ひのけやうと云ふ働きが起つて來る、これが軍備であつて、それは自然に起るのであるから、善いとか惡いとか議論の問題ではありません。無論、實相の完全な相が現象界に投影した理想的な狀態では、向ふから石が飛んで來ないやうになることが本當でありますが今迄の世界が本物でなくて、歪んでゐるのですから、その歪んでゐる狀態が平かになる時には、搖り直しの震動が起る、戰爭はその搖り直しであり、軍備はその搖り直しに自然に備へる生命の働きである。さうしたことは自然の過程として當然起るやうになつてゐるのですから、豫めそれが起る事も豫言すら出來る、それは自然のプロセスであるから善いとか惡いとか云ふのが間違つてゐる。吾々の肉體にして見ましても何か惡いものをたべれば、それを排泄するために下痢するとか嘔吐するとか云ふ現象が起る、惡いものをたべないのは理想的だが、もし食べてしまつたものなら仕方がない、それに對抗し排泄するために嘔吐とか下痢とかが起らなければならない、それは不自然を自然に直すための過程である。だから嘔吐と云ふ毒

物作用に對する反抗作用や、下痢と云ふ毒物に對する排泄作用が起ると云ふことを善だとか惡だとか云ふことは出來ない、それは斯くあるべくして起つてゐる自然の直す作用で、それは善惡の人間批判を超越して、たゞ『ありの儘』にそれを受け認めれば宜しいのです。

塚田――石が飛んで來るのを手で拂ひのけ、毒物に對して嘔吐で對抗することは、自然の直す作用であるとすると、病氣で痛いときに麻醉藥を用ひたり、何か外的故障が起つたときに外科手術をしたり人間が自然にしたくなることも自然の直す作用ではないでせうか。廣い意味で軍備と云ふ外的防禦手段を認めることは、肉體の軍備として外的防禦手段を講ずると云ふことも、また是認さるべきことではないでせうか。

谷口――『生長の家』では無論『醫療』全部を排斥するのではありません。たゞ現在の『醫療』はまだ幼稚であつて往々にして自然の治す働きを邪魔してゐるから、その儘では承認しがたい點もあると云ふだけです。石が外部から飛んで來るのを拂ひのけると同じやうに、外から來た負傷は、棘が入つたならそれを拔き、大きな切傷が出來たら外部から縫ひ附けるのは宜しい。外部にはさう云ふ外的仕事をするために外部的な手が與へ

外傷は外科治療もよいが、外傷を受けぬのが生命の實相である

られてゐるので、それに從ふことは自然に從ふことなのです。內部には外部的な手が屆かないやうにしてあるから目に見えない自然療能と云ふ內部的な手が其處に造つてあるのです。だからそれにまかすことは、最も自然な處置だと云はなければならないのです。下手に處方された對症療法的な內服藥や、注射藥は此の內部的な『眼に見えない手』の自然療能を攪亂するやうな外來力として働く場合があるので贊成出來ないのです。此れは既に病氣が起つたり、外傷が出來たりしてからの處置でありますが、根本的に云へば凡ゆる對症療法は軍備でも、外科手術でも、內服藥でも、すべて自分を侵略する不調和なものが此の世に存在すると云ふ假相の迷ひから出發して用意し準備し處置するのです。だから、その手段は是認されるけれども、實相の上で是認されるのではなく假相の上で認められるのです。此の世に自分を侵略する不調和なものは斷然存在しないと云ふ『實相』を確信出來るやうになりますと、戰場にゐてさへも、彈丸を拂ひのける動作をしなくとも上海の久保田儀藏君の樣に彈丸が當らなくなつたり、山伏の辨圓につけ覘はれても、どうしても途が行き違ひになつて惡者から害されなかつた親鸞聖人のやうになれるのです。無論毒物などは口から入らなくなるのです。山伏の辨圓から斬り付けられ

てから斬り結んで助かると云ふのは第二の善です。彈丸が當つてから外科治療を受けるのは第二の善です。實相を悟つた上での善はそんな不調和な狀態が起つてから防禦するやうなのではなく、さう云ふ不調和な狀態が全然起らなくなるので、それが最上の善なのです。形は心の影であり、心と云ふものは何も此の肉體の內部だけにあるものではなく肉體の外部にも作用するものであると云ふことが解れば、心の悟りが外部に反映して、外部的な環境や、境遇もまた調和したものになるのは當然だと解る筈です。

高津――私は國と國との戰爭と云ふものや、個人と個人との間の爭ひと云ふものなどを不調和なものとは認めないのです。それを不調和と認めるのは戰ひの『實相』を見ないからです。『戰ひ』の實相を見詰めると、其處には『生命の眞理』があるのです。個體生命はその個體を守る働きとして、自己の養ひとなるところのものを引寄せ、自己の養ひとならぬものを反撥し、自分の個性を侵害しようとする者に、攻擊を與へようとする本性がある、かくの如き本性あるが故に、生命は相戰ひ、生命は相戰ふが故に、今日の如く進步したのであつて『戰ひ』と云ふものは非常に結構なものであつて、全實在の上から調和したものである。『戰ひ』と云ふものを不調和と思ふことは眞理を知らないもの

であるから、生命の眞理を知らしてやれば、人間は互ひに戰ひ合ひながらも、嚙み合ひながらも、啀み合ひながらも、心は惱まずにゐられるのです。戰爭でも強い國が大きく伸びようと思つて隣國を侵略したとてそれは個體が生長する働きだから何も惡いことはない、併合されたと云つても何もその國がなくなるものではない。一國の生命が、位置をかへてまた生きることになるから、それでもまた差支へがない、また併合されたくないと思つて爭ふのもそれは個體を守る生命の働きであるから、それも惡いことはない、其處に爭ひがあり戰ひがあり、戰ひがあるから進步がある。だから戰爭もそれでよろしいし、强食弱肉もそれでよろしい。さう解ると、戰ひながらも、食ひ合ひながらも、人間はそれを調和したものと觀じ、惱まなくなるのです。

谷口――私には貴方の被仰る議論がどこか机上の空論だとしか思はれませんのです。たとへば猫に食はれる鼠が、食はれながら、食はれてゐる事實を實在であると思ふ限り、それを調和したと思ふことはどうしても出來ないでせう。それを調和したものと感ずることが出來ると云ふのは理窟だけの机上の空論ではありませんか。

高津――鼠が猫にくはれる、これは調和した事實ではありませんか。それを何故貴方は不

調和と感ずるのです。

谷口――鼠は食はれることを欲してゐない、それは猫を見れば恐れて逃げるので判る。それだのに、猫が來て食はれることを強制するからです。恐れて逃げるものを慘酷に捉へてたべることは、吾々に宿つてゐる『愛』の心が、それを不調和だと感じさせるのです。

高津――お言葉ですが、何故鼠は猫に食はれたくなく恐れて逃げるのですか。

谷口――食はれることに惱みを感じ、痛みを感ずるからです。

高津――猫にくはれても鼠の生命は滅びるものではない、その肉體に宿つてゐるエネルギーとなつて生き、鼠の靈魂もまた場所をかへて生れ代るものだと云ふことがわかれば、鼠は肉體が食はれて滅びると云ふことに惱みを感じなくなるでせう。また貴方は鼠が食はれる場合痛みを感じるから不調和だと被仰るけれども、痛まないことが調和したと云ふことなら、無神經になつて了つたならばもう痛むと云ふことがなくなるから調和した狀態だと云はなければならない。さうすると、原始細胞は痛覺を感ずる神經がないから、生命は進化しない方が調和したものだと云はなくてはならないのでせう。ところが、原始細胞から段々進化して吾々のやうな高級な生命になるにつれて、生物には痛覺を感ず

る神經細胞が出來て來た。凡そ進化と云ふことは生命が單純から複雜へ進んで行くことであります。複雜になるほど生命は苦痛を増す。苦痛は生命の進化した證據だからそれで好いのです。凡そ『美』と云ふものは、ある意味に於て『惡』がなければ存在しない、『戰ひ』がなければ存在しない。色彩にしても、反對があるので美しい。電氣にしても陰陽相戰ふから稻妻が出來、驟雨が降り、ネオン・サインが出來る。戰ひを不調和だと見、悲劇を不調和だと見るのは、生命の實相を見ないからです。戰ひも、苦しみも、悲劇もそれがあるので好い。それがあるので好いと解つたら、人間は戰ひながらでも、啀み合ひながらでも惱まなくなるのです。かうして啀み合ひながらでも惱まなくて濟む道があると云ふことを悟らせて、今このまゝで大安心の境地に入らせるのが吾々宗教家の役目なのです。啀み合ひそのものを此世から無くするのではないのです。

谷口――貴方の論議を進めて行けば、どうやら、貴方の宗教家としての使命がなくなりませんか。苦しみも痛みも戰ひも好い、生命は進化するに從つて複雜化し、痛みや苦しみが殖えてくる。だから苦しみも痛みも戰ひもそれで好いと云ふ議論を、そのまゝ進めて行けば、生命は進化するに從つて痛覺を感ずるやうな神經を拵へた。原始細胞は痛覺を

感じない。更に一層生命が進化すると、單純な痛覺と云ふやうな痛みを感ずる神經組織よりも尚一層複雜化した精神的惱みを感ずる組織をも發達さした。だから精神的惱みを感ずると云ふことは要するにその生命が進化してゐる證據であると云ふことになりませう。さうすると、精神的惱みを救ふと云ふ宗教家の使命とやらは痛覺神經を麻痺させると同樣、生命の進化を逆轉させることになりはしませんか。

高津――そんなことはありません。人間は惱むために却つてその生命の進化が遲れるやうな場合がある。たとへば或る人の病氣を治してやりたい、その病人は手術してあげなければその生命が回復の見込がない、しかし、手術は其儘では痛くて出來ないと云ふやうな場合に、その痛みを麻醉藥で麻痺させて手術をしてあげれば、その人の生命をとりとめると云ふやうな場合がある。それと同じく、その人の生命の進化の邪魔となるやうな心の惱みを取去つて、その人の生命が進化しやすい狀態にしてあげることが吾々宗教家の役目なのです。

谷口――貴方は痛みがあることが生命の進化即ち複雜化であつて、痛みはとり去る必要はない、痛みがあること其儘が有り難いと知らしてあげればそれで好いと先刻云はれたか

と思ふと、痛みを取去つてあげる方が必要だと云ふやうな實例をもつて來たりせられる。自分の議論を立てるためにならば、時には痛みはあつて好いと云はれ、時には痛みはない方が好いと云はれる。私には貴方の被仰ることが矛盾に聞えて理解出來ませんなア。

高津――私の云ふのは痛みと云ふものと、惱みと云ふものとは此れを區別しなければならないと云ふのです。痛んだからとて惱むには當らない。痛むと云ふのは有りの儘の肉體的感じですが、惱みと云ふのは心の持ちやうでどうにでもなる、痛みながらでも惱まないでゐることも出來るし、啀み合ひながらでも惱まないでゐることが出來るのです。痛みがとれなければ人間の惱みがとれないのでは人間は痛覺をもつて生れてゐるのだから惱みから救はれやうがないのです。啀み合ひが止まなければ人間の惱みがとれないのでは人間は複雜化したみんな別々の精神をもつて生れて來てゐるのですから、衝突は常にあり、衝突毎にその惱みから救はれることはできないでせう。痛みながら惱まないでゐられる人間、啀み合ひながらでも惱まないでゐられる人間にならなければ、現實界には痛みが滿ち、爭ひが滿ちてゐるのですから、惱みから救はれることは出來ないのです。それで病みながらでも啀み合ひながらでも惱まない人間に人を救ふことが私としては宗

教家の使命だと考へるのです。

谷口——さうすると猫に食はれたがらでも惱まないやうな鼠を作ることが宗教家の使命だと云ふのでね。

高津——さうです。猫が鼠を食ふと云ふことは猫の本性であるから變へることが出來ない。だから猫に鼠を食べないやうに教育したからとて仕方がない、喜んで惱まないで猫に食はれるやうになつたらその鼠は救はれたのです。

谷口——それは、私には机上の空論だと思はれる。私は痛覺が鼠にある限り鼠が猫に喜んで食べられるやうになるとは思はれない。痛覺そのものが生物に於て發達したのは痛みを避けて痛みの起らないやうな狀態にその生命をおく爲なのです。痛みが生物に起るのは、自然がその生物にとつて不調和な狀態が起りつゝあることを警告し、その生物をして不調和な狀態を無くするために何らかの內的又は外的の手段を採れよと自然が警告してゐることです。だから、苦痛があるのはそこに不調和があるとの警告であり、努力により、そこに不調和がとれ、調和が出現すると、そのしるしとして苦痛がなくなるのです。貴方の被仰るやうに苦痛そのものが生命が進化してゐる證據ではない、又、苦痛て

のものが調和そのものでもない。不調和を苦痛と感じ、調和を歡びに感ずる――調和と不調和との區別を鋭敏に感ずることが出來るのがその生物が進化してゐる證據であり、何のために調和不調和を感ずる性能を生物が發達させて來たかと云ふと、苦痛によつて其處に不調和の存在を感知し、その不調和を克服する方法をとり得るためなのです。苦痛を伴ふ不調和がそのまゝで喜べるやうに生物を教育し、鼠が痛覺を感じながらも喜んで猫の口の中に突貫して行くやうなことが出來ることは要するに貴方の空想ぢやありませんか。

高津――私はそれを空想だと思ふことが出來ない。鼠は喜んで猫の口の中へ飛び込み得ると思ふ。『生命』の世界はその實相を見詰めると要するに戰ひの世界である、苦痛の世界である。その戰ひを止めさし、苦痛をとめなければ人間は救はれないと云ふことはないと思ふ。人間の戰ひは譬へば『碁』の遊びである『碁』を止めなければ人間は幸福になれないと云ふことはない。負けて口惜しい悲しいと思ふ心を捨てゝも喜んで碁を戰はし得る名人の境地があるやうに、人間も生物も戰ひを止めないで喜んで生命の食ひ合ひでも出來るやうになれると思ひます。

谷口――斯の遊びと弱肉強食の事實は比喩にはならない。

高津――凡ゆる戰ひを遊戲化しスポーツ化すれば、戰ひは戰ひのまゝで生物は惱まなくなると思ふのです。負けた、それで好い！　痛い、降參つた！　それで好い！　と云ふ風になれると思ふのです。さうなると戰ひは戰ひの儘、苦痛は苦痛の儘で人間は啀み合ひながらでも、其儘で惱まない光明化された人生が出現するのです。戰ひも弱肉強食も生命が個體を守り個體を進化さす上での嚴肅な事實ですから止める必要はないのです。たゞ止めれば好いのは、それを惱みに感ずると云ふことだけです。

谷口――貴方はなか／＼哲學的に議論して來られますが、弱肉強食の事實とスポーツとは、一方は血みどろな息づまるやうな眞劍な生活爭鬪でありますし、一方は、どうでも好い、必ずしも吾々としてしなくとも好い遊びでありますから、これを同一段階に並べて譬へて見ることが元來間違つてゐるのでありませんか。それよりも、貴方の先刻被仰つた啀み合ひながらも、心が惱まない救はれた狀態があり得るものかどうかと云ふことを、一つ或る家庭の實例を擧げて見てくれませんか。私の考へでは、三界は唯心の所現形は心の影でありますから、心が平で啀み合はなくなつたら、形の上でも啀み合はなく

なる。心が平和で滞りがなくなつたら、身體の上でも家庭の上でも、病的狀態が無くなると見てゐるのです。

高津――此の社會問題と云ふことにしても、資本家は資本家の利益を計らうとし勞働者は勞働者の利益を計らうとしてゐる。それは當然なことであつて、其處で互ひに戰ひが起る、その戰ひを吾々は止めなくとも好いと思ふ。それが生命の實相であるならばそれでいゝ、好い――それで好い――その儘で好いそれが眞實であると觀ずるとき戰ひながらもその戰ひと云ふものから超克したところの一種の惱みなき根本的救ひの狀態が得られる――これが宗教の與へる救ひと云ふものであると思ひます。

谷口――だん〳〵議論が延びて議論の方へ脱線して行かれますが、問題は如何に巧みに議論が述べられると云ふことよりも實際に鼠が猫に食はれながら惱みなく居られるか、人間は互ひに啀み合ひながらも惱みなくゐられるかと云ふ實例の方が必要なのです。議論よりもその實例を擧げて頂きたいのです。

高津――私は亡父と非常に仲が惡くて意見が合はず常に啀み合つてゐたのでありますが、此の狀態からどうしても救はれたい、自分が善くなりたい善くなりたいと努力してゐた

のでありますが、努力しても努力してもどうしても善くなれない、家庭は益々悪くなる一方である。そして、もうどうにも斯うにもならないと云ふ狀態になつたときに、始めて私に眼がひらけたのであります。それはどう云ふ眼かと云ふと、幾ら自分は斯うして善くならうと努力しても善くなることの出來ない自分である、だから親父からあんなにガミ／＼云はれるのも尤もである、自分の心が親父に映つてゐるのであるから、もう親父を悪う思ふまい——斯う氣付きますと、親父と現實に啀み合ひながらも、その儘で心で惱まないでゐられるやうになつたのです。

諦めは宗教の使命に非ず

谷口——成る程、啀み合ひながらも惱まない狀態と云ふのはさう云ふ諦めの狀態でありますか。今迄の宗教は現實の生活苦を救はないで、諦めの心境に達せしめようと努力してゐました。宗教が實生活と離れて了つて、實生活とは何の關係もないと思はれるやうになつたのはそのためです。三界は唯心の所現でありますから、現實世界を宗教で救へないと云ふことは有り得ないのです。それが救へないのは『救へない』と思つてゐる貴方のやうな宗教家の心の所現なのです。私は啀みながら惱まないなどゝ云ふ狀態は救はれた狀態とは考へることが出來ないのです。それはたゞの諦めです。これを猫と鼠に喩へ

て見ますならば、鼠は猫に食はれながら、その痛い痛い恐怖の最眞中にゐながら、自分の身體が猫にとつて美味しく感じられるのは自分がさう云ふ美味しさうな匂ひを放つから自分が悪いのである、自分が猫に食はれないでゐるほど強くないのは自分が弱いのであるから自分が悪いのである――かう諦めて鼠が平和でゐられるものだと貴方は空想してゐられるけれども弱肉強食の血みどろのこの事實は、貴方の父子の嗤み合ひ――たゞの言葉爭ひ位ゐの苦しみではありません。貴方の親子の嗤み合ひと云ふやうなものは、問題にすれば問題になるけれども、問題にしなければ問題にならないやうな事實である。だから問題にしなくなれば嗤み合ひながらでも心が惱まずにゐられたのです。併し、本當の事を云へば環境は心の影でありますから、眞に貴方が『人生に本來嗤み合ひなし』と悟り、根本に惱まない心境に達せられたら、環境のイガミ合ひも實際になくなつた筈であります。病氣でも心が本當に惱まなくなれば治る。併し、半分ばかり平和になつた心境では病氣をまだ現はしてゐて心だけ惱んでゐないやうな過渡時代を現出するのです。だから貴方がもつと深く御反省になつたならば、現實に惱みが殘つてゐて心だけが惱まない狀態と云ふものは、まだ過渡時代の悟りであつて本當の悟りに入つてゐない

弱肉強食に不調和を感ずるのは實相永遠の秩序に背反してゐるからである

生命の世界に犠牲は必要か

ことを發見なさるに相違ありません。

高津――さうでせうかねえ。

谷口――貴方の場合は碁の戰ひにしても、父子の嚙み合ひにしても、鼠が猫に頭からかぶられるやうな血みどろな悲慘事ではない。鼠が猫に食はれるやうな血みどろな弱肉強食の事實が、生物に痛みを與へ、惱みを與へ吾々がそれを見て憐れみを感じ、不調和を感ずるのは、さう云ふ事實は『實相永遠の秩序』に反してゐるからなのです。『實相永遠の秩序』に一致するものは、吾々に痛みも惱みも與へないのです。吾々に痛みや惱みを與へる事物はどこかに實相永遠の秩序に反する所があるのです。

高津――私はさうは考へません。弱いものが強い者に食はれて苦しんでゐるのを見て可哀相に思ふのは、一見深切のことのやうに思へるけれども、可哀相に感ずるのは自分が利己主義だからです。誰でも可哀相に感ずるのは、吾が身に引きくらべて、自分があんなになつたら叶はぬなアと思つて可哀相に感ずるのです。吾が身が利己主義で他の犠牲になることが嫌やだから、他が犠牲になつてゐるのを見ると可哀相に感ずるのです。自分が利己主義でなく生命の世界には誰かの犠牲が必要であり、その犠牲になることは尊い

犠牲を必要とする世界は假相であつて實相ではない

仕事であると悟れたならば、犠牲になつてゐる人を見たら彼は尊い仕事をしてゐる美しい！　と思ふやうになつて可哀相だなんて感じは起らない筈です。

谷口――なか〳〵貴方は雄辯に駁論して來られますが、貴方の立場と私の立場とが根本的に異つてゐるために、千百の議論で突貫して來られても空氣に腕押してゐられるやうなものです。どちらも『生命』と云ふ言葉を使ひますが貴方の所謂『生命』は『生命の進化には誰かの犠牲を必要とする』やうな『現象生命』のことを云つてゐられるのです。私の說くところの『生命』はどんな犠牲も必要としない『實相生命』です。互ひに殺し合ふことも犠牲になり合ふこともない、互ひに生かし合ふばかりで調和してゐるのが本當に實在する『實相生命』なのです。私の觀る世界は犠牲なくして苦痛なくして調和してゐる實相界なのです。

高津――すべて戰ひと云ふもの、爭ひと云ふもの、反對と云ふものが無ければ、其處に美もなく生命もないのです。電氣でも男女でも本性相反するものが相鬪ふので、其處に美が生れるその生命の實相を知るならば、戰ひや爭ひや、犠牲と云ふことを見ても惱むことが無くなるのです。

五官で見える現象生命の事實に、假相であつて實相でない

戰ひによつて進化し行く生命は假相

谷口――貴方は戰ひや、爭ひや、犧牲がなければ、美は生じないと云はれる。貴方は『現象生命』だけを見てゐてそこにあらはれてゐる事象だけを見て、それを『生命の實相』だと云はれる。此れと同じ思想を私も有つてゐたことが十年ばかり前にあるので、貴方の被仰る意味は私にはよく解りますが今はその生命觀には贊成することが出來ないのです。

塚田――先生が論文集『聖道へ』をお書きになつた頃はさう云ふ思想のやうであつたやうです。

谷口――『聖道へ』を書いた時分はそれから幾分脫却しかけた人生觀をもつてゐた頃ですが、ロマンローランの生命觀が高津さんと同じやうな人生觀です。『神は人と一緒に苦しんでゐるのだ。神は戰ひによつて進化し行く生命である』と、例のノーベル賞金を貰つた小說『ジヤン、クリストーフ』に書いてありました。併し人と共に苦しんでゐる生命、鬪ひによつて進化し行く生命は『現象生命』であつて『生命の實相』ではなく『生命の假相』なのです。それは自他一體の生命の實相が、『個我』と云ふ迷ひによつて屈折して生じた假りに斯く觀ずる『生命』の狀態なのです。本當の『生命』――即實相

の生命は犠牲はなくして互ひに生かし合ふばかりで、そこに一層高い美が生じてゐるのです。反對色がなくとも美があり得る、影がなくとも光ばかりでも美があり得る。病ひがなくとも、病ひに對する健康ではなく、病健を超越した健康があり得るのです。

高津――さう云ふ世界は考へられないのです。

現象だけしか見られない心では實相世界の美は解らない

谷口――反對色で成立つてゐる現象界の美だけを見てゐるものには、實相界の反對色のない美が想像できないのです。自分が想像出來ないから、それを無いと云ひ切ることは間違ひです。音樂は、ブロークンな、他の音譜を傷けるやうな一節がなければ、その音樂には美がないとは云へないでせう。一つの音譜がその隣りの音譜を生かし、順次に互ひ互ひの音譜を生かして、自分も生き他の音譜も生き、全體の音譜が生きてゐるやうな音樂が本當に美しい音樂なのです。何も猫が鼠を食はなければ、そこに生命の美がないと云ふことは出來ない。猫が鼠と調和して遊んでゐると云ふやうな世界は一層の美の世界ぢやありませんか。

猫と鼠が草原で戯れてゐるのが實相世界

高津――猫が鼠を食はなければ何をたべて生きるのです。

谷口――猫と鼠は一緒に草原に寝轉んで草を食つて相戯れてゐるやうな状態が『實相の世

界」なのです。生命は互ひに奪ひ合ひ食ひ合はなければ生長進化出來ないと云ふのは實相を知らぬ『迷ひ』です。その『迷ひ』が客觀化されたのが、互ひに食ひ合ふ生命なのです。『迷ひ』がなくなれば『迷ひ』の具象化である現象生命の『食ひ合ひ』もなくなるのです。生長の家誌友には心一つで鼠と猫とを調和させた實例が澤山あります。

高津――そんなことは信ぜられません。假りに猫が鼠を食はずあらゆる動物が食ひ合ひをしなくなつても、人間の痛みや苦しみはなくならない。例へば地震とか海嘯とか云ふ天變はなくなりはしない。さう云ふ苦しみに出會つても惱まないやうに悟らせるのが宗教家の役目なのです。

天變地變も唯心の所現

谷口――私に云はせれば三界は唯心の所現ですから、地震とか海嘯とかも、吾々の心が清まれば起らなくなるのです。貴方の被仰る救ひは苦しみは苦しみの儘で諦らめてその苦しみから解脱する救ひですが、私の說くのは現實の苦難そのもの諸共に救はれるのです。悟りと同時に病氣が治り、境遇も環境もよくなるのです。

高津――たとひ現實に地震も起らなくなるとしても、それは幾十億劫後の世界のことでせう。それはあり得るかも知れない無いかも知れない。さう云ふ世界を空想して現實の苦

しみを救ふことは出來ない、現實の苦しみを救ふには、現實の苦しみに突き入つて、苦しみは苦しみの儘で其處に生命が生きてゐると云ふ眞理を悟らせるやうにするしか仕方がないでせう。

谷口――地上に地震や、海嘯がなくなるのは地上全體の生物の心が淸まらなくてはならないから、その遲速は、地上全體の心の淸まる遲速に關するのです。併し、一個の人の環境がよくなるのは、その人一個の心がよくなれば好いのです。地震や海嘯があつても、心に地震や海嘯がなくなつた人をその天災は害することが出來ない。この事實は生長の家誌友自身が多くの實例や體驗を作つてゐます。また夫婦で出來てゐる家庭ならば夫婦だけの心が淸まればその家庭は現實的にもよくなつてくるのです。夫婦が仲好く、家族に病氣がなくなり、收入も適當に出來て來るのです。『生長の家』の救ひは悟りと共に現實も救はれるので、貴方の被仰るやうに病氣があり、家族が不仲で、經濟難で、それでゐて心だけ惱まないと云ふやうな諦めではないのです。

高津――どう云ふ原理によつて現實界も共に救はれるのです？

谷口――現實界は、自分の肉體も、境遇も、すべて自分の心の影だからです。心が變れば

形が變る──之が原理なのです。

高津──私も此の現象世界がこのまゝ實在だとは信じない、影だとは思ふ。そして現象の裏に實在があり眞理があると云ふことを信ずる、その生命を見て、どんなに苦しみがあらうとも其處に意義があることを感じ有りがたく感ずるのです。

現象世界を變ずる宗教が生長の家

谷口──併し貴方が現象世界を影だと云はれる、その影だと云ふ意味は、私の云ふ影だと云ふ意味とはちがひませう。貴方は現象をその儘で肯定し、現象の裏に生々の生命があるから苦しみも戰ひも病ひもあつて其の儘で調和してゐて善いと云はれる。私の云ふ影と云ふ意味は『苦しみや戰ひのある現象世界は有るが如く見えてゐても本來無い』たゞ苦しみも戰ひもない大調和の世界が有ると云ふ。此の大調和の世界を觀ることによつて、現實の苦しみを超越するだけではなく、現象世界を變貌せしめて、現象世界を如實に苦しみなく病ひなく惱みなき世界になり得ると云ふのです。これを病氣に就て云へば、貴方は人間は病氣になるのが生命の眞理であるから病氣を喜べと云ふのです。『生長の家』では病氣は無いから有るやうに見えても無いのだからあつてもあると思はず喜べと云ふ。同じ病氣を超越するのでも、病氣があるのが生命の實相だと思つて超越する

のが、高津さんの方法でありますが病氣は無いと悟つて病氣そのものが消滅するのが『生長の家』なのです。貴方のやうに病氣があるのが生命の實相だと思つて病氣を超越したのでは『ある』と云ふ念の作用で、病氣は起つても治らないけれども、此の『生長の家』の超越の仕方によれば『病は無い』と云ふ念の作用によつて病氣が治つて了ふのです。

高津――それはどう云ふ根據からさう云はれるのですか？

議論ではない事實である

谷口――議論ではない、實際にさうなのです。醫師が到底助からぬと云つた結核や癌でも『生命の實相』を讀んで心が變ると共にその病氣が治つた實例が澤山ありますから。

高津――併し、すべての人間の病氣が『生命の實相』を讀んでも治ると云ふ譯には行かないでせう。

谷口――さうです。すべての人間の病氣が治るには定つてゐません。

高津――さうすると『生命の實相』を讀んだので病氣が治つたと斷定する譯には行かない。

谷口――『生命の實相』を讀んでも心が眞にそれに共鳴せず、實相を悟ることが出來ない人は治らないのです。眞理は種であるから、それを植ゑても生えない不毛の地や石地に

まいては生えないけれども、それは眞理と云ふ種が悪いのではない。十本の同じ種を植ゑて、半分も生えれば、その種は生える力がある、生えないのは土地が悪いのだと斷定しても好いでせう。人間は心的存在ですから、酸素に水素を交へたら必ず水が出來ると云ふ風に、人間に『生命の實相』を混ぜたら必ず病氣が治ると云ふやうに一定の結果を生ずると云ふ譯には行かない。『生命の實相』を話せば話すほど、素直に受けないで、議論で出來るだけ反撥して來られる貴方のやうな人もある。だから『生命の實相』を受ける心の相異に從つて色々の結果を生ずるのです。併し、それを讀んだ大多數の人々が病氣から救はれてゐる事實を否定することは出來ません。

高津――この議論する癖は私の悪い習慣です。併し、私は議論で解らなければ、必ずしも承認しないと云ふのではないのです。私は近頃、宗教界や思想界で偉いと思ふ人に出來るだけ會つて見ることにしてゐるのです。それは議論で判らなくとも、何かしら私の生命に相手の生命から流れ込んで來て私をよくして呉れるものがあることを感ずるからです。高橋正雄さんとは一ケ月に一度づゝ會ふことにしてゐますが、高橋さんに會ふやうになつてから、たゞ月に一回の會でありますけれど、高橋さんはあゝ云ふ平和な穩やか

な方である、その穏やかさが私に流れ込んで來て、私が段々穏やかになつてくるやうです。高橋さんは高橋さんで、私の鋭い明るさをその性格の中に取入れられて來られたやうに見えます。互ひに好きな尊敬する相手からは、心を開いてゐれば、無我と云ふほどにはなり切れなくとも理論以上のものが私に流れ込んで來るやうです。私は家内と仲が好いものですから、日常の行爲の癖や、性格や手紙の文字まで似て來るやうです。ところが反撥する相手とは益々異ふやうになつて同化して來ないですなあ。それは私と私の父とは常に反撥してゐましたから、常にあれぢやあ可かんな、あれぢやあ可かんなと思つてゐるものですから、父と子とでありながら段々似なくなつて來ました。私は道の上で尊敬出來る人には出來るだけ接觸するやうにして、そこから流れ込んでくるものを素直に受けるやうにしたいと思つてゐます。どうも失禮致しました。

第十章　世界は何處へ行くかを語る

場　所——東京市目白、友の家會館。

出席者——在東京の生長の家誌友約七十名と谷口雅春氏。

（昭和八年一月八日、本誌の萬教歸一篇の冒頭にある『中心に歸一する道』と題する講演のあつた後、晝食後、參會者と谷口氏との間に話された座談を收む）

谷口——佐牟田さんは齒科醫をしてをられますさうですが、此の齒と云ふものは人體各部のうちでも最も鑛物質的な純物質に近いものであつて、他の內臟機關のやうに早速『心』によつて左右せられるものではないやうに思はれますが、最近斯う云ふことを報告して來られた方がありました。其の方は××縣の某町で町長をしてをられた方であり、町の繁榮の爲に私財を提供するなど隨分盡した方でありましたが、一朝その方が肺病になると人情紙の如く傳染を恐れて誰もその人に近づく人がなくなつた。おまけに療養費のために財產全部を使ひ盡して尙病氣が癒えずに困つて居られましたが、或る時一燈園の機關雜誌『光』に生長の家叢書の無代進呈の廣告が載つてゐたので申込んで來られた。それで早速生長の家叢書を送つてあげますとそれを讀んで神誌『生長の家』も是非讀み

內部から齒が治れば磨かなくとも齒は健全

たいから送つて欲しいが、思ふやうに金がないと云つて來られた。そんなに困つてゐる方なら誌代は何時でも好いからお讀みなさい、讀んで病氣が治れば好いのであるからと云つて『生命の實相』も送つてあげ、毎號『生長の家』も送つてあげてゐますと、さしもの肺病も治りました。肺病が治つたがさう早速就職口もないので家計は益々逼迫して來る。齒磨粉を買ふ錢もなくなつたので、到頭その人は齒を磨く事を忘れて了つた。普通の口中衞生の立場から申しますと、齒は磨かなければ惡くなるのでありますが、その人は『生命の實相』を讀んで肺病が治るほどに悟られたのでありますから、內部から齒がよくなつて來たのであります。以前に毎日齒を磨いてゐられた頃には毎年齒痛のために二回位齒醫者の厄介になつてゐられたのに、齒磨で齒を磨くことを止めて『生命の實相』で心を磨くことにせられたら齒痛が起らないで、一回も齒醫者の世話にならないで濟んだと云ふのであります。私は不潔を勸めるのではありませんが『心』と云ふものは人體中最も純物質に近い齒までも改造するものだと云ふ實例として之をあげたいと思ひます。

佐牟田——その人が貧しくなつた爲に美食が食べられなくなつた。其の事も齒をよくした

原因の一つになりませう。美食と云ふものは穢れ血液を酸性にして齒質を害するのであります。

粗食は却つて健康によい

谷口――粗食は却つて人間を健康にする、貧しいと云ふことも必ずしも人間を不幸にばかりするのでないと云ふことはこれでも判ります。併しその人は『生命の實相』をお讀みになる前から既に療養費を使ひ盡してゐられたのですから、粗食は以前から粗食であつたらうと思はれますから、最近齒痛がなくなつたのは食物の貧しさよりも主として眞理をお悟りになつて心に變化が起つたからだと思はれます。眞理を悟らない貧しい人は其の貧しさの爲に倒れ、眞理を知つた人は貧しさの爲にも却つて生きて來るのです。

佐牟田――必ずやさうであらうと思はれます。齒は齲齒になつた處まで心の力で再生させることは困難でせうが、それ以上腐蝕進行しないやうに、内部から心の作用で適當な内分泌を生じ、防禦壁を作ることは出來ます。心の力は實に偉大なもので、私は先生の本『如何にせば運命を支配し得るか』を五六年前に拜見致しまして以來、あの本一冊で實に多勢の人の病氣を癒しました。それ以來後に出された『生長の家』と云ふ雜誌のことは知りませんでしたが、山本海軍大將に紹介されて拜見致しますと、谷口雅春編輯と

書いてあるので早速誌友にならせて頂いた譯であります。私は心の糧としては『生長の家』、食物としては玄米飯、飲料としては生水、この三つがあれば人間は病氣になるものではないと信じてゐます。

春木――生水の飲用は先年『サンデー毎日』で宣傳され、近頃また西式健康法で宣傳されてゐますが、自分に効いた健康法であるからとて、他にも効くやうに思つて無闇に宣傳するのはどうかと思ひます。西式では生水を一日に一升以上二升飲めと云つてゐますが、其の宣傳に乘せられてどうしても一日に一升以上飲まねばならぬと思つて、無理に飲みたくもない生水をがぶ〳〵飲んだ結果却つて病氣が悪くなつた人があります。

佐牟田――私はそんなに生水をガブ〳〵飲めと云ふのではありません。吾々は誰でも湯茶を飲むものですが、その湯茶を飲むときに湯茶の代りに生水を飲むことが好いと云ふのです。生水には色々生きた成分を含んでゐます。カルシユームなども生水には多量に含んでゐるのですが、水を煮てしまふと其のカルシユーム分が沈澱して人體に利用せられなくなる。このカルシユームは血液をアルカリ性に保つために非常な貴重な成分なのです。併し生水に限らず、どんな貴重な飲食物でも適度をはづして無闇に多量に飲んで好

いと云ふ筈はありません。

小池――私の知つてゐる一例を云ひますと長崎に高橋と云ふ醫學士で、患者に水ばかり投藥してゐる醫者があります。人稱して水醫者々々〱と云つてゐますが、患者に水を飲ませるだけで多くの病人が治つてゐます。水を投藥するのですから無論藥價は無代だから隨分流行つてゐます。（一同笑聲）

谷口――人間が玄米食、生水食とだん〱自然食に近づいて行くことは成る程結構なことではありますが、これも捉はれると詰らないことになります。形の上のことはすべて第二義的であつて心が整へば自然に嗜好が代つて來て、丁度適當のものが本能的に食べたくなる。此の本能と云ふものは内部的には生理的に催して來るものでありますが、宇宙を一つの生き物と観ますと宇宙の本能は、宇宙の内部の動きでありますから吾々の外部にも動いてゐる。だから自分の心が正しくなると、宇宙の本能で自分の周圍が動いて吾々にとつて必要なものを自然に外部からも運んでくれるやうになるのです。だから、自分の食膳に運ばれるものは何でも宇宙の本能が催して來たものだと思つて有り難くたべれば好いのです。あまり生水を禮讃し過ぎて湯茶を蛇蝎のやうに恐れる必要もない、湯

食物の酸性とアルカリ性と

茶が欲しい時には湯茶をのむが好い、水が欲しい時には水をのむが好い。アルカリ性食物だとか酸性食物だとか云ひますけれども酸性食物が可けなければ、自分の腹の中へ入れてから『心の力』でアルカリ性食物に變化したら好いぢやありませんか。人間の血液の酸性とかアルカリ性とかは口に入るものばかりできまるものではない。人間の血液の成分の變化はヨリ多く吾々の念の力によるのです。灸を据ゑてもタワシで皮膚を摩擦してもその刺戟で血液のアルカリ度は増加するさうですから、心の刺戟で血液のアルカリ度を増加出來ない筈はない。要するに食養法とか攝生法とか云ふものは、各人各々その時期その狀態に於て適當なものがあるので、形を强制しても何にもならない、心を正せば自然に形が整うて來るのです。

佐藤――先刻先生の御話の一節に武力と云ふものも現在の誤れる狀態を正す自壞作用として必要なものだと云はれたやうに承りましたが、諸種の左翼運動も直接行動も資本主義の自壞作用として正當視さるべきものではないでせうか。

唯物論の自壊

谷口――資本主義と云ふものは、蓄積の經濟で、唯物論から始まつてゐる。即ち『物』を心の影として、心に從つて有限にも無限にもなるものだと云ふ眞理を認めず、物は物で

あるから與へれば減つて了ふものだと云ふ考へから、物を蓄積したのが資本主義の始まりである。ところが『物』は實在ではないから『物』に頼るものは『物』によつて滅びる。同じ唯物論から左翼運動が發生してそれを自壞せしめることになつてゐる。唯物論は斯うして其れ自身で立つことが出來ず畢竟自壞して行くべき運命を有つてゐるのです。物質に執着する者は物質と共に自壞するほかはないのです。

佐藤――唯物論者を物質に執着する者と觀るのは誤りです。左翼の闘士にも實に愛の深い人達があり、物質に恬淡で、自分の全財産をその運動のために捧げ切つて了つてゐるやうな人があります。さうかと思ふと、宗教家のやうな人で唯心論を說教しながら物質に執着して金を貯めてゐるやうな守錢奴もあります。かう云ふ二種類の人物を考へると、どちらが本當に尊い人間であるかと云ふことを時々私は考へさせられます。

谷口――唯心論を主張しながら物質に執着して金を貯めてゐるやうな人は、その人全體の生命が唯心論に成り切つてゐないからでせう。唯物論を主張しながら其の人が物質に恬淡なのはその人の生命の大部分が唯心論に傾いてゐるからでせう。その人が眞の唯物論者であるか唯心論者であるかは、その人の把持する學說によつてだけでなく、生活全體

で判斷すべきでありませう。

瀧――人類愛に燃えてゐる愛深き唯物論者と、唯心論をとなへてゐる憎むべき僞善者とは、どちらが人間として價値ある人達でありませうか。

人類愛と無神論や唯物論とは併立しない

谷口――『愛』と云ふことを苟も尊いと認める限りに於て、『愛』とは『心の働き』であるから、唯物論は成立たないのです。『愛』と云ふものが唯、周圍の物質的條件で起る化學作用と云ふやうな唯物的なものであれば、それは機械的なものであつて道德的價値を附する事は出來ますまい。それは吾々が愛深き人間を讃嘆する理由とならないのです。人間の生命が本來自由なものであつて、同じ物質的な條件に於ても其人その人によつて自由な動きが出來るのに、守錢奴にならずに愛深き人になる、そこに始めて愛深き人間を讃嘆するべき理由があり得るのです。『愛』と云ふものが貴いのは、『自分』の喜びのうちに『他人』の喜びを見、『他人』の苦しみのうちに『自分』の苦しみを見、自他が一體であると云ふことを感ずるからです。自他が一體であることを認めるとは、自他が『一つの元の生命』から分れ出た兄弟であることを認めることです。その『一つの元の生命』とは『神』にほかならない。だから人類愛を唱へる人たちが無神論であつたり唯物論で

あつたりするのは自己撞着に陥つてゐるのです。實生活で愛深き人が唯物論者であるのは僞惡であります。吾々の「愛」が偉いのは愛のうちに「神」が生きてゐるからです。併し愛深き人であつて、人々が畏敬し崇拜するやうな人が無神論を唱へ、唯物論を唱導するがために、無神論や唯物論の方面へ多數の人類を引摺つて行くとしたならば、その人は知らずして大なる罪を犯すと云はなければならないでせう。いつも私は云ふのですが、神は「愛」であると同時に「智慧」である。「智慧」のない盲目的な「愛」は片輪の愛であるから相手を救はう救はうと思ひながらも、正しき智慧がなければ却つて相手を傷けることになるのです。「可愛い子供に旅をさせよ」と云ふ諺もありますが、子供を教養する正しい智慧なしに唯盲目的に溺愛したゝめに子供を墮落させた實例も澤山あります。病人を救つてあげたいと云ふ愛深き熱情から色々の醫療や藥を強ひたゝめに却つて病氣を惡くしてゐる實例も澤山あります。そんな人に藥の無効を覺らせて藥を取上げて病氣を治した實例も澤山あります。物を與へたら人間は幸福になると云ふ風に人間を唯物的に考へてゐる人は、病人には必ず藥物が要ると考へて却つて人間を不幸にしてゐる連中です。すべて「愛」は正しい「智慧」と轡を竝べて進むとき人間を幸福にします

が、正しい智慧の伴はない愛は却つて人間を不幸にするものです。だから左翼運動の所謂る愛深き人達が、間違つた智慧で世の中を一層悪い方面に導いて行きつゝあるのは頗る遺憾だと思ひます。

A――左翼運動の人たちは人間に富を與へたら、人間を幸福にすると單純に考へてゐますが、それは、さう云ふ富を有つてゐる人の生活の内幕に這入つて見ると、それらの人々の生活が非常に慘めなものであることを知らないからです。中には貧しい時代には眞面目な價値ある生活を送つてゐた人で、偶々富を得たゝめに生活が墮落して家族全體を不幸に突落す人もあります。此等を考へると富は人間の幸福の原因やら不幸の原因やら分らない。人間の生活の幸福は富から來るのではない、外界から來るのではない、貧しき人で幸福な人もあれば、富める人で不幸な人も多い、要するに人間の幸福は、その人の心の中にあるものだと私は考へます。

B夫人――『友の會』では一ケ月僅か四十錢の會費で昨年中に數萬圓の仕事をしてゐます。金がなければ仕事は出來ないと云ふことはウソだと思ひます。眞劍にやる氣があれば金は自然に集つてくると思ひます。

瀧――友の會が一人一ヶ月四十錢の會費で昨年中に數萬圓の仕事をしたと云はれる。友の會はプチブルの團體ではないか。そこにはプチブルと云ふ背景があるから、それだけの仕事が出來たのである。君たちのプチブルの教養はどこから來たか。それを考へるが好い。そしてその教養がなければ一ヶ月四十錢の持寄りでそれだけの仕事が出來る筈がない。その教養が出來ないやうに貧しさで虐げられてゐる多くの人達があることを考へねばならぬ。

A夫人――私達友の會は、さう云ふ虐げられた人達のためにも、救ひの事業を一歩々々やつて行かうと努力してゐるのです。

瀧――人間が環境によつて支配されるものであると云ふ事實は到底否定出來ない。君達が社會事業をする、その事を善い仕事であると思つてゐるのも、人間が環境によつて支配されることを認めてゐるからではないか。富める人にも惱みはあると云ふ――それは事實ではあらう。併し富める人の惱みは餘裕のある惱みである、切迫詰つた惱みではない、贅澤な惱みである。自分で惱むまいと思へば惱まずにをれる惱みである。ところが貧しい人達の惱みは其の貧しさのために肉體の生活すらも維持出來るか出來ないかの問題

『救はれる』と云ふ本義

である。生活權を奪はれるか奪はれないかの問題である。

谷口――人間が一々特定の環境に對して相關的反作用を營むことは事實であるがその反應は人によつて一定してゐない。だから、人間は必ずしも環境によつて支配される者とは云へない。内に神性を自覺すれば困難は吾々を一層高め上げる。だから心に神性を自覺さすことが貧しい人達を救ふ第一義である。第二義的の救ひは第一義的の救ひが完成すればおのづから整ふ。『救はれる』と云ふことは樂にして貰ふと云ふ狀態ではない。困難にも崩折れない強さを獲得することである。困難に崩折れない強さを獲得するとは困難に逢はないことではない、困難に突進んで困難を征服するやうに努力することである。昨夜此會の發起人の一人である松本さん宅で、帝展の彫刻部の審査員をしてゐられる山根八春氏に會ひましてその方の經歷を松本さんから承つたのでありますが、その方は家業の都合で小學校以上の學校へ入學出來なかつたが、幼時より彫刻家になりたいとの強き念願を有つてをられ、彫刻をするのにも人生の常識を備へてゐなければならぬと云ふので、中學の科程を學校に行かずに終了しようと思ひ、教科書を携へて、各課目の中學教師を個別訪問して教授を受けられた。當り前なら多勢一時に十把一からげに講

失敗の原因を外に歸するは卑怯

養を聽くのですが、此の人は學資はなくとも努力によつて、中學の課程を各教師に個人教授を受けられた。學資がないから、貧しいから、自己を伸ばすことが出來ないなどと云ふのは、自己の發達をたゞ外的原因にのみ歸して、自分そのものゝ責任を回避する卑怯な考へ方です。さう云ふ卑怯な者に味方するやうな理論を宣傳する事は要するに人生に卑怯者をつくることになるばかりです。どんな困難の前にも、若し自分が倒れるならば自分の努力が足りないのだと、みづからを省る者は進歩しますが、失敗毎に、その失敗の原因を『外』にばかり歸するものは終に卑怯な弱蟲になつて了ふのです。

瀧——山根八春氏の實話は興味深く承りましたが、山根氏が中學教師の宅を個別訪問して教授を受けて自己教養を續けることが出來たのは、さう云ふ餘裕あるタイムがあつたからではありませんか。さう云ふタイムの餘裕のない人々が此の資本主義時代には澤山ある。例へば或る職業に雇はれてゐる徒弟の如きものである、朝起きてから夜眠るまで自分の時間が全然ない迄に縛られてゐる。さう云ふ人は自己教養しようにも自己教養する時間がない。現在資本家が雇傭者から搾取してゐる最大なるものは『時間』である。貧しき者は『時間』を搾取されてゐるから努力するにも努力が出來ない、自己教養する

にも自己教養出來ない。此の意味に於て私は、働く時間の半分を失業者に讓つて雇傭者の數を增加し、人類を、時間を搾取されることから救ひ、自己教養の時間を人類全體に與へようとする運動『生長の家經濟聯盟』の趣旨に私は賛成するのであります。

松本夫人――『生長の家經濟聯盟』は人類の經濟生活を光明化する大變結構な聯盟であると信じますから、此の席にゐられるすべての人達は此の經濟聯盟に加入せられたい。そして又加入せられない方は何か疑點があるだらうと思ひますが、疑點のある方はある方で、谷口先生が丁度此の席に來てゐられるのを幸ひ、腑に落ちる迄充分質問して下さつた上、是非加盟せられたいと思ひます。

谷口――松本さんは先々月の生長の家東京誌友會に出席せられましたが、その席で經濟聯盟の話が出ましたに拘らず、その誌友の方々が唯信仰に陶醉してゐるやうな狀態で、かう云ふ經濟聯盟と言ふやうな實行運動に對しては頗る冷淡である。もつと皆の者が賛成し、運動に大體目鼻がついて來るまでは、日和見の態度を維持してゐる方が賢明であると言ふやうな意氣地のない男らしくない態度である。『友の會』は婦人團體でも、もつと實行的である。信仰と言ふものと生活と言ふものとは、もつとハツキリ一つになつて

動き出さなければならないものである。善いと思つたことは直ぐ實行に取掛るが好い、躓いたら躓いたで、また經驗を積んでそれによつて吾々は一層賢くなれるのだと言ふやうな急進的な意見を有つてゐられるのです。

雁金——私は『生長の家』を讀んで病氣が癒やされた者でありますが、谷口先生にはもつと靈的な精神的な問題で敎を頂かうと思つてゐたのです。ところが先生が經濟問題の解決策を『生長の家』に御書きになつた。これは畑が違ふと思つた。どうせ素人の素人考へだ位にしか思はないので其儘に打捨てゝ置いたのであります。ところが今日谷口先生がお出でになつて此處で集りがある、この席では『生長の家』の經濟國策と言ふものも話題になるだらうと思ひましたので大急ぎで昨夜から讀み始め、電車の中でもそれを讀みまして、大體讀了したのでありますが、まだ六頁許り殘つてゐます。讀んで見ますと、最初豫想したやうな素人の素人考へではない、實に堂々たる一大經國策である。此の點に於て私は谷口先生の經濟學上の蘊蓄に就ても感心したのでありますが、まだ讀んだ早々でもあり、六頁許り讀み殘しもありますので、更に熟讀しました上で充分考慮して御返事申上げたいと存じます。

C――加入者が殖ゑて百萬にもなれば此の經濟策を議會に提出して、勤務時間半減を法律によつて制定しろと言はれますが、また議院で色々と討議されて否決されるかも知れないし、そんなことでは、此の案は吾々が生きてゐる間には到底實現の可能性がないやうに思はれますが、私が此の『生長の家聯盟』に加盟しないのは加盟しても加盟しなくともその實現性が稀薄であると思ふからです。

谷口――實現するであらうと思ふ人が多くて加盟する人が多ければ結局實現するほかはないのです。念は必ず具體化するのです。理想世界も一人々々の信念の集積で出來上るのです。一人信じて加盟する人が多ければ『生長の家の經濟國策』が實現して世界に失業者のない世界が到來する日が一日だけ早くなるのです。左顧右眄は『生長の家』の生き方ではないのです。善いと思つたら必ず實行に取かゝる、先づ自分が加盟するのはその實行の第一着手で、續々人にも進めてこれに加盟せしめて、此の『生長の家經濟聯盟』の實行力を増すのはその第二です。

D――生長の家經濟聯盟に加盟して現在就職せる者が半分の就職時間を失業者に讓つて失業者絶無の世界を作らうとの御計畫ださうですが、現在の失業者數は就職者と同數はあ

るまいと思ひます。だから勤務時間を半減すれば仕事の方が過剩になつて、仕事が停滯して困ることになるだらうと思ひます。それから現在の就職者が失業者に仕事の半分を讓る結果は自分の收入が半減すると言ふことになりませんか。それとも現在の就職者の收入は從前通りとし、新たに失業者を雇入れるに要する負擔は全部資本家の負擔になるのですか。

谷口――現在就職せるものが、半分の仕事を失業者に讓ると云ふのは、唯さう云ふ主旨の下に同志を結合するスローガンとして提唱するのでありまして、實際何割の仕事を失業者に讓るかは此の制度を實施する時に各産業に亘つて精確な國勢調査を行ひ、その時の就職人員に對する失業人員の比率をとり、その比率に從つて當時の各産業平均の勤務時間を何割減ずれば、丁度失業人員を就職せしめ得るかを算出し、それによつて、その一半期に於ける各産業の就職時間を公定し、半期每に、産業の興頹に應じて就職時間を調節して彈力を有たすのであります。就職時間の制定は國家が管理する譯であります。假りに十時間勤務のところを五時間勤務として、二交代制とし、あとの五時間勤務を他の失業者が交代して働くとすれば失業者が就職者と殆ど同數の場合失業者は、完全に吸收消

化されて了ふことになるのですが、現在の就職者の勤務時間が半分に減少する代り、その時間給料を現在よりも六割増加すると、現在日給一圓五十錢貰つてゐる人は日收約一圓二十錢となる譯で、日收は半減と言ふ程に減じないが、その幾分は減ずるのです。日收一圓五十錢が一圓二十錢に減ずると大變損なやうに思はれますが、失業なき經濟組織になりますから今迄一圓五十錢貰つてゐても萬一の失業の虞れがあるために日給の五分ノ一、即ち三十錢を蓄積して一圓二十錢だけを購買力に廻してゐたのが、今度は一圓二十錢の給料全部を購買力に廻して了つても生活に不安がなくなる。だから現在の就職者の購買力は減少しない。現在の就職者がサラリーを貰ふことが尊いのは「購買力」を支給されるから貴いのであるから、サラリーの額が一圓五十錢から一圓二十錢に減つても、不安なく同一の購買力を發揮することが出來ればサラリーは額面の上では減つてゐても、實質の上では減つてをらず、尙失業不安がないだけ大いに得である。そして額面の上で減じた一人宛サラリー三十錢に資本家は新雇傭者一人宛に七十錢を自己の負擔として加算して合計一人宛日給一圓として失業者を雇傭して新規就職者としてこれを購買人員に振向けます。すると購買力は現在の約二倍となります。新規雇傭者の給料は既就

職者より少くしたのは失業してゐるだけ未熟練者と見たのです。かく現在就職せる勤労階級は額面上のサラリーを減らされても此賃金低下の犠牲を勤労階級は決して負擔するのではない。と云つてそれを資本家が負擔するかと云ふと、資本家は從前の雇傭者數一人宛に付、從前よりも五十パーセントだけ多く賃金を支給しなければならないから生産費がそれだけ高くつくから、同數しか購買力のない世界では從前ほど一ケ當りの生産品の利益が得られない。併し、購買力が二倍に増加する世界では、生産品一個當りの利得が減つても二倍數賣れるから資本家の收益が減らない。成るべく製品の賣價は値上せしめないことにし、人件費、生産費の五割増加のために在來の賣價では損失を來すもののみ値上を政府が許可する。産業調査を嚴重にして、暴利取締令を發動して原價と賣價との差を一定率に抑制する。資本家は一個當りの收益の少いことを憂へるに當らない。各勤務者の勤務時間が少いために新鋭の氣力を以て働いてくれ、疲勞が少く、疲勞による疾病手當や、事件費が半減し、能率が高まり、從前よりも二割は生産額を増加し得る、結局資本家は給料支出額は殖ゑるけれども、賣行の倍加と、疾病手當、事件費の減少と、二割の生産増加とで、その損失は埋め合されて却つて大變利益となる。これ即ち、心を

豐かに持つて、現在の有收入者が失業者に職業と賃金とを讓る結果、その心の反映として、物の流通が圓滑となり、資本家も、現在の就職者も、失業者も共に豐かなる物資に惠まれ經濟的黃金世界が約束される譯であります。

A——雇傭人員を增加し、資本家の出す給料總額を增せば製品の値段は成る可く上げないことにしても、生產費、人件費が增加する結果、どうしても商品の價格は上るに違ひないと思ひます。さうすると購買者の人員は增加し、そのサラリー合計は增加しても、そのサラリーの合計を以て購入し得る商品の數量は增加しないと云ふことになり、餘計賣れるから資本家の總收入は減じないと云ふ理由は成立たないと思ひます。

谷口——それが成立つのだから面白いのです。購買群のサラリーの總收入が約倍加する此の新制度に於ては、失業の恐れなきが故に、それを購買力に直に轉じ得る。この時、購買力は約倍加したことになるのです。物價は一時に昂騰せず、徐々に昂騰するのです。だから、購買者のサラリー合計が二倍加した代りに、物價が二倍加して、賣行が現在と同じ數量に低下して了ふには數年を要するのです。かうして購買力が物價を引上げて行きつゝある間が所謂好景氣時代でありまして、徐々に物價が昂騰して、購買力に追付

いて行きますと、貨幣の名稱から云ふと其の收入は多くても、實際物を購入し得る貨幣力から云ふと收入が少いと云ふことになる。ところが物質は好景氣の購買力增多時代に購買力が追驅けるために豐富に作る生產設備が出來てゐますので、購買力が減退しますと生產過剩狀態となります。製品の値段を下げたら、その時、現在の收入でも尚購買力は增加しますが、高賃金を拂つて生產した製品の値段を下げることは生產者の損失となる。だから生產者はそんなことはしたくない。その時は購買者のサラリー收入を上げれば好いのです。さうすれば購買力が殖えて滯貨が一掃される。購買力に廻さるべき貨幣と云ふものは斯うして順繰りに增加して行かなければ、機械力增加に對して購買力が追隨して行くことは出來ない。生產機械力は年々增加して行く。ところが、貨幣を代表してゐる金の產額は他の製品の生產增加の如くには增加しない。だから金を以て貨幣とし、それに一定の購買力のみを代表せしむる限りは、結局は、生產と購買力との不平均を生じ、物貨はあれども、買ふことが出來ない、生產過剩の貧困時代と云ふものになるのです。それではどうすれば可いかと申しますと、金を貨幣とするならば、金の兌換紙幣發行價額を常に生產物の蓄積と生產力增加に比例して昂騰せしめれば好いのです。現

に金の値段は昂騰しつゝあり、政府の買上げ値段も引上げられつゝありますが、更にこれを合理的大膽に行つて國富を循環流通せしめ得るだけに一國の紙幣發行總額を高めるのです。と云ふのは、世界中の購買し讓渡し得る生產物貨を一個所に偏在せしめないためには、世界中の流通貨幣の總量が略々世界中の可購買物貨と同額だけなければならない。百圓の品物があつても五十圓しか貨幣がなければ、殘りの五十圓だけの品物は滯貨となつて偏在するのです。無論、貨幣は流通速力が速ければ、一圓でも五十遍流通すれば、五十圓の物貨を買ふことが出來ますが、貨幣が少いと、出したら減ると云ふ感じを起しますので、出來るだけ貨幣を出すまいとし、流通速度を益々減ずることになるので流通貨幣の總量が少くて流通速度が速いことはあり得ない、だから流通貨幣の總量が少いと、物貨は動かないで一方に偏在し、物貨豐富の貧困狀態を現出する。これを救ふ道は流通貨幣の總量を增加するにあるのです。金準備の有無に拘らず、流通貨幣が多ければ多いほど購買力は增加し、生產力を刺戟し、無爲の失業群が生產群に編入し國富の生產額は增加し、國富は增進するのです。貨幣の購買力を金と云ふ物質に附隨したものだと思つて金準備額だけしか貨幣が出せないと思ふのは物質に捉はれた考へです。貨

幣の有する購買力と云ふものは心の世界に出來上つた「買へる」と云ふ約束、即ち觀念であつて、「買へる」と云ふ觀念が先づあつて、其の觀念が具象化したものが貨幣なのです。だから幾ら金が此處にあつても、そんなもので物質が買へると云ふ約束が成立たず、「買へる」と云ふ觀念が起らなかつたら、生産力を促進することも出來ず、生産品を買ふことも出來ないのです。吾々は現在、紙幣を使つてゐて金貨を使つてゐない、金準備が日本銀行にあると稱するけれども實際にあるかないかは吾々は知らないのです。知らないけれども、吾々の使つてゐる紙幣に購買力があるのは、唯この「紙幣を持つて行けば物が買へる」と信念によるのです。それで貨幣の購買力の本體は「信念」即ち「心」だと云ふことが出來るのです。物があつて、それを買ふために貨幣が造られたと思ふのは間違ひです。「買へる」「買つて貰へる」と云ふ「心」があつて物が生産し出されるのです。例へばこの山麓に御影石がある。それは自然の山の一部であつてまだ生産品ではない。ところで私が一枚の紙ビラをもつて來て、この紙を持つて行けば何でも買へるから、この紙をお前にやるからあの御影石を掘出して呉れと賴むと、「この一枚の紙ビラさへあれば物が買へる」と思ふものだから、其の人が働いて御影石を掘出して、生産品

としてくれる。そして石屋さんが、その紙ビラを貰つて何でもそれで買へると信じて、大工の所へ往つて、この紙ビラさへあれば何でも買へると云ふことだからその山の木で机をこしらへて呉れと云ふと、大工がまた山から樹を切つて來て机を拵へてくれる。その大工が机を拵へて紙ビラを持つて次へ行く、又次の生産品が出來る……と云ふことになるのです。生産品が先づあつて貨幣が出來るのではなく、貨幣と云ふ『買へる、買つて貰へる』と云ふ信念の象徴があつて生産品が生産され、またその生産品が有無相通ずることになるのです。貨幣を持たされて購買力が動き、貨幣を見せられて生産力が動くのです。それで現在のやうに生産過剩の状態が起り、滯貨と、物資偏在の状態が起つたときには『買へる』と云ふ信念の象徴たる貨幣が一部に不足してゐる時ですから、其の不足してゐる一地方(天災地とか饑饉地とか)と、一階級とに「買へると云ふ信念」即ち貨幣を補足してやると可いのです。義捐金を募つて富者から一地方又は一階級に貨幣を補足するのも一方法だが、義捐金は富者の慈悲心を滿足させるだけで眞に一地方とか、一階級の購買力を増進せしめるほどの義捐金額に達することは出來ないし、貨幣の存在場所が一方から他方へ轉じただけであるから、一國全體としては購買力が殖えないから、

全國の生產活動を刺戟しないから、國富を增進する譯に行かないのです。それで天災とか饑饉とかのあつた地方へは紙幣を增發して各戶に分配し無條件でその地方の物資購買力を增進してやれば、滯貨地方の物貨が、窮乏地方へ自由に移動して、富の偏在も物資の偏在も、生產過剩も、失業も無くなるのです。

A——さうすると、貨幣の流通總量は次第に增加して、金準備額を遙かに超越することになるのでせう。さうすると紙幣インフレーションとなつて、紙幣の價値が下落して、紙幣はあれども物を買ふことが出來なくなりはしませんか。

谷口——貨幣の流通總額は金準備に對して定めるべきものではなく、實際の國富に對して定むべきもので、國富と同額より稍多いのが好いのです。國富と同額以下である時には國富はあれども、それを購買する手段が不足するので、物貨が一部に偏在し、一部に片寄つた窮乏者を起します。貨幣の流通量が、國富より稍々多きを要するのは、現在の國富を動かすだけではなく、それ以上に新しき生產活動を刺戟するためです。それでその年の紙幣流通總額は現在の國富總額——即ち過去の生產力の蓄積と現在年度の生產力の總和——に加ふるに、失業者を刺戟して新しき生產活動に移らしむるだけの價額即ち失

業者人員全部を雇傭して半年間に給すべき給料額全部を合算しただけは發行しても紙幣インフレーションにはならないのです。即ち紙幣發行額は金準備に對して定むべきではなく、國富總額及び新生産力總額を標準に發行するのが合理的であつて、この限度を超えた時始めて紙幣インフレーションを起すのです。大戰後の獨逸で紙幣インフレーションの結果、一枚の洋服が一百マークもするやうになつたのは、金準備の缺乏によるのではなく、國富が大戰のために破壊し、國富準備の缺乏した結果なのです。國富と現在の失業者就職を標準として紙幣を發行するならば、決して紙幣インフレーションとはならないのです。

A――つまり金兌換ではなく國富兌換の貨幣が出來る譯でございますね。

谷口――さうです。貨幣が金幣とならないで本當に貨幣となるのです。物貨の代用の紙幣となるのです。所有權を移動し得る物貨だけの額の貨幣を發行するのですから、不兌換紙幣とはなりません。それに加ふるに、失業者の勞働力とも兌換し得る兌換紙幣となるのです。失業者の勞働力はいつでも紙幣と兌換されることを望んでゐる潛在國富ですから兌換準備となし得ます。

A——今迄マルクス主義の本も多數讀みましたが、吾々の讀んだ限りに於て、その說く所は、金はその生産に限りがある、その金を使つて生産力の無限に增加する物貨を買はうとするから、資本主義經濟には行き詰りがあると云ふことをクド〳〵說いて資本主義經濟組織は崩壞すると說いてゐるのです。が、先生の被仰るやうに國富卽ち『過去の生産力の蓄積と現在年度の生産力との總和』だけの兌換券を出すことが出來るとすれば、生産力が如何に增加しても兌換券もそれに連れて增加するからこゝに經濟組織が無限に行詰らないことになりますねえ。

金兌換にしないで國富兌換

谷口——世界が金兌換でなしに國富兌換と云ふことになりますと、米國が獨逸に『戰債を金貨で返せ』獨逸が米國に『イヤ金貨はないから製品で返さう』などゝ云ふ爭ひはなくなるのです。製品で返して貰つても、それだけ國內の物貨が殖えれば、それだけ國富が增進したのであるから、その額だけ國家は兌換券を發行することが出來る。そしてその兌換券は國富を背景としてゐるので、世界各國に通用さすことが出來るのです。

太期——（銀行家）私は最初、此の經濟提唱を讀みました節、大變結構なお說であると感心しましたのでありますが、それに加盟すれば自分の給料を減らして失業者に一部を分つ

結果自分の收入が減ると思ひ、何となく加盟を表明することを遠慮してをりましたのですが、先日よく反省しました結果、これは自分が卑怯であり、我慾が強い結果で、貧しき者に收入を分つことを吝しんでゐるのであると思ひ、決心して先日谷口先生宛に加盟の手紙を差上げて置いたのであります。

C――資本家も就職者も失業者も皆喜べる經濟策だと云はれますが、本當の理想世界が來たら資本と云ふものは解消して了ふのではありませんか。

B――資本が無ければ産業は成立たないではありませんか。

C――固定した資本と云ふものは解消して了はなければならないのではありませんか。

谷口――私には貴方の被仰ることの意味が解りません。もつと解るやうに云つて下さい。

C――固定資本があるがために世の中の經濟が行き詰つてゐる……。

B――固定資本と云へば紡績で云ふなら機械のやうなものですが、機械が解消して了つたら産業は成立たないのでありませんか。

C――これは「言葉」を誤りましたから前言を取消します。流通すべき資本が資本家と云ふ一局部に固定してゐるために經濟が行き詰つてゐる。だから、さう云ふ資本の流通を

固定させてゐる資本家と云ふ階級は理想世界の出現と共に結局は解消し公けな經營に管理されるでせう。それだのに其の資本家も生かす經濟組織提唱をせられる如きは、蓄積經濟を根本原則として否定してゐる生長の家の經濟論にとつては第二義的のものではありませんか。即ち、此の資本主義經濟組織と云ふものは結局自壞して了つて、つひには一層新しい理想的な經濟組織に位置を讓るべきものだと思はれますが「生長の家經濟聯盟」のやうに現在の資本主義經濟組織に修正を加へてその缺點を少くし、資本主義經濟組織の存續を長からしめようとする運動は結局無駄なことをすることになりはしないでせうか。資本主義と云ふものは先刻谷口先生の云はれたやうに唯物論で出發した。唯物論で出發したものは結局自壞すべきものでその自壞にまかせて置く方が好いのぢやありませんか。

谷口――『生長の家經濟聯盟』は資本主義經濟組織の一部の修正ではないのです。或は形の上ではさう見えるかも知れないが、それは現在の資本主義機構の上に自然に働きを及ぼし行く外見上からさう見えるだけのことで『心』の上からは全然資本主義の原則とは反對なのです。即ち『資本主義』は全然唯物論の上に立脚し『物』は物質であるから

與へれば減つて了ふものだと云ふ立場から來た蓄積經濟によつて成立つてゐますが『生長の家經濟聯盟』の主張は『物』は『心の影』であるから『心』で物を有限だと思ひ、物を出したら減るから出すまいと思つて他に渡すことを澁れば、其の結果、其の『心の影』として物の流通が不圓滿になり、現在のやうに物資が豐富にありながら、全體に富が霑はない。ところが、その反對に、物は心の影であるから、豐かなる心を有てば豐に流れて來ると信じて慾ばらない心で現在の過度の長時間の就職時間を他へ讓ることにすれば、失業者は購買群に變化し、物資の流通が圓滿になり、産業は榮え、資本家も助かり、失業者も助かることになると云ふやうに、全然『唯心論』に成立つてゐるのです。その唯心論が、現在の資本主義機構の上に働きかければ、『生長の家經濟聯盟』と云ふやうな『職業と收入とを慾ばらぬ會』の提唱となり、その結果は革命の激化に到らしめずして現在の資本主義機構を穩健に修正しつゝ更に一層の理想世界に推移し行くことになるのです。あの聯盟に這入つて呉れることは、此の推移を圓滑にすることになるから大變結構です。併し、今茲に出席してゐる人が全部加盟してくれても少人數である。世界はそんな少數で改造せられない。併しあの經濟提唱を私が念を起して書いたと云ふこと

に意義がある。此の宇宙は『念の世界』でありますから、私があゝ云ふ念を起して新しい經濟提唱をしたゝめに全世界の經濟思潮に新しい念の流れが起つて遠隔治療式に、あの經濟提唱は全世界を動かしつゝある。現に米國にも、歐羅巴にも、勤勞時間の低減による失業者根絶と景氣回復策とが叫ばれ出した。今年は國際經濟會議にも此の問題は論議せられることになつてゐる。生長の家の經濟提唱は念の力で全世界を動かしてゐるのです。無論あの『生長の家經濟聯盟』の規約にあらはれてゐる制度は生長の家の唯心論的經濟理論を以て、現在の經濟機構に働きかければ、どう云ふやり方になるかと云ふ臨機的な暫定的に暫くある形をあらはしたものに過ぎません。その意味に於てあの經濟提唱は第二義的のものです。もつと善い恒久的な經濟組織は來る。それは
日本天皇陛下の世界統一が實現した後に於てゞす。

瀧――先刻の御講話に今此の世界に理想世界を實現するために二種の國境抹殺運動がある、一つは露西亞の共産黨の運動であり、もう一つは大日本世界國家運動であると被仰いましたが、前者はその運動が表面化して着々實行運動に移つてゐるやうですが、後者はそれが表面に表はれてゐない。表面　表はれてゐるならば成る程と吾々も其の理想世

界建設運動に共働したいと思ふのでありますが。

大日本世界國運動

谷口――露西亞の赤化運動が表面化してゐるのに、日本の大日本世界國運動が表面化してゐないのは當然のことです。露西亞の赤化運動は日本を除く全世界の帝王權を覆滅し、國境を出來るだけ抹消して大日本世界國家を建設するための地均しの運動なのですから、日本主義の運動の先驅者として先にあらはれてゐるのは當然のことです。日本主義の世界國家運動は靈界にちやんと準備されてゐるので、愈々の時が來ればそれが明かになる。露西亞の赤化運動よりも尚善いものが待つてゐることを知つてゐれば、愈々の時にも去就に迷ふと云ふやうなことが無くなるのです。

瀧――どうしてさう云ふ日本主義の世界統一運動が靈界に準備されてゐることが判るのですか。

中心は唯一つ

谷口――それは世界創造の時から定つてゐるのです。太陽系統にたゞ一つの中心太陽があり、物質分子にたゞ一つの中心があるやうに造られてゐる時から、此の地上にも唯一の中心が君臨することが定められてゐたのです。イエスが『東より西に稻妻の閃くが如くキリストも再臨せん』と豫言した時から定められてゐたのは東方日本國の使命なので

す。あらゆるものには中心者が一つある。露西亜の赤化運動でも事實上の中心者スターリンがある。スターリンの政策に反對する者は革命の元勳トロツキーでも追放せられる。露西亜の運動も、誰も人間が人間を支配しない運動だなどゝ思つたら誤りである。どうしても中心者は世界に、それも唯一つなければならぬ。それも唯一つの中心者をスターリンにすべきか蔣介石にすべきかと云ふ事になると何の神聖性もないどこの馬の骨かも分らない樣な者を單に強いと云ふだけで中心者に置けば、もう一層強い者が出て來て簒奪して世界はその度毎に戰亂を繰返す。それでは永久平和の理想世界は來ない。さうすると、世界國家の中心者と定むべき主權は自然、世界で最も神聖なる方の掌中に收めて頂くことによつてのみ永久平和の理想世界が出現するのです。茲におのづから、露西亜の世界統一運動と、日本の世界國家運動との優劣が判るではありませんか。

佐藤（順）——日本天皇陛下の尊いと云ふことはよく私には判つてゐるのでございますが、イザ人に説明してあげようと云ふ時になるとどう云つて説明したら好いか判らないのです。これを私は常々殘念に思つてゐるのでございますが、此の機會に解り易く説明して頂きたいと思ひます。

谷口――現象界は有限の世界であり、象徴の世界である。此の有限の世界に於て無限性をより完全に象徴せるものほど尊いのです。一幅の畫はその寸法は有限であり、測られる。けれどもその畫の尊さは、その畫が如何程の程度まで無限性をあらはしてゐるかによつて其の尊さは定められるのです。

天皇の玉體は、肉體の方から見れば有限であり測られますが、之を「皇位」と云ふものに就て考へるとき、日本天皇の「皇位」は有限の世界に於て最も完全に永遠性を顯はしてゐるから尊いのです。有限の世界に於て無限をあらはす場合には、有限その儘で無限をあらはし得ないために、概くは有限が交代しつゝ連續することによつてその永遠性を現はしてゐるのです。吾々の生命が或る時間繼續生きてゐる、しかし吾々の物質なる細胞は瞬時も停止する所なく交代してゐて、血液は循環し尿になるものは尿となり榮養は沈着し、熱量となつて放散するものもあり、一分間前の自分と現在の自分とは肉體の上では同じ自分ではない。併し此等の細胞の交代を一貫して連續することによつて、生命の永續を象徴し、吾々はこの交代止まざる肉體に於て一人格を感ずる。それと同じく、天皇の皇位は代々の天皇の交代により、其交代が永遠に連續することによつて「天皇」

地上に存在する最大の無限性

と云ふ永遠に續く一人格を成してゐる。即ち　日本天皇は皇統連綿たる皇位の永遠性によつて、地上に存する凡ゆる人格のうち有限のうちに最も完全に無限をあらはしてゐるのです。無限とか永遠とか云ふものは、實相世界のものである。その實相世界の永遠性が最も完全に現象世界に現はれてゐるのが　日本天皇の皇位なのでありますから、唯一中心の世界國家を實現さすとするならば、どうしても、此の最も尊く神聖なるところの日本天皇の皇位を以て統治の中心體としなければならぬのであります。

諸方の神懸りが一致して唱へてゐる處でありますが、最近さう云ふ神代文字の記録が茨城縣の北方磯原の太神宮に出て來たと云つて古典研究者の注目を引いてゐるのであります。

鹽谷——愈々の時は案外早く近づいてゐるやうでありますから靈界に於ける日本主義の運動に就て『生長の家』誌上に於て詳しく發表して頂きたいものだと思ひます。いざ世界の混亂狀態が來たときに結局誰が世界を統一するか前途の見越しがついてゐるならば吾々は迷はないで落付いて終始一貫從ふべき所へ從つて行くことが出來ると思ひます。

義若——前途の見越しがつかなければ周章狼狽しなければならないやうでは『生長の家』

の家族ぢやないではありませんか。さう云ふ豫言的なことを知らなくとも、人間は肉體ではない永遠不滅の存在であると云ふことが解れば、どんな事が現はれて來ても驚くと云ふことも迷ふと云ふこともないと思ひます。

谷口――さう被仰るのも眞理でありますが、吾々が神に一致する時、豫め知らねばならぬ事は自然必ず豫め知らされると云ふことも事實であります。それは丁度、吾々が眞理を知つて神に一致するとき、丁度自分にとつて適當な食物が自然に食膳に運ばれることになるやうなもので、自然に知らねばならぬことは知らされるやうになるのです。今日皆様此がの席においでになり、日本の世界統一の使命と、將來に約束された理想世界の片鱗をお聞きになつた。これも亦偶然ではないのであります。知るべきことは知らされる。得べきことは與へられる。『生長の家』家族には善き事のほかは起らないのです。知らされたことを拒むにも當らないし、與へられたことを拒絕するにも當らないのです。吾々は何が無くとも立つことの出來るところの人間の生命の實相を掴んでゐる。此の基礎の上に立つて吾々は選ぶべきを選び、受けるべきものを受け、一切を包容しながら正

しく強く生きて行くべきであります。

第十一章　國と家庭を良くする話

場　所――生長の家出版部の奥座敷。
內　容――昭和九年八月中旬、假見眞道場對話のうちより。

山田――私の知人に腎臟が惡くて血壓が二百五十もある人がございまして、毎日醫者に血壓を下げる注射をして貰つてをりましたが、醫者は患者の心に安心を與へて血壓を下げるつもりで、家人と相談して注射毎に今日は血壓が何ミリメートル下がつてゐるなどゝ暗示をしてゐました。併し實際はその患者の血壓は下がつてゐないのでした。ところが、その患者は先日京都の帝國大學病院へ行きまして診察を受けたのですが、多勢の患者がつめかけてゐますので內科の醫長が診て呉れないで、助手のやうな人が診たゝめに、血壓計に表はれる數字を、患者に對する心理的影響などは全然考へないで、血壓二百五十と正直に云つたものです。と、急にその患者が氣力が脫けて動けなくなり一ケ月許り大學病院に入院して近頃自宅へ歸つて來たのですが、依然として血壓が下がらないことを苦にしてゐたのでした。先日、私がその方を見舞つてあげまして、聖典『生命の實相』

神想觀で血壓が下がる

を差上げて讀むやうに勸め、私も二回ばかり、その人のために神想觀をして身體を撫でてあげたのでありますが、そのために血壓が二十ばかりも急にさがりまして患者が元氣になりました。丁度そこへ近頃その人がかゝつてゐられる神戸の腎臟病の名醫田村博士が來られましたので、その話を致しますと、患者の狀態を見て『これは非常に經過が好い、さう云ふ好い本があるなら、この方と同じやうな容態の病人が他にもあるからその人に是非讀ましてあげたいから一冊取寄せて欲しいと云はれましたので、私のを一冊差上げまして、その補充に一冊頂きにあがつたやうな譯でございます。その節、私は『生長の家』に書いてあつた話を思ひ出すまゝに、『醫者と云ふものは大學を出た匆々は、一つの病を二十通りもの藥を使つて治さうとするけれども、三十年も開業して實地の體驗を積んで來ると、二十種の病氣を、一樣に一藥で治し得るやうになる、結局、患者の心理を上手に摑んで、患者が安心して患者自身の心の內から自然療能を發現させるのが名醫だと云ふことを承りましたが、本當にそんなものでせうか。』とたづねますと、田村博士は一寸答へ淀んでゐられたが『君、この患者の血壓をさげる藥だと云つて私が今使つてゐる藥は何だと思ふ。それは××ですよ、之は此處切りの話ですが。』と云はれま

醫術は修養

した。さう云ふありふれた××で腎臓病でも高血壓病でも肺病でも治るのだから面白いぢやありませんか。尤も、それは治る筈なんです。田村博士はそのデップリ肥つた平和な容貌にいつも明るいニコヤカな表情を湛へてゐて、一目見ると患者に信頼と安心との念を起させるやうな態度で、鷹揚に患者に臨まれるのですから。『先生のやうなニコニコした、接する人に健康の氣を吹き込むやうな態度の方では、先生の顏を見るだけでも患者の病氣が治るでせう。』と私が申上げますと、田村博士は『私は、若い時はさうでもなかつたが、修養で斯うなつた。その修養と云ふのは人に接するとき、人が進んでくれば、自分は一歩退いて衝突しないと云ふ修養です。醫術と云ふものは、君、修養だよ、修養がないと藥がきかない。』と云ふやうなことを云はれました。私は非常に興味深く感じました。

精神的雰圍氣が病を治す

谷口――精神的雰圍氣が病氣を造り、また病氣を治すと云ふことが判つたらその人は醫道の奥儀を攫んだと云ふことになるのです。その精神的雰圍氣と云ふものは、必ずしも一家の中とか、極々傍にゐる人にだけ感ずると云ふやうな弱いものではない、始終その人から放散してゐて、その人に近親な特別に心の連絡のある人とか、別にさう云ふ親しい

夫婦喧嘩の精神波動が七里彼方の子供に感應して發作を起す

と云ふ人でなくとも、互に遠隔治療とか精神感應の約束のある人とか、さうでなくとも念波が相似てゐると云ふやうな人とかの處に達して、感應し、或は病氣を治したり、或は病氣を惡くしたりしてゐるのですよ。丁度、昨日來られた或る奧さんの話によりますと、この奧さんは大阪の船場に店を持つてをられて、堺の高師ヶ濱に住宅をもつてゐて、そこから毎日店へお通ひになるのですが、店の問題などのことで大阪で夫婦爭ひをすることがある。『見てゐなさい、こゝでこんなに爭つてゐると、屹度娘が宅で苦しんでゐますよと私はそんな時、良人に云ふんですが、その時間に娘は屹度七里も彼方で發作を起して苦しんでゐるのです』とその奧樣は云はれました。親子間は心の構成が類似してゐるので、その間に起る精神的波動と云ふものは、七里も離れてゐてもこんなに覿面に感應するものなんです。私は遠隔思念を頼まれたときには時間があいてゐる時にはお受けして、特にその方の爲に三十分なり一時間なり光明の思念を放送してあげたのでありましたが近頃時間がない爲にお斷りしてゐます。一人の爲に三十分なり一時間なり費さねばならぬのでは『生長の家』では一日に二三十人しか治すことが出來ないことになつて行詰つて了ふのであります。併し、實際はさうでないから百人千人一萬人に頼ま

れても行詰らない。それはその人が『生長の家』に頼まうと云ふ念を起したときに、その人の念が眞實でありましたならば、それを肉體の私が知ると知らぬとに論なく、『生長の家』とその人との間に精神波動の上に連絡が出來ますので、毎日吾々が『生長の家』本部で神想觀をして光明思念を醞釀してゐる、その光明思念と云ふものは、スグには消えて了はないで、蓄積して宇宙に漂うてゐるものでありますから、その光明思念を受信することになり、其處に神癒が始まるのであります。だから私に依賴の手紙を出したり自動車で駈けて來つゝあるうちに治つて了つたりする例があるのであります。併しこれには患者自身が『生長の家』で醞釀されてゐる光明思念に對して相感應するだけに眞實の念を起してゐねばならないのであります。患者が幼兒であり、保護者がまだ『生長の家』の誌友ではなく『生長の家』を信ずることが充分ではなく、たゞ、病氣を癒す爲に色々やつて見てゐるうちの手段のうちの一方法として醫者にもかゝりながら『生長の家』の光明思念も受けて見たいと云はれるやうな場合には、光明思念に感應するほどには、その患者又は看護にあたる保護者に眞實の念が動いてゐない。その時には、その看護にあたつてゐる保護者の『眞實の念』を喚起するために、その保護者の方に聖

遠隔思念の即日より快方に向ふ

典『生命の實相』を患者の枕頭で讀んで貰つて、聖典の讀誦により眞理を知つて頂き、少くとも眞理の方向に心が向いてこちらからの光明思念に感應して頂けることにしてゐるのであります。先日も或る小兒科の病院に隣り同士の病室で同じやうな重態の腸炎で入院してゐる二人の小兒がありました。一人の小兒の方の奥樣は早くから『生長の家』や誌友の一人から知らされて『生命の實相』も讀んでをられ、『生長の家』へ遠隔治療をお頼みになつたゝめに、遠隔思念をお受けになつたその日から、突然その小兒の食慾が出て元氣を回復せられ、普通その病院へ腸炎で入院された患者は早くとも四十日間は退院の許可が出ないのですが、この小兒だけはレコード破りで約その半分の日數で退院の許可が出たのであります。隣りの病室にゐて、ともども子供の病氣に就て語り會ひ慰め合ひしてをられた一方の母親は、もう一人の方の子供が急にメキメキよくなつて退院の許可が出たのに、自分の方の子供ばかりは惡くなる一方で、つひに變な吐乳までして全然食慾がなくなつて衰弱の度を加へ、醫者も、此の調子では、自分の經驗では回復の望みがもう殆どないから覺悟をしてくれと云はれた程になりました。子供が快くなつた一方の母親は同病相憐れむと云ふやうな氣持で『生長の家』へ遠隔思念を頼んであげませ

うと私の方へ使ひを寄越されたのでありましたが、本人は生長の家の何たるかを知られないし、個人々々に遠隔思念をする時間がありませんので、私はそれを受理しませんでした。スゲなく斷つたのですが、あとで氣の毒になりまして病院の方に手紙を差上げまして『斷はられても失望なさるな。斷はつたのは時間がないからである、そちらで一生懸命に「生命の實相」を讀み、それに書いてある眞理を理解し、こちらの神想觀の遠隔指導の時間に一心に心の波長を合はすためにお祈りになるが好い。こちらから、光明思念を貴方の方へ突入して行かなくとも、貴方の方で心の波長を合はしてアンテナになつて下さりさへすれば光明思念はいつでも全國に對して放送されてゐるのであるから、特に貴方に對して遠隔思念をしなくとも、その光明思念を捉へることが出來さへすれば病氣が治るものである』と書いて差上げたのであります。子供がよくなつた方の奧様が、もう一人の奧樣に聖典をお貸しになられて、もう一人の奧樣も、醫者が覺悟せよと云つたのですから、もう他に賴る所がないから、絶對絶命、心が背水の陣式になつてゐるので、一生懸命に聖典を讀誦し、遠隔指導の時間に一心に合掌してお祈りになつた。そこに眞實の心が喚起されて、光明思念をお捉へになつたのでありませう。聖典を貸

聖典分冊二冊で重症疫痢治る

して貰つた日から直ぐ、今迄醫者から見放されてゐたその子供に食慾が出、元氣が回復して、間もなく退院されたのであります。此の話を聞いて知つてゐられた奧樣の所へ、今度は芦屋に住んでゐる人で、疫痢になつて難かしいと云ふ幼兒の親が、夜半にたづねて來られて『生長の家』で遠隔治療をして貰へまいかと云ふ御相談なのです。併し、其の奧樣が被仰るのに『先日も一人腸炎で難かしい子供の遠隔思念をお願ひしたけれども、忙がしくて時間がないと云つてお斷りになつたから、今度もお願ひしても駄目でありませう。併し、こちらがアンテナになり、生長の家の光明念波を捉へることが出來たならば治るのであつて、その實例が先日も、實際あつたのですから、聖典を讀んで、眞理を知り、神想觀の遠隔指導の時間に一心にお祈りなさい、必ず治るでせうから。』と云ふやうなお話をなすつたが、生憎『聖典』を人に貸して手許になかつたので聖典の拔萃小冊子二冊を貸してあげられたのであります。何分疫痢の經過は早いものでありまして、倏忽の間に死を招くなどと云ふこともありますので、兩親も今は絕對絕命で、一生懸命にその小冊子をお讀みになり、本部の神想觀實修時間に一緒に、病兒の枕頭で『生長の家』の方を向いて神想觀をしてお祈りになつた。翌日此の小冊子を貸してあげられ

た奥樣が見舞つてあげると、病兒は昨日と打つて變つて大變元氣になつて卵がたべたいの、お粥が欲しいのと云つてゐたさうであります。かう云ふやうに眞實の心が起つて『生長の家』の光明思念を受け得るラヂオ的装置がその病人又はその病人の兩親の心に出來上るならば、特に遠隔治療と云つて、肉體の私にお願ひにならないでも可い。心に光明思念を感受する受信機を作るために、聖典を讀み、神想觀を修することだけが必要なのであります。

杉野――『生長の家』第七號が出まして、あれに私のことが書いてありましたので、私の知人間には大評判でございます。今更ながら、何處にも、表面は平和のやうでその實夫婦間の精神的葛藤と云ふものに惱んでゐる家庭が多いものだと云ふことが判りました。杉野、君のうちの家庭もそんなだつたのか、それでも今はそんな心境になつたとは、さても羨しいと云ふ譯で、各方面から相談を持ち掛けられてゐる譯で、私の方は家庭煩悶相談所と云ふやうになつて來ました。

夫婦喧嘩の原因

谷口――夫婦間の精神的爭ひと云ふものは、どうして起るかと云ふと、餘り馴れ親しんで接近し過ぎた結果、摩擦が起るからであります。つまり、良人や妻を『神の子』だと思

優しき言葉は家庭に油を注す

はないで、自分のものだと思ふ。それは先刻お話のあつた田村博士の話のやうに、一歩退いて親しむと云ふやうにすれば摩擦が起らない。

舟橋――成る程、接近し過ぎて摩擦が起るとは面白い！

杉野――敬愛と云ふことがなければならないんですなア。愛するばかりで敬すると云ふことがなければ、つひに衝突して摩擦が起ることになるのですなア。

谷口――一歩退いて、その間隙に『言葉の柔和』と『心の敬愛』と云ふ油を塗つて緩衝装置を施して置いたら衝突して、夫婦仲が毀れるなどと云ふことは無くなるのです。愛してゐても、言葉の柔和を失つて、言葉がゾンザイになると衝突し易くなるものです。これには、言葉を浄めて言葉の力を善用するやうにしなければならないのです。『オイ、馬鹿。こんなゾンザイな仕様で困るぢやないか』と言葉に角を立て、突慳貪に云ふ処を、『済まないが、こゝを、もう少し斯うして下さい』と言葉に圓味をつけて云ふやうにすれば衝突が起らないものです。機械でも重要な接觸部にはボールベヤリングと云つてマサツを防ぐために圓い球を入れてある、言葉の圓味と云ふものは、家庭の重要な要素である。『良人』と『妻』との間隙にも是非とも挾んでおいて其の接觸を柔らげなくてはな

らないものは、言葉の圓味と云ふボールベヤリングです。それにこの夫婦仲が惡いと云ふことは人生の歡びの大部分を奪つて了ふほどに重要なものですのに、折惡しく暴風雨が起つて夫婦の仲が倒れて了ふと云ふやうなことがありましても、ともすればその夫婦仲を起さうとする努力が、普通世間の夫婦では足りないやうに思ふのであります。假りに庭にダリヤを植ゑて置いても暴風雨が起つて、そのダリヤが根から引つくり返つてしまふと云ふやうなことがあると、吾々は暴風がをさまると直ぐそのダリヤを起して、竹でもたてゝ二度と倒れないやうに突つ支ひ棒とするのであります。ところが夫婦仲が一朝の暴風雨で倒れてしまふと、大抵の夫婦はそれを直ぐ起さうとしない。ダリヤでさへ引つくり返つたら、すぐ起さうとするのに、夫婦仲だとそれを直ぐ起さうとしないのは智慧が足りないからであります。夫婦仲と云ふものを、一本のダリヤや植木よりも重大なものでないと思つてゐるのです。漠然とさう思つてゐるのですなア。夫婦仲が眞に重要だと云ふことが判れば、倒れたら誰だつて起さずにはゐられない筈のものです。それを、良人は良人で、良人の方から夫婦仲を直しにかゝつたら良人が負けたことになるからと思つたり、妻は妻で、妻の方から夫婦仲を直しにかかつたら自分が負けたことにな

ると思つて、夫婦仲を直さうとする努力をしない。互ひに『負けるものか』と思つて、最も大切なものが倒れてゐるのを見捨てゝゐて顧みないから可けないのです。だから夫婦仲をよくするにはどうしても、夫婦仲と云ふものは、吾々の家庭生活の中で最も重大なものである、植木や塀が倒れてゞさへも直ぐ起すのに夫婦仲を起さないのは、その重大性に就ての認識不足である事を第一に知り、互ひに『負けまい』と云ふ負け惜しみを捨て、言葉と表情を互ひに圓くして摩擦を去り、敬愛と云ふ油を塗つて置けば、もう大丈夫なのであります。こゝにこんな話があります。私の以前住んでゐた宅の近所に、一組の夫婦が住んでゐましたが、蚤の夫婦で、妻が身の丈秀でゝ二十二貫もある。良人は普通の方であります。或る時夫婦喧嘩を始めたのでありますが、良人が拳をもつて奥さんに打つてかゝると、奥さんがチョイと肩をかはして片手にその拳を受けて引つぱると、奥樣が二十二貫もある大兵で力が強かつたものですから良人の肩の蝶番が抜けてしまつたのであります。良人の肩の蝶番が抜けて了つては重大である、始めて妻も良人もその重大性に氣がついて、忽ち夫婦喧嘩は止めにして、骨つぎ醫者を迎へにやるやら、その不幸を救ふために大變な仲良しになつて了つたのであります。この夫婦にとつては、良

人の肩の蝶番が外れて拔けることは、夫婦の仲と云ふものが外れて拔けることよりも重大な出來事に見えたのであります。重大だと云ふことが判れば誰だつて拋つて置かないのでありますが、肩の關節は目に見えるから、その重大性が判るが、夫婦仲と云ふものは眼に見えないから、兎もすれば重大性に氣がつかない。氣がつけば必ずそれを良くしたいと云ふ努力が起る――さうすれば必ず夫婦仲はよくなるのであります。

自分の立場からのみ見ずに相手の立場からも見よ

杉野――先日名古屋からの歸りがけに『生命の實相』を讀んでゐましてフト氣がついて考へたのでありますが、私の家内が耳が遠い。話をするとき、どうも不便でこちらがヂレつたくなつて來る。それで今迄時々腹が立つたのでありますが、それは、いつも私は自分の立場からのみ、家内の耳遠と云ふことを見てゐた、そしてそれは自分にとつて不便な存在だと思つてゐた。けれどもそれは自分の心が狹かつたからであつて、これは家內の立場からも考へてやらなければならぬと氣がついたのです。家內は自分が不便がつてゐるヨリ以上に不便なのに相違ない、氣の毒だと云ふ感じがして來たのであります。大抵腹が立つのは、自分の立場からのみ事物を見て相手の立場からも考へてやる包容力とか愛とかが乏しいからだと氣がつきました。

谷口——さうです。大抵、相手の身になつて考へてやれば、腹は立たずに濟むものなのです。自分の身勝手のことばかり考へてゐるから腹が立つて來るのです。腹の立つ人は、身勝手な利己主義の人だと云ふことが出來ますなア。

瀧村——夫婦仲が惡くなるのは下層階級ではその貧困が非常に原因してゐるやうに思ひます。毎日生活問題で夫婦が罵り合つてゐる。貧困さへ無くなれば夫婦仲がよくなると考へられる場合が澤山あるやうです。

貧困がなくなれば夫婦喧嘩がなくなるか

谷口——瀧村さんは貧民階級をよく研究してゐられるから貧民の夫婦喧嘩が目について、その原因が貧困だと云ふ結論を下されるのでありますが、貧民はさうして貧困を題材にして夫婦喧嘩をしますし、金持は金持で、その富貴を題材にして夫婦不仲になるやうです。大抵、この邊の富豪の家庭は表面は靜かな仲の好い同士に見えてゐますけれども、その家庭の內部に這入つて見ると、實に夫婦が陰慘な抑へられたやうな氣持で生活してゐるのが多いのであります。白蓮女史が筑紫の女王と謳はれて千萬長者の伊藤傳右衛門の家庭にゐたときには、常に餘所行きのやうな最上等の着物を着てゐるので『私には餘所行きの着物がない』と云つて嘆いたと云ふ噂を物の本で讀んだことがありますが、そ

貧しい爲に夫婦仲の好い家庭

の時代の白蓮女史の家庭は實に陰慘なものであつた。ところが、その同じ白蓮女史が貧しい宮崎龍介氏のところへ嫁くと却つて、夫婦仲がよく、良人のために選擧應援の演說などをして樂しく生活をせられることになつたのであります。だから、富んでゐて却つてそれが原因で夫婦仲が惡くなつてゐるのもありますし、貧しいために夫婦仲がよくなることもあるとしますと、何も貧しいからつて物質的に不幸だからつて、夫婦仲を惡くするには極つてゐないぢやありませんか。昔から『兄弟牆に鬩いでも外侮りを防ぐ』と云ふ諺もある。貧しくして、外部の經濟的壓迫に對抗して夫婦相協力して艱難に當ると云ふやうな場合には却つて夫婦の仲はよくなる――斯う云ふことは事實ではありますまいか。先刻の例でも、夫婦喧嘩の最中にでも、良人の肩の關節が拔けたら、一遍に仲直りしましたし、私の知つてゐる人は非常に夫婦仲がよかつたが、姑がゐるために、その仲の好さを充分樂しむことが出來ない。姑さへなくなつたら人生はどんなに幸福だらうとその奥さんは思つてゐられたら幸ひに姑がなくなられた。で、夫婦が幸福になつたかと云ひますと、夫婦仲の邪魔物があるために、良人としても妻を可哀想だと思つて愛してゐたが、もう妻をいぢめる人がなくなつたと思ふと妻を可哀想だと思へなくなり却つ

て夫婦仲が悪くなつて、良人はヨソへ行つて酒を飲んだり、女を買つたりするやうになりました。人生はそんなもので、貧乏の人は貧乏さへなくなれば人生が幸福になると思ふ。姑にいぢめられる人は姑さへなくなれば人生は幸福だと思ふ、歯痛の人は歯痛さへなくなれば人生は幸福になると思ふ。ところが、それが願ひ通りなくなつて見ると、又別の苦情が出て來て人生が不幸になるのです。どうしても人生の幸不幸と云ふものは、心に歸すべきで、心を治さないで形だけを直しておくのでは、球根を保存して置いて芽をつむやうなもので、又別の芽が出て來るのです。

人生の幸不幸は心に在る

瀧村——富めるがために家庭の仲が悪くなり、貧しいがために家庭の仲がよくなると云ふやうな例は探したら、それはあるかも知れませんが、それは程度の問題であり、あまりに悲慘な極端な貧しさの前には、家族が病氣にかゝつても醫者にかけられなかつたり、日々見るに堪へない悲劇が行はれてゐると云ふのが事實ではありますまいか。

谷口——現代の新聞記事は暗黒面を大袈裟に描いて讀者の好奇心を唆つてゐるのが大變に多いやうですが、それでさへも新聞に現はれる殺人とか自殺とかの悲劇は、寧ろ所謂貧民階級でないものゝ方が多いやうではありませんか。この横町にも九尺二間位の小さ

な貧民窟と云ふほどでないにしても貧しい人達の長屋がありますが、別に貧しい爲に悲劇が起つたと云ふことを聞かないのです。毎日八百屋とか何とか、行商をして細々と食べてゐる。それに家庭の仲は好い。併し、此の附近は大體富豪地帶ですが、大抵さう云ふ富豪の家庭には、良人が妾宅をかまへるとか、家庭は常に悪い精神波動があつて、奥様はヒステリーであるとか家庭には醫者の癒すことの出來ない奇病とか精神病とかに罹つてゐる者が一家庭に一人や二人位はあるものです。それは貧民にも病人はある。瀧村さんは貧民の方をよく眺めて居られるから、貧民が病氣になるのを、貧しいことが原因だと思はれるかも知れないが、この邊のやうに富豪地帶で金持ばかりの家庭で病人が絶えないのを眺めてゐると金があるのが原因で病氣になつてゐるのだとも思へる。實際金持位ゐ氣の毒なものはないとも云へます。金があるために色々の財産上の爭ひや、男女間の爭ひが暗黙の間に起つて、病氣は兎も角、そのために家庭地獄を現出してゐるのです。

富者の苦しみは我儘、貧者の苦しみは壓迫から

瀧村――併し、貧民の苦しみと富者の苦しみとを比べれば、富者は勝手に放肆な生活をして苦しんでゐるので、止めようと思へば止められる苦しみを、勝手にやつてゐるので

すが、貧民は他から壓迫されて止むを得ず苦しんでゐるので、その苦しみ方が非常に異ふと思ひます。

谷口——さうでせうか。それなら貴方がその貧民と云ふ人を一人づゝ連れて來て、過去の生活や心の持方を一々吟味して御覽になれば、必ずやその貧民は今の貧しい境遇位置を受けるに相應はしい點數の心の持方をして來たに違ひないことを認め得ると思ひますが。境遇を作るのは心であつて外界の壓迫ではないと云ふことを。

瀧村——(苦笑して)果してさうでせうか。

谷口——さうだと思ひますねえ。貴方は貧民に愛の深い人であつて、毎日玄米食ばかりとつて月給の殘り全部を救濟事業に獻金せられて來たほどの人である。ところで貴方のやうに玄米飯を食へば、一日一人七錢位で生活することは何でもない。三人家族で二十錢あれば生活出來る。どんな貧民でも一日二十錢位は內職でも何でもして生活出來ない事はない。その貧しい食物程人間を健康にすると云ふことを發表した人もある位です。貴方でも玄米飯ばかり食べてゐられた時代でも、貧乏だとも生活難だとも御自身お考へにならないし常に健康であつたし、意氣も衰へないし理想も抱懷してゐられたぢやありま

せんか。だから、生活費にする金の少いことは生活難ではないので、それを生活難だとする心が生活難を作るのです。どちらかと云ふと貧民の方が富豪よりも自然に近い生活をしてゐるので、その方が健康であるのは、貧乏人の子澤山の實例でもよく判るのです。一寸病氣だと直ぐ婦人科醫へ通ふやうな金持の奥樣は却つて子供が出來ずに困つてゐるけれども、婦人科醫が見たら到底姙娠出來ないやうな子宮をもつてゐても、健全な子供を出産するのが貧民であると云ふことを聞いてゐます。

生活難は心に在る

瀧村――普通の常識では、病氣になれば醫者にかゝれば治ると思はれてゐるのですが、さう云ふ常識に捉はれてゐる貧民が病氣になつても醫者にかゝることが出來ないのは悲慘なのです。

自然療能を知るは無限の醫療費を持つことになる

谷口――さう云ふ場合、醫者にかゝる金を與へるのが救ひになるか、或は人間は醫者にかからなくとも治り得る自然療能を備へてゐると云ふ眞理を知らしてやるのが本當の救ひになるかは考へ物です。醫者にかゝる金を與へればその時は假りに醫療費にありついて救かるかも知れないが、その金がなくなれば、二度目はまた救からないが、眞理を知つて自然療能の尊さを知つて救かつたら永久に醫療費が要らなくなるから、無限の醫療費

を貰つたと云ふことになるのです。だから『生長の家』の眞理を知らしてやることは彼らに無限の醫療費を供養することになるのです。

瀧村――ところが、『生長の家』の眞理は仲々難かしい。教養のない貧民にそれを知らせてやることは到底不可能のことだと思ひます。

谷口――決してそれは不可能ではないのです。醫者の藥が病氣を治すと云ふことも、貧民がそれを研究して知つてゐるのではないのです。たゞ一般にさう云ふから、その宣傳に乘つてさう思つてゐるだけです。そして金がなくて醫者にかゝれないことを不幸かなんそのやうに思つて苦にやむのです。私に云はせれば、醫藥費を出し得る富豪の方が、醫者に好い加減にゴマ化されて、輕い病氣でも重く云はれたり、或は恐ろしい病名を宣言されるだけで恐怖心を唆られたりして、却つて病氣を重くしてゐる例の方が多いと思ふのです。その點は貧民は、病氣にかゝつても醫者にかゝる金がないと背水の陣を布いて了つてゐるから、罹病率が非常に少く、自然療能に頼るしか仕方がないから、自然療能が強くて病氣が早く癒るのです。貧民は貧乏だから病氣に罹つて可哀さうだと貴方は云はれるが、私に云はせれば金持は醫藥費があるから病氣に罹り易くて可哀相だとも云へ

素人は醫藥の効果を信じ、醫師は却つて醫藥の効果を信じない

るのです。藥に病氣を癒す力がないと云ふことは醫學を充分研究してゐる醫者自身の方が知つてゐるのです。普通の人は醫學を研究したことがないから宣傳だけで雷同して藥の卓効を信じてゐるのですが、そんなものではないのです。先日も、子供が肺炎に罹つた奥さんが來られましたが、或る醫者が投藥したらすぐ熱が下がつて快方に向つた。するとその次の子供がまた肺炎に罹つて今度は熱がなか〳〵下らない。それでその奥樣が醫者に『先日、上の子供に使つたあの良く効く藥を處方して下さい。あの藥を服むと直ぐ熱が下がつてよくなりましたから』と云ひますと、醫者が奥さんに『素人は、そんなことを云ふから困る。藥がそんなに効いてたまるものですか。丁度それは病氣が熱が下がつて快方に向ふ時期が來てゐたのですよ』と云つた。これは臨床的經驗のある有名な醫學博士が云つたのですから間違ひがないのですが、こんどは奥樣の方がそれを本當にしない。『お醫者さんが、藥がきくものぢやないなど〻云はれると取りつく嶋もないぢやありませんか。』と被仰つたやうな始末です。要するに一般人が醫者の藥を効くと思つてゐるのは、一般人が深く醫學を研究して見た上で信じてゐるのではない。この實話でも判る通り、研究してゐる醫者自身は却つて藥効を深く信じないで、たゞ宣傳にかゝつ

てゐる素人だけが、信じてゐるのです。何でも大衆と云ふものは、自分で研究もして見ないで宣傳の通りに信ずるものですから「生長の家」の眞理でも、深くそれを讀みこなして、本當に眞理を掴むことは至難であるにしても、「人間の病氣は藥を使はなくとも治る」と云ふ結論だけを信じさせることは、社會の先達の位置にある知識階級が宣傳するだけで好いのです。宣傳すれば大衆は信じて幸福を得るのです。ところが現在では、貧民は榮養不良で、過勞で、生活環境が惡いから病氣に罹る、そして病氣に罹れば藥がないと治らないと云ふやうな宣傳ばかりが多く行はれてゐるから、貧民を恐怖さし、貧民の頼り得る唯一の醫者たる自然療能力を鈍らし、どんな不遇の環境にでもズン〳〵伸びて行ける生活力の芽を刈りとつて了つて、貧しい人をいやが上にも不幸に押し込んで陰慘な狀態に陷入れてゐるのです。

瀧村――藥劑無効の絶對的眞理は別として病氣に罹れば醫者にかゝるといふ通念がまだ現在は一般人にあります以上、貧乏の爲に醫者にもかけず子供を失ひ、或は親をなくしたといふ場合、その貧困が遺族に與へた悲しみは最大の打撃になると思ひます。醫者にかけても駄目な病人だつたとは思ひながらも、醫者に一度でも見てもらつておけばよかつ

たといふ嘆きが起るのは普通で、未だ『生長の家』の眞理を知らない人にとつては、醫者にかゝることの方が幸福に思はれ、不幸にして醫者にかゝり得ないことを、自ら幸福であると悟つてゐる人は全くなく、この點當事者にとつては貧しく醫者にかゝり得ないとを不幸と感ずる外はないのであります。

谷口——そこで、貴方のやうな貧民愛の深い人が出現して街頭に立つてでも、醫藥なくして病氣の治り得る理由、人間は環境に支配せられるものではなくて、自覺さへ強まれば、勇氣さへ出せば健康上にも社會上にも頭をあげ得る所以を宣傳して下さる必要があると思ふのです。所で、實際、玄米飯すら碌に食べられない、奮發しても頭が上げられないと云ふ樣な貧民窟階級は日本の人口の何パーセントもないでせう。

瀧村——貧民窟階級が日本の全人口に比べてどれ位の率になつてゐるかは存じませんが、現在の農民(都市接續地以外)の生活は都會の貧民窟の生活と比べて同等の慘さにあると思ひます。彼等の無比な勤勞に對する報酬は常に借金以外の何物でもなく、農民の生活程度は愈々低下する一方です。日本のみならず世界各國の農民の生活が一樣に慘憺たるものであることは、そこに經濟組織に誤があるからだと思ひます。今の程度なら、いく

ら農民の生活を引上げても、それは何ら外界から甘やかす事にはならぬし、却つて正當な勤勞に對し正當な報酬を與へ人間的な（人間的と申しますと、經濟的に不安なく、與へられた自然の美しさ、人情の宜しさを味はひ、互ひに優しき言葉をもつていたはり合へる程度の）生活を生活せしめることになると思ひます。

勞農露西亞の眞似をしても農民は幸福にならぬ

谷口――だつてソビエツトの農民だつてパンがなくて困つてゐる。だからソビエツトの政策の眞似をしても農民が幸福になるとは思はれない。ロシヤの邊境に住んでゐる農民は一年一ポンドのパン粉すら與へられない者があると云ふぢやありませんか。

瀧村――それは反對論者のデマぢやありませんか。

谷口――デマぢやありませんよ。私の甥で日露協會學校の卒業生でどちらかと云ふと自由奔放な性格の男で在來の權威と云ふものを認めない少しも嘘のない性格の男で、それが日魯漁業につとめてゐて、漁場の監督や日露の交渉に通辯などしてゐるのですが、カムチヤツカの方面に出漁してその附近に住んでゐる漁民にパン一個を與へたら、こちらで買へば百圓もすると云ふ狐の毛皮を呉れたと云つてその毛皮の實物を持つて歸つての話ですから間違ひはありません。その方面の住民は一年一ポンドのパン粉にもありつけ

ず、魚を獲つて、それを乾して粉にして、そればかりを常食としてゐるので、パン一個をどんな寶よりも欲しがるのだと云つてゐました。

瀧村――それは、さう云ふ邊陬の地ですから配給が行き屆かないのでせう。少くともモスコーその他の中央都市附近にゐる住民はさうではないと聞いてゐます。またソビエツトのやり方で農民や漁民が貧窮してゐるのは、物資が足りない過渡時代にあるからです。それは資本家階級が搾取してゐるのではないから、そこに慰めがあるのです。ロシヤには階級がないのです。

資本家階級は固定してゐない

谷口――日本だつて固定した階級はない。あると云へばあるけれども無いと云へば無い。微賤から起上つて資本家にもなれるし、それは實力の問題――心の問題であつて、心の偉大なものは、どんな逆境からでも起上つて、どんな高き位置にでも上ることが出來るのです。數年前の一職工はドイツのヒツトラーにでもなり得るのです。資本家だつて失敗すれば貧民階級に落ちて了ふし、凡そ資本主義組織の美點は、固定した階級と云ふものがなくて、努力次第で、どんな階級にでも上り得ると云ふ所にあるのです。

瀧村――それは資本主義組織の發達途上にあつた時代のことで現在のやうに資本主義の崩

壞期には望めないことです。

貧民より起つて洋裁塾で成功した話

谷口――不撓の意氣と不屈の努力とさへあれば、現在でも貧賤から起つて、少くとも貧賤の階級を脱して中産階級程度に昇り得る機會は澤山あるのです。可憐な婦女子でもそれが出來ないことではない。一例を擧げれば、唯今大阪に洋裁塾を開いてゐるNさんですが、この方は、良人が久しく患つて諸方の醫者に罹り、多額の費用を醫者に拂つてその結果治らずに死んで了つても、醫者はその金を返してくれる譯ではなし、貯金は一つもない、全く無一物の中に、お婆さんと、八歳になる一人の息子とを殘されて自分が何とかしてこれら二人を養つて行かなければならないのでした。止むを得ずこの婦人はパン屋を始められた。××高等學校の學生の晝食に食パンをサンドウイッチにして車にのせて運ぶのです。お婆さんは、生れが貧民ではなかつたので、「私はパン屋の婆さんだと云はれるのは嫌やだから、別の家を借りる」と云つて近所にまた家を借りて住まれると云ふやうなこともあつた。それにも屈せず、パンの配達を續行し、八歳になる息子には新刊雜誌の配達をさせたりして家計を補はせ、其側ら、洋裁を研究してつひに洋裁を大成せられて、今は塾生も殖えて塾も大變に盛んになつてゐる。息子さんも先日中學を卒業

どんな逆境にも屈せざる者は遂に勝つ

貧しいからこその母子の愛

せられて、上の學校の受驗をせられたが『生長の家』を知られてから午前三時迄勉強して却て肥る位でしたが、それは兎も角、この婦人は、無一物の女手ひとつで、さう云ふお婆さんの牽制があり八歳の子供を抱へて倚屈せず今は子供を大學へ出しても困らないだけの地盤ある洋裁塾を造り上げられたと云ふことは、人間は、どんなに貧しくとも、どんなに逆境にあつても、不屈不撓の打勝つ力を心にさへ持つてゐれば、一人前に頭を擡げる事位は、現在の組織の中にゐても出來る證據であると思ひます。それに、さう云ふ貧窮の間から苦勞を重ねて子供を養成して來られたので、母子の間の美しい愛情の結び合ひはまことに、見てゐても涙ぐましいものがあります。東京へ受驗に往つてゐられる間にも常に激勵の電報を送られる、すると息子さんからまた『ゲキレイヲシヤス云々』と云ふ返電が來る。母子が一つになつて結ばれてゐる、さう云ふ愛情は富豪の子弟には少い、子は親に養はれる權利がある、金を出せなどと云つて短刀で脅迫したり、遊んでラクをして生活しようとして親と衝突したり家庭の中がゴテ〳〵してゐるのが多い。逆境は必ずしも人間を不幸にしない。人間を不幸にするのは、環境に甘える心だと云ふことが判るのです。かう云ふ點から考へると資本主義組織は劃一的に定規を當てたやう

に人間を平等にしない代りに、意氣あるもの、努力ある者には機會をつかませ、向上せしめ、富豪でもみづから萎縮して意氣なきものにはそれ相應の不幸な境遇を與へ、心に從つて心相應の境遇を與へるので、この點はまだまだ資本主義組織が他の組織よりも美點であると思ひます。

瀧村――私の勤めてゐる會社では年少社員を酷使してゐて、長時間年少社員を酷使し、外部に對しては、毎日數時間を年少社員の教養に當てゝゐると云つてゐますが、その實、教養すべき年頃の少年に何一つ精神的な教養を與へず全く自由を束縛し、變態的な生活を與へてその少年達を精神上の不具者にしてゐる點があり、又肺病にならずにすむやうな少年でも、私の社へ來て酷使された爲に肺病になつたとすれば斯う云ふ資本主義を惡用した社の生活が如何に惡いかを證明してゐるのです。そして酷使の結果、肺病、その他の病氣にかゝつても、私の社では療養の施設は何一つなく、罹れば罹つたものが惡いとして、何ら責任をもたないのはひどく冷酷であると思ひます。資本主義時代に大きく生長した大富豪などは大抵この類型に屬して勤勞階級を搾取して肥つた結果だと思ひます。充分の療養費療養施設をもつてゐる金持の病氣になる場合は、貧困な者の病氣の場

合とは事情が全くちがひ、自分が勝手に苦しんでゐるので少しも慘めではない。貧困者は病氣そのものよりも、病氣から起る家庭的な悲劇が一層慘めなのであります。

ロシヤにも階級がある

谷口――資本主義は、逆境に處しても不屈不撓の精神を把持するものには、自由發達の道を拓いてくれることは先刻の實例で申した通りです。併し、資本主義を惡用して他を苦しめてゐる者があるのも事實です。しかし、惡用するものがあつて、惡い結果が生じ、善用するものには善なる結果が生ずる――それが自由で、非常に人生に味を添へると云ふことになるぢやありませんか。愚かでゐると、惡賢い奴にシテやられるから、智慧を磨くと云ふことになつてくる。刺戟があり、困難があるので人間は向上するのです。ロシヤの制度だつて惡用すれば惡い結果を生ずると云ふ點では同じだと思ひます。貴方は『ロシヤには階級が無い』と云ふことを先刻主張せられましたが、私はロシヤにも階級があると思ひます。階級と云ふ名で呼ばないだけぢやありませんか。現に貴方は、邊陬の土地にゐるロシヤ人にパン粉一封度當らないのは配給が行き屆かないからであつて、モスコーその他の都市附近の住民はそんなことはないと云はれましたが、誰がその配給を行屆かせないのですか。それは配給に當つてゐるロシヤ政府の官吏がでせう。その配

給に當つてゐる官吏は裕福にパンも食べてゐるのでせう。さうすると、ロシヤの官吏階級は、邊陬の地の農民や漁民を搾取してゐるのでせう。少くとも自分に最も近しい關係にある連中に厚う配給して、關係や距離が遠い所にある連中に對する配給は好い加減に胡魔化して置くと云ふ點がある、これは人間の人情の弱點であつて、制度をいくら變へても、それを運用する人間が、自分に最も近いサークルの人間だけに厚うしようと云ふ心が失せない限りは、人間はそのサークルの利益を計る。そのサークルに階級と云ふ名前をつければそれは明に階級である。そのサークルを階級と云はないで「ロシヤには階級が存在しない」などと云ふ言葉の手品に掛るものは餘程頭が惡いのですよ。又、ロシヤには資本家がないなどと云ふ言葉を聞きますが、勞農政府そのものが一つの大資本家ではありませんか。自國の農民を搾取して、(貧窮でパン一片食べられないやうにして)他國に對して農産物をダンピングし、他國の農産物の價を下落させて、他國の農民階級の收入を益々減じようとしてゐる、それは資本家と云ふ名前をつけない資本家ではありませんか。

瀧村――併し、それは過渡時代でありまして、モスコー邊りでは勤勞階級の勤勞時間が一

日六時間に嚴守されて餘程理想的に行はれてゐるやうでありますし、勞農政府が一個の資本家であるとしましても、その資本の運用は一個人が利益を壟斷するためには使はれてはゐないで、全國民が、勤勞の生産物を均霑して受けるために、運用せられてゐるので、此點は個人の資本家と大變異ふと思ひます。

谷口――一日六時間勤勞は、別に勞農ロシヤでなくとも、近頃は資本主義國の米國大統領が率先して勤勞時間減少、給料引上げにより、生産過剩の抑制と購買力の增進に大童になつてゐるではありませんか。だから勤勞時間半減は、何もロシヤの共産黨の統制の下に屈服しなくとも、資本主義下に於ても行ひ得ることなのです。米國大統領よりも先に『生長の家經濟聯盟』では勤勞時間半減を主張してゐる。機械が人間の代りに働いてくれる世界では人間の勤務時間半減は世界の常識となりつゝあるのです。米國はそれを大統領が率先して實行しようとしてゐるが、日本はまだそれが實行出來さうにないのは、一般の輿論がまだ贊成しないからです。だから、これを輿論にすれば、日本でも出來るのです。そんなことをするのに、別に革命とか組織變革とかの危險騷ぎは要らないのです。『生長の家經濟聯盟』の參加者を殖やして合法的に法律一つ設ければ出來ることで

す。

瀧村――『生長の家經濟聯盟』の缺點は失禮ながら、多數の贊成者が出來た上でないと、今直ぐ實行することが出來ない點にあるのです。今直ぐ貧民を救濟することが出來ないのです。

共產黨は唯物論、生長の家は唯心論

谷口――今直ぐ貧民が救濟されないのは、ロシヤ勞農政府のやり方でも同じでありませんか。貴方も始終それは『過渡時代であるから』と云つて辯解してをられる。ところが、ロシヤ共產黨は唯物論に出發してゐるのであり、人間は環境に支配されると云ふ理論に出發してゐるから、實際『物』が圓滑に全國民に供給されて『過渡的環境』が終つて了ふまでは人間の不幸は去らないのです。これに反して『生長の家』では、唯心論に出發してゐて、心の自主的創造力を說いてゐるので『過渡的環境』が終了しなくとも、

唯物論は人類の氣力を奪ふ

まだ舊態依然たる環境の中にあつても、起ち上る意氣あるものは起ち上り、幸福を創造する氣力あるものは幸福を創造することが出來るのです。唯物論者が人間を環境の全然支配下にあるものだと宣傳して歩く位ゐ人類の氣力を萎縮せしめるものはないのです。さうでなければ貧民の中からでも起上り得るものがあるのに、人間と云ふものは本來境

遇に屈服するほかはないものだなどと云ふ宣傳が弘がれば弘がるほど、その言葉の力で、農民は氣力を失ひ、貧民の勇氣が挫け、その結果、農民や貧民を救はうと云ふ運動が、却つて農民や貧民の氣力を失はしめ、環境に屈服して、いつまでも被搾取階級に籍を置いてゐるやうになつてゐるのです。それは丁度、人間の健康を護らうと思つて、結核菌の環境の恐るべきことを宣傳すればする程、人間が結核菌を恐怖し結核菌に對する抵抗力がなくなり、却つて結核病が世界に蔓延して行くやうなものです。何にしても、人間は必ず環境に支配せられるほかはないと云ふやうな、自主的創造の生命を認めない唯物論的宣傳をすることは、人間の經濟病の征服に對しても、肉體病の征服に對しても決して善いことではないのです。

それから『生長の家經濟聯盟』は今直ぐ實行出來ないのが缺點だと云はれましたが、團體運動としては、團體運動の性質上多勢が集まらなければ出來ないですけれども、一個人だけでもその趣旨に贊成の人は今すぐ實行出來るのです。現に小田村の齒科醫で、生長の家經濟聯盟の主旨たる職業を慾ばらないで半分の患者をハヤらない同業者に讓ると云ふことを實行してゐる方もあります。これは自發的に勤勞時間を半減し、半分の勤勞

を失業者に分けてゐることになるのです。一人でも出來れば多勢でも出來るのです。

平地を歩く競技は興味なし

人間の生活の味と云ふものは障碍物があるところを生命が自分の足跡を刻みながら進んで行くところにあるのです。劃一的な強制力によつて人間の生活をラクにして見ても、それでは人生の味がなくなるのです。オリンピック大會でも色々困難な條件を設けてあつて、そこで人間が競爭するから面白いのです。平地を歩く競技では面白くない。彫刻でも空氣のやうな障碍物のない材料に鑿を揮つても面白くない。やはり木材とか大理石とか鑿に對して『手ごたへ』即ち困難を與へるものに彫つて行くので面白いのです。その彫つて行くのでも、定規を當て、定規の劃一力によつて直線を引いたのでは、それは手で引いた線よりも美しくとも味はひはないのです。だから吾々の生命は強制力によつて劃一的なラクな環境におかれて生活するよりも、困難は困難でも、自分の力相應に人生を切り拓いて行ける組織の中に生活する方が味はひがあるのです。

資本主義も共產黨も唯物論

斯う云へば、私は資本主義組織を禮讃してゐるやうにお考へになるかも知れませんが、必ずしもさうではないのです。資本主義組織と云ふものは唯物論に出發してゐること、ロシヤの共産黨のイデオロギーと同じことです。その迷ひの一つは人間は物質によつて

幸福になると信じてをり、同時に、物質は有限であつて、出せば減るとの迷ひに捉はれてゐることです。『出せば減る』し、『物質がなくては幸福はない』と云ふ此の觀念から蓄積經濟即ち資本主義組織と云ふものが出來上つてゐるのです。ところが『生長の家』の經濟學は物質は心の影であつて、無限心を持てば無限となり有限心を有てば有限となり、出せば減ると思へば減り、使へば使ふほど殖えると思へば殖えると云ふやうな、唯心的立場にあるのです。だから資本主義とは全然反對のものでありますけれども、如何なる組織にも縛られない心の自主獨立的な自由性を認めてゐますから、資本主義の世界にだつて少しも困らないのが人間だし、外部から組織をかへて行かなくとも、蓄積經濟の蓄積の必要と云ふものが不要であると云ふことが各人の心の中で自覺出來たならば外から組織を變革しなくとも、內から組織が淨化されて異つたものとなつてくると信ずるのです。

瀧村――併し外から改造して住みよい世界を造つて行けば、內から淨まるのにも早く淨まるのではありますまいか。

谷口――早いかも知れない。併し早いのが能ではない。機械的に外部の強制力で出來たも

機械的に創作味がない

牛乳瓶が外から見て穢いのは內側が汚れてゐるからだ

のは製作に早くとも味はひがない。遲くとも內部の生きる力を發現させて徐々に人生に生命を刻んで行く。この方が好いのではありますまいか。兎も角、資本主義も左翼理論も、人間は物質の豐富と安易とによつて幸福になると考へてゐる點に於て、人間の生命の自主的な創造力を否認して、人間を一個の土偶にして了つてゐる點に於て贊成出來ないのです。

瀧村――私は今氣が附きましたが、形の世界が現實界(念の影の世界)であるとしますと、今迄外から淨める方が早く淨まるのぢやないかと考へてゐたのが誤りであると氣がつきました。牛乳瓶は外から見て穢く見えてゐても、それは內側に牛乳のカスが附いてゐるからであるとしますと、外から洗ふ方が手つ取り早いと思つて幾ら外から磨いても美しくなりつこはない。制度や組織を變革しても、それを運用する人間の心が淨まらなければ、又別な點に於て新制度新組織の運用に缺陷を生ずる！　わかりました。私は、社會をよくする道はたゞ『生長の家』を宣傳しさへすれば好いのだと云ふことが判りました。この考へは急に私の頭に閃いて來て、今迄私の心の中を占領してゐた疑問がスッカリ溶けて了ひました。

谷口――牛乳の瓶の穢れは內側に牛乳のカスが附いてゐるからで外から幾ら洗つてもそれはとれない――それは貴方の仰被る通りです。此の現代資本主義制度は『物質は蓄めて置かねば足りなくなる』と云ふ、物質有限觀と云ふ人間の『迷ひの滓』が制度と云ふ牛乳瓶の內側に蓄つてゐるから、外側から見ればそれが資本主義制度となつて現はれ、搾取でも何でもして蓄めて置かねば損だと云ふ風にあらはれてゐるのですが、此の失業者と云ふ全然働くべき職業のない者の多くある現代に、人の二人前も三人前もの長時間を職業に噛りついて、失業者の就職に邪魔をしてゐる人間があるのは、どう云ふ『迷ひのカス』が心の牛乳瓶の內側に溜つてゐるからであるか解りますか。それは『慾ばる心』と云ふ『迷ひ』のカスが溜つてゐるからであります。一層よく解り易いやうに、實例をもつて話したいと思ひますから、貴方の會社の勤務時間は現在一日何時間だか話して吳れませんか。

瀧村――普通十六時間になつてゐますが、十八時間も二十時間も働く人があります。最高二十二時間まで働く人があります。かう云ふ人は表彰され、昇給する率が多いのです。

谷口――ところで、最初から、貴方の會社はそんなに長時間勤務だつたのですか。

瀧村――いゝえ、最初は午前八時から午後五時までの勤務時間だつたのださうです。ところが、社員中の誰か二三の者が勤務時間外まで居殘つて働くやうになつたのです。すると上役から賞められる、給料の昇りも好いと云ふことになつたので、皆それを眞似して長時間働くやうになつたのです。皆が勤務時間外に二時間づゝ餘分に働くやうになつたら、皆と平等に二時間づゝ餘分に働いてゐた位では、皆と同等で特に表彰されたり、特に昇給率が高いと云ふことがなくなつたので、それなら自分はもうその上に二時間、他より長時間働いて、人よりも早く昇進してやらう、人より餘計月給を貰つてやらうと云ふ人が出來て來まして、それに他の人もまたその眞似をする事になり、一列一帶に勤務時間が延びて來たのです。また一列一帶に勤務時間が延びて來ると、當り前の規定通り、勤務時間しか働かない者は懶けてゐると見られることになつて、人より少し時間を早く切り上げて歸ることにでもすると、主任の方から「君は何か不平があるのかね」と注意をされる。すると馘首が恐ろしいものだから、其人は一層勤務時間を長くすると云ふ風になつて來たのです。

谷口――では、規定の勤務時間は九時間であり、食事の休憩時間などを除くと八時間勤務

だと云ふ譯ですねえ。

瀧村――だから、社長は外部への辯解として『社の規定は八時間勤務になつてゐるが、皆が喜んで社務に奉仕してゐるのだ』と云つて宣傳してゐるのです。併し、内部は實に怨嗟の聲に滿ちてゐるのです。それで解雇される人を皆は出獄すると云つてゐます。併し自ら進んで止める程の勇氣もないのです。職業が他にないのですから。

谷口――一人が餘計働きすぎるから雇傭人數が少くて濟み、職を求めても得られなくなるのが、お互ひ樣なのですから、それが判れば少くともみんな揃うて規定の勤務時間だけしか働かないことにしたら好いぢやありませんか。

瀧村――ところが今では不文律ではありますが十六時間勤務が普通だと云ふ動かせない制度のやうになつてゐるのです。

慾ばり根性が長時間勤務をさせる

谷口――よろしい。解りました。何が彼らを無闇に長時間勤務させるかが、貴方は、今迄、制度があるので人間が善くなれないのだと云ふことを、よく口にされましたが、制度は八時間勤務だと定めてあつても、人間が慾ばり根性であり、自分だけが拔け驅けの功名をして、人を凌いでも收入多くなりたいために、他の人以上に長時間勤務する。Ａが長

人類を搾取するのは就職者自身

時間働けばBは一層長時間働く。Bが長時間働けばAは尚一層長時間働くと云ふ風に、勤務時間をセリ上げて往つたのでせう。そして遂に制度が十六時間勤務と云ふことになつたのです。こんな制度に立到つたのは人間の慾ばり根性が基だと分るでせう。制度は人間の心を支配しないで、逆に人間の慾ばり心が制度を作り上げたのです。そしてその自分の作つた制度に縛られて、自縄自縛されてゐるのが人間です。だから佛者も貪瞋痴と云つて『貪』即ち慾ばり心を罪悪の最初に置いてゐるのです。だから、私は人類を搾取してゐるのは就職者自身だと云ふのです。慾ばり心をなくしなければ制度はどんな制度を作つても、心が化してまたやがて悪い制度が出現するのです。私に云はせれば、慾ばり心が作つた制度は慾ばり心を無くすれば自然に崩壊する、牛乳瓶は内部を洗へば外側からも透き通つたやうになるのです。

杉野――私の會社では各社員に暑中休暇を二週間與へてありましたが、社員の一人が暑中休暇をとらなかつたら、重役がそれを賞めて特別慰勞を百圓與へることにしました。私はそんなことをすれば、皆が休暇をとらなくなる、休暇を皆がとらなければ休暇の制度を作つておいたのが無駄になると云つて反對しましたら、その後、休暇をとらないでも

特別慰勞と云ふものはなくなりました。慾ばる心で働くのは可けませんね。

瀧村――人間の慾ばり心を刺戟するやうに、蓄積し易い形で貨幣と云ふものが出來てゐるのが可けないのではありませんか。

谷口――貨幣は、蓄積し易い形にも出來てゐますが、循環し易い形にも出來てゐるのです。これを蓄積し易いと考へるのは『蓄めたいと云ふ人間の心』であり、これを循環し易いと考へるのは『循環させたいと云ふ人間の心』であります。蓄積と循環とは全然反對でありますが、見る人の心によつて、同一の貨幣が蓄積し易いとも、反對に循環し易いとも考へられるのです。みんな心の反映です。

瀧村――貨幣の蓄積を禁止する法令を出す事にするとか、貨幣を廢してそれに代る何か好い制度でも造れば……

谷口――ソビエット露西亞では幾度も貨幣を廢止しようとして、結局また貨幣を使用しなければならなくなつたと云ふぢやありませんか。制度と云ふものは、『心』が變らなければ變るものではなく、強制的に變へても、また似たものが出て來るものです。若し貨幣を蓄積することが禁止されるとか、多く働いても少く働いても同じ分量の貨幣しか與へ

現在の發達程度の人間では貨幣制度の世界に棲むのが適當

られないと云ふことになりますと、人間は――現在の發達程度の靈魂の人間は――働くための刺戟がなくなつて働かなくなるでせう。山形縣の隱れたる經濟學者眞木傳五郎氏の息子が、金を貰はぬと、休暇で遊んでゐても低地へ土を運ばないのが、金を與へることにしたら働くやうになつたと同樣です。そして働かなければ、人間の靈魂の進歩と云ふ事がなくなるのです。だから人間が金に刺戟されなければ働かないと云ふやうな現在の發達狀態では彼が貨幣制度の世界に棲息せしめられてゐることは、天の配劑であり、人類のために好いことなのです。その爲に人類は精出して働き進歩するのです。人は自分自身の心相應の環境を作つて、その中にゐて苦しみ、その苦しみによつて自己が一段進化するやうになつてゐるのです、米國でも最近ルーズベルト大統領が發案せる「生長の家經濟聯盟の提唱」同樣、勤務時間短縮、最低勞働賃銀制、發案した如き全ての産業資本家が贊成すればあの産業復興方法は成功しませうが、これに反對する人が多ければ成功しないでせう。つまり人類の大多數の心が、それに相應はし、心境に達しなければ、人類はまだ〳〵それ相應の悪い制度の中で苦しまなければならないのです。そしてまたルーズベルト大統領のNRAの政策は勞働者の團體交渉權を認めてゐるのが缺點です。あゝ云

ふ制度は最高の智者が上に立つて、下のものは文句なしに服從して行くことによつて成功するのです。我利主義同志で團體交渉してゐたら成立たない。貨幣制度と云ふものは現在程度の發達の人類にとつては、好い拍車を供給してくれてゐるので、自然にさう云ふ制度が出來てゐるのです。この貨幣制度の中では、優れた者は多く報酬を得、優れない者は報酬を得ることが出來ない。それで人間は勵みが出て能力を練磨することになり人類は進歩するのです。慾ばり根性がなくなり、報酬がなくとも勵みが出て、働いて進歩し得るやうに人類の多數がなつてくれば、人間は金の必要がなくなる。すると金で追ひ廻して人間を使はうとしても無駄のことであるから、そんな馬鹿なことをする人間も無くなるのです。

貨幣制度は心の現れ

金に追ひ廻される人間、金に縛られる人間があるからこそ金で人間を追ひ廻したり金で縛らうとする人間も出て來るのです。皆な自分の心が環境に現はれるのです。皆な慾ばつて、人よりは餘計月給を貰はう、人を押し倒して人よりは餘計地位が上らうなどゝ考へてゐるから、みづから長時間勤務と云ふ制度を作り上げて了つて、我れと我が手で自分を縛り苦しめることになつたのです。人を押し倒して自分が上にあがらうなどゝ思つてゐるから、月給は餘計貰つても、無理をして、人間らしい家庭の樂

しみも味へず、苦しんで、自分の慾ばり根性は棚に上げて、雇ひ主が長時間働かすなどと雇ひ主を怨んだりすることになるのです。怨むならば自分の心ばかりです。自分の心が變れば、そのやうな會社の制度が變つてくるか、自分と云ふものと、會社の制度と云ふものとが調和しなくなりますから、その人は自然にさう云ふ會社を出てもつと自由な勤務につくことが出來るやうになるのです。そして、その會社の制度が自身の心に相應するやうな代りの人間がその會社に這入つて來て、其處でまたその人が、心相應に鍛へられることになるのです。何事も無駄はないのです。心相應の人が心相應の世界で鍛へられるやうになつてゐるのが此の世界であります。だから『生長の家經濟聯盟』では、慾ばる心を捨て去つて職業時間の大體半分を他の人に讓ることに約束を定めてゐるのです。さうすると自分だけ、長時間働いて拔けがけの功名をして立身出世などをしようと云ふものがなくなるので、此の失業時代に一部の人だけの長時間勤務などゝ云ふものは成立たなくなるのです。杉野さんが、休暇中に出勤して働く者に特別賞與を出すのに反對された。これは好いことであります。休暇中の勤務時間外に働きたければ、自分の好きな自由勞働をすれば好いのです。兄弟に拔け驅けして自分だけ長時間働いて立身出世

しようと云ふやうな耻づべき人類の裏切者に賞與を出したり人一倍昇給させたりする者があるから可けないのです。人類全體の心がもつと賢くなり、兄弟に拔け驅けして榮昌したり立身出世しようなどゝするものを皆なで排斥するやうになれば、此の世界の制度はひとりでに善くなるのです。日本の商品が外國で排斥されるのも、それは國情が異ふからだと色々辯解して見ても、日本の産業資本家が勞働者に長時間働かせて廉價で他國品を壓倒しようとするからです。何と云つても人類の心が他を押へて自分だけが榮えたいやうでは善い制度の世界が出て來ようはありません。休日には一緒に休んで樂しみ、働く時には一緒に仕事を分けて働くやうになつたとき人類全體に失業のない善い制度の世界が開けて來るのです。併しそれもさう後の事ぢやありません。『生長の家經濟聯盟』の提唱も海を超えて米國産業復興局の勤勞時間減少、失業救濟政策となつて試みられつつあり、日本でも色々それに類した政策を先覺者が提唱して來ました。もう曙は近いのです。光は生長の家からです。

生命の實相（第八卷完）

昭和十年三月二十日印刷納本
昭和十年三月二十五日發行

生命の實相（全集豫約）
第八巻（定價二圓 送料・内地十錢）

著作者　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地　谷口雅春
發行者　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地　佐藤勝身
印刷人　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地　小川新藏
印刷所　東京市小石川區白山御殿町十八番地　大文堂印刷所
製本所　東京市小石川區柳町十一番地　生長社製本部

版權登錄

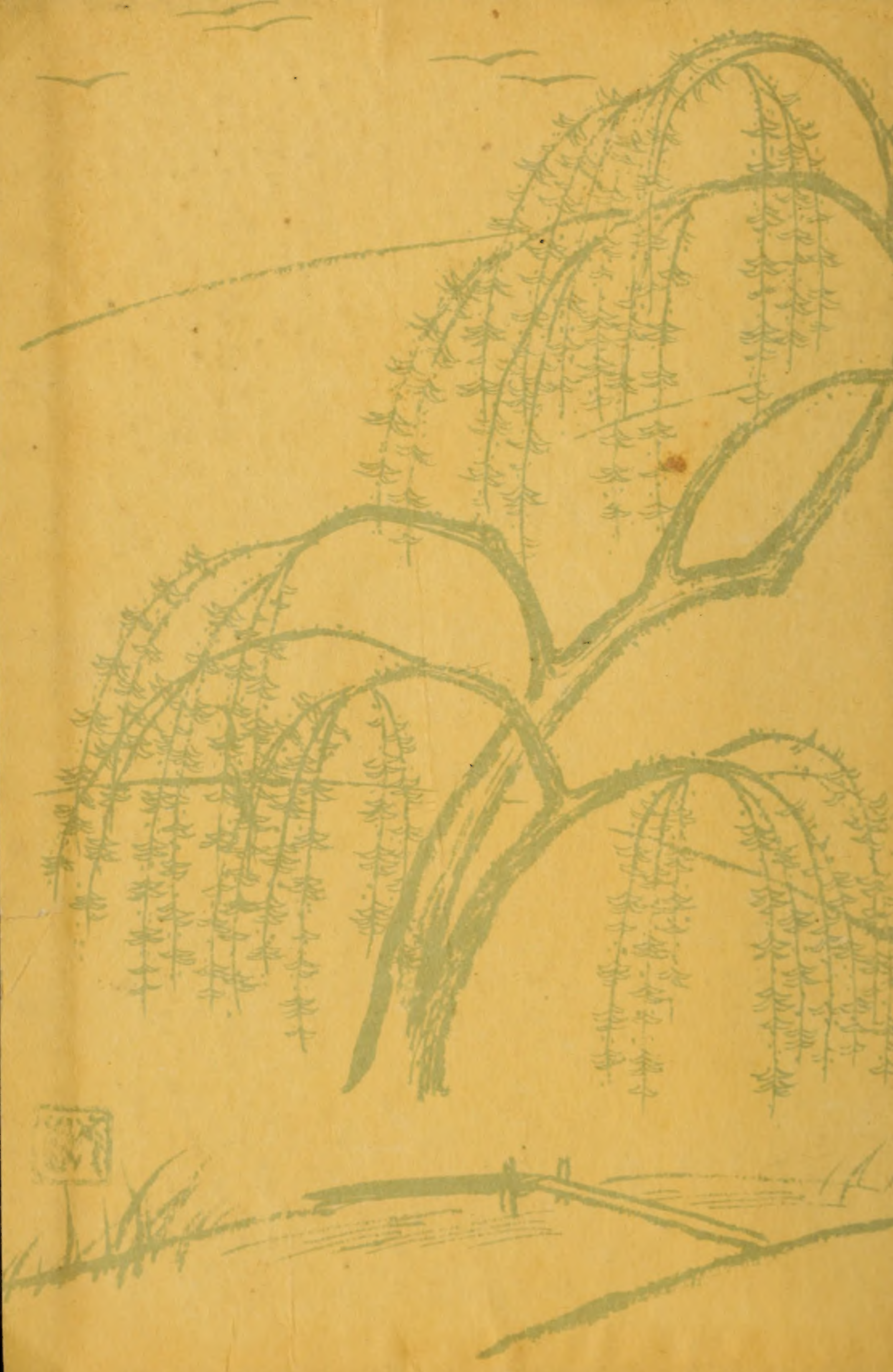
發行所　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地
光明思想普及會
電話青山(36)四四三一番
振替東京五五五一九番

吾れを伸ばすものは、
絶えず與へてゐると云ふ感じ、
絶えず人から喜ばれてゐると云ふ感じ、
與へる歡びは自己擴大の感じ、
自己の愛が次第に擴がる感じ、
この感じのうちに生命は伸びて行く。

――「生長の家」創刊號卷頭の歌――

「生長の家」誌友申込
誌代一ヶ年分三圓六十錢

東京市澁谷區穏田三丁目七六
生長の家出版部・發行
（振替東京三二一二二番）



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03171 4157

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03171 4157